㈶八尾市文化財調査研究会報告41

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

Ⅰ　久宝寺遺跡　（第４次調査）
Ⅱ　小阪合遺跡　（第19次調査）
Ⅲ　小阪合遺跡　（第20次調査）
Ⅳ　東郷遺跡　（第33次調査）
Ⅴ　東郷遺跡　（第35次調査）
Ⅵ　八尾南遺跡　（第７次調査）

１９９３年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

正　誤　表

（財）八尾市文化財調査研究会報告４１

頁	行	誤	正
１６２	28～29	堰	用途不明の木製品（堰？）
１７５	81	堰	用途不明の木製品（堰？）
１７６	８	ＳＤ－４０１	ＳＤ－４０２

㈶八尾市文化財調査研究会報告41

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

Ⅰ　久宝寺遺跡（第４次調査）

Ⅱ　小阪合遺跡（第19次調査）

Ⅲ　小阪合遺跡（第20次調査）

Ⅳ　東郷遺跡（第33次調査）

Ⅴ　東郷遺跡（第35次調査）

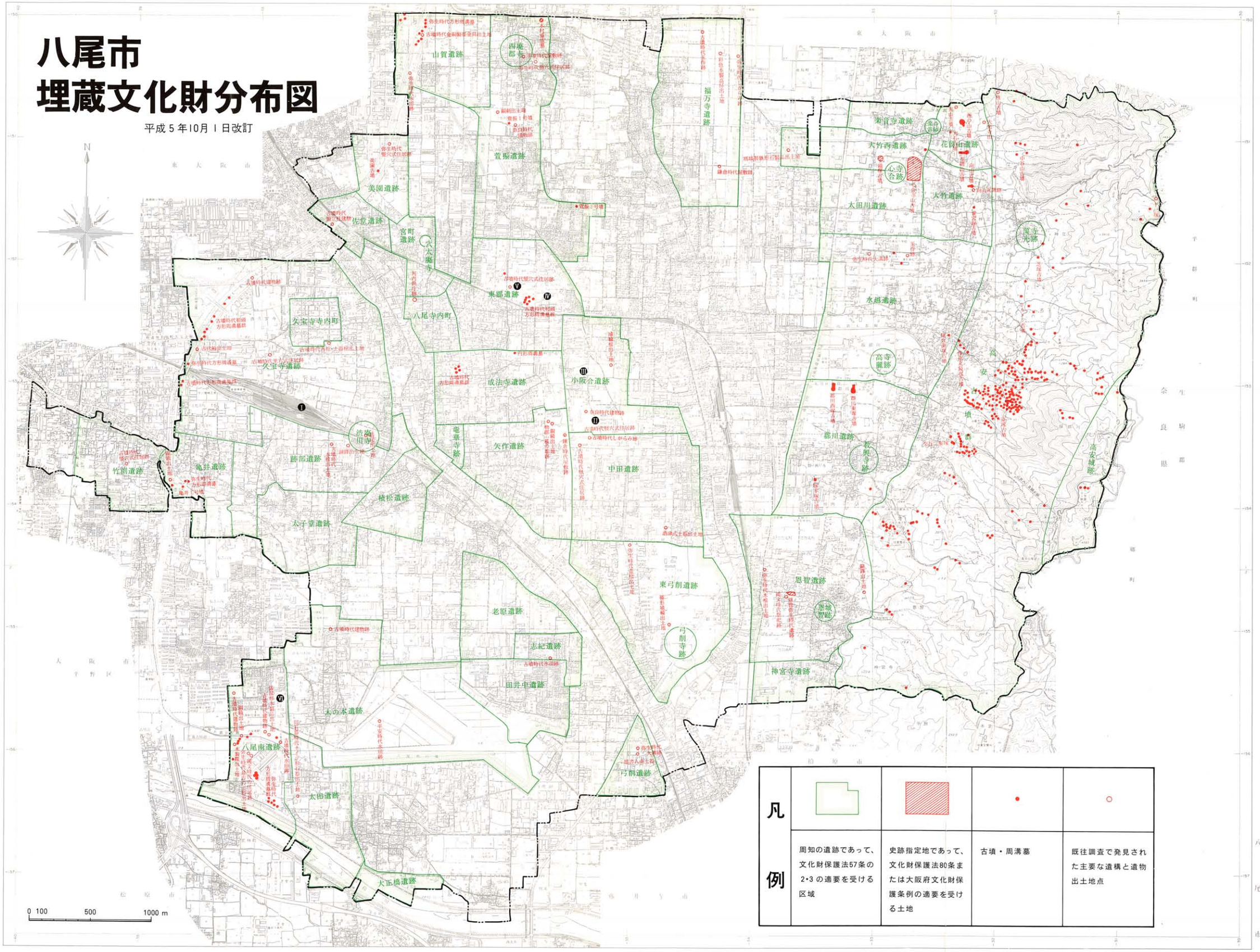
Ⅵ　八尾南遺跡（第７次調査）

１９９３年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成５年10月１日改訂



はしがき

八尾市の位置する河内平野は、古来より幾度となく旧大和川の氾濫を受けながら、その自然環境のもと、豊かな土壌に育まれてきた地域であります。この平野部には古来より先人達が生活するうえで築いてきた貴重な文化遺産が数多く埋蔵されております。また同市の東部に連なる信貴生駒山系の西麓部にも平野部と同様、数多くの文化遺産が埋蔵されています。

近年八尾市では、大小様々な分野での都市開発事業が進められるようになり、21世紀に向け近代都市へと大きく変貌しようとしております。しかし、こうした都市開発は便利さや豊かさを与えてくれる反面、先人達の数々の足跡である文化遺産を破壊する危険な面を持っています。確かに一部の遺跡では整備され保存・保護されているとはいえ、そのほとんどは痕跡を止めず消滅していきます。そこで、私共では「開発の波」に呑まれ、失われていく貴重な文化遺産を後世の人々へ伝承することが責務であると認識し、破壊される遺跡については発掘調査を実施して記録保存に努めております。

今回、昭和61年度に実施しました八尾南遺跡（第７次）、平成元年度に実施しました東郷遺跡（第33次）、平成２年度に実施しました久宝寺遺跡（第４次）、小阪合遺跡（第19次）、東郷遺跡（第35次）、平成３年度に実施しました小阪合遺跡（第20次）の調査・整理が完了しましたので報告書を刊行する運びとなりました。本書が学術研究及び本市の地域史の資料として、さらに文化財保護への啓発普及に活用して頂ければ幸いであります。

末筆となりましたが、調査においてご協力いただきました関係各位の皆様方に深くお礼申し上げますとともに、今後ともより一層のご理解、ご支援を賜りますようお願いいたします。

平成６年３月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 福 島 孝

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が昭和61年度・平成元年度・平成２年度・平成３年度に実施した発掘調査成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現場終了後に着手し、平成５年度をもって終了した。

1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市市役所発行の2,500分の１（昭和57年11月１日）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成３年４月１日改訂）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。

1．本書で用いた方位は磁北及び国土座標の真北を示している。

1．遺構は下記の略号で表した。

竪穴住居－ＳＩ　掘立柱建物－ＳＢ　溝－ＳＤ　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　小穴－ＳＰ
土器集積－ＳＷ　落込み－ＳＯ　自然河川－ＮＲ

1．遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器・埴輪・石類－白、須恵器・陶磁器－黒、木製品－斜線。

1．各調査に際して発掘調査、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　久宝寺遺跡（第４次調査）……1
Ⅱ　小阪合遺跡（第19次調査）……23
Ⅲ　小阪合遺跡（第20次調査）……45
Ⅳ　東郷遺跡（第33次調査）……69
Ⅴ　東郷遺跡（第35次調査）……101
Ⅵ　八尾南遺跡（第７次調査）……115

Ⅰ　久宝寺遺跡第４次調査（ＫＨ90－４）

例　　言

1．本書は、八尾市亀井及び渋川で行ったＪＲ久宝寺駅駅舎改築工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第91号　平成元年９月28日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、日本国有鉄道清算事業団近畿支社から委託をうけて実施したものである。

1．本調査は、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第４次調査である。

1．現地調査は、当調査研究会　坪田真一を担当者として、平成２年４月２日に着手し、同年６月12日に終了した。調査面積は87.1㎡である。

1．現地調査には、岡田聖一・坂下　学・濱田千年・若竹慶弘の参加を得た。

1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和惠・都築聡子・山内千惠子の参加を得た。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を田島・山内が作成した。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過……1

第２章　周辺の地理的・歴史的環境……1

第３章　調査概要……4

　第１節　調査方法……4

　第２節　基本層序……5

　第３節　検出遺構と出土遺物……7

第４章　出土遺物観察表……20

第５章　まとめ……22

挿　図　目　次

第１図　久宝寺遺跡調査地位置図（Ｓ＝１／15000）…… 2
第２図　調査地位置図（Ｓ＝１／2500）…… 3
第３図　調査区設定図（Ｓ＝１／250）…… 4
第４図　調査区北壁土層断面図（Ｓ＝縦１／40、横１／160）…… 6
第５図　第１～４次面遺構図（Ｓ＝１／200）…… 8
第６図　第５～７次面遺構図（Ｓ＝１／200）…… 9
第７図　１区　第３層出土遺物（Ｓ＝１／４）……10
第８図　１区　第３次面平面図（Ｓ＝１／50）……11
第９図　２・３区　第３次面遺構出土遺物（Ｓ＝１／４）……12
第10図　２区　第３次面平面図（Ｓ＝１／50）……13
第11図　３区　第３次面平面図（Ｓ＝１／50）……14
第12図　１区　第４次面ＳＤ1401遺物出土状況図（Ｓ＝１／30）……16
第13図　１区　第４次面ＳＤ1401出土遺物①（Ｓ＝１／４）……17
第14図　１区　第４次面ＳＤ1401出土遺物②（Ｓ＝１／４・１／６）……18
第15図　ＮＲ1501出土遺物（Ｓ＝１／４）……19

表　目　次

表１　久宝寺遺跡内当調査研究会発掘調査一覧表…… 2
表２　１区　第１次面溝（ＳＤ1101～1106）法量表…… 7
表３　２区　第１次面溝（ＳＤ2101～2106）法量表…… 7
表４　１区　第３次面溝（ＳＤ1301～1305）法量表……11
表５　１区　第３次面ピット（ＳＰ1301～1310）法量表……12
表６　２区　第３次面溝（ＳＤ2301～2304）法量表……12
表７　２区　第３次面ピット（ＳＰ2302～2304）法量表……13
表８　３区　第３次面溝（ＳＤ3301～3303）法量表……14
表９　３区　第３次面ピット（ＳＰ3301～3303）法量表……14
表10　３区　第３次面ピット（ＳＰ3304～3308）法量表……15

図　版　目　次

図版一　調査地全景（西から）
　　１区　第３次面（東から）
図版二　２区　第３次面（東から）
　　３区　第３次面（東から）
図版三　１区　第４次面ＳＤ1401上層遺物出土状況（北から）
　　１区　第４次面ＳＤ1401（東から）
図版四　１区　ＮＲ1501遺物(40)出土状況（西から）
　　３区　ＮＲ1501遺物(42)出土状況（上が南）
図版五　２区　ＮＲ1501（西から）
　　２区　第６次面（東から）
図版六　出土遺物
図版七　出土遺物

第１章　調査に至る経過

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画では、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井町・渋川町がその範囲となっており、さらに西側の大阪市・北側の東大阪市に広がっている。

遺跡発見の契機は、昭和10年に行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことにさかのぼる。その後、昭和48年以降、（財）大阪文化財センターによる近畿自動車道関連の調査（以下、近畿道調査）をはじめ、（財）東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が実施されており、当遺跡は２km四方にもおよぶ縄文時代後期～近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

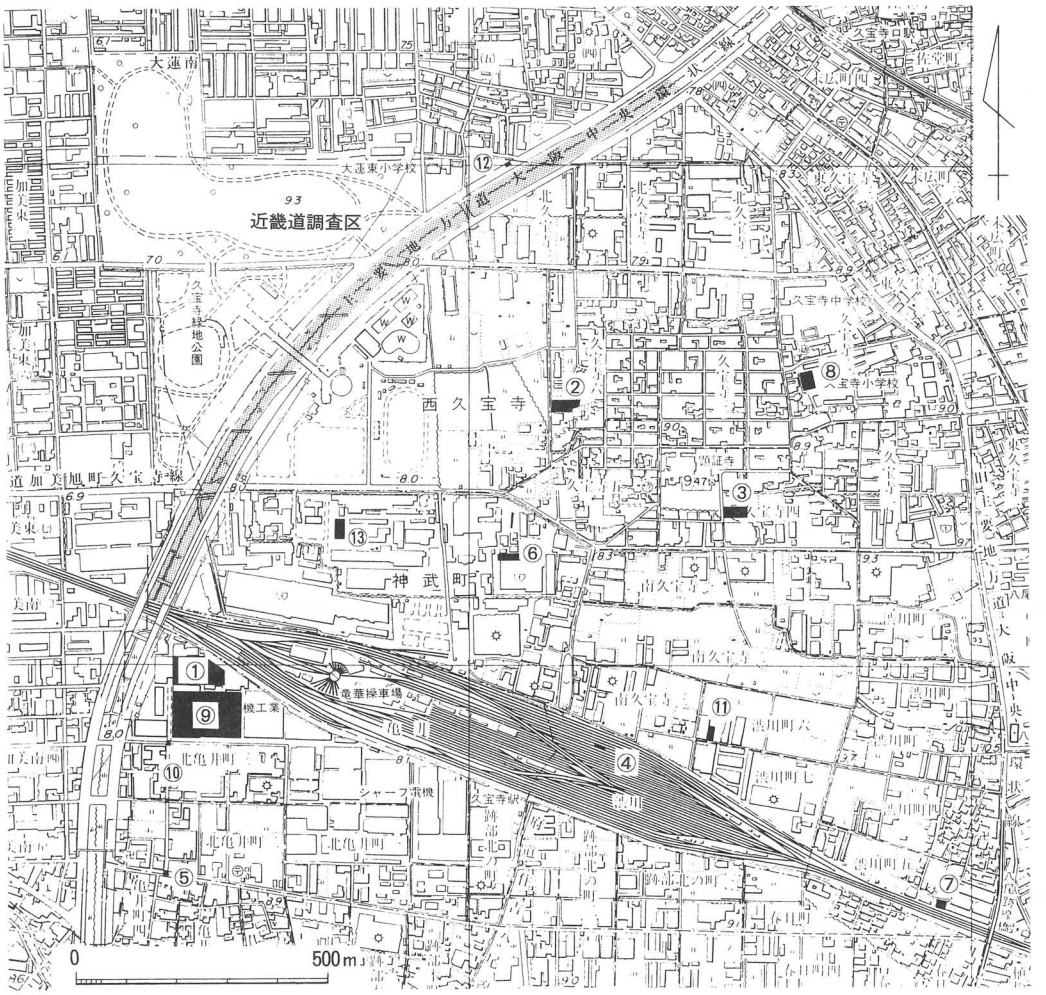
このような情勢下、日本国有鉄道清算事業団近畿支社より、八尾市亀井及び渋川の鉄道敷地内において、ＪＲ久宝寺駅の駅舎改築工事を行う旨の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあることから、昭和63年８月・11～12月、工事予定地内に５ｍ×５ｍのグリッドを７箇所設定し、試掘調査を行った。[註] その結果同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、工事により遺構の破壊が予想される部分を対象に、発掘調査を実施することが両者で合意された。発掘調査にあたっては、事業者・同文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

第２章　周辺の地理的・歴史的環境

久宝寺遺跡の位置は、地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・亀井遺跡・太子堂遺跡が存在する。なお西側の大阪市域では加美遺跡として調査が行われているが、両遺跡は同一の遺跡として捉えられている。

当遺跡の西部から北部については、昭和55年～60年に実施された近畿道調査や、（財）大阪市文化財協会による加美遺跡の調査等により、遺跡の様相は解明されつつあるといえる。ここではまず近畿道調査の成果について簡単に述べる。

生活の痕跡が確認されるのは縄文時代後期からであり、後期・晩期の河川・遺物包含層があげられ、河川では足跡が検出されている。弥生時代では溝・ピット等の集落遺構の他、しがらみ・杭列を施した河川がある。中期では方形周溝墓も検出されている。後期には大規模な河川



第１図　久宝寺遺跡調査地位置図（S＝１／15000）

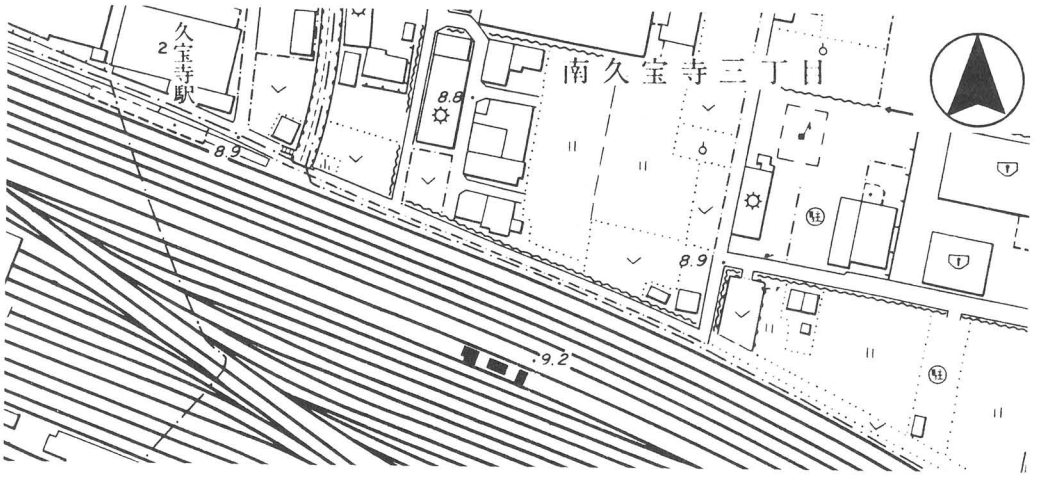
	第○次調査	調　査　地	調　査　期　間
①	第１次	北亀井町３丁目１	昭和60年４月２日～６月25日
②	第２次	久宝寺６丁目226	昭和63年２月16日～２月29日
③	第３次	久宝寺４丁目74	昭和63年12月５日～12月28日
④	第４次	亀井町及び渋川町	平成２年４月２日～６月12日
⑤	第５次	北亀井町２丁目地内	平成２年４月15日～４月22日
⑥	第６次	神武町17・20～27番地	平成２年９月３日～10月12日
⑦	第７次	渋川町５丁目33番地	平成２年12月17日～12月21日
⑧	第８次	久宝寺２－２－33	平成３年６月20日～７月27日
⑨	第９次	北亀井３丁目１番72	平成３年８月１日～12月３日
⑩	第10次	北亀井町２・３丁目地内	平成３年10月２日～10月22日
⑪	第11次	渋川町６丁目34・35番地	平成３年10月７日～10月19日
⑫	第12次	北久宝寺３丁目地内	平成３年11月29日～10月19日
⑬	第13次	神武町２番35号	平成３年12月16日～４年１月23日

表１　久宝寺遺跡内当調査研究会発掘調査一覧表（平成３年度まで）

堆積が確認されている。古墳時代前期では数か所の集落域と墓域が確認されている。また注目される遺物として準構造船の一部が出土している。中期では韓式系土器を多量に出土した集落が確認され、渡来系氏族あるいはそれに関連する集団の居住地と推定されている。飛鳥・奈良～平安時代では、ほぼ全域にわたって掘立柱建物群・井戸等の集落遺構、水田が検出されている。これらは現在の条里地割に一致するものである。中世以降は耕作地となっている。

これらの多大な調査成果に対して、遺跡の中央部や東部、また今回の調査地にあたる南部地域については、小規模な発掘調査が数件行われているにすぎず、遺構の広がり等を把握するまでには至っていない。次に、この地域で当調査研究会が行った調査の成果について述べる。

弥生時代では中期の遺物包含層が⑥で確認されており、遺存状況の良好な土器が出土している。付近に当時の集落が存在するのは確実であろう。後期では⑧で溝・土坑等の集落遺構が検出されている。古墳時代では前期の集落遺構が⑥・⑧で、また墓域では方形周溝墓が③で、前方後方墳が⑨で検出されている。この時期の遺構は、西部や北部の調査では数面の遺構面が確認され、また遺物面でも多大な調査成果が得られている。これに比して南部や東部では遺構・遺物ともに非常に希薄なものであるといえる。中期から後期・終末期の集落遺構としては、南部の⑪で土坑・溝等が検出されているのみであり、南東部の⑦では後期の遺物包含層が確認されている。中央部付近ではこの時期の遺構・遺物は確認されておらず、また西部でも遺構・遺物は減少しており、前期とは逆の様相が指摘できる。南部から東部では中期頃から土地が安定してゆき、居住域となっていったのであろう。奈良時代では②・⑥・⑦で遺物包含層が確認されている。平安時代では③で水田、⑪で耕作溝が、⑥で遺物包含層が確認されている。



第２図　調査地位置図（S＝１／2500）

第３章　調査概要

第１節　調査方法

今回の調査は建物基礎部分の調査であり、調査区は３か所に分かれており、東西方向に約３ｍ間隔で並んでいる。地区名は西から１～３区とし、調査面積は１区－33.8㎡・２区－29.8㎡・３区－23.5㎡で、計87.1㎡である。

掘削に際しては、現地表下約1.0ｍまでを機械掘削とし、以下の約5.0ｍを層理にしたがって人力掘削により調査を進めた。なお調査は１～３区を並行して行った。

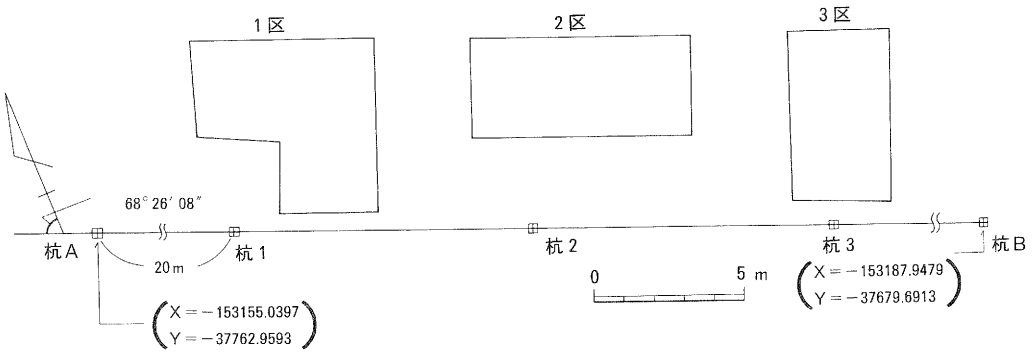
平面図の基準については、調査区の南側に東西方向の任意の基準ラインを設けることとし、まず基準杭（杭Ａ・Ｂ）を打設した。そして杭Ａから東に20ｍと、さらに10ｍ間隔で杭（杭１～３）を打設し、各調査区の基準杭とした。なお将来の周辺での調査との関係を考慮して、杭Ａ・Ｂには国土座標Ⅵ系の座標値を設け、この基準ラインが使用できるようにした。

杭Ａ（Ｘ＝－153155.0397　Ｙ＝－ 37762.9593）　　杭Ｂ（Ｘ＝－153187.9479　Ｙ＝－ 37679.6913）

遺構名は下記のように、略号＋四桁の数字に統一した。また複数区にまたがる遺構については、最西の地区名を冠した。

Ｓ Ｄ １ １ ０ １

- ０１：番　号
- １：遺構面
- １：地　区



第３図　調査区設定図（Ｓ＝１／250）

第２節　基本層序

各調査区の北壁を基本層序とした。詳細な断面図は第４図に掲載したが、ここでは主に各遺構面間の土層を、土質を中心として基本層序とした。

第１層－盛土。主に機械掘削により除去した部分である。地表面の標高は約9.3ｍを測る。１区から２区には下部に旧耕土が遺存していたが、３区ではみられなかった。

第２層－黄褐灰色系粘質土～砂質土。東部の３区では砂質土となっている。古墳時代後期～近世の遺物を含んでいる。この上面が第１次面であり、標高は8.2ｍ～8.4ｍを測る。

第３層－灰褐色系砂混じり粘質土～砂質土。第２層と同様、東部ほど砂質になっており、また層厚が増している。古墳時代後期～中世の遺物を含んでいる。この上面が第２次面で、標高は7.7ｍ～8.0ｍを測る。

第４層－灰黄褐色系砂混じり粘質土。１区から２区西部にみられ、古墳時代後期～平安時代の遺物を含んでいる。

第５層－灰黄色系粘質シルト。２区東部から３区にみられた。第４層・第５層の上面が第３次面であり、標高は7.5ｍ～7.7ｍを測る。

第６層－黄灰褐色系粘質シルト～粘土。１区北部でのみ見られた。固くしまっており整地層とも考えられる。この上面が第４次面であり、標高は約7.3ｍを測る。

第７層－青灰色～暗灰色系の粘土～微砂。東部ほどシルト質・砂質となる。古墳時代中期の遺物を含んでいる。

第８層－黄褐色系粗砂。弥生時代後期から古墳時代前期頃の遺物を少量含んでいる。第７層・第８層は、ＮＲ1501の堆積土層で、河床面を第５次面とした。標高は5.9ｍ～6.8ｍを測る。

第９層－暗灰青色系粘土。植物遺体を多く含んでいる。東部では上層部分が灰色系微砂との互層状を呈している。遺物は検出されなかった。

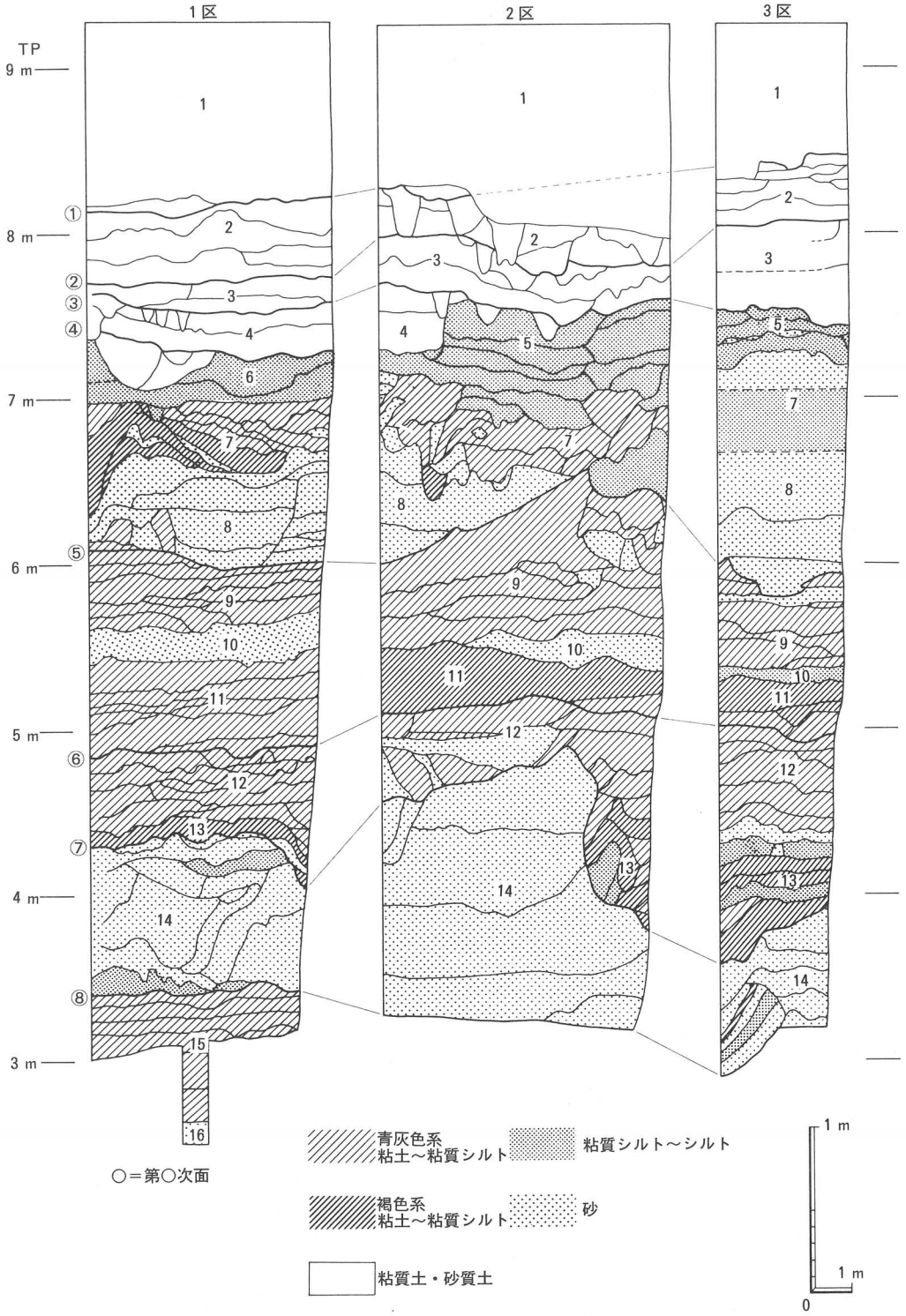
第10層－灰青色～灰黄色系の荒砂～細砂。西部ほど砂粒は荒くなっている。遺物は検出されなかった。ＮＲ1501の下層部分とも考えられる。

第11層－暗灰青色～暗褐色系粘土。東部ほど褐色系となっている。

第12層－暗青灰色系粘質シルト。２区では暗灰色系の砂との互層状を呈する。この上面が第６次面であり、標高4.8ｍ～5.1ｍを測る。

第13層－暗褐色～灰青色系のシルト～粘土の互層。植物遺体を多く含んでいる。弥生時代中期頃までの遺物を含んでいる。第12・13層がＮＲ1701の堆積土層で、河床面を第７次面とした標高は3.6ｍ～4.9ｍを測る。

第14層－暗灰黄色系荒砂。ＮＲ1801の堆積土で、河床面の標高は約3.4ｍを測る。摩滅した縄文土器片を含んでいる。



第４図　調査区北壁土層断面図（S＝縦１／40、横１／160）

第15層－暗緑灰色系の粘土・粘質シルトの互層。植物遺体を含んでいる。以下からは遺物は検出されなかった。

第16層－灰緑色系細砂。固く締まっている。

第３節　検出遺構と出土遺物

調査により、河川の床面を含め８面の遺構面（第１～８次面）を確認した。

〈第１次面〉

１区で溝６条（ＳＤ1101～1106）、２区で溝６条（ＳＤ2101～2106）、３区で落ち込み１基（ＳＯ3101）を検出した。

・ＳＤ1101～1106

１区北部で検出した南北方向に平行する溝群で、方位は北から東に約27度振っている。南部は削平されていると考えられる。断面皿状を呈し、埋土は暗灰黄色砂質土で、近世までの遺物を含んでいる。近世の鋤溝と考えられる。法量等は表１にまとめた。

ＳＤ	1101		1102		1103		1104		1105		1106	
検出長	0.8		2.1		2.1		2.3		2.3		2.3	(m)
幅	22		57		28		37		47		25	(cm)
深さ	5		5		3		3		3		3	(cm)
間隔		29		28		28		16		10		(cm)

表２　１区　第１次面溝（ＳＤ1101～1106）法量表

・ＳＤ2101～2106

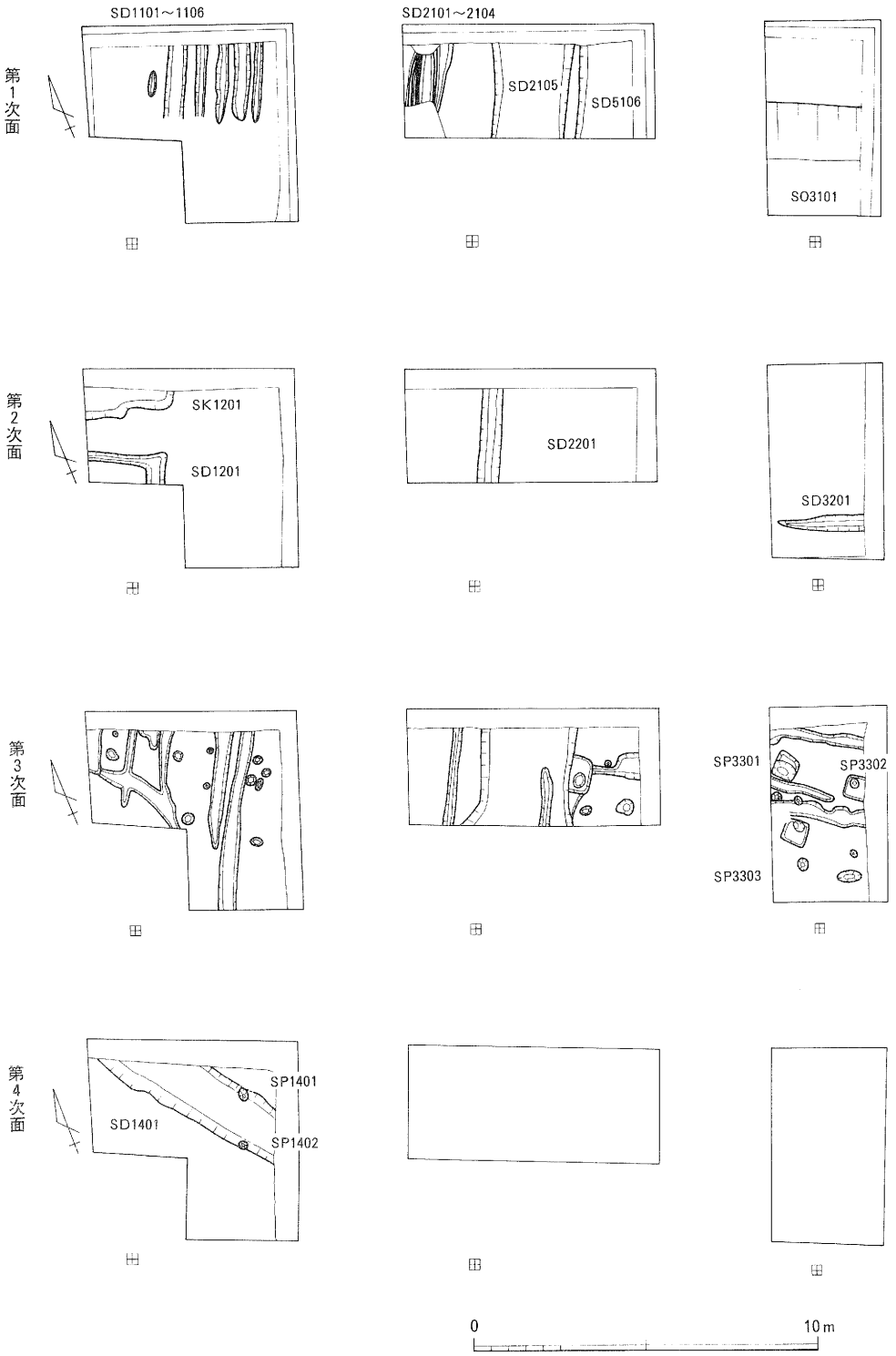
南北方向に平行して伸びる溝群で、西部のＳＤ2101～2104は１区の溝群と一連のものと考えられ、埋土は同様である。法量等は表２にまとめた。

ＳＤ	2101		2102		2103		2104		2105		2106	
検出長	1.8		1.5		1.5		2.1		2.8		2.7	(m)
幅	－		16		44		47		220		－	(cm)
深さ	5		5		3		3		3		3	(cm)
間隔		10		5		6		145		32		(cm)

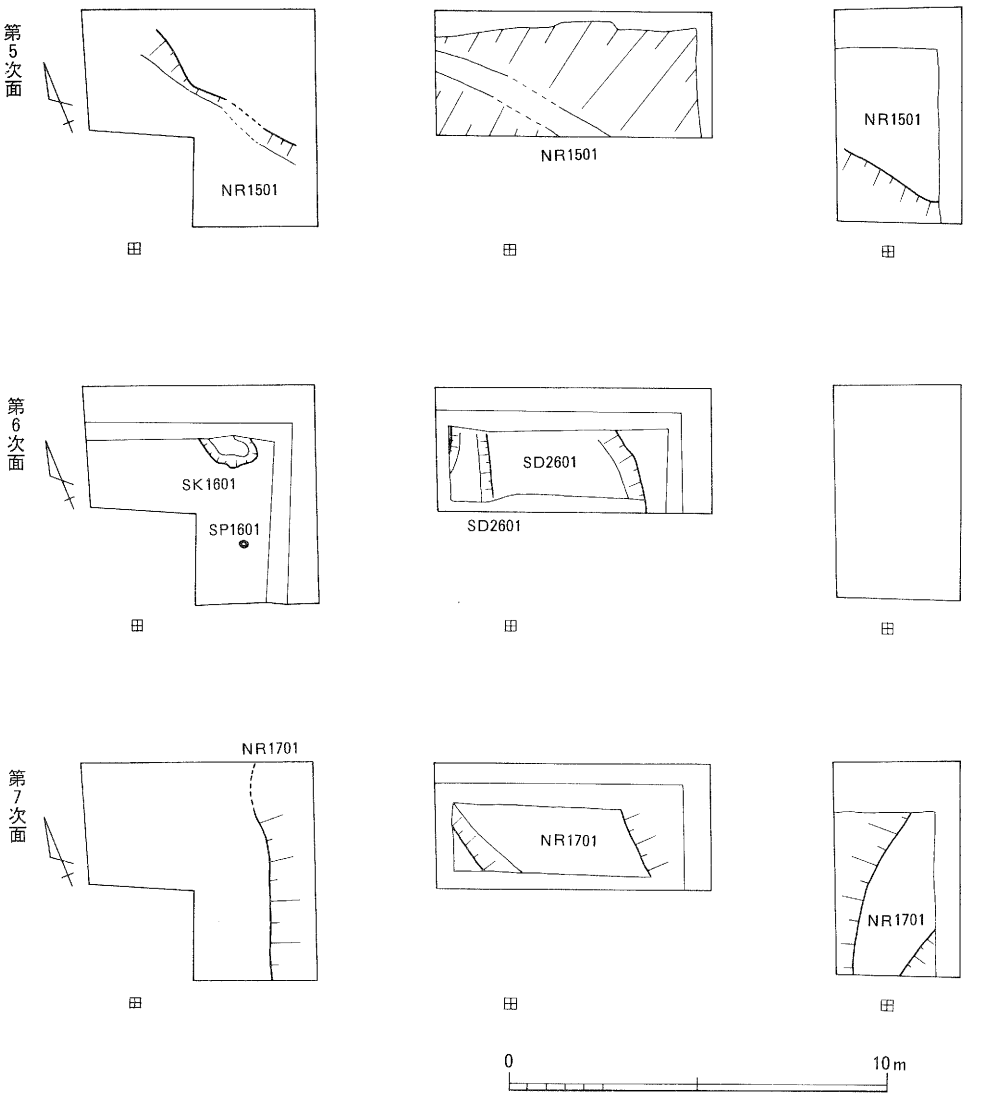
表３　２区　第１次面溝（ＳＤ2101～2106）法量表

・ＳＯ3101

３区の南半部を占め、北から南に落ち込んでいる。平面形は不明であるが、検出部分の掘形ラインは東西方向の直線的なものである。規模は南北3.3ｍ以上、東西3.1ｍ以上、深さ約0.5ｍを測る。埋土は上から黄褐色砂質土・灰色砂質土・灰褐色砂質土である。中世から近世頃の遺物が出土している。



第5図　第1～4次面遺構図（S＝1／200）



第６図　第５～７次面遺構図（S＝１／200）

〈第２次面〉

１区で土坑１基（ＳＫ1201）・溝１条（ＳＤ1201）、２区で溝１条（ＳＤ2201）、３区で溝１条（ＳＤ3201）を検出した。

・ＳＫ1201

１区北西角に位置し、調査区外に続くため平面形は不明である。規模は東西2.6ｍ以上、南北1.0ｍ以上、深さ約10㎝を測る。埋土は灰黄色細砂混じり粘質土で、出土遺物は細片のみで時期の特定できるものは無い。

・ＳＤ1201

ＳＫ1201の南側で検出した東西方向の溝で、東端で南方にほぼ直角に屈曲している。規模は幅26cm～55cm・深さ約10cmを測り、埋土は灰褐色粗砂混じり砂質土である。中世頃までの遺物を含んでいる。

・ＳＤ2201

南北方向に直線的に伸びる溝で、検出長約2.8ｍで、方向は北から東に約26度振っている。幅約60cm・深さ約10cmを測り、埋土はＳＤ1201と同様である。遺物は出土していない。

・ＳＤ3201

東西方向に直線的に伸びる溝で、検出長約2.5ｍ・幅約45cm・深さ約８cmを測り、埋土はＳＤ1201と同様である。遺物は出土していない。

ＳＤ1201・2201・3201は、その方向や埋土の状況から関連性が認められる。

〈第３次面〉

１区で土坑２基（ＳＫ1301・1302）・溝５条（ＳＤ1301～1305）・ピット10個（ＳＰ1301～1310）、２区で溝４条（ＳＤ2301～2304）・ピット４個（ＳＰ2301～2304）、３区で溝３条（ＳＤ3301～3303）・ピット８個（ＳＰ3301～3308）を検出した。

・ＳＫ1301

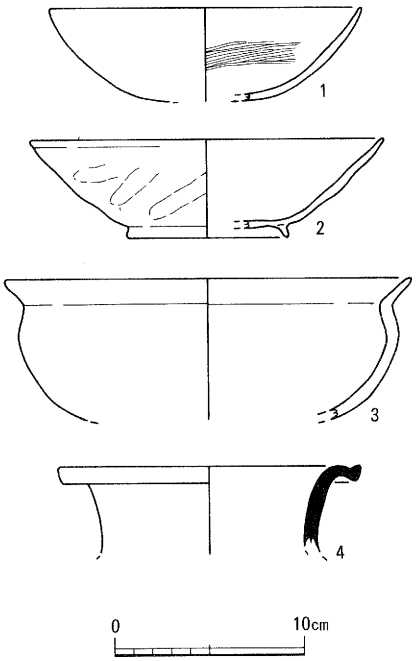
１区北西角に位置し、調査区外に続くため平面形は不明であるが、検出部分の形状は方形の角部にあたる。規模は東西0.45ｍ以上、南北1.3ｍ以上、深さ約５cmを測るが、調査区北壁部分では深さ約25cmと深くなっている。埋土は上層が黄灰色細砂混じり粘質土、下層が灰黄色粘質土である。出土遺物は細片のみで時期の特定できるものは無い。

・ＳＫ1302

平面不整形で、規模は東西0.6ｍ、南北0.6ｍ以上、深さ約５cmを測り、埋土は黄灰色細砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。

・ＳＤ1301～1305

ＳＤ1301～1304は南北方向に平行して直線的に伸びる溝で、いずれも断面逆台形を呈する。ＳＤ1305は北西－南東方向に伸びる弧状を呈し、ＳＤ1301・1302と合流している。西端はＳＫ1301によっ



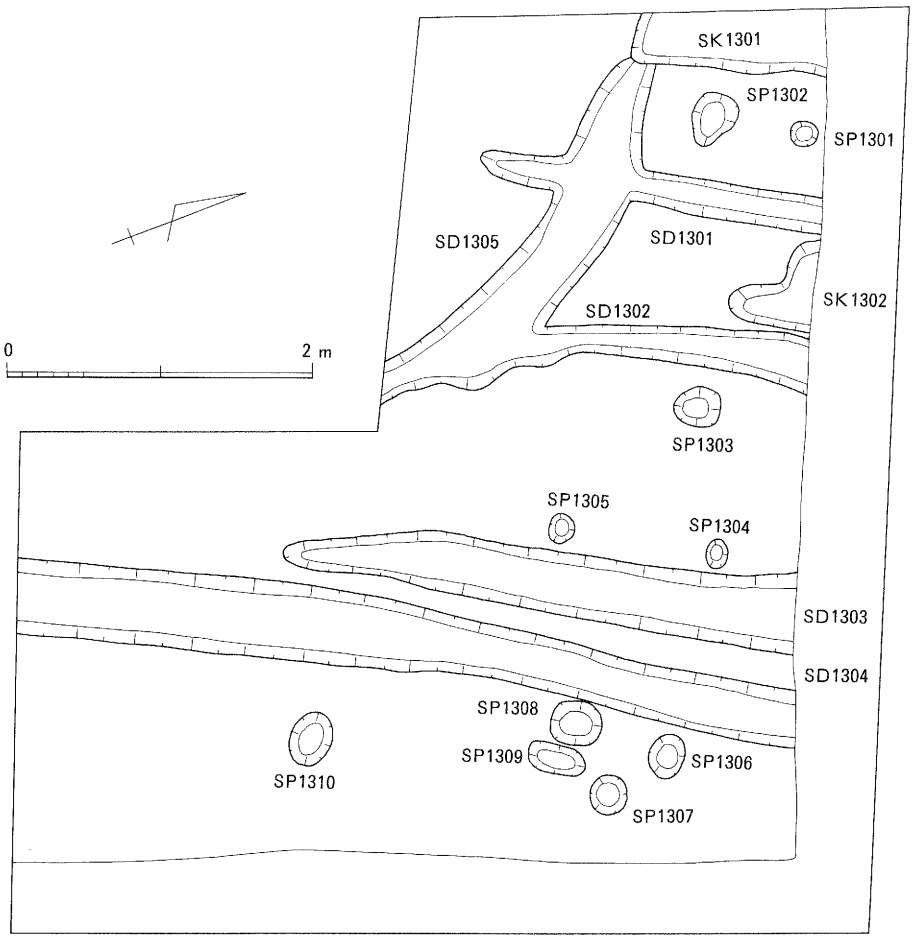
第７図　１区第３層出土遺物（Ｓ＝１／４）

て切られている。ＳＤ1301～1304から古墳時代後期～平安時代頃に比定される土器片が出土している。法量等は表４にまとめている。

ＳＤ	1301		1302		1303		1304		1305	
検出長	2.3		1.9		3.4		5.2		2.8	(m)
幅	20～25		18～36		39～55		34～51		24～44	(cm)
深さ	5～9		4～7		5～10		4～9		4～7	(cm)
間隔		74		135		20		－		(cm)
埋土	①		②		②		②		②	※

※①淡黄褐色細砂混じり粘質土　②灰黄褐色細砂混じり粘質土

表４　１区第３次面溝（ＳＤ1301～1305）　法量表



第８図　１区第３次面平面図（S＝１／50）

・ＳＰ1301～1310

これらのピットからは規則性は見いだせない。またいずれも深さ約５cm程度の浅いもので、

建物を構成する柱穴とは考え難い。ＳＰ1304～1308は、ＳＤ1303・1304の縁辺に位置し、これらの溝との何らかの関連が考えられる。法量等は表５にまとめた。

	平面形状	長辺×短辺×深さ（cm）	埋　　土
ＳＰ1301	円　　形	１８×１６×５	灰黄褐色細砂混じり粘質土
ＳＰ1302	不整円形	３７×２７×５	〃
ＳＰ1303	楕円形	３２×２６×５	〃
ＳＰ1304	楕円形	２０×１４×６	〃
ＳＰ1305	円　　形	２１×１７×９	〃
ＳＰ1306	円　　形	３０×２３×５	〃
ＳＰ1307	円　　形	２７×２４×５	暗灰黄色微砂混じり粘質土
ＳＰ1308	円　　形	３４×３０×４	灰黄褐色細砂混じり粘質土
ＳＰ1309	楕円形	３８×１９×４	〃
ＳＰ1310	楕円形	３７×２７×６	〃

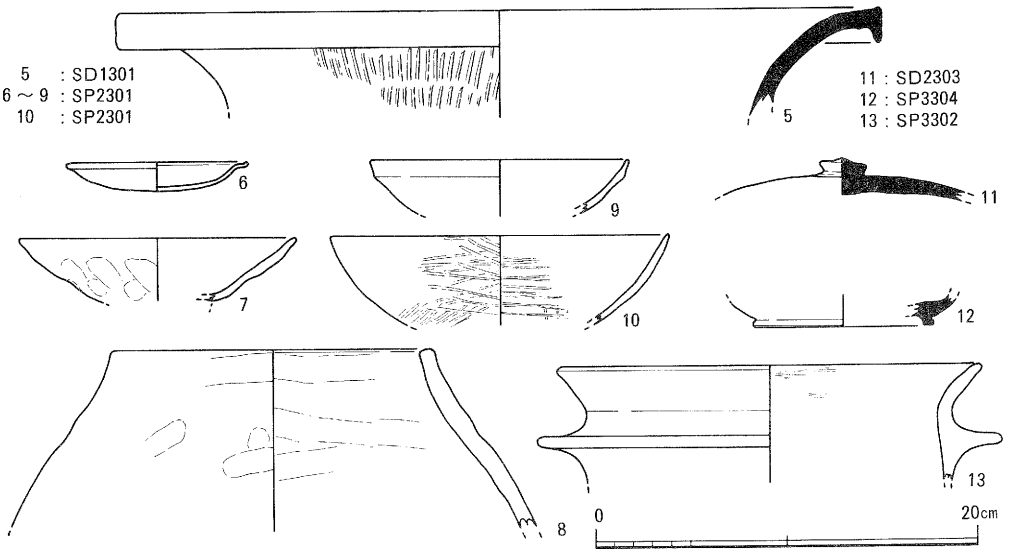
表５　１区　第３次面ピット（ＳＰ1301～1310）法量表

・ＳＤ2301～2304

ＳＤ2301と2302は平行する南北方向の溝で、間隔は約2.4ｍを測る。ＳＤ2304はこれらと直角方向の溝である。ＳＤ2303は前者と同一方向の溝であるが幅が広く、ＳＤ2302は当溝が埋没

	幅（cm）	深さ（cm）	埋　　土
ＳＤ1301	２４～３０	３～９	灰褐色細砂混じり粘質土
ＳＤ1302	２７～３７	３～５	灰褐色細砂混じり粘質土
ＳＤ1303	２７０～３２５	１０～１８	淡灰黄褐色粘質シルト
ＳＤ1304	２０～７３	３～５	灰色粘質土

表６　２区　第３次面溝（ＳＤ2301～2304）法量表



第９図　２・３区　第３次面遺構出土遺物（S＝１／４）

した後に上面に掘られている。ＳＤ2303から飛鳥～奈良時代に比定される杯蓋（11）が出土している。ＳＤ2304は東部で北側に広がり、幅が広くなっている。法量等は表６にまとめた。

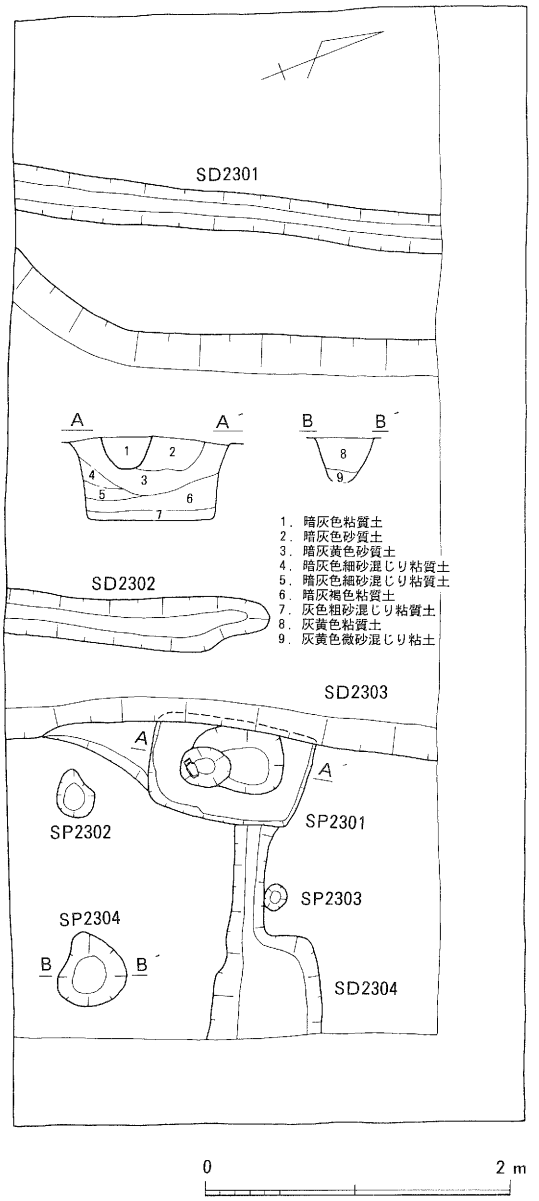
・ＳＰ2301

平面形はほぼ長方形で、西部はＳＤ2303によって削平されている。規模は1.06ｍ×0.68ｍ・深さ55㎝を測る。掘方は垂直に近いもので、底部は平坦である。内側面・底面が固く締まっており、叩き締められている可能性がある。中央やや南寄りで、平面33㎝×26㎝の楕円形で深さ20㎝を測る柱根部が確認された。掘立柱建物を構成する柱穴と考えられる。

遺物は柱根部から黒色土器椀(10)、掘方内上層からは完形のいわゆる「て」の字口縁の土師質皿（６）他が出土している。時期は平安時代中頃以降と考えられる。

・ＳＰ2302～2304

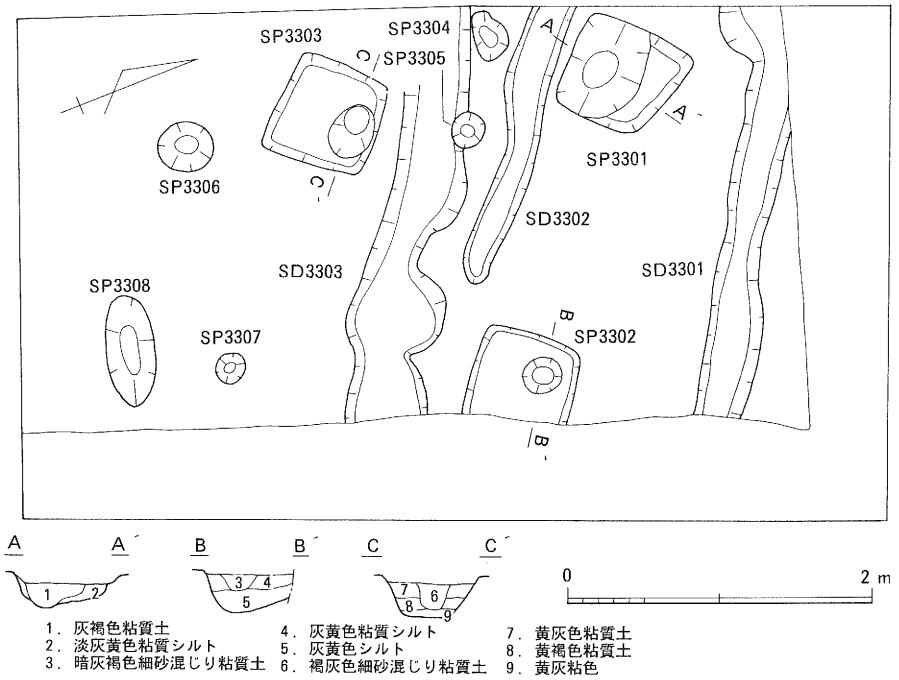
ＳＰ2304が深さ30㎝を測り、ＳＰ2301と連続して掘立柱建物を構成する可能性がある。両者を結ぶラインの方位は北から西に約39度振っており、両者間の距離は約1.6ｍである。法量等は表７にまとめた。



第10図　２区第３次面平面図（S＝１／50）

	平面形状	長辺×短辺×深さ（㎝）	埋　　土
ＳＰ2302	不整円形	３２×２５×１０	灰色粘質シルト
ＳＰ2303	円　　形	１７×１５×　３	灰色粘質土
ＳＰ2304	不整円形	４８×４５×３０	灰黄色粘質土・灰黄色微砂混じり粘土

表７　２区　第３次面ピット（ＳＰ2302～2304）法量表



第11図　3区第3次面平面図（S＝1／50）

・ＳＤ3301～3303

3区北半部で検出した平行する東西方向の溝である。ＳＤ3303は掘形のラインに凹凸がみられる。ＳＤ3302と3303から古墳時代後期から平安時代頃の土器の細片が出土している。法量等は表8にまとめた。

	幅（cm）	深さ（cm）	埋　　土
ＳＤ3301	２５～４０	３～５	灰黄色粘質土
ＳＤ3302	１９～２９	３～６	灰褐色細粘質土
ＳＤ3303	３１～６４	５～８	〃

表8　3区　第3次面溝（ＳＤ3301～3303）法量表

・ＳＰ3301～3303

平面形はほぼ方形を呈し、掘立柱建物の柱穴と考えられる。ＳＰ3301と3302が連続すると考えられ、両者を結ぶラインの方位は北から東に約50度振っており、両者間の距離は約2.0ｍを測る。いずれのピットからも古墳時代後期から奈良時代頃の土器（13）が出土している。法量

	長辺×短辺×深さ（cm）	柱根部の長辺×短辺×深さ（cm）
ＳＰ3301	７５×６９×２４	６８×４８×２４
ＳＰ3302	６８×６５以上×２８	２６×２４×１３
ＳＰ3303	７１×７０×２８	３７×２８×２２

表9　3区　第3次面ピット（ＳＰ3301～3303）法量表

等は表９にまとめた。

・ＳＰ3304～3308

ＳＰ3307が、ＳＰ3303と連続して掘立柱建物を構成する可能性がある。両者を結ぶラインの方位は北から西に約39度振っており、これは２区のＳＰ2301とＳＰ2304を結ぶラインと平行している。両者間の距離は約1.8ｍである。ＳＰ3304と3308から奈良時代頃の土器の細片（12）が出土している。法量等は表10にまとめた。

	平面形状	長辺×短辺×深さ（cm）	埋　　土
ＳＰ3304	不定形	３３×２２×５	灰褐色粘質土
ＳＰ3305	円　形	２３×２０×５	〃
ＳＰ3306	円　形	３７×３４×６	〃
ＳＰ3307	円　形	２１×１９×５	〃
ＳＰ3308	楕円形	７５×３２×４	灰褐色粘質土・暗灰褐色粘質土

表10　３区　第３次面ピット（ＳＰ3304～3308）法量表

〈第４次面〉

１区で溝１条（ＳＤ1401）・ピット２個（ＳＰ1401・1402）を検出した。

・ＳＤ1401

北西－南東方向の直線的な溝で、方位は北から西に約39度振っている。規模は検出長6.0ｍ・幅約1.5ｍ・深さ15～30cmを測り、断面皿状で、埋土は上層が灰褐色微砂混じりシルト、下層が褐灰色微砂混じり粘質シルトである。古墳時代後期末から終末期に比定される遺物（14～39）が出土している。このうち（15・19・21・29～31）が上層出土である。

・ＳＰ1401

平面形は楕円形を呈し、規模は40×24cm・深さ約10cmを測り、埋土は上層が灰色微砂混じり粘土、下層が灰色微砂～シルトである。

・ＳＰ1402

平面形は不整円形を呈し、規模は29×24cm・深さ約16cmを測り、埋土は上から灰褐色粘質土・灰色粘質土・灰褐色粘質シルトである。

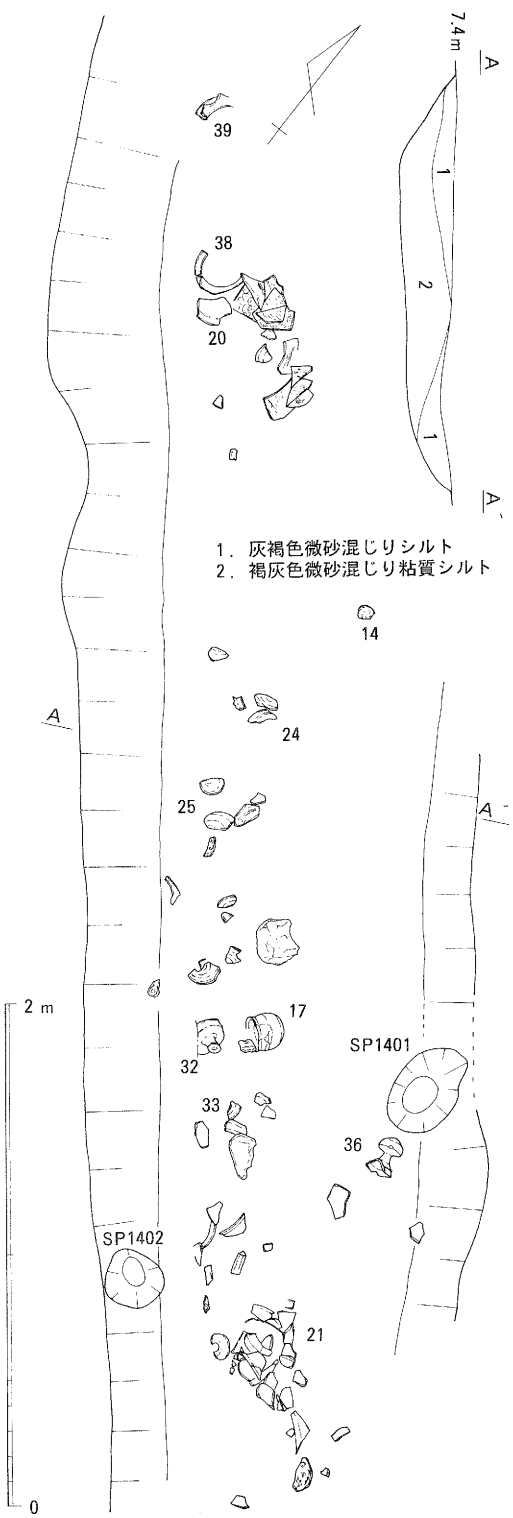
ＳＰ1401と1402は、ＳＤ1401埋没後に掘られている。

〈第５次面〉

河川１条（ＮＲ1501）を検出し、河床面を遺構面とした。

・ＮＲ1501

１区から３区までの調査区全域にわたる自然河川であり、第９層の暗灰青色系粘土の上面を河床面とした。河床面の標高は約6.0ｍを測る。検出長約24ｍを測るが、調査区内で肩は検出しえなかったため幅・深さ等は不明である。堆積土は上層が層厚40～50ｍを測る青灰色～暗灰



第12図　1区第4次面ＳＤ1401
遺物出土状況図（S＝1／30）

色系粘土～微砂、下層が層厚約60cmを測る黄褐色系粗砂である。上層は東部の3区ほど砂質となっている。2区の南西部が流心部となる可能性があり、河床面の凸凹の状況や堆積土の状況からは北西－南東の流路方向が窺える。

遺物は、上層部からは古墳時代中期に比定される須恵器（40～42）等が、下層部からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器（43～47）の他流木が出土している。

〈第6次面〉

1区で土坑1基（ＳＫ1601）・ピット1個（ＳＰ1601）、2区で溝1条（ＳＤ2601）・落ち込み1基（ＳＯ2601）を検出した。

・ＳＫ1601

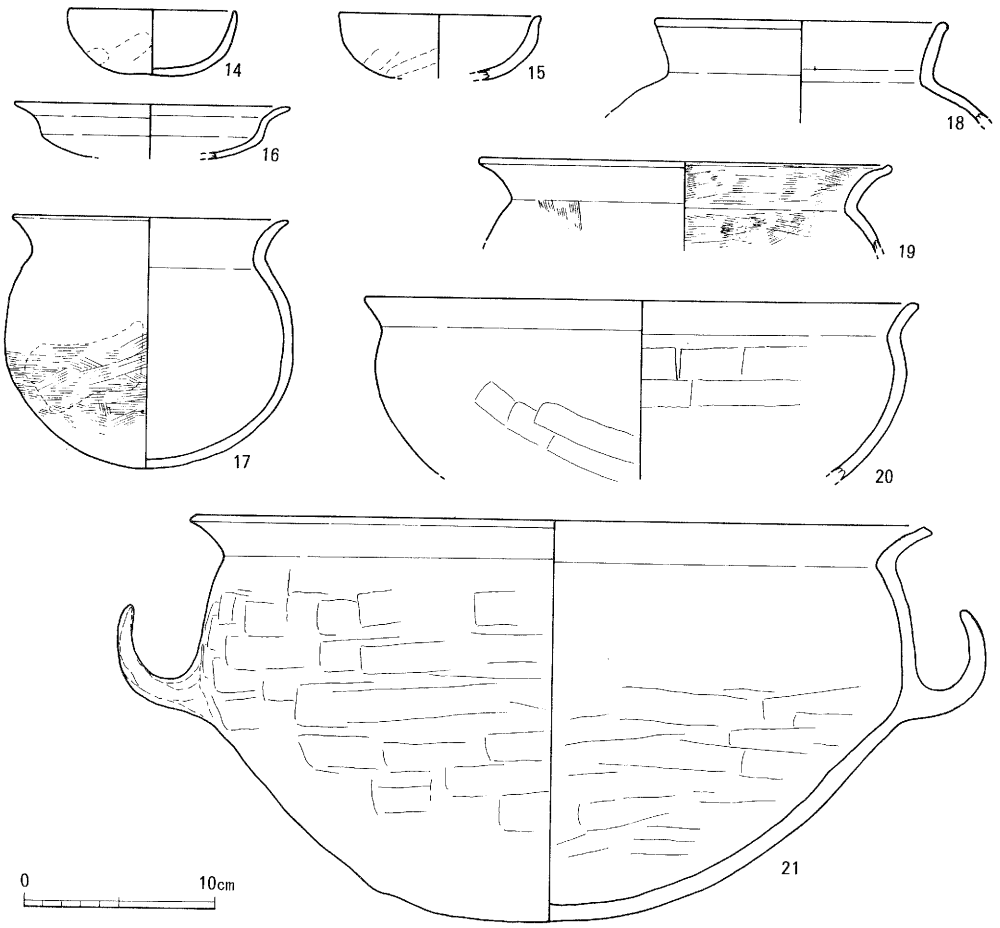
北部は調査区外に至り、平面形・規模は不明である。検出部分の平面形は不定形で、規模は1.5m×0.8m・深さ約10cmを測り、埋土は暗灰色粗砂混じりシルトである。時期不明の土器片が出土している。

・ＳＰ1601

平面形は20×17cmの楕円形を呈し、深さは10cmを測り、埋土は暗褐色細砂混じり粘土である。

・ＳＤ2601

2区西端で検出した南北方向の溝である。検出長約1.9m・幅約1.0m・深さ10～20cmを測り、埋土は上から灰黄色粘質シルト粒を含む暗灰褐色粘質シルト・暗褐色微砂混じり粘質シルト・灰青色シルト～微砂である。最上層は第6次面を覆う第11層が落ち込んだと考えられる層で、ここから縄文土



第13図　１区第４次面ＳＤ1401出土遺物①（S＝１／４）

器と考えられる摩滅した土器片が出土している。

・ＳＯ2601

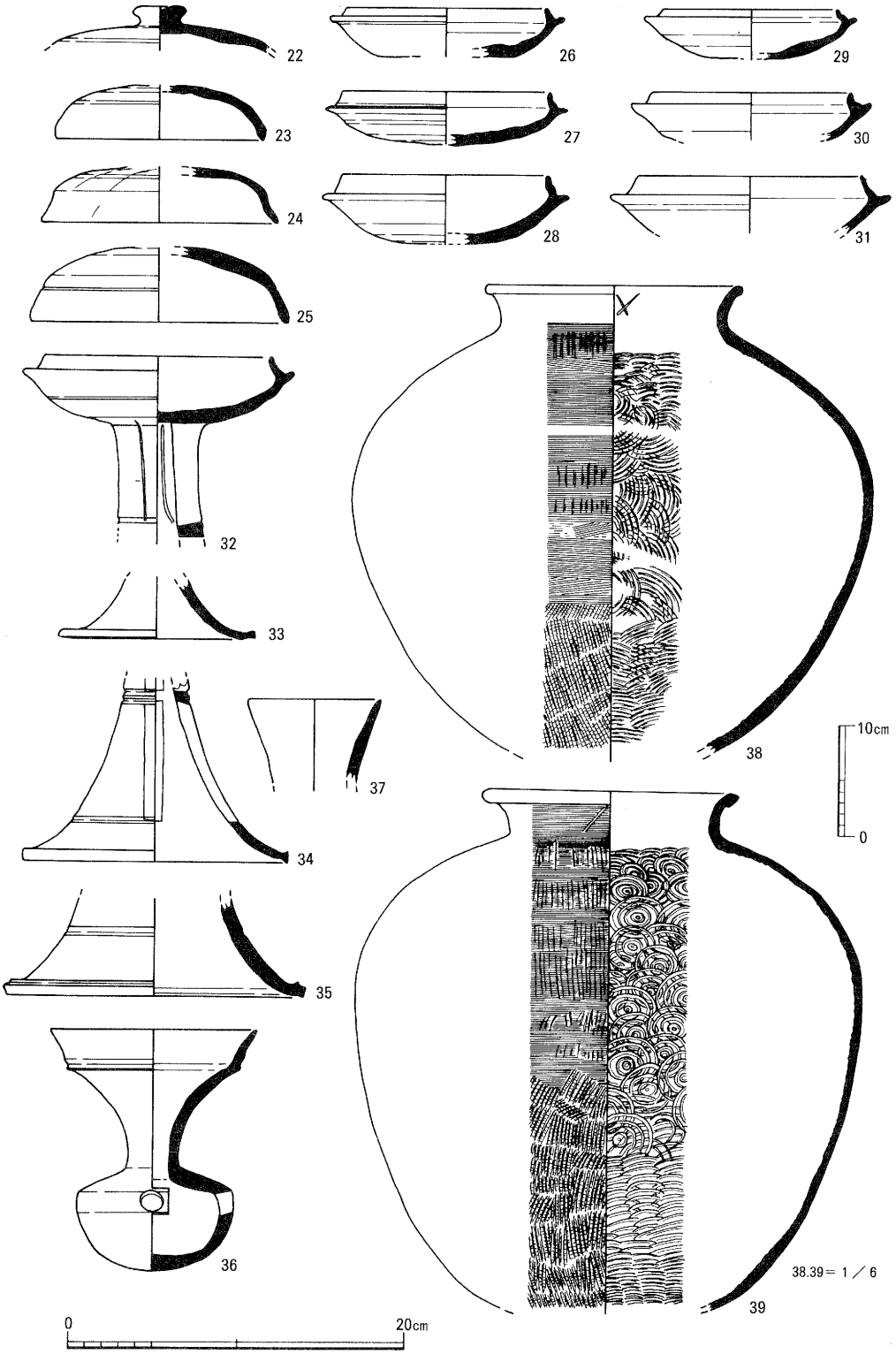
２区の東部から西に落ちる浅い落ち込みで、西端はＳＤ2601に削平されている。検出部の掘形ラインは南北方向の弧状を呈している。規模は東西3.6ｍ以上×南北2.0ｍ以上・深さ約15㎝を測り、埋土は上層が黒灰色粘土、下層が暗灰色微砂混じり粘土である。

〈第７次面〉

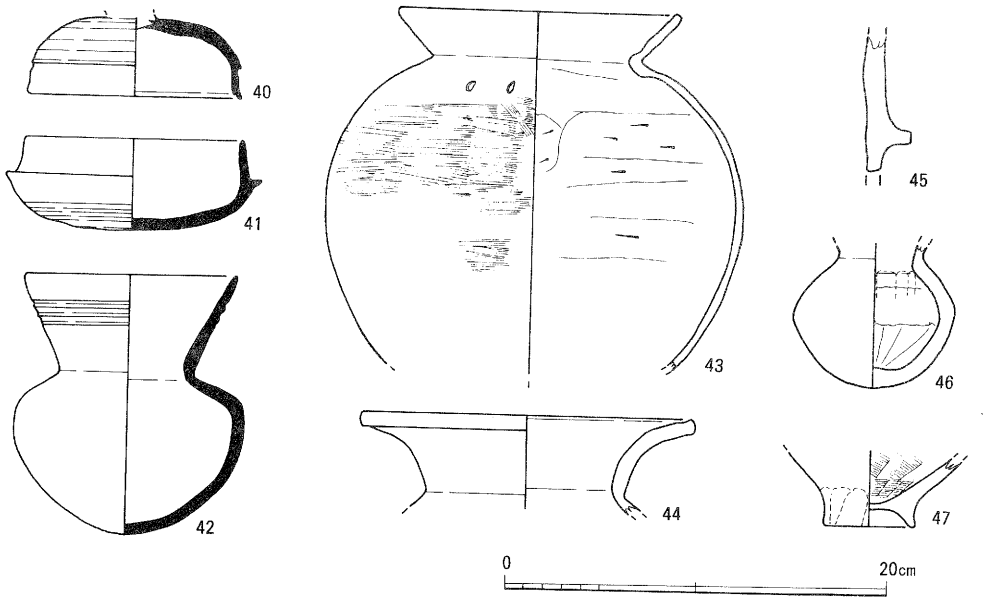
河川１条（ＮＲ1701）を検出し、河床面を遺構面とした。

・ＮＲ1701

１区から３区までの調査区全域にわたる自然河川であり、第14層の暗灰黄色系荒砂の上面を河床面とした。河床面の標高は約3.6ｍ～4.9ｍを測る。堆積土は上層が層厚約50㎝を測る暗青灰色系粘質シルト、下層が層厚約50㎝を測る暗褐色～灰青色系のシルト～粘土の互層で、下層は植物遺体を多く含んでいる。河床面は凹凸が著しく、２区の中央付近が最も高く、西になだ



第14図　1区第4次面ＳＤ1401出土遺物②（S＝1／4・1／6）



第15図　ＮＲ1501出土遺物（Ｓ＝１／４）

らかに、東に急激に落ち込んでいる。遺物は、弥生時代中期以前と考えられる摩滅した土器片が出土している。

〈第８次面〉

河川１条（ＮＲ1801）を検出した。

・ＮＲ1801

１区から３区までの調査区全域にわたる自然河川である。ＮＲ1701の河床面を形成する層厚1.0ｍ以上を測る第14層暗灰黄色系荒砂を堆積土としている。１区で確認した第15層暗緑灰色系粘土・粘質シルトの互層の上面を河床面とし、ほぼ平坦な面で、その標高は約3.4ｍを測る。河床面は東部ほど低くなっているようで、２・３区では第15層は確認していない。堆積土から縄文土器と考えられる摩滅した土器片が出土している。また１区での下層確認調査によると、この第15層は層厚約80㎝を測り、さらにその下で河川の流水堆積層と考えられる第16層灰緑色細砂を確認している。

第４章　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	出土地点	法量(cm)　口径 (復元値)　器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
1	黒色土器 椀	1区 第3層	(16.5)	黒灰色	密　1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	ヘラミガキ。A類。	⅙ 反転
2 六	土師器 椀	1区 第3層	(18.6) 5.3 高台径　(8.7)	茶橙色	密　1.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部指押え。	⅓ 反転
3	土師器 鉢	1区 第3層	(21.4)	茶橙色	密　1.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	⅙ 反転
4	須恵器 壺	1区 第3層	(16.0)	淡灰色	密　1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。	口縁　⅙ 反転
5 六	須恵器 甕	1区 SD1301	(40.0)	淡灰青色	密　1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口頸部外面ナデ、内面回転ナデ、頸部外面平行タタキ、内面同心円タタキ残る。	極小 反転
6 六	土師器 皿	2区 SP2301	9.4 1.6	乳灰茶色	密　2.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。	完形
7	土師器 椀	2区 SP2301	(14.4)	茶橙色	密　1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面指押え、内面ヨコナデ。	⅙ 反転
8 六	土師器 甕	2区 SP2301	(16.7)	茶灰色 灰褐色	密　1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面指押え、内面ナデ。内面煤付着。	口縁　⅙ 反転
9	土師器 鉢	2区 SP2301	(13.6)	茶褐色	密　1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	口縁　⅙ 反転
10	黒色土器 椀	2区 SP2301 柱根部	(17.9)	黒灰色	密　0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	ヘラミガキ。B類。	⅙ 反転
11	須恵器 杯蓋	2区 SD2303	つまみ径　2.5 つまみ高　1.0	淡灰色	密　1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。	口縁　⅙ 反転
12	須恵器 杯身	3区 SP3304	高台径　(9.6)	灰色	密	良好	回転ナデ。	極小 反転
13 六	土師器 羽釜	3区 SP3302	(22.4) 鍔径　(24.6)	淡茶色	密	良好	ナデ。口縁部内面にハケ残る。	極小 反転
14 六	土師器 杯	1区 SD1401	8.6 3.5	淡茶橙色	密　1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部ナデ。底体部外面指押え、内面ナデ。	ほぼ完形
15	土師器 杯	1区 SD1401	(10.5)	茶橙色	密　1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ナデ。底体部外面指押え、内面ナデ。	⅓ 反転
16	土師器 鉢	1区 SD1401	(14.4)	茶橙色	密　1.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	不明。	⅙ 反転
17 六	土師器 甕	1区 SD1401	9.5 13.4 底径　3.4	淡橙色	やや粗　1.0㎜以下の砂粒を含む。	やや良好	口縁部～肩部ヨコナデ。底部体部外面ハケ、内面ナデ。体部外面黒斑。 体部最大径　15.1cm	ほぼ完形
18	土師器 甕	1区 SD1401	(15.1)	淡茶橙色	密　1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	やや良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。肩部ナデ。	口縁　½ 反転
19	土師器 甕	1区 SD1401	(21.5)	暗茶橙色	密　2.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。肩部ハケ。	口縁　¼ 反転
20	土師器 鉢	1区 SD1401	(29.0)	茶褐色	密　1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	口縁　⅙ 反転
21 六	土師器 把手付鍋	1区 SD1401	39.2 21.7	淡橙色	密　0.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	ほぼ完形
22	須恵器 杯蓋	1区 SD1401	つまみ径　3.0 つまみ高　1.1	灰色	密　5.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。	⅓

遺物番号 図版番号	器　種	出土地点	法量(cm) (復元値)　口径 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
23 六	須恵器 杯蓋	１区 SD1401	(12.2)	淡灰色	密　1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	⅓ 反転
24	須恵器 杯蓋	１区 SD1401	(14.0)	淡灰青色	密　1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリでヘラ記号あり。	½ 反転
25	須恵器 杯蓋	１区 SD1401	(15.2)	乳灰茶色	密　1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。	⅖ 反転
26	須恵器 杯身	１区 SD1401	(11.8)	灰色	密　1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。内外面灰かぶり、底部外面窯着痕あり。	⅙ 反転
27	須恵器 杯身	１区 SD1401	(12.4) 3.2 受部径　(14.4)	灰青色	密　1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	⅙ 反転
28	須恵器 杯身	１区 SD1401	(12.2) 4.2 受部径　(14.7)	淡灰色	密　1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	¼ 反転
29 六	須恵器 杯身	１区 SD1401	(10.4) 3.0 受部径　(12.8)	淡灰色	密　1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部内面中央部ナデ。底部外面窯着痕あり。外面自然釉。	½ 反転
30	須恵器 杯身	１区 SD1401	(11.8) 受部径　(14.4)	灰色	密　2.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	⅙ 反転
31	須恵器 杯身	１区 SD1401	(13.2) 受部径　(16.8)	灰青色	密　1.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	⅙ 反転
32	須恵器 高杯	１区 SD1401	13.4 受部径　16.2	灰色	密　3.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。脚柱部２方向２段の線状スカシ。	½
33	須恵器 高杯	１区 SD1401	底径　(9.8)	灰色	密　1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	裾部　½ 反転
34 七	須恵器 高杯	１区 SD1401	底径　(15.6)	灰黒色	密　1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。脚柱部３方向２段の長方形スカシ。	裾部　½ 反転
35 七	須恵器 高杯	１区 SD1401	底径　(17.7)	暗灰緑色 淡灰色	密　1.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。内面ナデ。内面灰かぶり。	極小 反転
36 七	須恵器 甕	１区 SD1401	(12.2)	灰青色	密　5.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	回転ナデ。底体部外面回転ヘラケズリ。体部上位に円孔。	口縁　½欠損 反転
37	須恵器 口縁部	１区 SD1401	(7.8)	灰青色	密　1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	極小 反転
38 七	須恵器 甕	１区 SD1401	23.0	灰色	密　2.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部回転ナデ。体部外面平行タタキ後上位回転カキ目、内面円弧タタキ。口縁部内面ヘラ記号。	口縁　⅙ 反転
39 七	須恵器 甕	１区 SD1401	23.0	灰青色	密　1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部回転ナデ。体部外面平行タタキ後上位～口縁部回転カキ目、内面同心円タタキ。口縁部内面ヘラ記号。	口縁　¾ 反転
40 七	須恵器 杯蓋	１区 NR1501	11.1	淡灰色	密　1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。	つまみ欠損 反転
41 七	須恵器 杯身	３区 NR1501	11.4 4.9 受部径　13.5	淡灰色	密　2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	完形
42 七	須恵器 直口壺	３区 NR1501	11.5 14.0 最大径　12.1	灰青色	密　2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	回転ナデ。口頸部外面３条の凹線。口頸部内面～肩部外面灰かぶり。	ほぼ完形
43 七	土師器 甕	１区 NR1501	14.8 最大径　21.9	黒色 暗褐色	密　0.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ、内面ヘラケズリ。 肩部外面圧痕文（５個以上）。	⅓
44	弥生 甕	１区 NR1501	(17.4)	淡灰茶色	やや粗　2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ナデ。	口縁　⅙ 反転
45	円筒埴輪	１区 NR1501		淡灰茶色	やや粗　5.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	不明。スカシあり。	極小

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
46 七	弥生 壺	2区 NR1501	最大径	8.5	茶橙色	密 1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	ナデ。	口縁部欠損
47	弥生 底部	1区 NR1501	底径	4.5	淡灰茶色	密	良好	体部外面平行タタキをナデ消し、内面ハケ。底部外面ナデで、指押え残る。	底部のみ

第5章　まとめ

今回の調査は調査面積も狭く、遺構の面的な広がりを捉えることは困難であったが、縄文時代から近世にわたる遺構・遺物を検出した。

第1・2次面は近世～中世頃の遺構面と考えられ、検出した遺構はいずれも農耕に関連するものと考えられる。

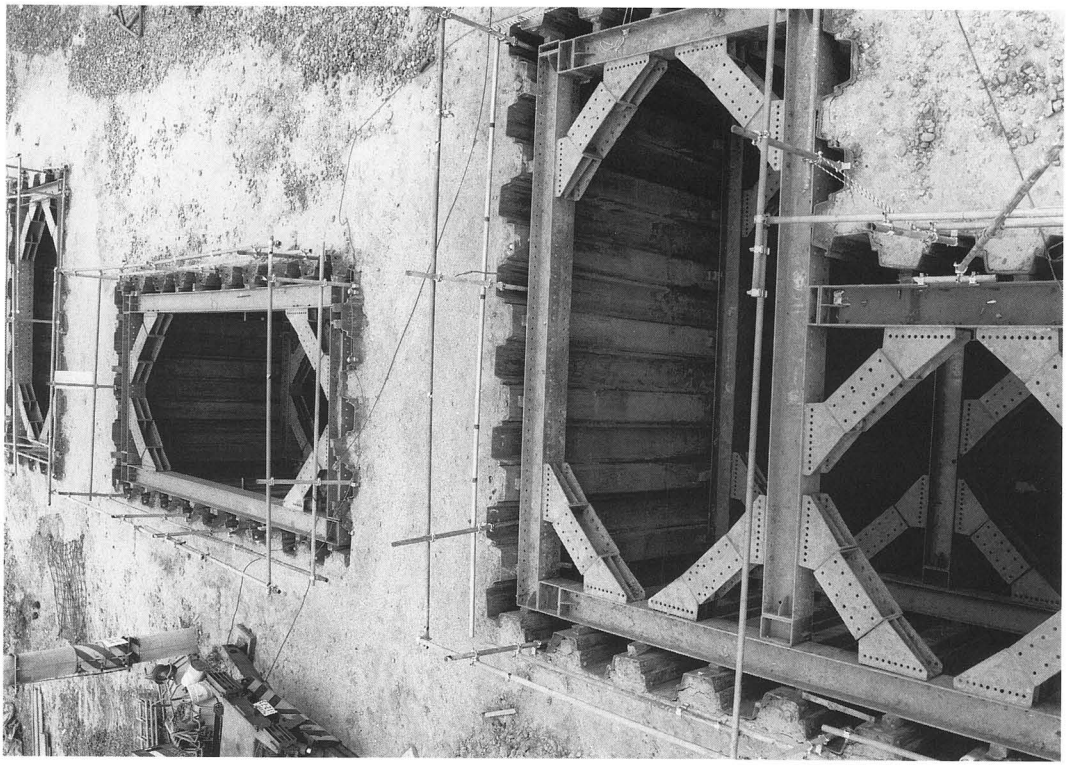
第3次面は平安時代頃の遺構面と考えられ、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴が検出された。なお一部の遺構は飛鳥・奈良時代までさかのぼる可能性もあり、調査地の東部に推定されている渋川廃寺との関連も考慮しなければならない。

第4次面では1区で古墳時代後期末の溝を検出した。第4次面以下では時期を明確にできる遺構は検出できなかったが、第5次面で検出したＮＲ1501埋土の上層からは古墳時代中期に比定される完形の須恵器が出土しており、付近に当時の集落の存在が推定される。また下層からは上流から運ばれたと考えられる弥生時代後期から古墳時代前期（布留式期）の土器が出土している。

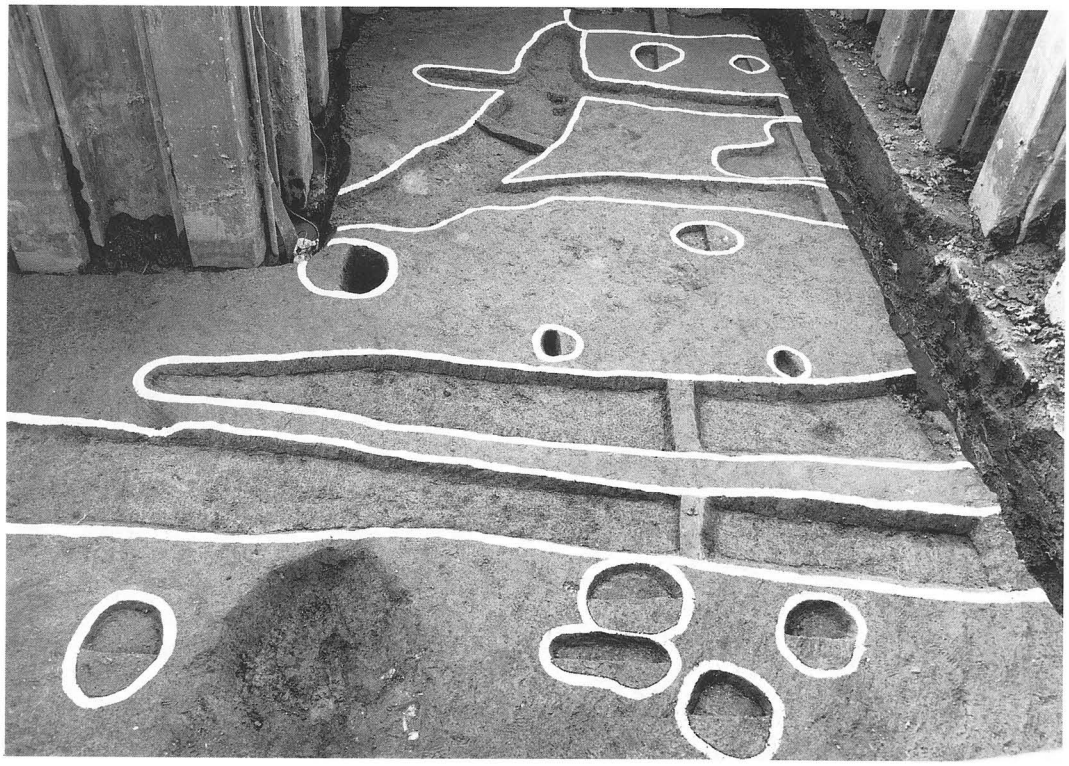
第4次面以下の約5.0ｍは河川の堆積層が続き、層厚0.3ｍ～1.5ｍの粘土層・砂層が交互に堆積している状況が確認された。これは河川の氾濫期と安定期とを示している。第6次面で検出した溝・ピット等は、河川の氾濫により廃絶した一時的な集落であろう。これらのことから、土地環境が安定し当地が恒久的な居住地となるのは第4次面の古墳時代後期以降であると考えられる。

註　八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ　久宝寺遺跡（63－269）の調査」1989.　3　八尾市文化財調査報告20

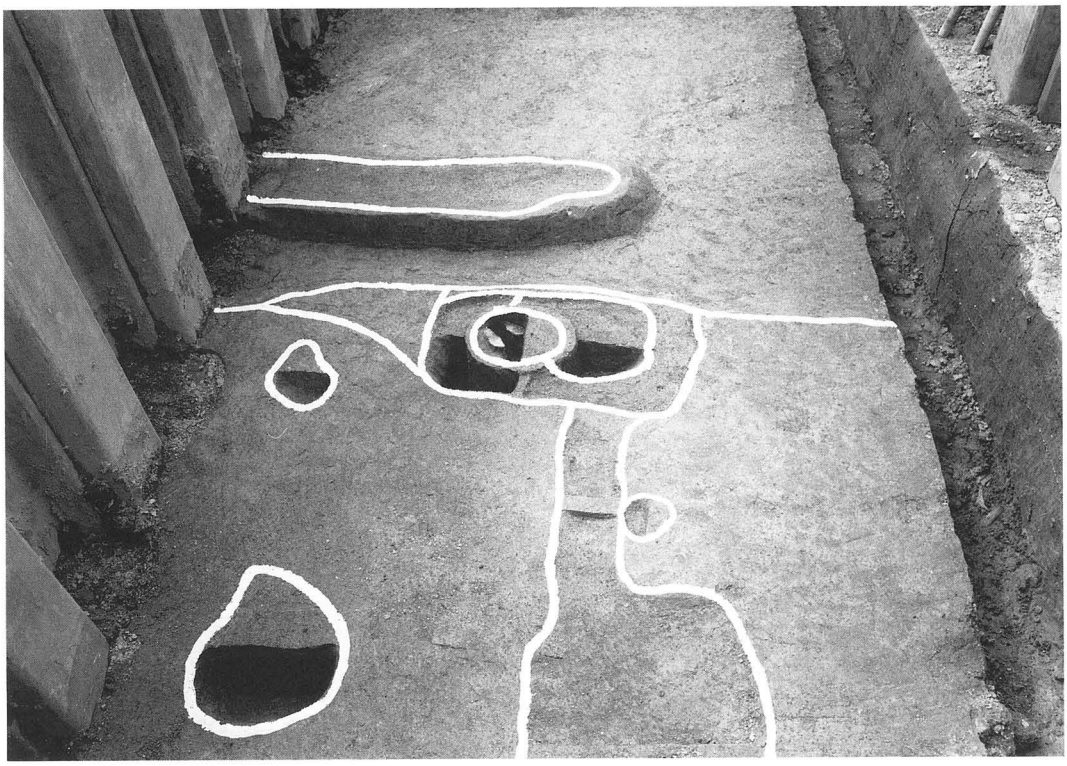
図　　版



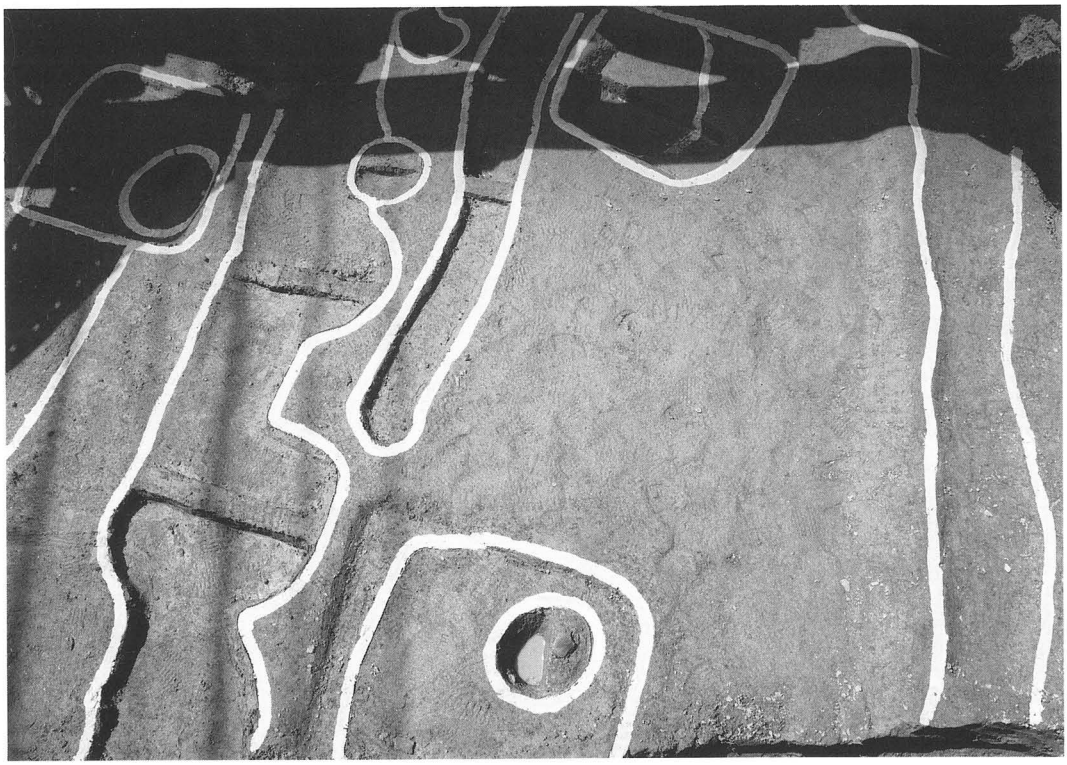
調査地全景（西から）



1区　第3次面（東から）



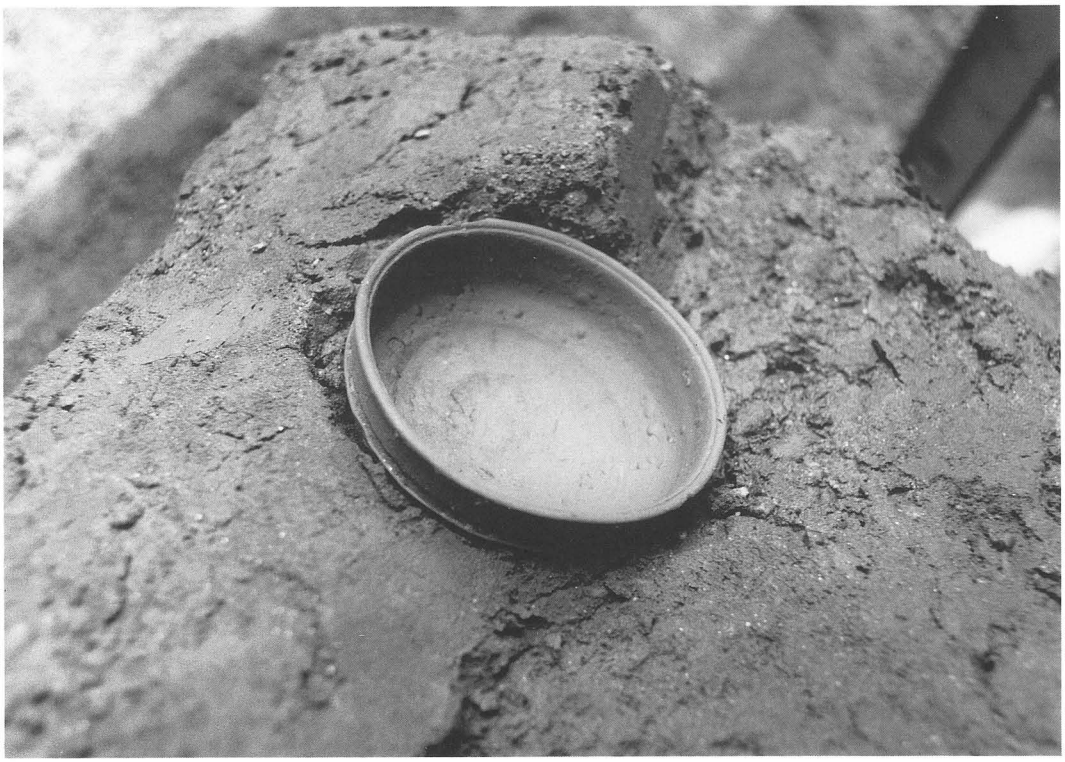
2区　第3次面（東から）



3区　第3次面（東から）

1区　第4次面　SD1401上層遺物出土状況（北から）

1区　第4次面　SD1401（東から）

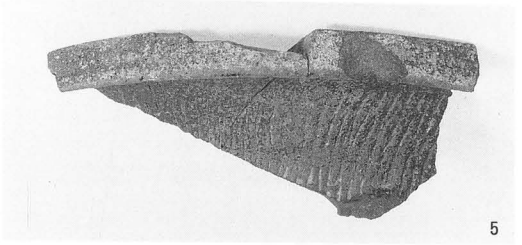


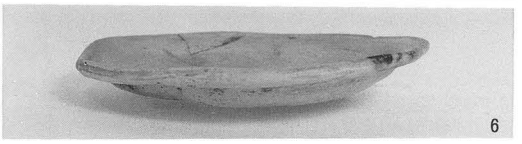
1区　NR1501　遺物（40）出土状況（西から）

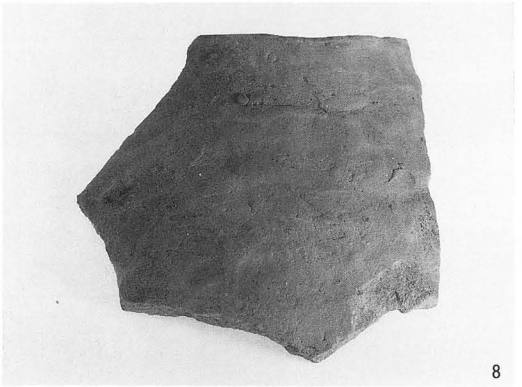
3区　NR1501　遺物（42）出土状況（上が南）

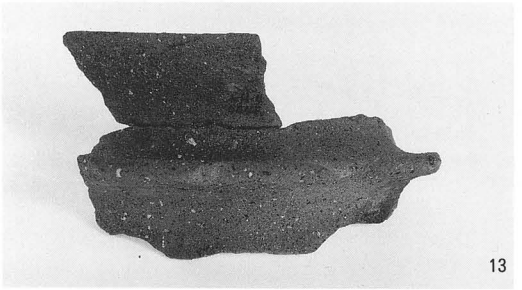
2区　NR1501（西から）

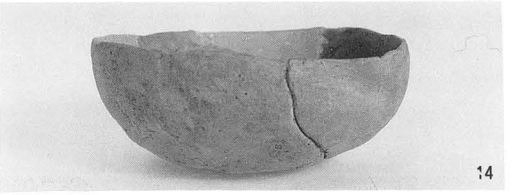
2区　第6次面（東から）

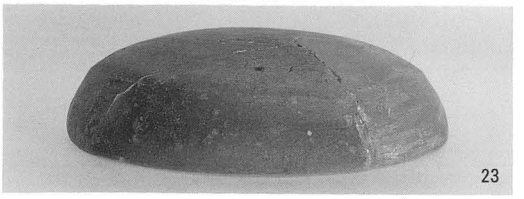


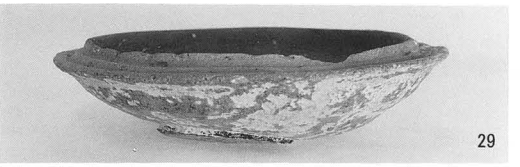


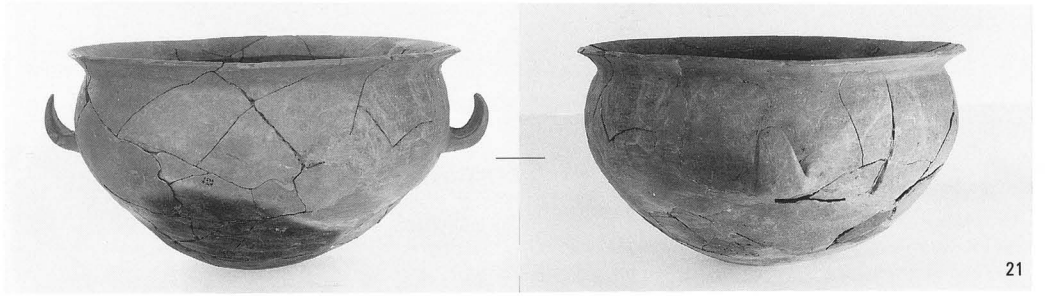




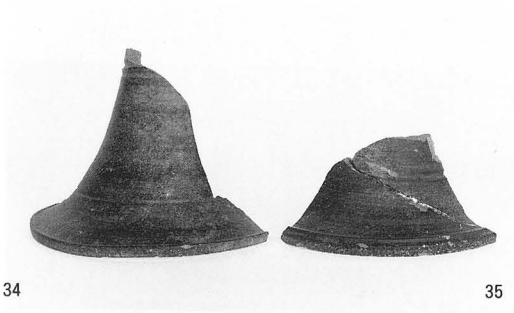


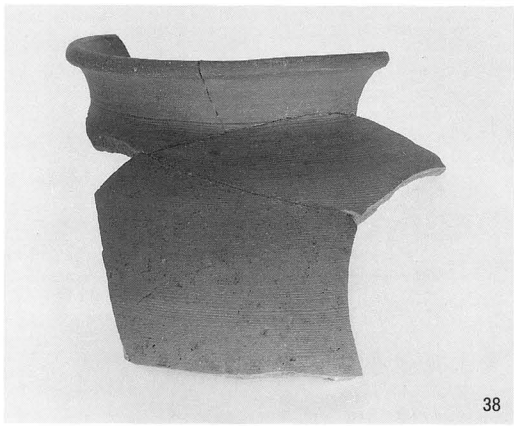


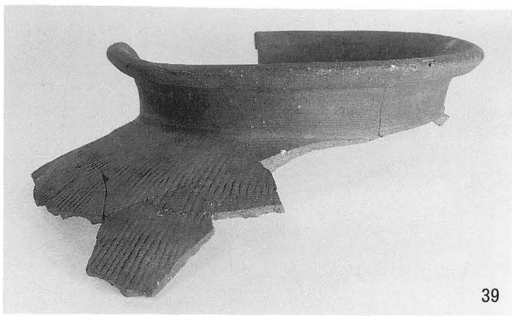




2：1区　第3層　　5：1区　SD1301　　6・8：2区　SP2301
13：3区　SP3302　　14～32：1区　SD1401







34～39：１区　ＳＤ1401　　40～43：１区　ＮＲ1501　　46：２区　ＮＲ1501

Ⅱ　小阪合遺跡第19次調査（ＫＳ90－19）

例　　言

1．本書は、八尾市青山町５丁目93・94で行った店舗付共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第58号　平成２年７月７日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、辰己　進氏から委託をうけて実施したものである。

1．本調査は、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第19次調査である。

1．現地調査は、当調査研究会　坪田真一を担当者として、平成２年10月16日に着手し、同年11月１日に終了した。調査面積は164㎡である。

1．現地調査には、岡田聖一・坂下　学・濱田千年・松下哲也の参加を得た。

1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和惠・都築聡子・山内千惠子の参加を得た。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を田島・山内が作成した。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過……23

第２章　周辺の地理的・歴史的環境……24

第３章　調査概要……25

　第１節　調査方法……25

　第２節　基本層序……25

　第３節　検出遺構と出土遺物……26

第４章　出土遺物観察表……40

第５章　まとめ……44

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図（Ｓ＝１／5000）……23
第２図　調査区設定図（Ｓ＝１／400）……25
第３図　基本層序（Ｓ＝１／40）……26
第４図　１区　第１・２次面遺構平面図（Ｓ＝１／200）……27
第５図　１区　ＳＫ101東壁断面図（Ｓ＝１／40）……27
第６図　第３・４次面遺構平面図（Ｓ＝１／200）……29
第７図　１区　土器棺墓301平・断面図（Ｓ＝１／10）……30
第８図　１区　土器棺墓301出土遺物（Ｓ＝１／６）……31
第９図　２区　ＳＫ301東壁断面図（Ｓ＝１／20）……31
第10図　１・２区出土遺物（Ｓ＝１／４）……32
第11図　２区　ＳＫ301出土遺物（Ｓ＝１／４）……33
第12図　２区　ＮＲ301出土遺物（Ｓ＝１／４）……33
第13図　２区　調査区南壁断面図（Ｓ＝１／40）……34
第14図　１区　竪穴住居群平・断面図（Ｓ＝１／50）……35
第15図　１区　ＳＩ401出土遺物（Ｓ＝１／６）……36
第16図　１区　ＳＫ401平・断面図（Ｓ＝１／40）……37
第17図　２区　ＮＲ401出土遺物①（Ｓ＝１／４）……38
第18図　２区　ＮＲ401出土遺物②（Ｓ＝１／４）……38

表　目　次

表１　１区　第１次面溝（ＳＤ 101～103）法量表……27
表２　１区　第２次面溝（ＳＤ 201～208）法量表……28
表３　１区　ＳＩ401内ピット（Ｐ－１～Ｐ－10）法量表……36
表４　１区　ピット（ＳＰ401～407）法量表……37

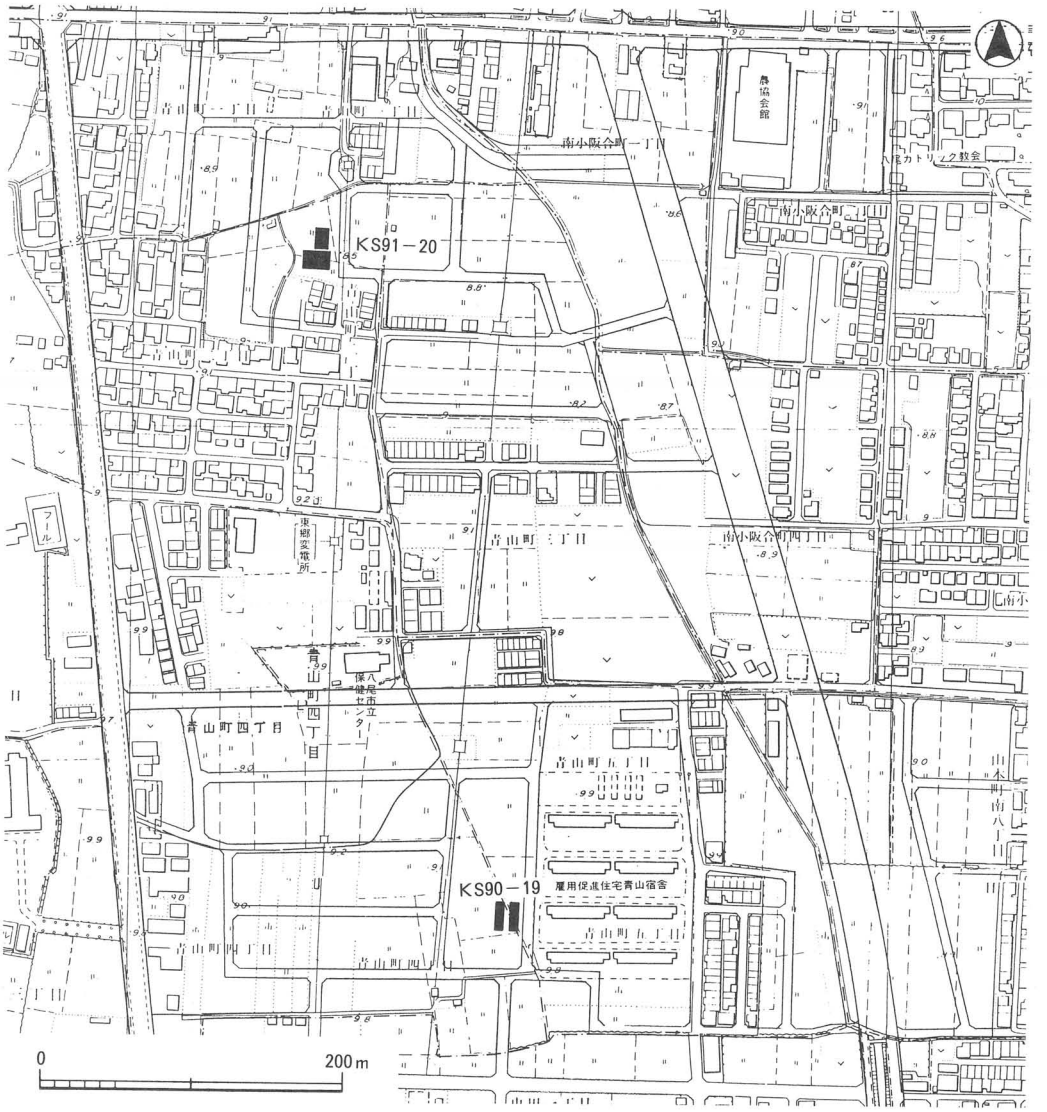
図　版　目　次

図版一　1区　第1・2次面全景（北から）
　　1区　第3次面全景（北から）
図版二　1区　土器棺墓301（北から）
　　1区　土器棺墓301（北から）
図版三　2区　ＳＫ301東壁（西から）
　　2区　第3次面全景（北から）
図版四　2区　調査区南壁（北から）
　　1区　第4次面全景（北から）
図版五　1区　ＳＩ401・402（南から）
　　1区　ＳＩ401内炉・台石（42）検出状況（東から）
図版六　1区　ＳＩ402畦南壁（北から）
　　1区　ＳＤ 401西壁（東から）
図版七　出土遺物
図版八　出土遺物

第１章　調査に至る経過

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では小阪合町１・２丁目、南小阪合町１・２・４丁目、青山町１～５丁目、若草町、山本町南７・８丁目がその範囲にあたる。

当遺跡発見の契機は、昭和30年の大阪府営住宅供給公社建設工事中に古墳時代の遺物が多量に出土したことに遡る。そして発掘調査は昭和57年以降、当調査研究会による16次－12,000㎡にわたる土地区画整理事業に伴う調査をはじめ、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～近世にわた



第１図　調査地位置図（S＝１／5000）

る遺跡であることが確認されている。

このような情勢下、平成2年、辰己　進氏より、八尾市青山町5丁目における店舗付共同住宅建設の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあることから発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、工事により遺構の破壊が予想される部分を対象に、発掘調査を実施することが両者で合意された。発掘調査にあたっては、事業者・同文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

なお今回の調査区の周辺の道路部分は昭和58・59年度に当調査研究会により調査が行われており（第3・4次調査）、弥生時代後期の落ち込み、古墳時代前期の溝・井戸・土坑・自然河川、平安時代の自然河川、鎌倉時代の溝・井戸・土坑等が検出されている。

第2章　周辺の地理的・歴史的環境

当遺跡は地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上の北西で東郷遺跡、西で成法寺遺跡、南西で矢作遺跡、南で中田遺跡と接している。

ここでは遺跡範囲の中央部にあたる前述の土地区画整理事業に伴う調査の成果を中心に、当遺跡の概要を簡単にまとめる。

まず弥生時代前期では包含層・自然河川から土器が出土しているが、遺構は検出されていない。当遺跡で生活の痕跡が確認できるのは弥生時代中期からであり、北西部に集落の中心があると考えられている。弥生時代後期では中央部から南東部で集落遺構が検出されている。古墳時代前期はほぼ全域で遺構・遺物が検出され、特に西部・南東部が中心となり、庄内式期から布留式期になると集落域が拡大されることが確認されている。古墳時代中期では南部で居住域が確認されている。北東部は墓域になると考えられ、埴輪円筒棺の他、各地で埴輪が検出されている。古墳時代後期の遺構は北部と南部で検出されている。奈良時代の集落遺構は西部で検出されている。平安時代の集落遺構は北部と南部で確認されており、南部は中田遺跡に拡がるものと考えられる。鎌倉時代から室町時代はほぼ全域で水田遺構が検出され、居住域は北西部と南部で確認されている。

参考文献　（財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」1990　当調査研究会報告26

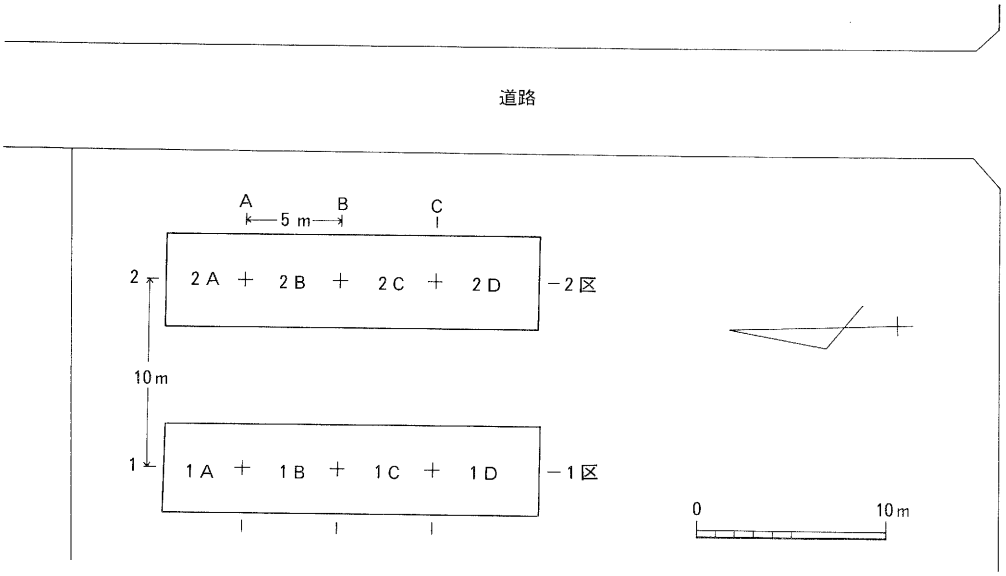
第３章　調査概要

第１節　調査方法

今回の調査は建物基礎部分を対象としているため、調査区は南北に細長いトレンチ２本で、西トレンチを１区、東トレンチを２区として１区から調査を実施した。

調査は１区で地表下約1.2ｍ・２区で約1.5ｍを機械掘削し、以下を人力掘削により実施した。

地区割は調査区に合わせて任意の方眼ラインを設定し、実測、遺物取り上げの基準とした。なおこの方眼の南北ラインは磁北から東に約２度振っている。

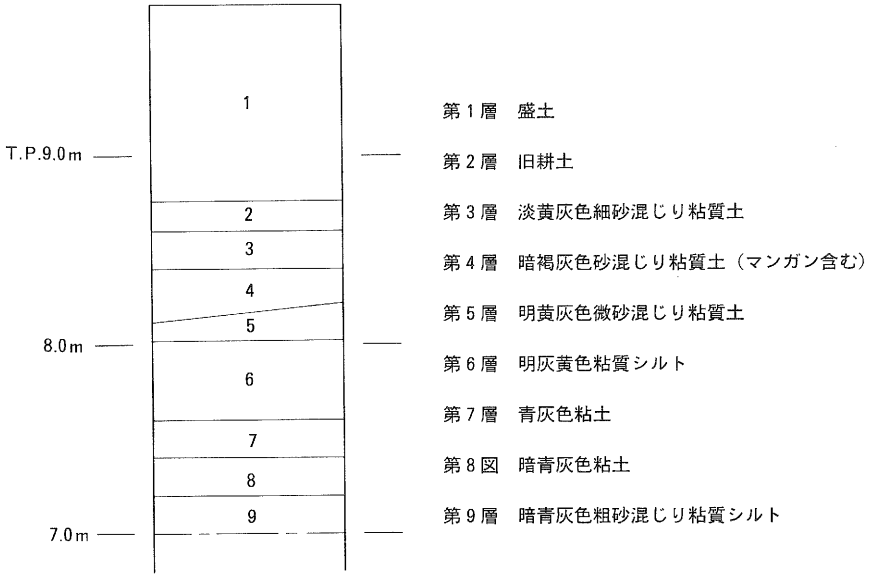


第２図　調査区設定図（S＝１／400）

第２節　基本層序

１区の土層を基本層序とした。

第１層が盛土、第２層が旧耕土である。旧耕土直下の第３層上面が第１次面で、標高約8.6ｍを測る。第３層は古墳時代前期から奈良時代の土器を少量含んでいる。第４層上面が第２次面で、標高約8.4ｍを測る。第４層は古墳時代前期から後期の土器を含んでいる。第５層上面が第３次面で、標高約8.2ｍを測り、北に向かってやや高くなっている。第５層は古墳時代前期の土器を含んでいる。第６層上面が第４次面で、標高約8.0ｍを測る。第６層以下は１区南部で確認したが、粘土～粘質シルトが厚く堆積している。



第3図　基本層序（S＝1／40）

第3節　検出遺構と出土遺物

・第1次面

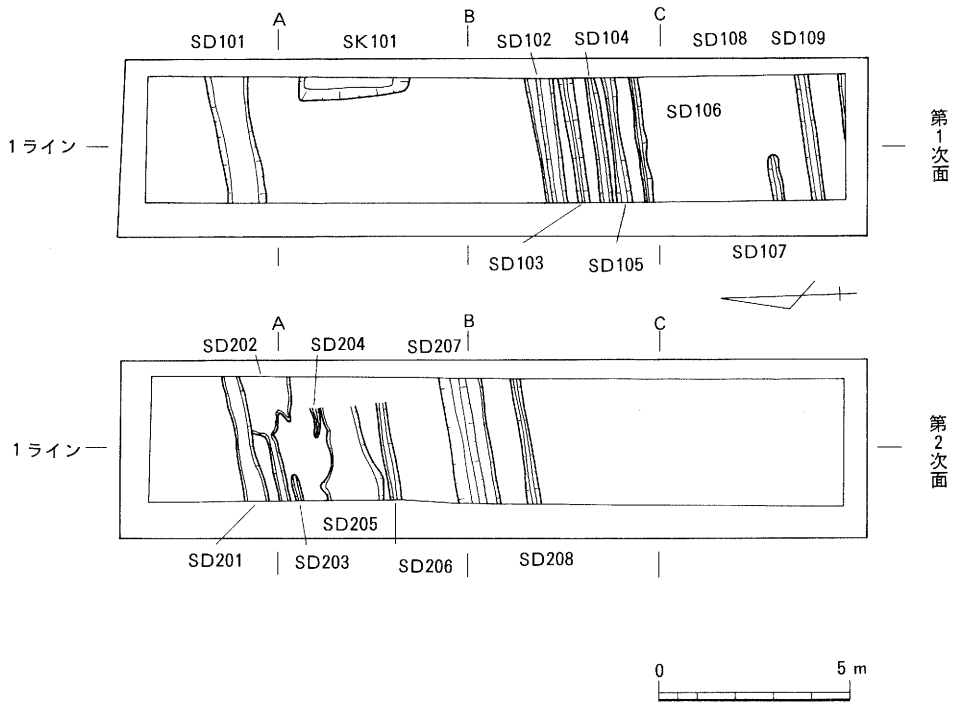
1区で土坑1基（ＳＫ101）・溝9条（ＳＤ101～109）を検出した。

ＳＫ101

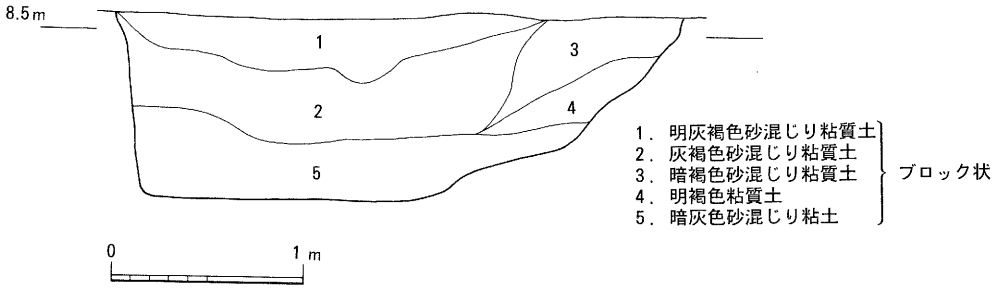
1Ｂ区に位置し、東部は調査区外に至るため掘形の西部のみの検出である。検出部分の平面形は長方形を呈し、西辺は一辺約2.9m、深さは約1.0mを測る。東断面をみると掘方は北側が垂直に近く、南側はなだらかで、底部は平坦である。埋土は上層が灰褐色系の砂混じり粘質土、下層が暗灰色の砂混じり粘土で、全体にブロック状を呈しており、一気に埋められた状況である。これらの状況から当遺構は井戸あるいは水溜め等の機能が考えられる。古墳時代前期から近世の遺物が出土している。

ＳＤ101～109

東西方向に平行して伸びる溝で、方位は西から南に約9度振っている。ＳＤ101・102が幅が広く、他はほぼ同一規模である。ＳＤ107～109は上層の旧耕土が埋土となっており、時期が最も新しいといえる。これらの溝は近世の耕作に伴うものと考えられる。古墳時代前期から近世の遺物が出土している。法量等は表1にまとめた。



第４図　１区　第１・２次面遺構平面図（S＝１／200）



第５図　１区　ＳＫ101東壁断面図（S＝１／40）

ＳＤ	101	102	103	104	105	106	107	108	109	
検出長	3.35	3.35	3.35	3.35	3.35	3.35	1.2	3.35	1.8	(m)
幅	94	64	64	33	26	26	32	36	－	(cm)
深さ	16	11	11	6	6	7	5	7	3	(cm)
間隔	720	26	30	15	37	304	70	75		(cm)
埋土※	①	②	②	②	②	②	③	③	③	

※①灰褐色砂混じり粘質土　②灰青褐色砂混じり砂質土　③暗青灰色砂混じり粘質土

表１　１区　第１次面溝（ＳＤ101～109）法量表

・第２次面

１区で溝８条（ＳＤ 201～208）を検出した。１区北部ではこの上面で灰色粗砂の広がりがみられた。一時的な冠水の痕跡である可能性がある。

ＳＤ201～208

東西方向に平行して伸びる溝で、方位は第１次面の溝と同一であり、あまり時期差は無いと思われる。第１次面の溝は第２次面の溝の上部には掘られていないが、溝の付け替えの際に意図されたとも考えられる。法量等は表２にまとめた。

ＳＤ	201	202	203	204	205	206	207	208	
検出長	3.4	3.4	0.74	0.8	2.5	2.6	3.35	3.35	(m)
幅	50	25～140	20	16	85～165	30	105	30	(cm)
深さ	16	11	13	6	6	7	5	7	(cm)
間隔	25	11	60	4	10～55	148	80		(cm)
埋土※	①	①	①	①	①	②	③	①	

※①灰青色粘土混じり粗砂　②淡灰褐色砂混じり粘質土
③上から褐灰青色砂混じり粘質土・褐灰色細砂混じり粘質土・褐灰色粘質土

表２　１区　第２次面溝（ＳＤ201～208）法量表

・第３次面

１区で土器棺墓１基（土器棺墓301）・溝２条（ＳＤ301・302）・ピット１個（ＳＰ301）、１・２区で河川１条（ＮＲ301）・２区で土坑１基（ＳＫ301）を検出した。

土器棺墓301

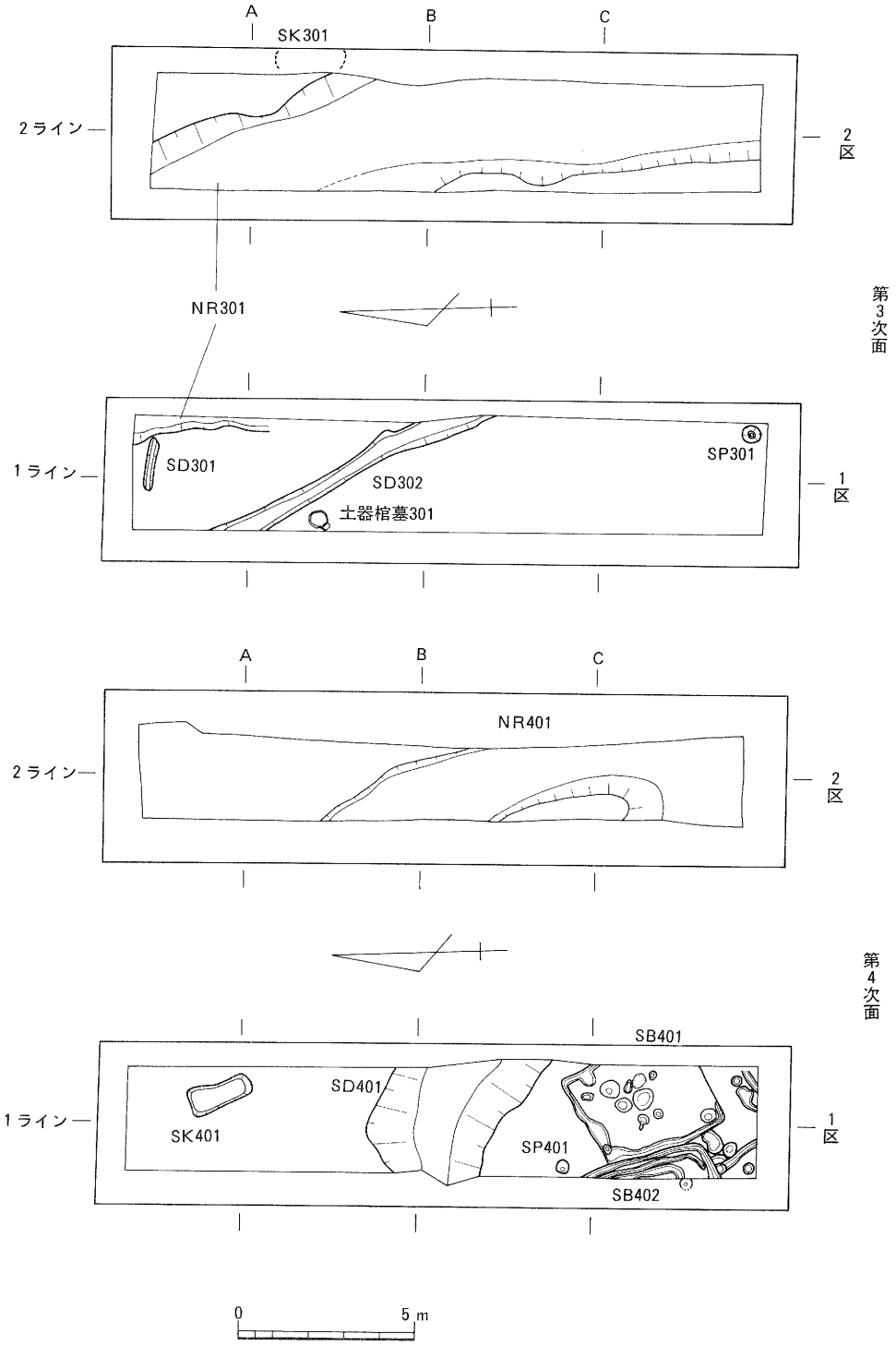
１Ｂ区で検出され、検出面の標高は約8.2ｍを測る。主体部は吉備系の形態とされる大型の複合口縁壷（２）で、口縁部を西に向けた横位の状態で検出した。主軸の方向は西から南に約19.5度振っている。土器棺は上部が後世に削平されており、破片は内部の堆積土上に落ち込み、また周辺に飛散しているものもある。土器棺内の堆積土は暗灰褐色砂混じり粘質土である。また別個体の二重口縁壷の口頸部～肩部（１）が口縁部付近と内部から出土しており、これを棺蓋としていた可能性がある。

掘形は検出されなかったが、出土状況等から土器棺墓であると判断した。なお、副葬品・人骨等は認められなかった。

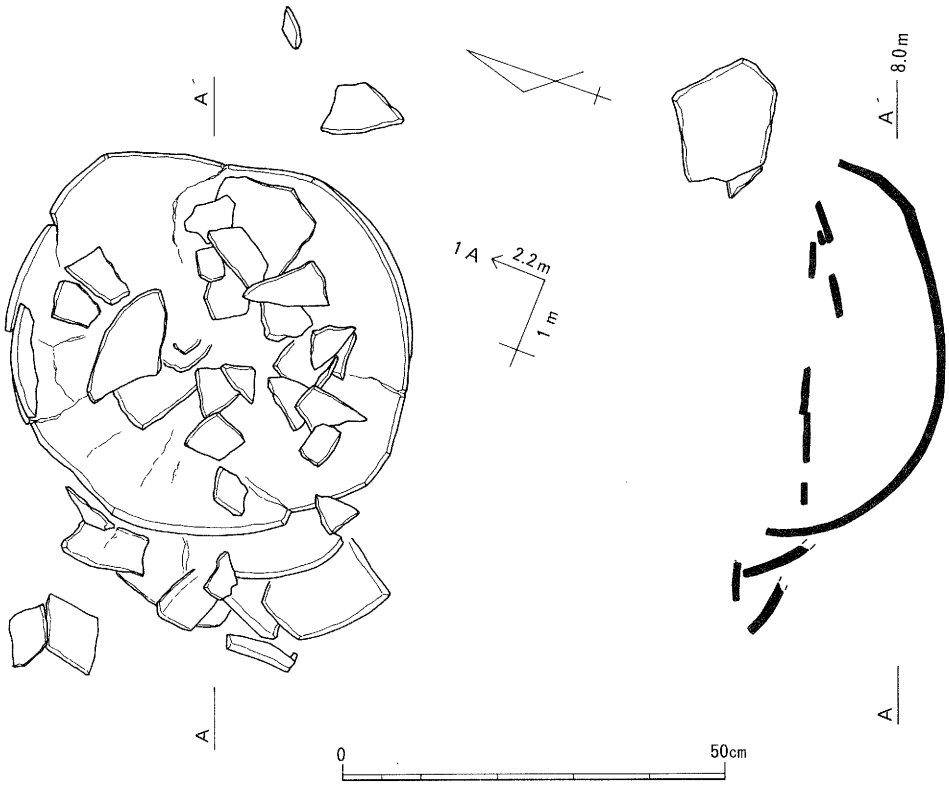
（２）は口径24.2㎝・器高64.3㎝を測り、生駒西麓産と思われる胎土のもので、色調は茶褐色を呈する。口頸部を補修しており、欠落した破片を紐等で結束するための穿孔が五か所に認められる。土器の時期は布留式期古相に比定される。

ＳＤ301

１Ａ区で検出された東西方向の溝で、検出面の標高は約8.1ｍを測る。規模は検出長約1.5ｍ・幅約26㎝・深さ約10㎝を測り、断面皿状で、埋土は灰褐色細砂混じり粘質シルトである。遺物



第６図　第３・４次面遺構平面図（S＝１／200）



第７図　１区　土器棺墓301　平・断面図（S＝１／10）

は出土していない。

ＳＤ302

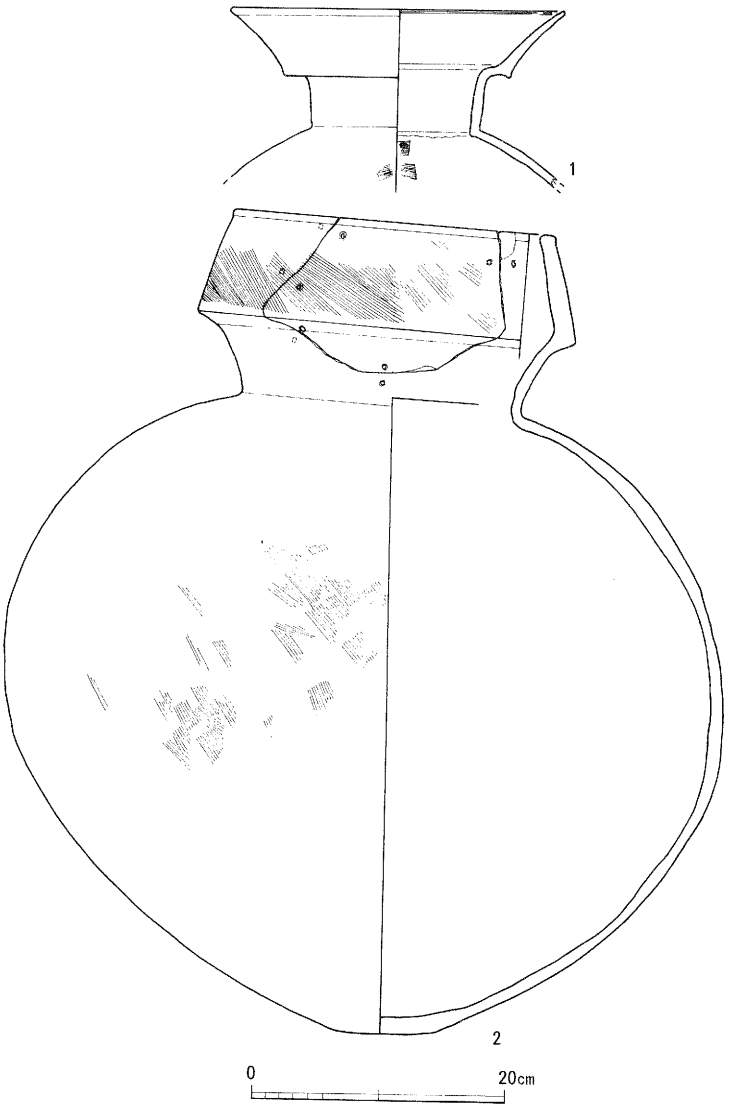
１Ａ～１Ｃ区で検出された北西－南東の方向に直線的に伸びる溝で、両端は調査区外に続いている。検出面の標高は8.1ｍ～8.2ｍを測り、方位は北から西に約30度振っている。規模は検出長約8.8ｍ・幅40㎝～63㎝・深さ約15㎝を測り、断面半円状で埋土は暗灰褐色微砂混じり粘質土の単層である。遺物は古墳時代前期の土器片が出土している。

ＳＰ301

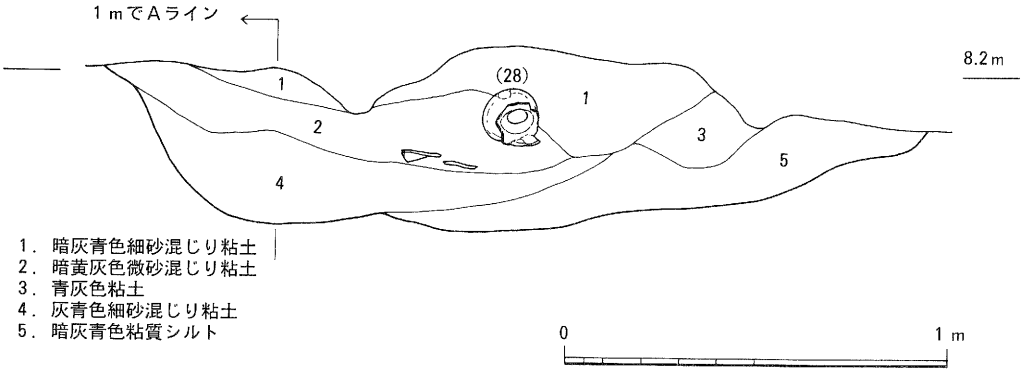
１Ｄ区の南東角で検出したピットで、検出面の標高は8.13ｍを測る。平面円形で、規模は直径約50㎝・深さ21㎝、ほぼ中央部に位置する柱痕部の直径約20㎝を測る。掘方は垂直に近いもので、柱痕部は断面逆三角形に近く、掘方の底部に至っている。埋土は柱痕部が灰褐色細砂混じり粘土、掘方部が灰褐色砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ301

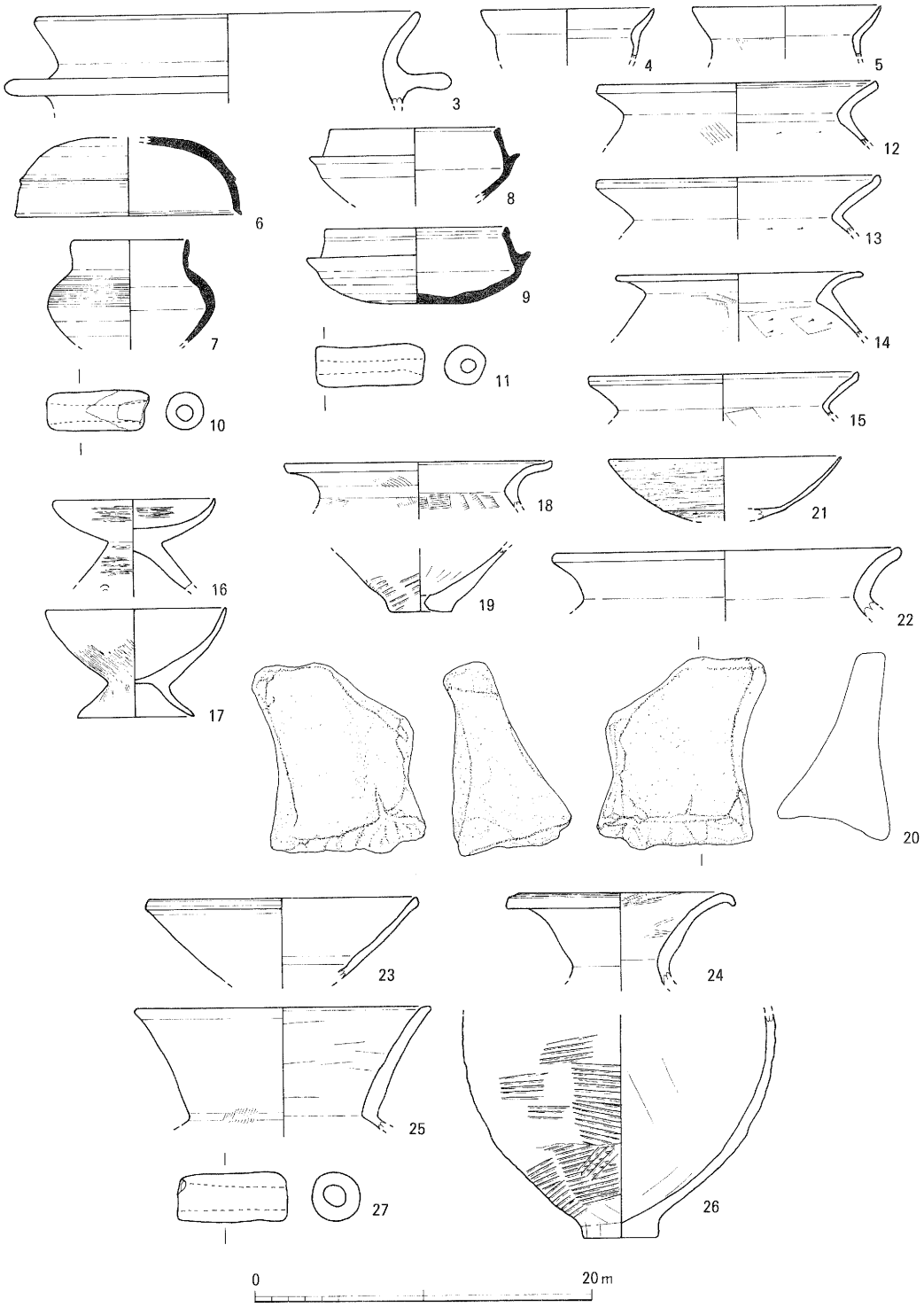
平面的には捉えられなかったが、２Ｂ区の調査区東壁内で検出した。断面の規模は検出長約2.2ｍ、深さ約50㎝を測り、上部はＮＲ301に削平されている。埋土は青灰色～黄灰色系の粘土～粘質土である。上層からほぼ完形の二重口縁壷（28）が出土している。



第８図　１区　土器棺墓301　出土遺物（S＝１／６）



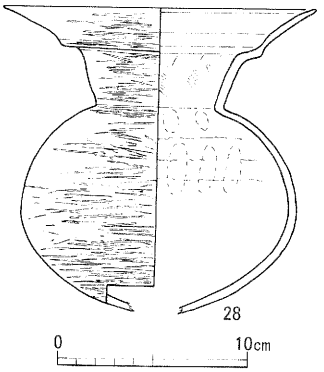
第９図　２区　ＳＫ301東壁断面図（S＝１／20）



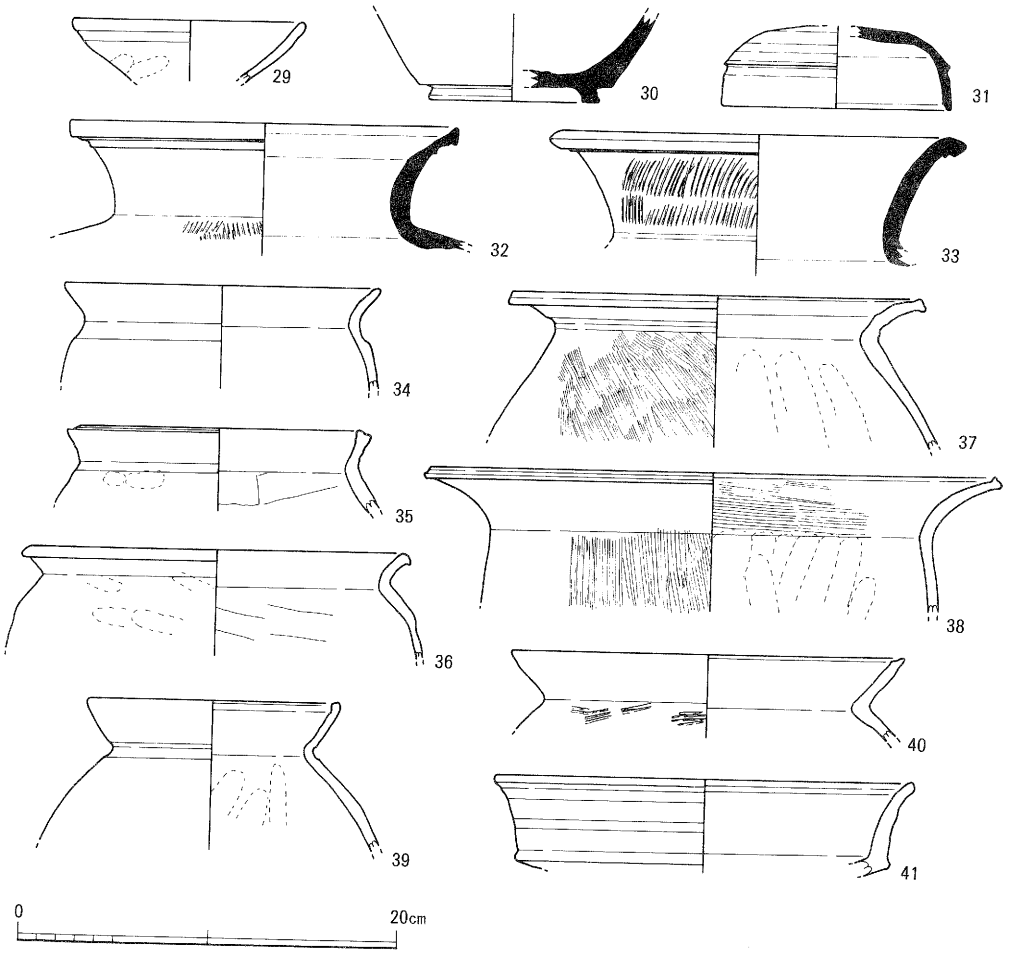
第10図　1・2区出土遺物（S＝1／4）

ＮＲ301

１区北部で西肩、２区北部で東肩を検出した。１区では南部がＳＫ101によって削平されている。検出面の標高は西肩が約8.2ｍ、東肩が約8.25ｍである。流路方向はほぼ南北で、方位は北から西に10～20度振っている。規模は幅約9.0ｍ・深さ約0.7ｍを測り、河床のレベルをみると北端で標高約8.0ｍ、南端で約7.5ｍとなり、南部がやや低くなっている。埋土は上層が灰褐色系の粘質土・粘土・細砂・粗砂の互層で、下層が淡灰黄色系の粗砂・細砂であり、青灰色系の粘土が河床となっている。



第11図　２区　ＳＫ301出土遺物（Ｓ＝１／４）

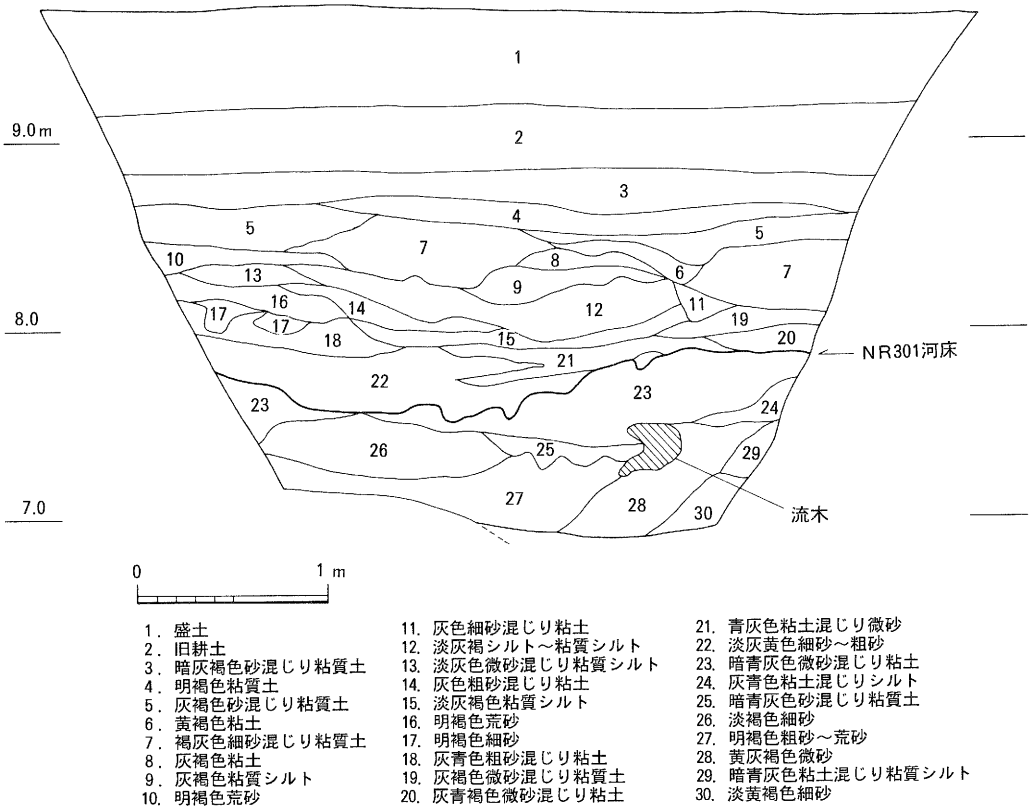


第12図　２区　ＮＲ301出土遺物（Ｓ＝１／４）

古墳時代前期～平安時代の遺物が出土している。

・第４次面

１区で竪穴住居２棟（ＳＩ401・402）・土坑１基（ＳＫ401）・溝４条（ＳＤ 401～404）・ピット７個（ＳＰ401～407）、２区で河川１条（ＮＲ401）を検出した。



第13図　２区　調査区南壁断面図（S＝１／40）

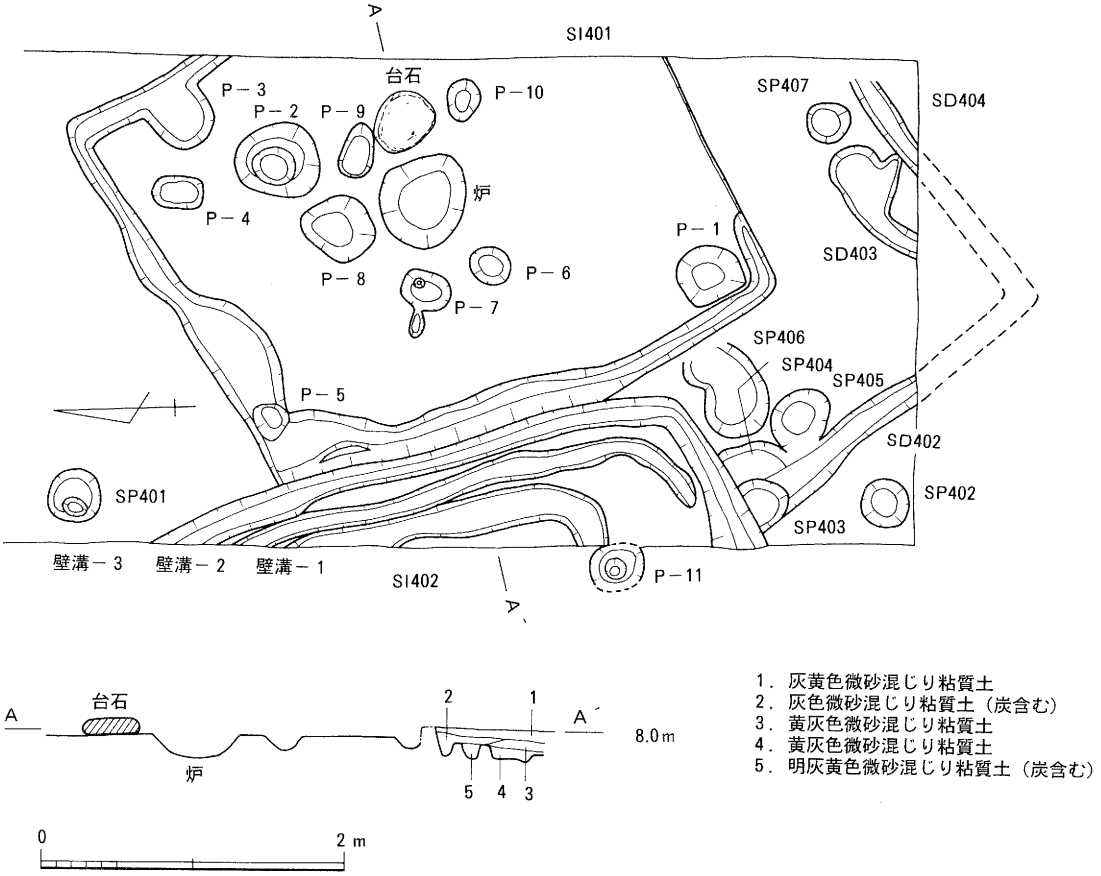
竪穴住居はいずれも方形のもので、１区南部で切り合った状況で検出した。この切り合い関係からＳＩ402が新しく構築されていることが確認できた。

ＳＩ401

南北約3.6ｍ・東西約3.3ｍのやや長方形を呈するもので、北西角部はＳＩ402に削平され、南東角部は調査区外になる。南北軸は北から西に約31度振っている。

検出面がほぼ床面にあたるため壁はほとんど遺存しておらず、壁高は南部で最高約５㎝を測るのみである。床面の標高は約7.95ｍを測る。壁溝は１条で、南辺では明確に検出されなかったが全周するものと考えられる。規模は幅15㎝～45㎝、深さ約６㎝を測る。なお西辺の北部がやや内側に屈曲しており、掘り直しが行われている可能性がある。

ピットは床面・壁溝内から５個検出したが（Ｐ－１～Ｐ－５）、主柱穴と考えられる深さ30



第14図　1区　竪穴住居群平・断面図（S＝1／50）

cm～40cmを測るものは2個（P－1・P－2）である。

中央部に平面ほぼ円形の炉を有している。規模は直径約60cm・深さ約15cmを測り、断面皿状を呈する。埋土は上層が灰褐色シルト混じり粘質土、下層は底部から約5cmの炭層と考えられる暗灰色粘質シルトが堆積し、底面には全面に炭が付着している。また東側の壁が一部火を受けて赤変している。炉の周囲の西・北・東には5個のピット（P－6～P－10）が巡っている。なお炉の東側のP－9とP－10の間には作業台と考えられる長辺約42cm、短辺約33cm、厚さ約9cmの扁平な台石（42）が遺存していた。炉の周辺には層厚1cm～3cmの固く締まった赤褐色砂混じり粘質土がみられ、貼床と考えられるが、炉は貼床上面から、周囲のピットは貼床下のベース面から掘り込まれ、台石はベース面に置かれている。ベース面には炭の付着が認められることから、炉の掘り直しの際に貼床が行われたとも考えられる。

出土遺物は少量で、図化できたものは高杯の杯部（21）のみである。

ピットの法量等は表3にまとめた。

	平面形	長辺×短辺×深さ（cm）		埋土（上から）
P－1	不整円形	42×37×30	①②③④	
P－2	不整円形	56×50×42	⑤②③⑥	
P－3	不整円形	41×35×7	①	〈層名〉
P－4	楕円形	34×22×17	①	①暗灰褐色粘質土（炭含む）
P－5	不整円形	26×25×38	①	②灰黄色粘質土
P－6	円形	28×26×6	⑦	③暗灰黄色細砂混じり粘質土
P－7	楕円形	34×26×8	⑦	④黄灰色粘質土
P－8	不整円形	43×43×12	⑦	⑤灰褐色砂混じり青色粘質土（炭含む）
P－9	楕円形	37×27×10	⑦	⑥灰黄青色粘質土
P－10	楕円形	28×23×2	⑦	⑦暗灰褐色砂混じり粘土（炭含む）

表3　1区　SI401内ピット（P－1～P－10）法量表

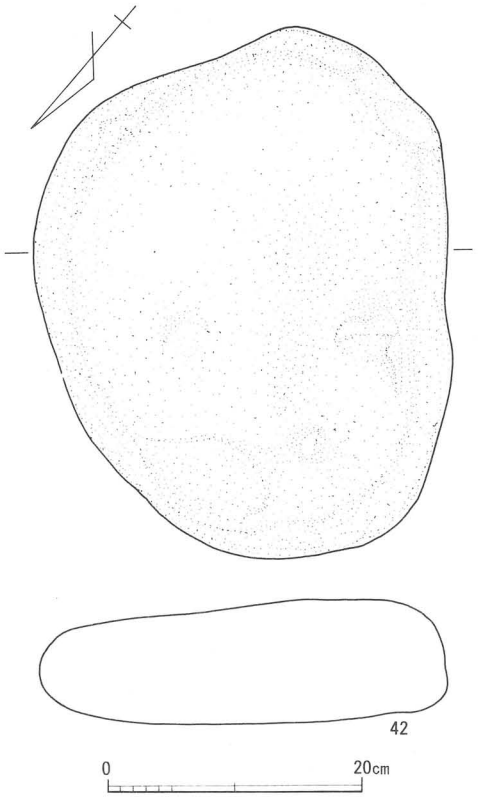
SI402

東側の一部の検出で明確な規模は不明であるが、南北辺は3.6m以上を測る。南北軸は北から西に約14度振っており、床面の標高は7.8m～7.9m、壁高は約20cmを測る。壁溝は3重に巡っており、断面の観察によると一番外側の壁溝3が最も新しく掘られており、拡張が行われていることが確認された。壁溝は幅12cm～25cm・深さ3cm～10cmを測る。

ピットは1個検出した（P－11）。平面形は直径約36cmのほぼ円形で、深さ約36cmを測り、掘方はほぼ垂直を呈し、埋土は灰青色粘質土である。

出土遺物は細片のみで、図化できるものは無かった。

これらの竪穴住居の時期は、その上面を覆う第5層出土土器（16～19）から庄内式期と考えられる。



第15図　1区　SI401出土遺物（S＝1／6）

SK401

1A区で検出した土坑で、平面形は長辺約1.8m、短辺0.65m～0.85mの長方形を呈し、深さ約12cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は灰褐色細砂混じり粘質土の単層で、底部の全面には層厚約1cmの炭層が堆積している。

出土遺物は細片のみで、図化できるものは無かった。

ＳＤ401

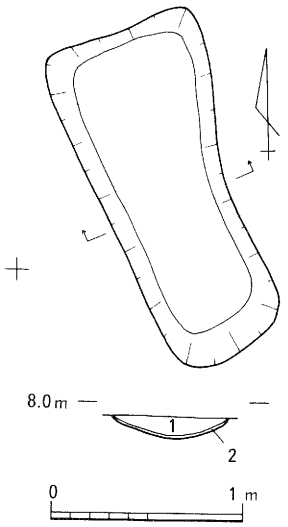
１Ｂ～１Ｃ区で検出した東西方向に伸びるやや弧状を呈する溝で、規模は検出長約3.2ｍ、幅2.6ｍ～4.3ｍ、深さ約60㎝を測る。断面皿状で、埋土は上層が灰青色系のシルト～細砂混じり粘土、下層が黒灰色粘質シルトである。

出土遺物は細片のみで、図化できるものは無かった。

ＳＤ402～404

１区南端、ＳＩ401・402の南側に位置する溝で、溝の方向はＳＩ401の壁溝とほぼ平行しており、竪穴住居の壁溝である可能性が高い。規模は幅約20㎝・深さ５㎝～10㎝を測る。ＳＤ402の北部はＳＩ402に削平されている。

遺物は出土していない。



第16図　１区　ＳＫ401平・断面図（Ｓ＝１／40）

ＳＰ401～407

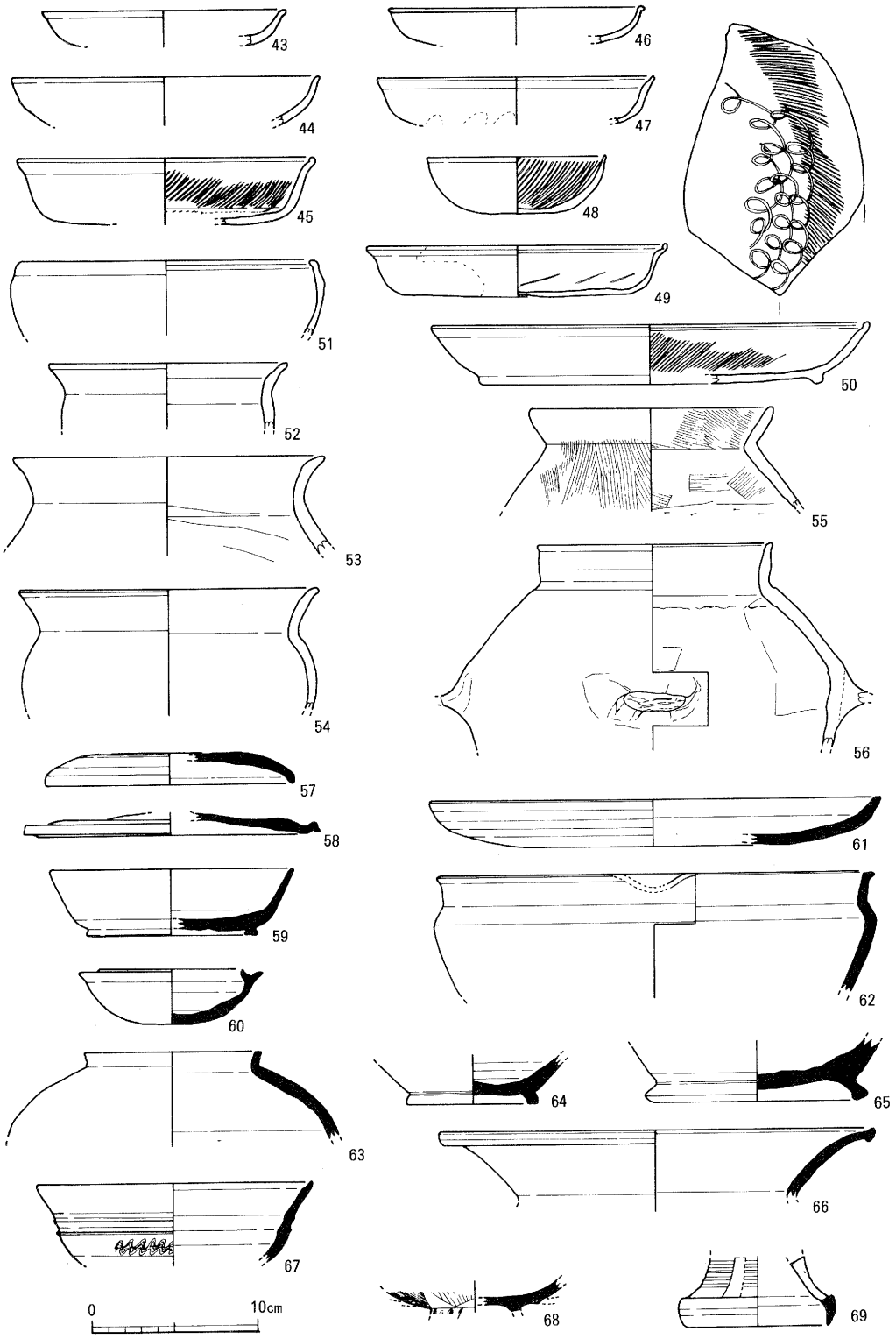
いずれも１区南部の竪穴住居群周辺に位置する。このうちＳＰ402～407はＳＤ402～404を壁溝とする竪穴住居の柱穴となるものと考えられる。ＳＰ406は２個のピットが連続していると考えられる。法量等は表４にまとめた。

	平面形	長辺×短辺×深さ（㎝）	埋土（上から）	
ＳＰ401	円　形	３６×３６×１５	①	
ＳＰ402	円　形	３３×３２×１５	②③	〈層名〉
ＳＰ403	不整円形	３４×２６以上×２８	④⑤	①灰褐色砂混じり粘質土
ＳＰ404	不整円形	３９以上×３０以上×１４	④	②黄灰色粘質土
ＳＰ405	不整円形	４５×３７×１２	④⑤	③灰褐色粘質土
ＳＰ406	不整円形	７１以上×３６×１３	④	④暗灰黄色細砂混じり粘質土
ＳＰ407	円　形	２９×２８×８	④	⑤暗灰黄色微砂混じり粘質土

表４　１区　ピット（ＳＰ401～407）法量表

ＮＲ401

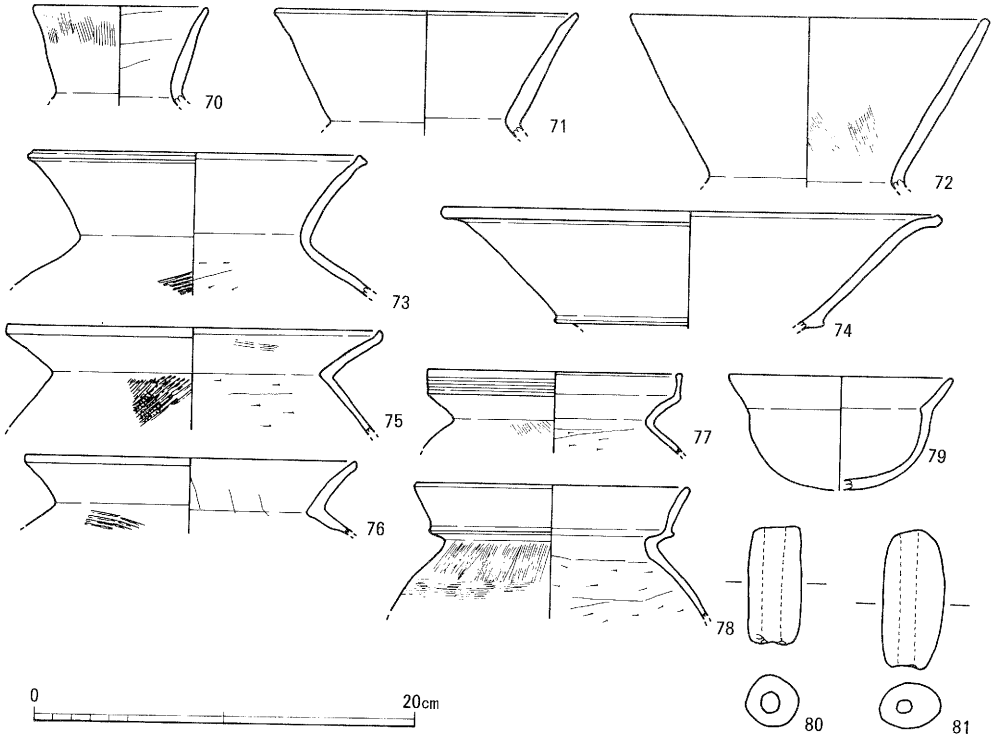
２区全域を含む河川で、ＮＲ301に削平されているため肩は検出できなかった。堆積状況等から流路方向は南北方向で、方位は北から西に約30度振っている。埋土は上層が暗青灰色系の微砂混じり粘土、下層が灰黄褐色系の細砂・粗砂である。河床は、北半部では層厚1.0ｍ以上を測る暗灰青色系粘土～粘質シルトが平坦面を形成しており、これを河床とした。標高は約8.0ｍを測る。北端ではＮＲ301と河床を共にしている。また中部やや南ではこの粘土層の隆起が認められた。中部から南部はこの粘土層を切り込むように下層の砂が厚く堆積しており、湧水



第17図　2区　ＮＲ401出土遺物①（S＝１／４）

も激しく、危険防止のため標高約6.7mまでで掘削を断念したため、河床は確認できなかった。

下層の砂層に古墳時代前期～奈良時代の遺物が多量に含まれている。



第18図　2区　ＮＲ401出土遺物②（S＝１／４）

第４章　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
1 七	土師器 壺	土器棺墓 301		(26.2)	茶赤色 茶褐色	やや粗4.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口頸部外面ヨコナデ、内面ナデ。肩部ハケ。	⅓ 反転
2 七	土師器 壺	土器棺墓 301		24.2 64.3 7.0	茶褐色	やや粗	良好	口縁部外面ハケ、内面ヨコナデ。頸部外面ヨコナデ、内面ナデ。底体部外面ハケ、内面ナデ。 口頸部に補修痕あり。　体部最大径　54.0	½
3	土師器 羽釜	１Ｃ区 第３層	鍔径	(22.8) (26.8)	茶橙色	やや粗3.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ナデ。内面煤付着。	⅛ 反転
4	土師器 鉢	１Ｄ区 第３層		(10.3)	淡茶橙色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。	反転
5	土師器 壺	１Ｃ区 第３層		(11.2)	淡茶灰色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ナデ。口縁部～肩部間外面ハケ残る。	⅙ 反転
6 七	須恵器 杯蓋	１Ｂ区 第４層		(13.6)	淡灰色	密3.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。天井部外面　¾回転ヘラケズリ。	極小 反転
7	須恵器 広口短頸壺	１Ｃ区 第４層	最大径	(6.8) (10.0)	淡灰青色	密1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。体部外面上位回転カキ目、下位回転ヘラケズリ。	反転
8	須恵器 杯身	１Ｃ区 第４層	受部径	(10.0) (12.5)	灰色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	⅙ 反転
9 七	須恵器 杯身	１Ｃ区 第４層	受部径	(10.8) 4.6 (13.3)	淡灰色	密1.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	¼
10	土錘	１Ａ区 第４層	長さ 径	8.2 2.5	淡茶灰色	やや粗2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	ナデ。	⅓
11	土錘	１Ｂ区 第４層	長さ 径	6.4 2.5	灰茶色	やや粗1.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	ナデ。	⅓
12	土師器 甕	１Ｂ区 第４層		(16.6)	暗茶褐色	やや粗1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。肩部ナデ。	¼ 反転
13	土師器 甕	１Ｂ区 第４層		(16.8)	暗茶褐色	やや粗1.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	¼ 反転
14	土師器 甕	１Ｂ区 第４層		(14.5)	暗茶褐色	やや粗2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	⅓ 反転
15	土師器 甕	１Ｄ区 第４層		(16.1)	淡灰茶色	やや粗1.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	⅙ 反転
16 七	土師器 器台	１Ｃ区 第５層		(9.7)	茶橙色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	杯部ヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ、内面ナデ。脚部３方向に円孔。	½
17 七	弥生 台付鉢	１Ｄ区 第５層	底径	(10.8) 6.5 (7.0)	淡茶灰色	やや粗3.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	鉢部外面下位ヘラミガキ。台部外面ハケ、内面ナデ。	
18	土師器 甕	１Ｂ区 第５層		(16.0)	暗褐赤色	やや粗1.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。肩部ハケ。	¼ 反転
19 七	弥生 甕	１Ｂ区 第５層	底径	3.4	茶灰色	やや粗1.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	外面タタキ、内面ハケ。底部穿孔。	底部完存
20	砥石	１Ｂ区 第５層	長さ 径	11.3 7.0	灰白色				
21	土師器 高杯	１Ｄ区 ＳＩ401		(14.0)	淡茶橙色	密	良好	杯部外面ヘラミガキ。	⅓ 反転
22	陶器 甕	１Ｄ区 第３層		(17.0)	暗緑色 断面一灰黄色	密1.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	⅙ 反転

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)　口径 器高	色調　外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
23	白磁 椀	2A～D区 第1層	(16.0)	乳灰白色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。体部外面下半露胎。	極小 反転
24	弥生 壺	2A区 第1層	(12.1)	茶灰色	やや粗2.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁端部ヨコナデ。頸部外面ナデ、内面ヘラミガキ。	1/5 反転
25	弥生 壺	2A区 第1層	(16.8)	茶褐色	やや粗2.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ナデ。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	1/5 反転
26	弥生 甕	2A区 第1層	底径　4.2	暗茶褐色 暗灰茶色	やや粗5.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	外面タタキ、内面ナデ。	1/3 一部反転
27	土錘	2A区 第1層	長さ　6.7 径　3.0	茶灰色	やや粗4.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	ナデ。	完形
28 八	土師器 壺	2B区 SK301	(16.5)	茶橙色	密1.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁外部ヘラミガキ、内面ヨコナデ。頸部外面ヘラミガキ、内面ハケ。底体部外面ヘラミガキ、内面ナデ、底部穿孔。底部外面黒斑。	口縁　1/2欠損 反転
29	土師器 杯	2A区 NR301	(12.2)	淡茶橙色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面指押え、内面ナデ。	1/5 反転
30	須恵器 底部	2A区 NR301	底径　(8.8) 高台高　0.8	灰青色	密3.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	回転ナデ。	3/4
31	須恵器 杯蓋	2D区 NR301	(12.2)	淡灰青色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。天井部外面3/4回転ヘラケズリ。	1/4 反転
32 八	須恵器 甕	2B・C区 NR301	(20.5)	淡灰青色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部回転ナデ。肩部外面タタキ、内面ナデ。	1/5 反転
33 八	須恵器 甕	2B・C区 NR301	(20.6)	淡灰青色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。外面タタキ残る。	1/6 反転
34 八	土師器 甕	2B・C区 NR301	(16.6)	暗茶灰色 淡灰茶色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。肩部ナデ。	1/5 反転
35 八	土師器 甕	2B・C区 NR301	(14.8)	茶橙赤色 暗灰茶色	密1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面指押え、内面ナデ。	1/5 反転
36 八	土師器 甕	2B・C区 NR301	(19.9)	茶褐色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面指押え、内面ナデ。内面煤付着。	1/6 反転
37 八	土師器 甕	2B・C区 NR301	(21.6)	茶灰色	密2.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ハケ、内面ナデ。	1/8 反転
38 八	土師器 甕	2B・C区 NR301	(30.0)	淡赤橙色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。肩部外面ハケ、内面ナデ。	1/8 反転
39	土師器 甕	2B・C区 NR301	(13.3)	淡赤橙色	やや粗2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	ナデ。	1/5 反転
40	土師器 甕	2D区 NR301	(20.8)	淡灰茶色	やや粗1.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ナデ。肩部外面ハケ、内面ナデ。	1/4 反転
41	土師器 甕	2B・C区 NR301	(22.1)	淡茶灰色	やや粗1.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	ヨコナデ。	1/5 反転
42 八	台石	1D区 SI401	長辺　42.1 短辺　32.6 厚さ　9.6	灰色			砂岩。	
43	土師器 皿	2C・D区 NR401	(14.8)	淡茶橙色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	1/5 反転
44	土師器 皿	2C・D区 NR401	(18.5)	淡茶灰色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	1/8 反転
45	土師器 杯	2C・D区 NR401	(17.9)	淡灰橙色	密0.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。内面放射状暗文。	1/4 反転

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
46	土師器 皿	2C・D区 NR401		(15.1)	淡茶褐色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	1/5 反転
47	土師器 皿	2A・B区 NR401		(16.8)	淡茶灰色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。底部外面指押え。	1/8 反転
48 八	土師器 杯	2C・D区 NR401		(10.8) 3.4	茶橙色	密0.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部外面ナデ。内面放射状暗文。	1/3
49	土師器 杯	2A・B区 NR401		(18.2) 3.1	淡茶橙色	密1.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。底部外面ナデ。内面放射状暗文。外面黒斑。	1/5 反転
50	土師器 皿	2A・B区 NR401	高台径	(26.4) 3.6 (20.8)	淡灰茶色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。底部外面ナデ。内面口縁部放射状暗文のち底部螺旋状暗文。 高台高 0.5	1/5 反転
51	土師器 鉢	2C・D区 NR401		(17.6)	淡灰茶色 淡茶橙色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。	極小 反転
52 八	土師器 甕	2区 NR401		(14.4)	赤橙灰色 淡灰茶色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	肩部ナデ。	1/5 反転
53 八	土師器 甕	2B・C区 NR401		(18.8)	淡茶灰色 淡茶橙色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	ナデ。	1/4 反転
54 八	土師器 甕	2C・D区 NR401		(18.0)	灰橙色 灰黄褐色	やや粗2.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部～肩部ヨコナデ。体部ナデ。	1/4 反転
55 八	土師器 甕	2C・D区 NR401		(14.4)	乳茶灰色	やや粗2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ヨコナデ、内面ハケ残る。体部ハケで、内面下位ヘラケズリ。	1/5 反転
56 八	土師器 甕	2C・D区 NR401		(13.5)	茶橙色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。2個一対の把手を付す。	1/4 反転
57	須恵器 杯蓋	2C・D区 NR401		(15.0)	淡灰緑色	密1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。	1/3 反転
58	須恵器 杯蓋	2C・D区 NR401		(18.0)	淡灰青色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	1/3 反転
59	須恵器 杯身	2C・D区 NR401	高台径	(14.6) 4.0 19.2	淡灰青色	密2.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。 高台高 0.5	1/3 反転
60 八	須恵器 杯身	2C・D区 NR401	受部径	8.6 3.3 19.2	淡灰青色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	ほぼ完形
61	須恵器 皿	2C・D区 NR401		(26.9)	淡灰色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	1/8 反転
62	須恵器 鉢	2C・D区 NR401		(26.6)	淡灰緑色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。片口。	1/5 反転
63	須恵器 広口短頸壺	2C・D区 NR401		(10.7)	淡灰青色	密1.0㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。	1/5 反転
64	須恵器 底部	2C・D区 NR401	底径 高台高	(7.8) 0.7	淡灰青色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。底部外面ナデ。	1/3 反転
65	須恵器 底部	2C・D区 NR401	底径 高台高	(12.2) 1.2	淡灰色	密1.5㎜以下の砂粒を微量含む。		回転ナデ。内面灰かぶり。	1/3 反転
66	須恵器 甕	2C・D区 NR401		(28.4)	淡灰色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。	1/8 反転
67 八	須恵器 高杯	2C・D区 NR401		(16.6)	淡灰青色	密1.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	回転ナデ。体部外面波状文。	1/8 反転
68 八	須恵器 器台	2C・D区 NR401			灰黒色	密2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	回転ナデ。杯部内面ナデ。杯部外面下位下向きの鋸歯文。脚部外面波状文。脚部3方向に長方形スカシ。	極小 反転

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値) 口径 器高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
69 八	須恵器 高杯	2C・D区 NR401	底径　(8.2)	淡灰青色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	回転ナデ。脚部外面回転カキ目。脚部3方向に長方形スカシ。	⅕ 反転
70	土師器 壺	2C・D区 NR401	(9.2)	淡茶橙色	密0.5㎜以下の砂粒を微量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデのち上位ヘラミガキ、内面ナデ。	⅕ 反転
71	土師器 壺	2B・C区 NR401	(15.8)	淡灰茶色	やや粗2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。	⅛ 反転
72	土師器 壺	2C・D区 NR401	(18.4)	茶褐色	やや粗5.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデのちハケ。	⅕ 反転
73	土師器 壺	2C・D区 NR401	(17.2)	茶橙色	やや粗1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。肩部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	⅛ 反転
74	土師器 高杯	2C・D区 NR401	(26.3)	茶橙色	やや粗1.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ナデ。	⅛ 反転
75	土師器 甕	2C・D区 NR401	(19.6)	暗茶褐色	やや粗1.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部ヨコナデで、内面ハケ残る。肩部外面タタキ、内面ヘラケズリ。外面煤付着。	⅛ 反転
76	土師器 甕	2C・D区 NR401	(17.4)	茶褐色	やや粗2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口縁部～肩部ナデ。肩部外面タタキ残る。	⅛ 反転
77	土師器 甕	2C・D区 NR401	(13.5)	乳茶灰色	やや粗1.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口頸部ヨコナデで、口縁部外面に櫛描直線文。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	¼ 反転
78	土師器 甕	2B・C区 NR401	(14.4)	乳茶灰色	やや粗0.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	口頸部ヨコナデ。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	¼ 反転
79	土師器 鉢	2C・D区 NR401	(11.8)	淡灰茶色	密1.0㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	⅕ 反転
80 八	土錘	2B区 NR401	長さ　6.4 径　2.8	灰茶色	やや粗4.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	ナデ。	完形
81 八	土錘	2C・D区 NR401	長さ　7.5 径　3.2	淡灰茶色	やや粗2.0㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	ナデ。	完形

第５章　まとめ

今回の調査では古墳時代前期から近世の遺構・遺物を検出した。

古墳時代前期では１区で竪穴住居群・土器棺墓を検出した。これらは、当遺跡内では初めて明確に確認されたものである。土器棺墓の時期は布留式期古相に比定されるもので、竪穴住居群の時期はこれよりやや遡る庄内式期と考えられる。庄内式期の居住域が布留式期に墓域に移り変わったとも考えられ、１区の北西約60ｍの地点では方形周溝墓と推定される溝群が確認されている（第３次調査）。

２区ではＮＲ301・401を検出した。ＮＲ301は、昭和59年度の第４次調査における第５調査区河川２にあたるものと考えられる。ＮＲ301はごく最近の地目にまで影響しており、当地の区画整理以前の農水路に重なるものである。

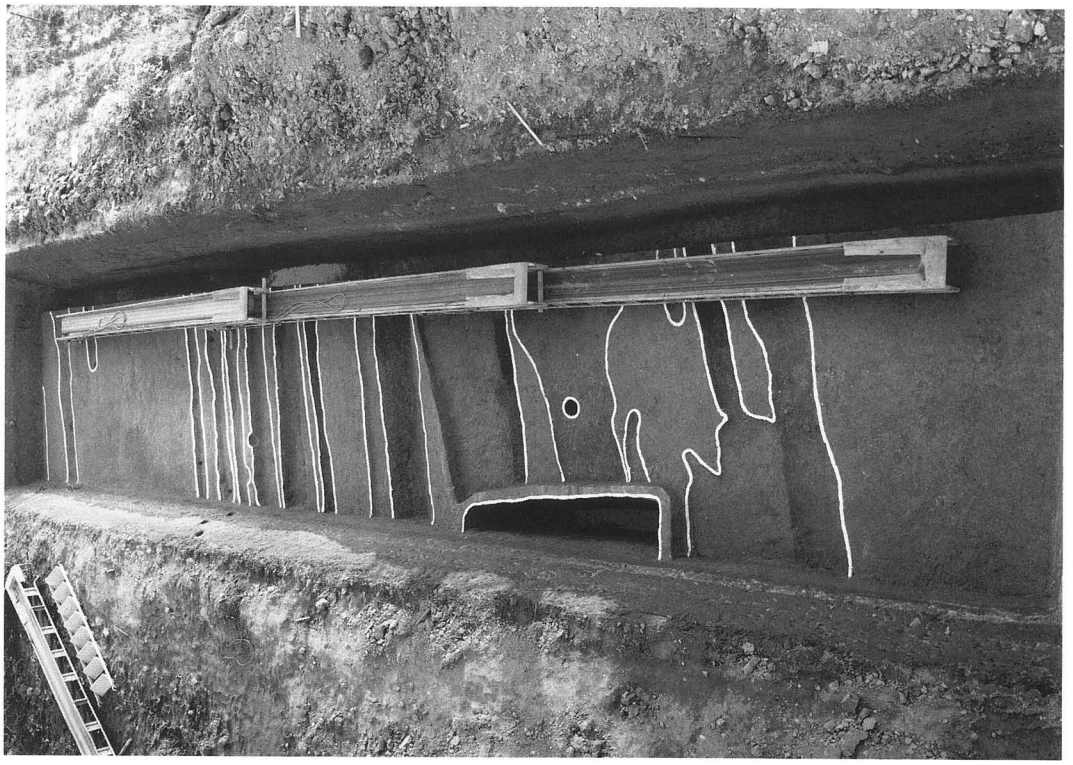
ＮＲ401下層には奈良時代の土器が多量に含まれており、かなり大きな破片もみられる。また少量ではあるが古墳時代中期の須恵器も含まれている。このことからこの周辺から上流付近に当時の集落の存在が予想される。

この２条の河川は大規模な河川の上層と下層として捉えることもできよう。この場合、中層となるＮＲ401上層にはほとんど遺物は含まれておらず、奈良時代以降集落の途絶える時期があったものと考えられる。

参考文献

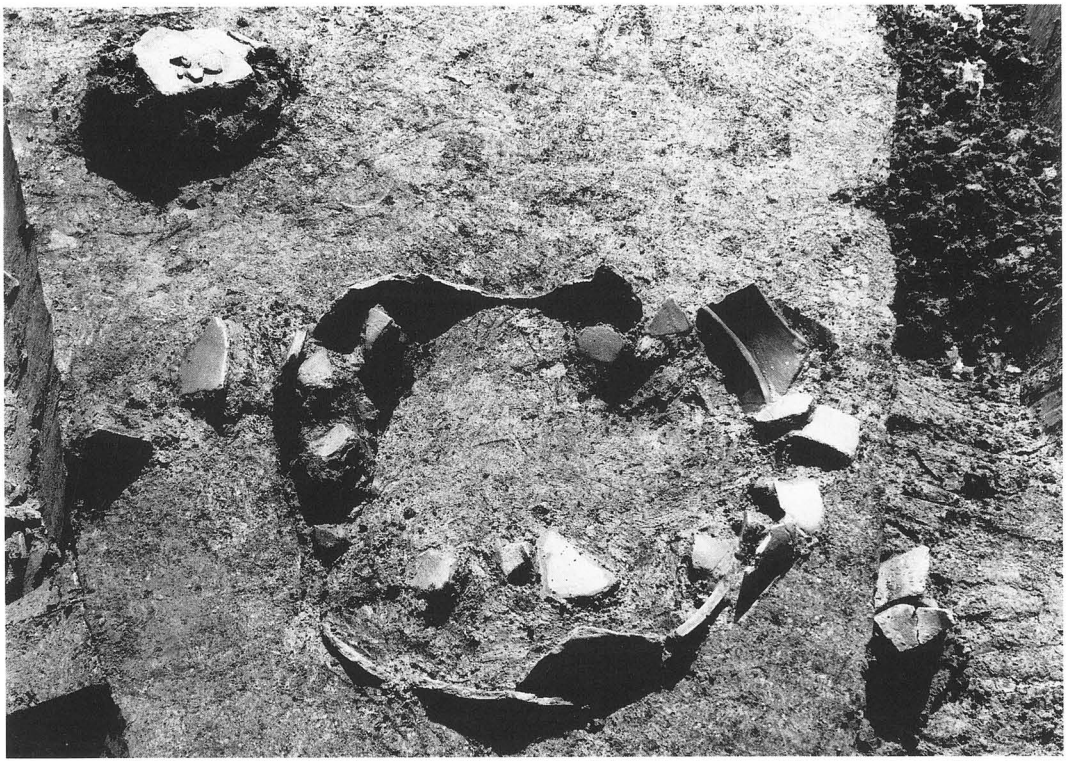
（財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡〈昭和59年度　第４次調査〉」1988　当調査研究会報告15

図　　版



1区　第1・2次面全景（北から）

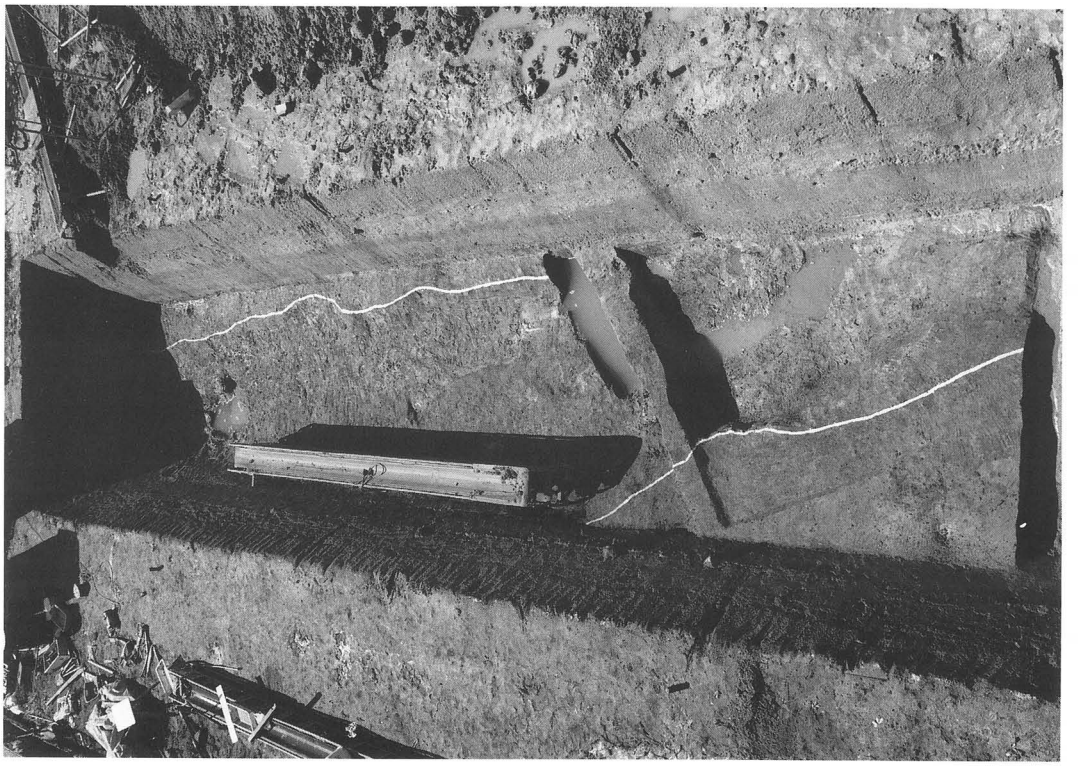
1区　第3次面全景（北から）



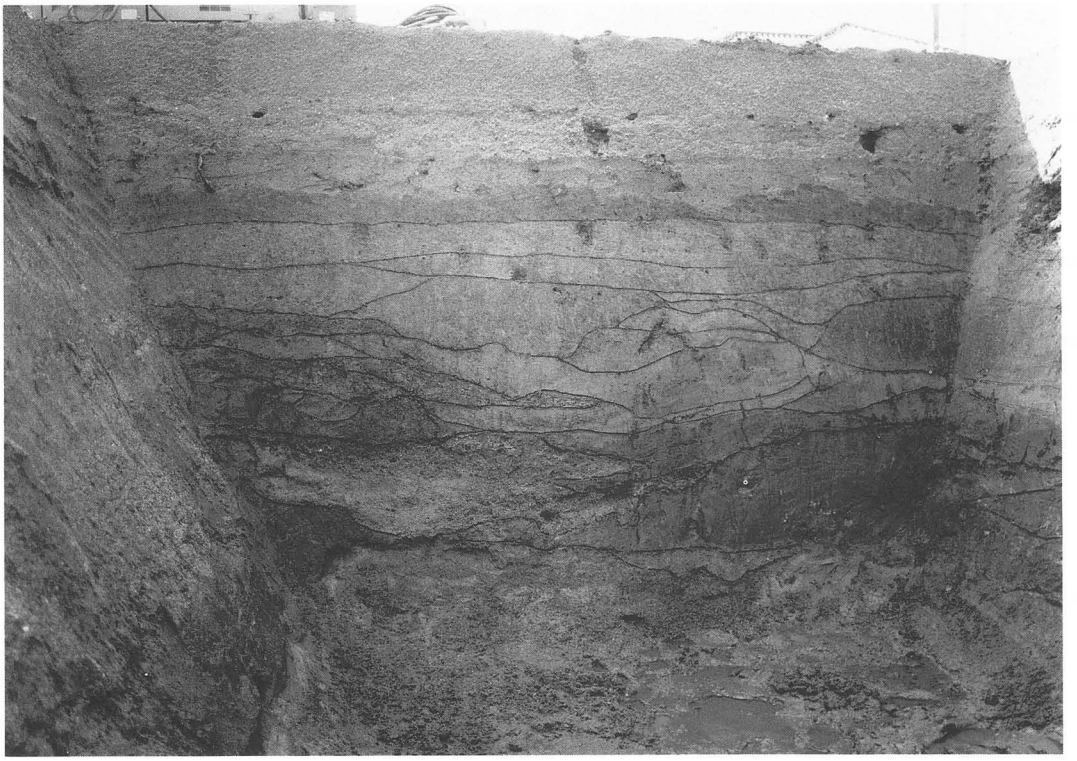
1区　土器棺墓301（北から）

1区　土器棺墓301（北から）

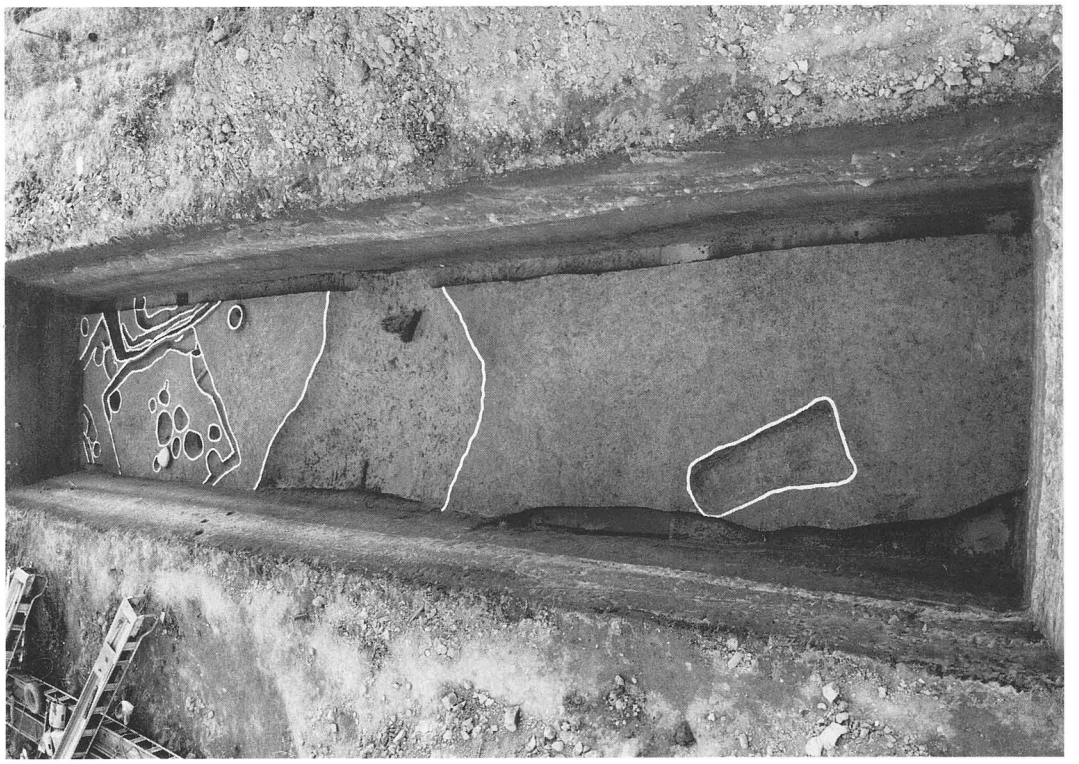
2区　SK301東壁（西から）



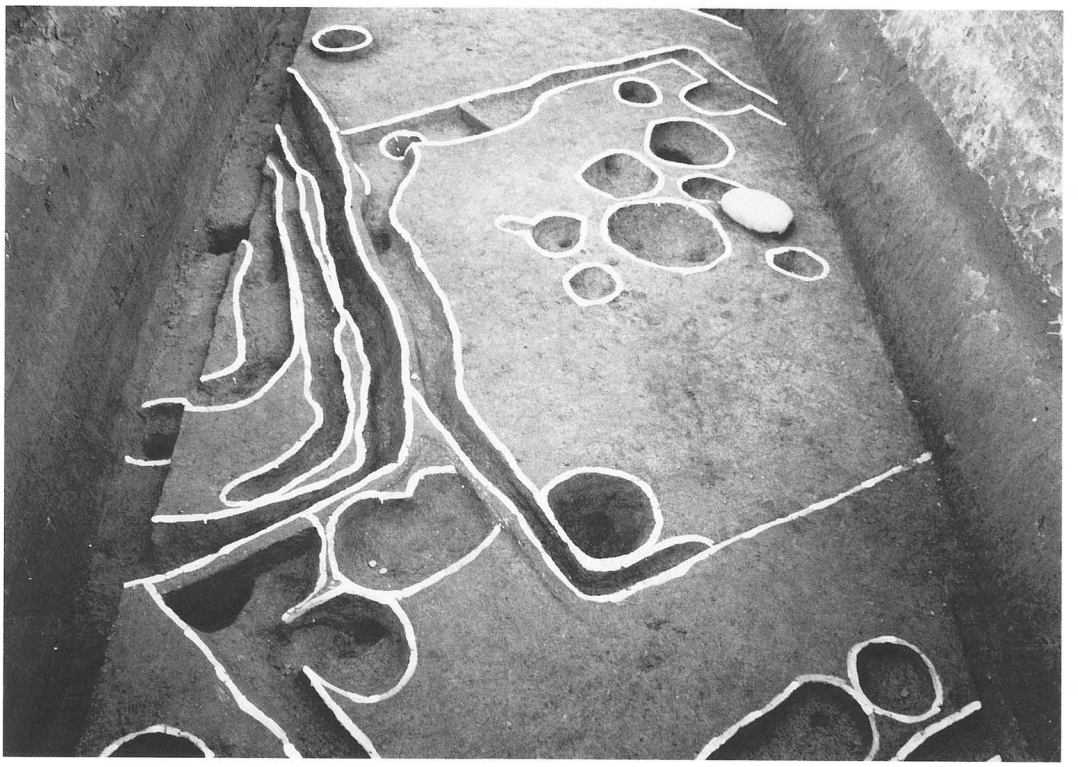
2区　第3次面全景（北から）



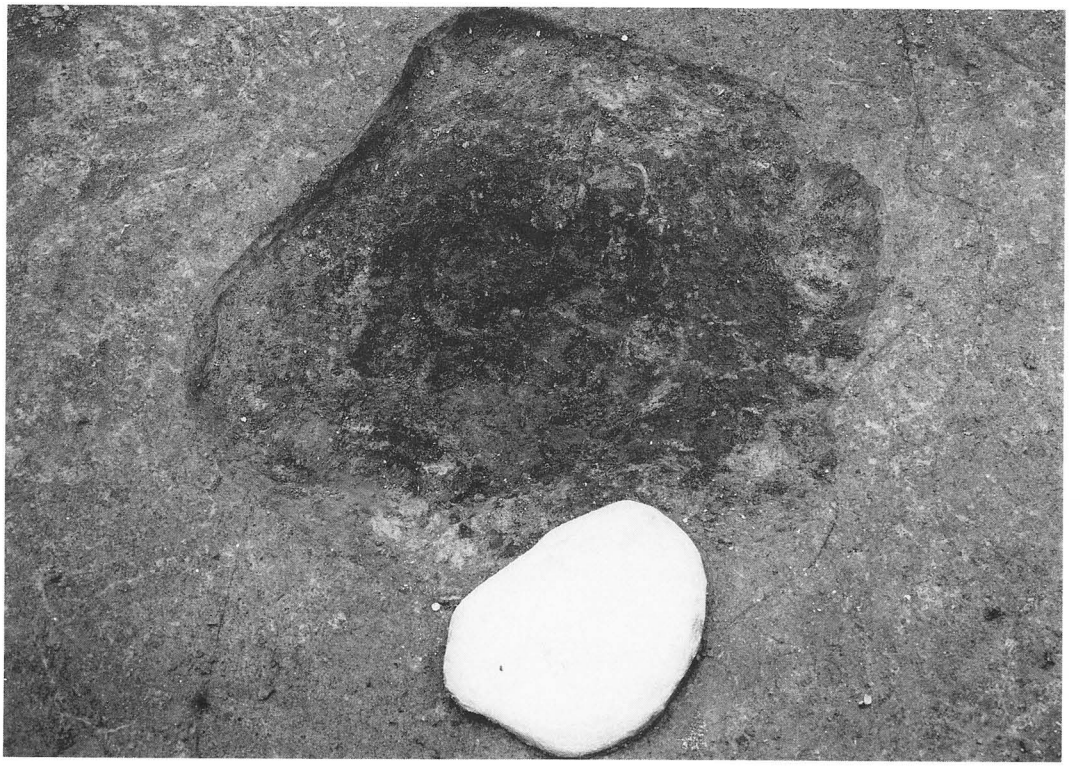
2区　調査区南壁（北から）



1区　第4次面全景（北から）



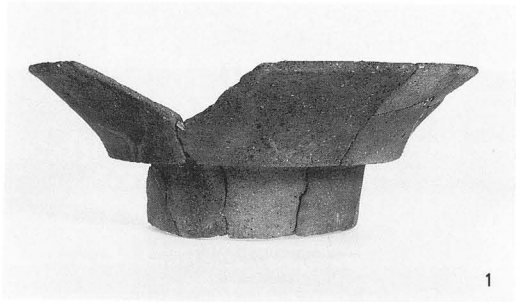
1区　SI401・402（南から）

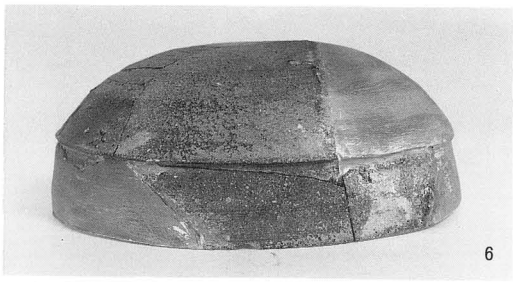


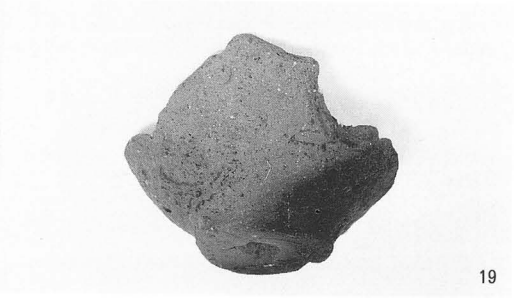
1区　SI401内　炉・台石（42）検出状況（東から）

1区　SI402　畦南壁（北から）

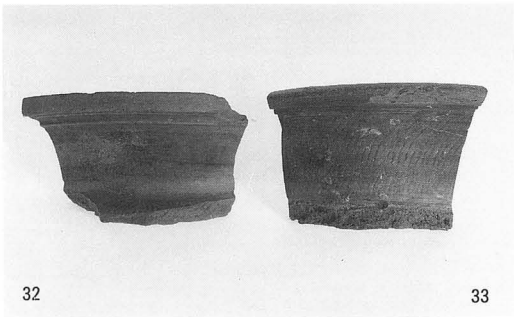
1区　SD401西壁（東から）

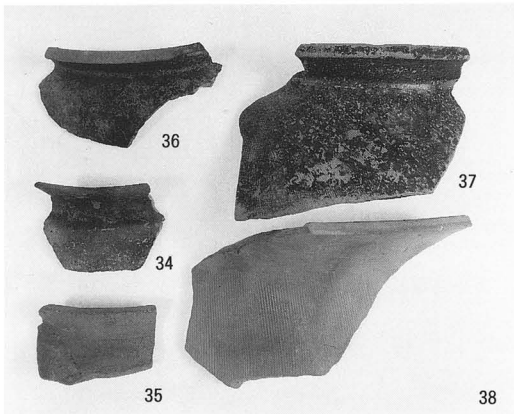


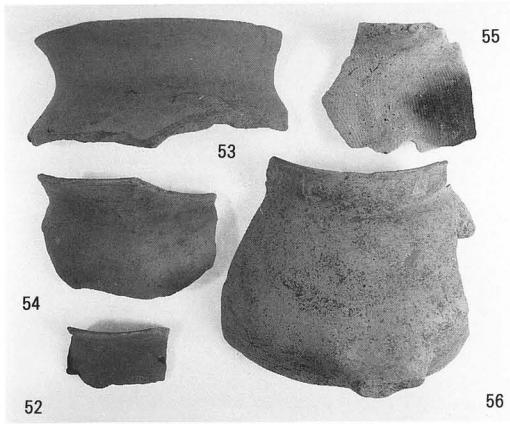


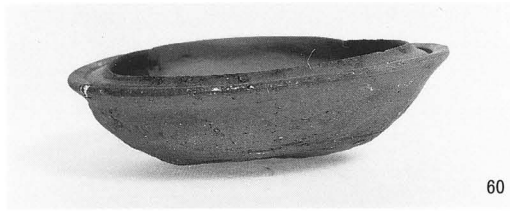


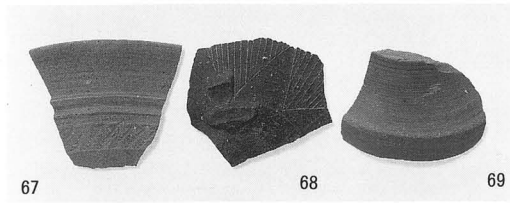
1・2：土器棺墓301　6・9：第4層　16～19：第5層

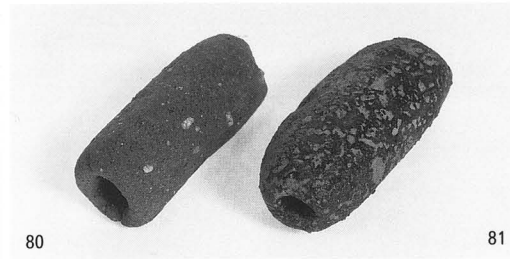












28：SK301　32～38：NR301　42：SI401　48～81：NR401

Ⅲ　小阪合遺跡第20次調査（ＫＳ91－20）

例　　言

1．本書は、八尾市青山町２丁目１で行った共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第 156号　平成３年３月18日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が、杉本一二三氏から委託をうけて実施したものである。

1．本調査は、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第20次調査である。

1．現地調査は、当調査研究会　坪田真一を担当者として、平成３年４月19日に着手し、同年５月16日に終了した。調査面積は340㎡である。

1．現地調査には、垣内洋平・坂下　学・濱田千年・真柄　竜・沖田純一・小田久一の参加を得た。

1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子・山内千恵子の参加を得た。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表は主に田島が作成した。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過……45

第２章　調査概要……46

　第１節　調査方法……46

　第２節　基本層序……47

　第３節　検出遺構と出土遺物……49

第３章　出土遺物観察表……61

第４章　まとめ……67

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図（Ｓ＝１／5000）……45

第２図　地区割図（Ｓ＝１／400）……46

第３図　基本層序（Ｓ＝１／40）……47

第４図　遺構平面図（Ｓ＝１／150）……48

第５図　ＳＷ１出土遺物（Ｓ＝１／４）……49
第６図　ＳＷ１平面図（Ｓ＝１／５）……49
第７図　ＳＥ１平・断面図（Ｓ＝１／50）……50
第８図　ＳＥ１出土遺物（Ｓ＝１／４）……51
第９図　ＳＫ１出土遺物（Ｓ＝１／４）……52
第10図　ＳＤ１出土遺物（Ｓ＝１／４）……52
第11図　第４層出土遺物（Ｓ＝１／４）……53
第12図　ＮＲ１出土遺物（Ｓ＝１／４）……53
第13図　ＮＲ２上層〈北区〉出土遺物（Ｓ＝１／４）……55
第14図　ＮＲ２上層〈南区〉出土遺物（Ｓ＝１／４）……56
第15図　ＮＲ２下層〈北区〉出土遺物（Ｓ＝１／４）……57
第16図　ＮＲ２上層～下層〈南区〉出土遺物（Ｓ＝１／４）……58
第17図　ＮＲ２上層〈北区〉出土遺物（Ｓ＝１／６）……59
第18図　ＮＲ２出土遺物（Ｓ＝１／２・１／４）……60

図　版　目　次

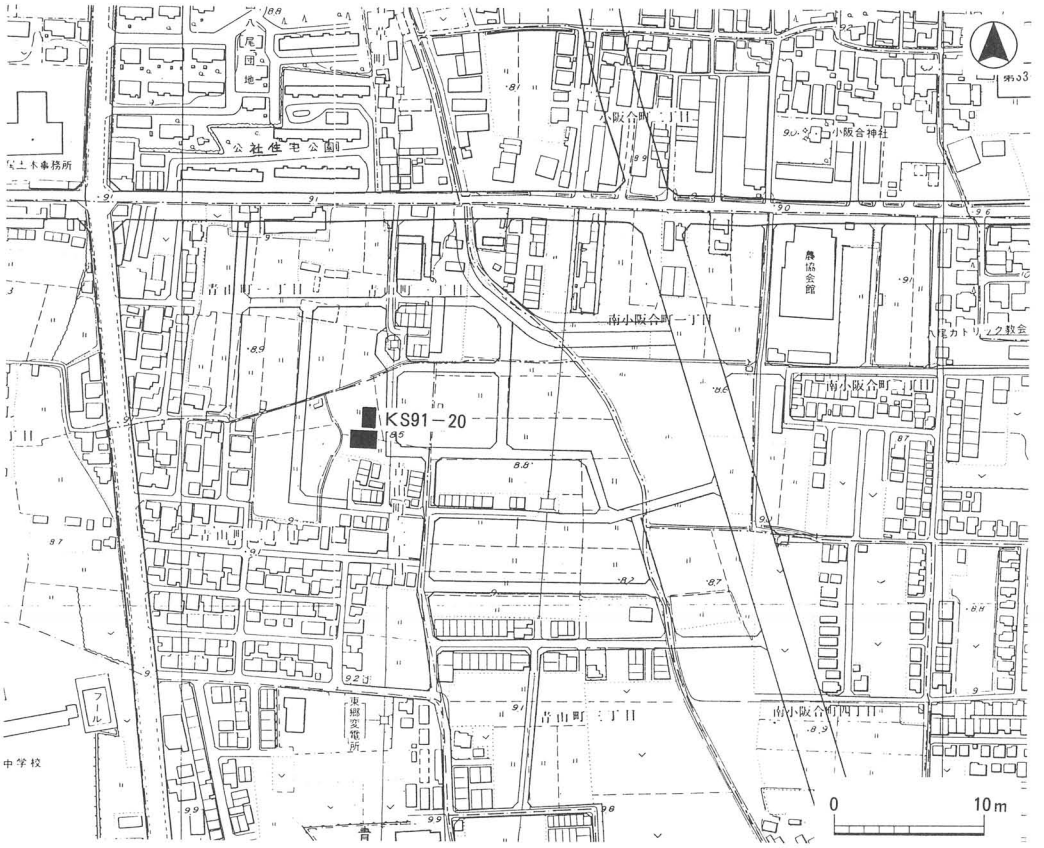
図版一　南区　全景（西から）
　　北区　ＳＷ１（上が南）
図版二　南区　ＳＥ１上層遺物出土状況（西から）
　　南区　ＳＥ１曲物（南から）
図版三　北区　ＮＲ１全景（北から）
　　北区　ＮＲ１横槌（63）出土状況（南東から）
図版四　南区　ＮＲ２全景（西から）
　　北区　ＮＲ２木製品（138）出土状況（北東から）
図版五　北区　ＮＲ２横櫛（139）出土状況（上が北東）
　　南区　ＮＲ２木製品（140）出土状況（西から）
図版六　出土遺物
図版七　出土遺物
図版八　出土遺物
図版九　出土遺物
図版一〇　出土遺物

第１章　調査に至る経過

小阪合遺跡内では、昭和57年以降、土地区画整理事業等に伴う発掘調査が、当調査研究会・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～近世に至る遺跡であることが確認されている。

平成３年、杉本一二三氏より、八尾市青山町２丁目１における共同住宅建設の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあることから発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、工事により遺構の破壊が予想される部分を対象に、発掘調査を実施することが両者で合意された。発掘調査にあたっては、事業者・同文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

今回の調査地の周辺では、当調査研究会により第８次[註1]・18次[註2]調査が行われており、古墳時代中期、平安時代末～鎌倉時代の遺構が検出されている。また東側の第18次調査では弥生時代中期の集落・後期の水田が確認されている。



第１図　調査地位置図（S＝１／5000）

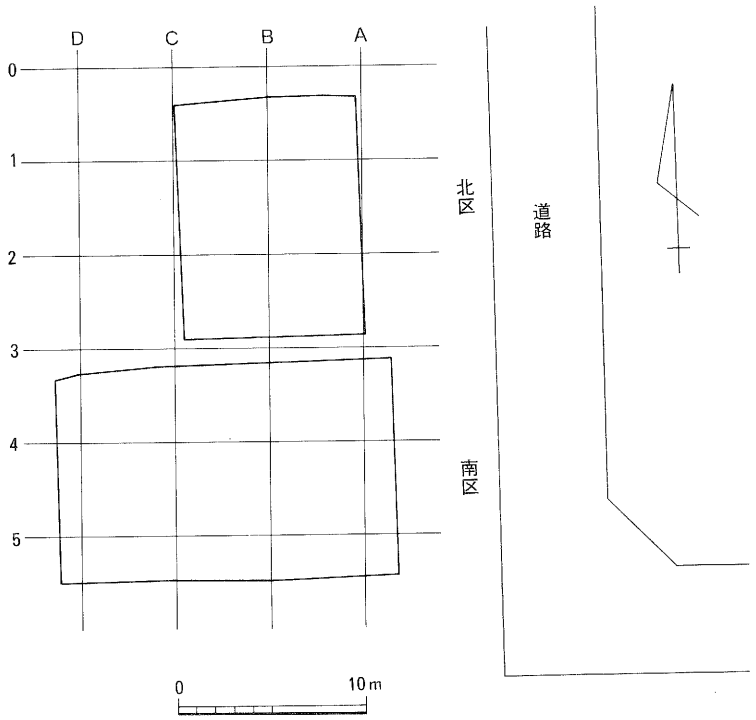
第２章　調査概要

第１節　調査方法

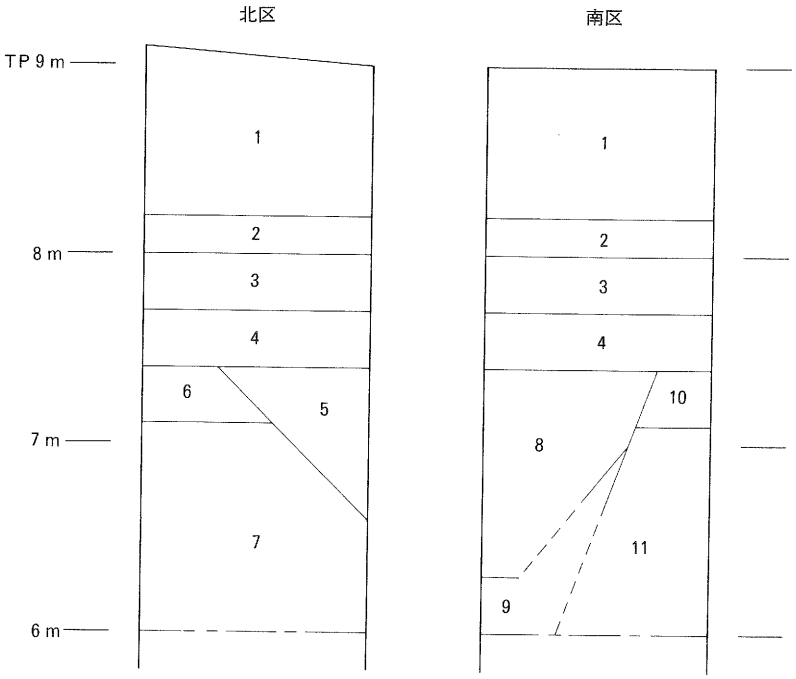
今回の調査は共同住宅建設に伴う調査である。調査区は約1.3ｍの間隔で南区・北区に分かれており、各調査区の面積は北区－約130㎡、南区－約210㎡である。

調査は北区・南区を並行して実施した。掘削は北区で地表下約1.7ｍ・南区で約1.5ｍまでを機械掘削とし、以下を人力掘削で調査を行った。

地区割については、調査区平面形に合わせて５ｍ方眼を任意に設定し、実測・遺物取り上げの基準とした。なおこの方眼の南北ラインは磁北から東に約1.7度振っている。



第２図　地区割図（S＝１／400）

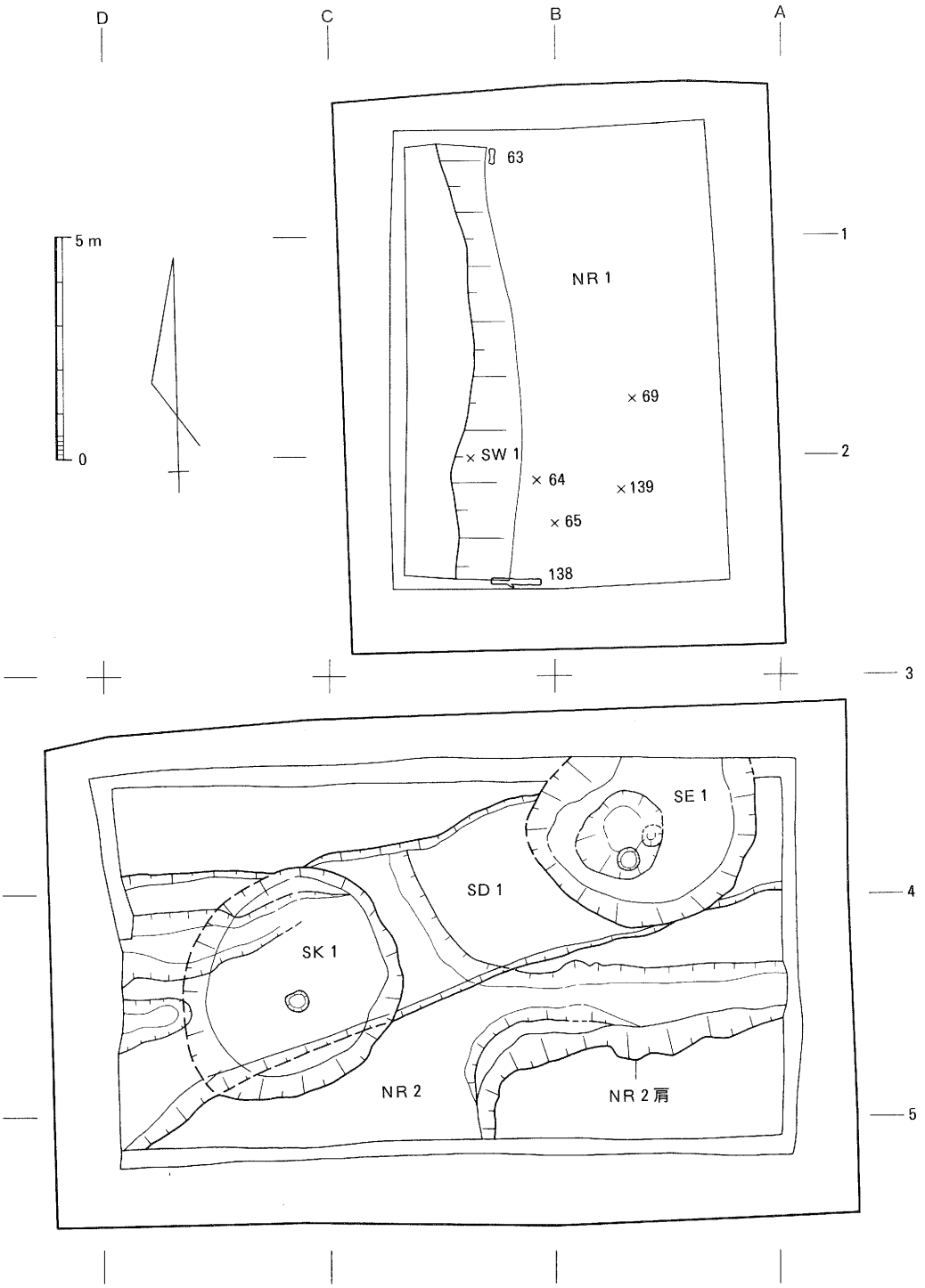


1．盛土
2．旧耕土
3．灰褐色細砂混じり砂質土
4．褐灰色細砂混じり粘質土
5．褐灰色～灰色系細砂・粗砂－ＮＲ１
6．暗褐灰色粘質土
7．黄灰色系細砂～灰青色系粘土の互層
8．灰黄褐色系のシルト～粗砂の互層 ］－ＮＲ２
9．青灰色系の粘土～シルト
10．暗灰黄褐色系微砂～粗砂（固く締まる）
11．黄灰色系微砂～粗砂

第３図　基本層序（S＝１／40）

第２節　基本層序

第１層は現代の耕作土、及び近年の土地区画整理事業に伴う盛土である。第２層は旧耕土である。第３～４層はほぼ水平堆積を呈しており、それぞれ２～３層に分層できる。北部・南部ほど粘質、中央部がやや砂質となっている。西側の第８次調査で確認されている平安時代末期頃の整地層に相当する可能性があり、層厚は当調査地が増している。古墳時代から中世までの遺物を少量含んでいる（45～55）。第４層下面が遺構面となり、標高7.4ｍ～7.2ｍを測る。北区の第５層がＮＲ１に相当し、第６層は北区のみでみられＮＲ１の西肩を形成する層である。南区の第９・10層がＮＲ２に相当し、第９層は北区では第５～８層を総合した層として捉えられる。第11・12層がＮＲ２のベースとなり、弥生時代の遺物をわずかに含んでいる。



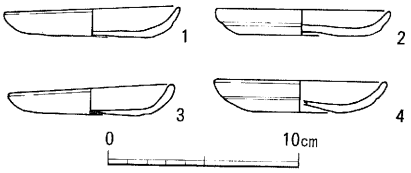
第４図　遺構平面図（S＝１／150）

第３節　検出遺構と出土遺物

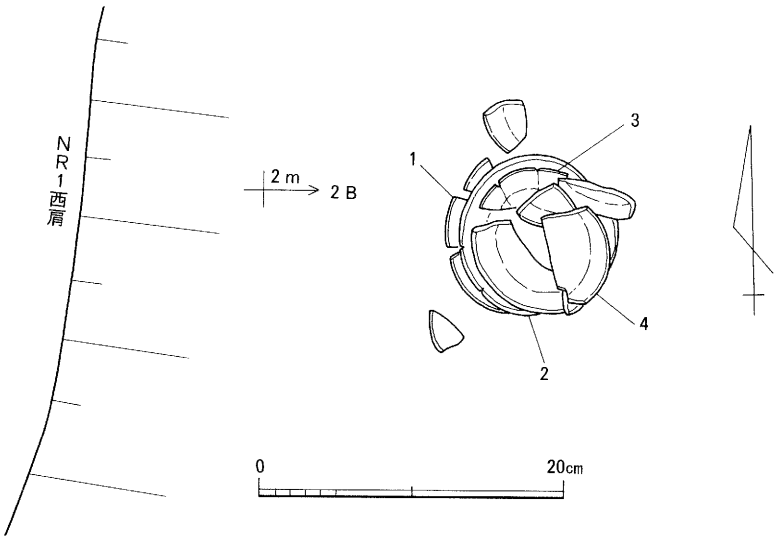
北区では土器集積（ＳＷ１）・河川１条（ＮＲ１）、南区では井戸１基（ＳＥ１）・土坑１基（ＳＫ１）・溝１条（ＳＤ１）・河川１条（ＮＲ２）を検出した。

ＳＷ１

北区の南西部、ＮＲ１の上面で検出した。検出レベルは標高約7.57ｍを測る。４枚の土師質の小皿（１～４）を正位に重ねたもので、掘形は認められなかった。土器の時期は平安時代末～鎌倉時代頃と考えられる。性格については、周辺に建物遺構や明確な整地層が認められないため断定はできないが、地鎮祭祀である可能性が考えられる。



第５図　ＳＷ１出土遺物（Ｓ＝１／４）



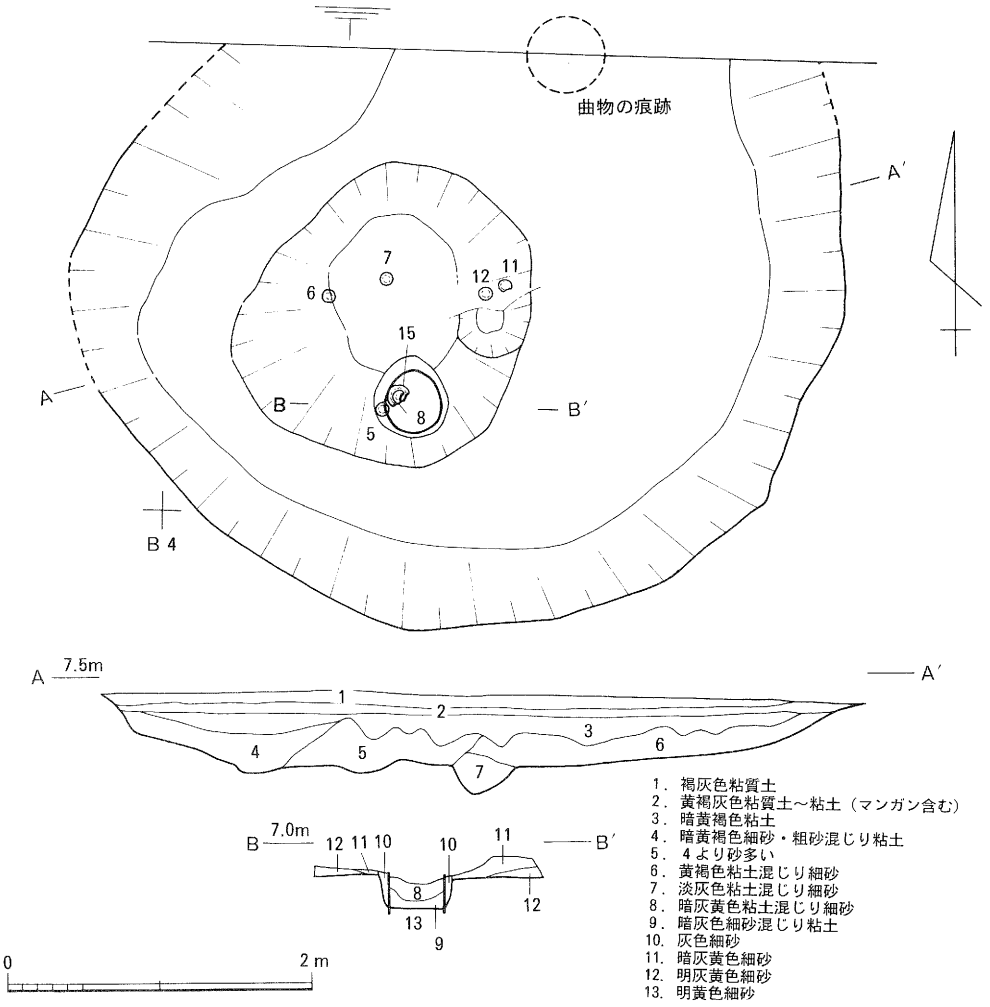
第６図　ＳＷ１平面図（Ｓ＝１／５）

ＳＥ１

南区の北東部で検出した曲物井戸である。掘形は直径約5.0ｍの円形を呈すると考えられる。埋土の第１層～第３層は井戸廃絶後の堆積で、曲物を覆っており、本来の掘形埋土ではない。曲物は掘形の南部に位置し、一段のみが遺存しており、直径約37㎝・高さ27㎝を測る。曲物はベースとなる湧水層である明黄色細砂層を直径約50㎝・深さ約20㎝掘りこんだ後、約５㎝埋め込まれている。この曲物の他にも中央部（第７層）と北部の調査区壁内に井戸側の痕跡と思われる落ち込みが認められ、２回以上の掘り直しが行われたものと考えられる。掘形の規模が大きいのは、この掘り直しに起因するのであろう。

第１層から土師質小皿10枚（５～14）・大皿１枚（15）が出土しており、出土地点のわかる７枚をみると、意図的に並べられた様な状況である。このうち３枚は曲物の上位に位置しており、正位で５と15を並べ、15の上に逆位の８を重ねている。また第３層中の曲物上位からは、ほぼ完形の瓦器椀１点（18）が横位で口縁部を北東に向けて出土している。これらの土器は井戸廃絶時の何らかの祭祀に関するものである可能性が考えられる。

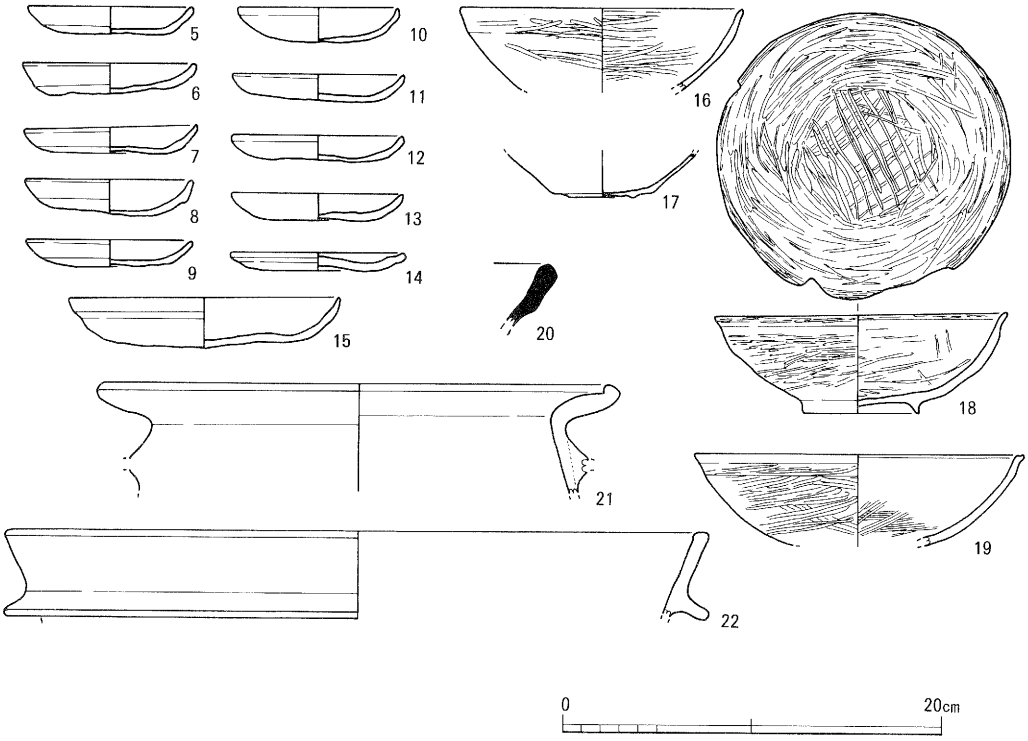
出土遺物（５～22）の時期は平安時代末頃に比定される。



第７図　ＳＥ１平・断面図（Ｓ＝１／50）

ＳＫ１

南区の西部で検出したが、西側はＳＤ１との境が明確に捉えられなかった。平面形は直径約5.0ｍの円形を呈すると考えられる。深さ約50㎝を測り、断面形状は逆台形で底部が平らな形



第８図　ＳＥ１出土遺物（Ｓ＝１／４）

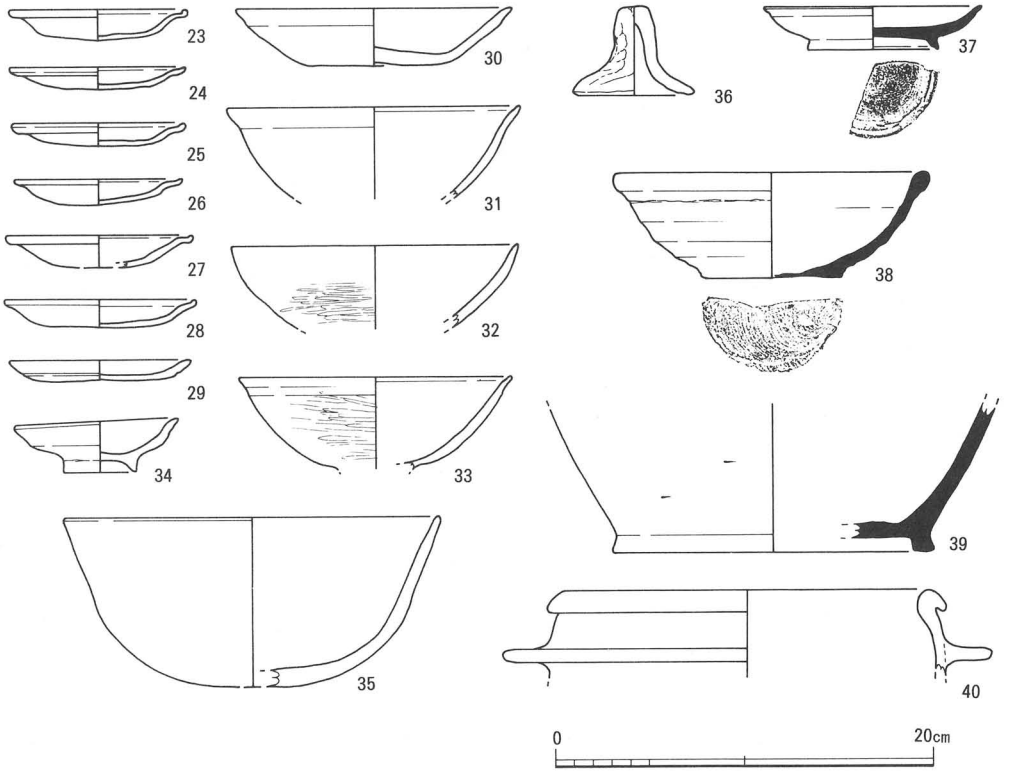
状を成す。埋土は上から灰褐色細砂混じり粘質土、暗青灰色粘土、暗灰青色細砂混じり粘土である。底部の中央付近に、直径約50cm・深さ20cmを測り、青灰色細砂混じり粘土の埋土をもつ落ち込みがある。これを曲物井戸の枠の痕跡と考えるならば、当土坑はＳＥ１と同様の井戸であった可能性がある。

出土遺物（23～40）の時期はほぼ平安時代中葉以降に比定される。38は底部糸切りの須恵質鉢で、焼成は不良である。形態的に篠窯産の可能性がある。40の土師質羽釜はやや時期が下ると考えられ、当遺構の埋没過程の混入と思われる。

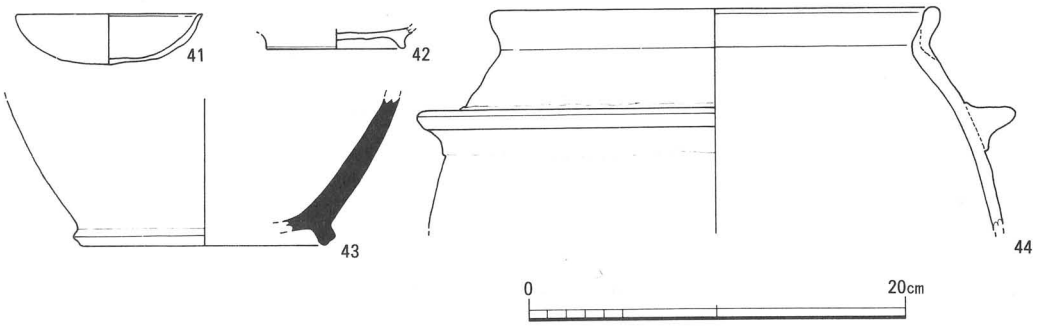
ＳＤ１

南区を東西方向に横断する溝である。幅3.5ｍ～5.4ｍ、深さ20cm～50cmを測り、底のレベルは西部が低くなっている。断面皿状を呈し、埋土は褐灰色系の粘質土～粘土である。中央部の上層では拳大～人頭大の石の散乱がみられた。出土遺物（41～44）は平安時代頃に比定され、図化しえなかったが円筒埴輪片も出土している。

なおＳＤ１は、後述のＮＲ１・２の最終段階の堆積部分であるとも考えられる。



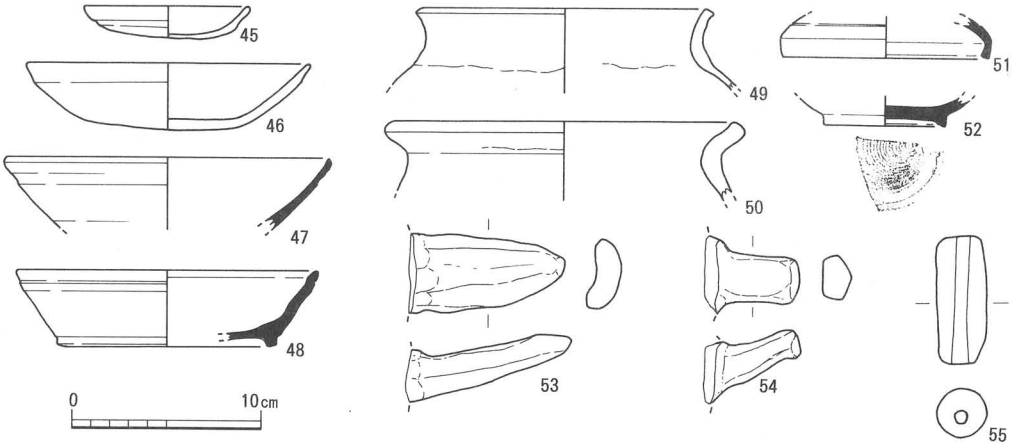
第９図　ＳＫ１出土遺物（Ｓ＝１／４）



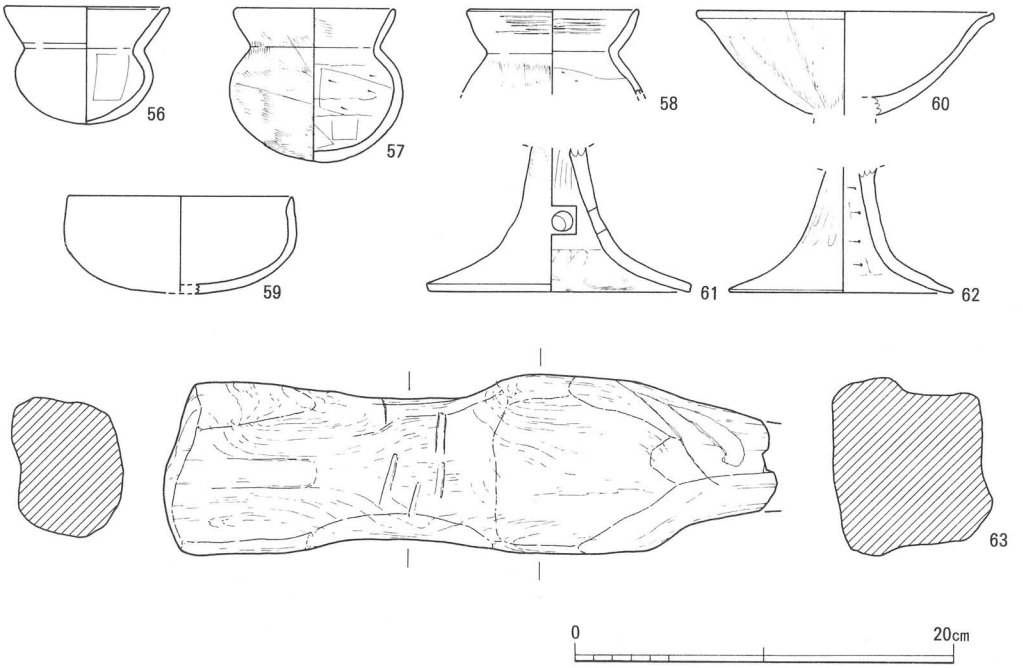
第10図　ＳＤ１出土遺物（Ｓ＝１／４）

ＮＲ１

北区西部で左岸を検出した。検出レベルは標高7.3ｍ～7.4ｍを測る。ほぼ南北方向の河川で、第６層暗褐灰色粘質土を肩としているが、南区ではこの第６層は認められなかった。南部でみられた暗灰青色系粘土～粘質シルトを河床とした。規模は検出長約9.7ｍ・深さ0.8ｍ～1.3ｍ以上を測り、河床は北東部が深くなっている。堆積土は褐灰色～灰色系の細砂・粗砂であり、最



第11図　第４層出土遺物（S＝１／４）



第12図　ＮＲ１出土遺物（S＝１／４）

上層は固く締まっている。ＮＲ１上面で検出したＳＷ１が河川埋没後のものであることから、平安時代後半には河川としての機能を停止していることがわかる。なお、このＮＲ１の下層にも後述する河川（ＮＲ２）の堆積が続いている。

出土遺物には、古墳時代前期末頃の時期に比定される布留式期新相の土器（56～62）の他、木製品では横槌（63）が出土している。

横槌（63）は河川の底部北端、傾斜部との際で出土した。大型のもので、柄部は欠損しており、残存長32.4cmを測る。頭部は断面約9.4cm×8.3cmの方形を呈し、長さ27.4cmを測り、中央部が細くなっている。頭部と柄との間は面取りが施されている。頭部の中央付近には溝状の使用痕が認められ、また線状の刃物痕のような痕跡もあり、これは加工痕とも考えられる。

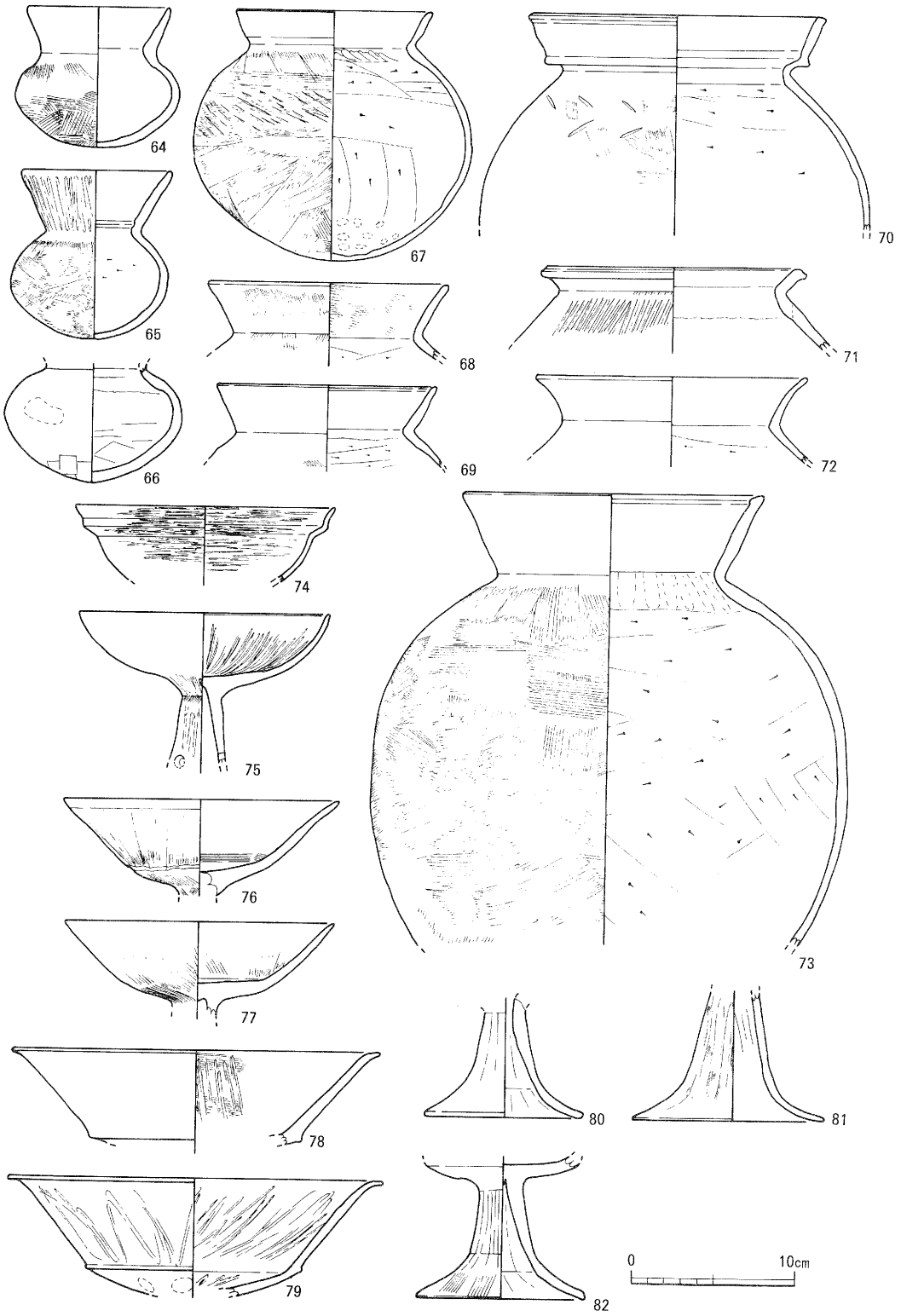
ＮＲ２

北区全域と南区のほぼ全域を占める河川で、南区南東部で右岸を検出した。検出レベルは標高約7.4ｍを測る。規模は幅12ｍ以上を測り、南西－北東の流路方向をもつと考えられ、暗灰黄褐色系の固く締まった微砂～粗砂を肩としている。堆積土は大まかにみると、上層が暗灰青色系粘土～粘質シルト、中層が灰黄褐色系のシルト～粗砂の互層、下層が青灰色系の粘土～シルトである。上層は北区のみに堆積しており、ＮＲ１の河床とした層である。下層とした粘土層は南区の北西部と北東部で確認したが、底部までの掘削は断念したため深さは不明である。全体的に砂層と粘土層が複雑な堆積を呈するものであり、上～下層は明確には分層できない。

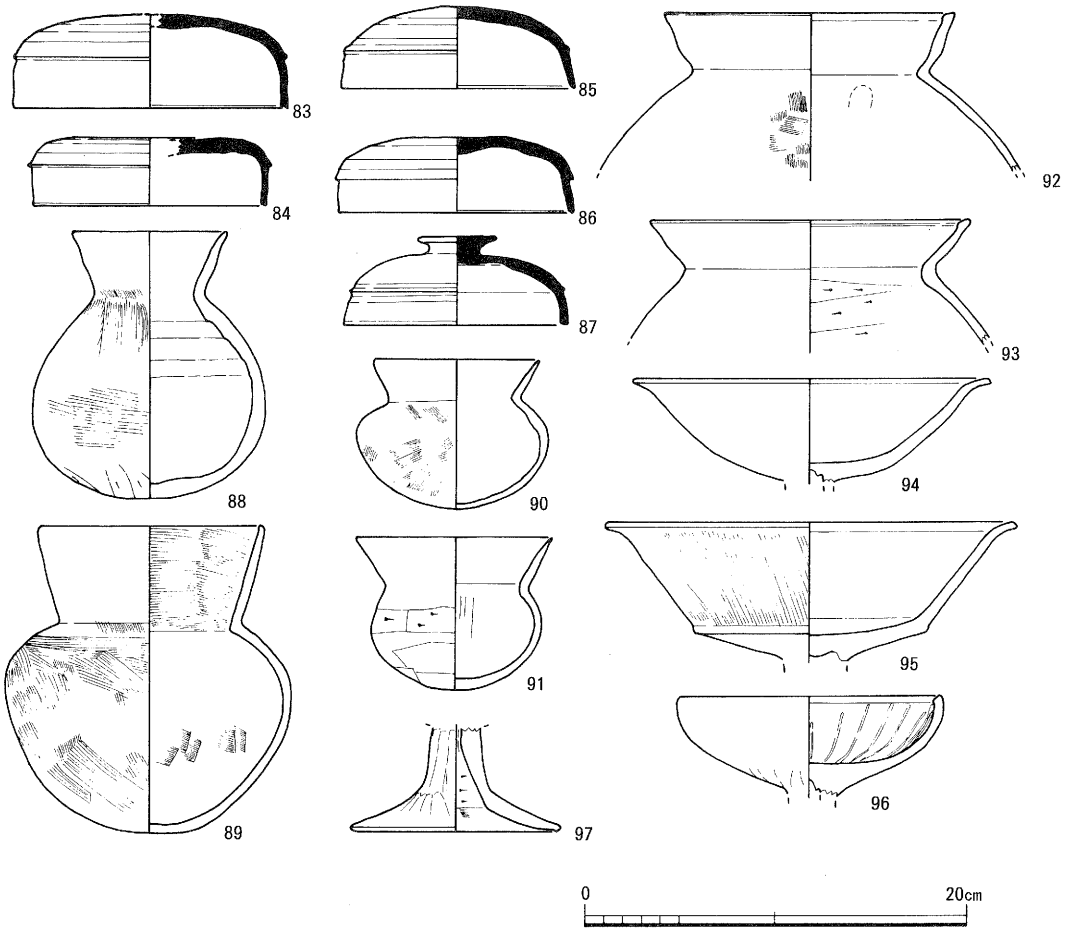
北区で検出したＮＲ１は、このＮＲ２の上層部分にあたると考えられるが、南区の調査ではＮＲ１の範囲は明確にはできなかった。このためＮＲ１に相当すると考えられる砂層も含めてＮＲ２とした。

河川堆積土からの出土遺物には、古墳時代前期後半と中期後半の時期に比定される土器（64～137）や木製品（138～143）があり、ベースとした砂層には摩耗した弥生時代の土器が少量含まれている。このうち南区出土のもの（83～97・112～137）については、前述の理由からＮＲ１出土遺物として捉えられるものも含まれよう。中期後半に比定されるものには83～87の須恵器や89・118の土師器がある。118の形態は明らかに須恵器を模したものと考えられる。これらは南区の上層から出土している。

不明木製品（138）は、北区ＮＲ１掘削時に底部と傾斜部との際で一部が検出されていた。北区南端の上層、ＮＲ１の河床を形成する暗灰青色粘土・粘質シルト層（植物遺体を含む）～黄灰色細砂の互層上面付近から、Ａ面を上にしてほぼ水平な状況で出土した。出土レベルは標高約6.90ｍである。長方形の板材で、法量は長辺118.5cm・短辺14.5cm～12.5cm・厚さ4.8cm～3.7cmを測る。木材は樹木の叉部分を使用しており、片方の側面に長さ約19.5cmにわたる枝を残している。この枝部分の表面は滑らかであり、磨かれたものか、あるいは二次的に摩滅した（把手のように握る部分・何かを巻きつけての使用等が考えられる）ものである可能性もある。板部の幅は枝より上部が広くなっている。板部には二か所に長方形の枘穴が貫通している。枘穴には桜（？）の皮と、厚さ約0.7cmの扁平な楔形の木片が遺存しており、何かに結束したのち固定するために枘穴を充填していたという状況である。またＡ面の枝側には二か所の凹みがある（イ・ロ）。加工痕はＡ面と枝の根元付近に数か所が確認できるが、明瞭なものではない。



第13図　ＮＲ２上層（北区）出土遺物（Ｓ＝１／４）

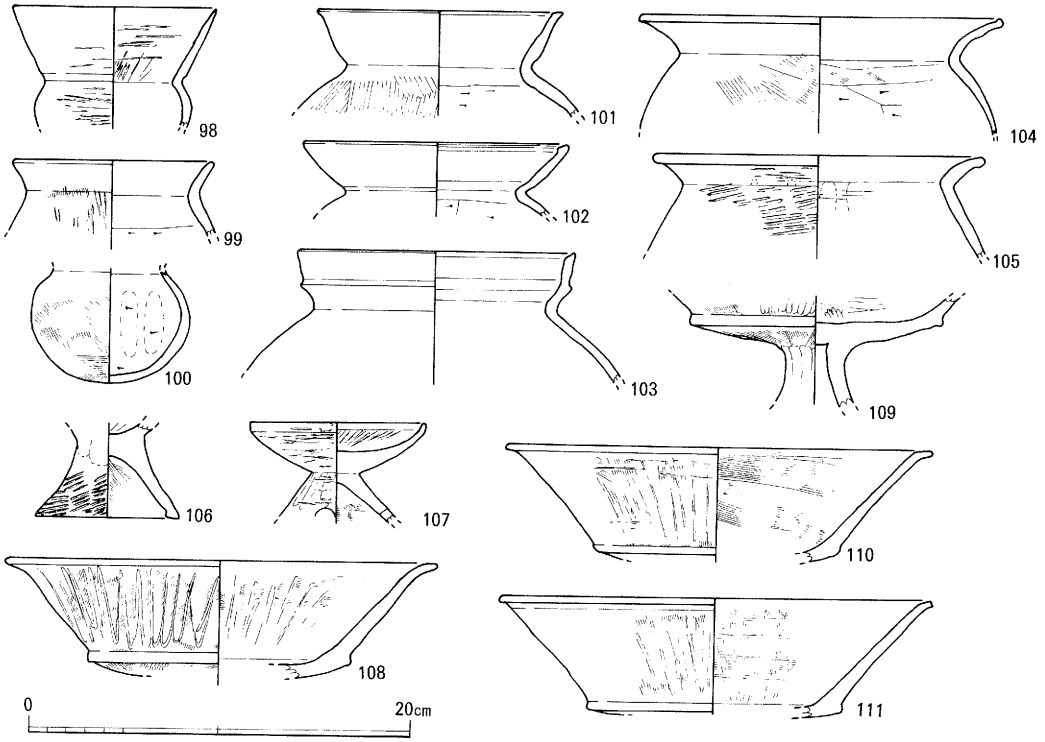


第14図　ＮＲ２上層（南区）出土遺物（S＝１／４）

類例をみないが、形状から準構造船の舷側板材である可能性を考えている。この場合、枘穴は船底部と結束するためのもので、枝部分が櫂の支点となる突起部と思われる。他に扉材や櫂などの用途も考えられよう。

なお当調査地から西に約３kmに位置する久宝寺南遺跡の調査で、準構造船の一部が検出されているが、これに伴って出土し、舷側板の可能性があるとされている板材は、枝部は無いものの法量（長辺121cm・短辺21cm・厚さ２cm）や枘穴の状況が類似しているようである。[註3]

横櫛（139）は北区南東部の上層、ＮＲ１の河床を形成する暗灰青色粘土～粘質シルト層（植物遺体を含む）から出土した。出土レベルは標高約6.61ｍを測る。挽歯の横櫛で、棟の一端が欠損している。法量は縦5.1cm・横8.9cmを測り、厚さは棟中央が最大となり1.1cmを測る。棟部断面は丸みをもち、歯部は棟とは段を成して薄くなり、歯先に向かって細くなっている。歯数は23本で密度の粗いものであり、歯は丁寧に削られている。なお棟の表面には黒漆が塗ら

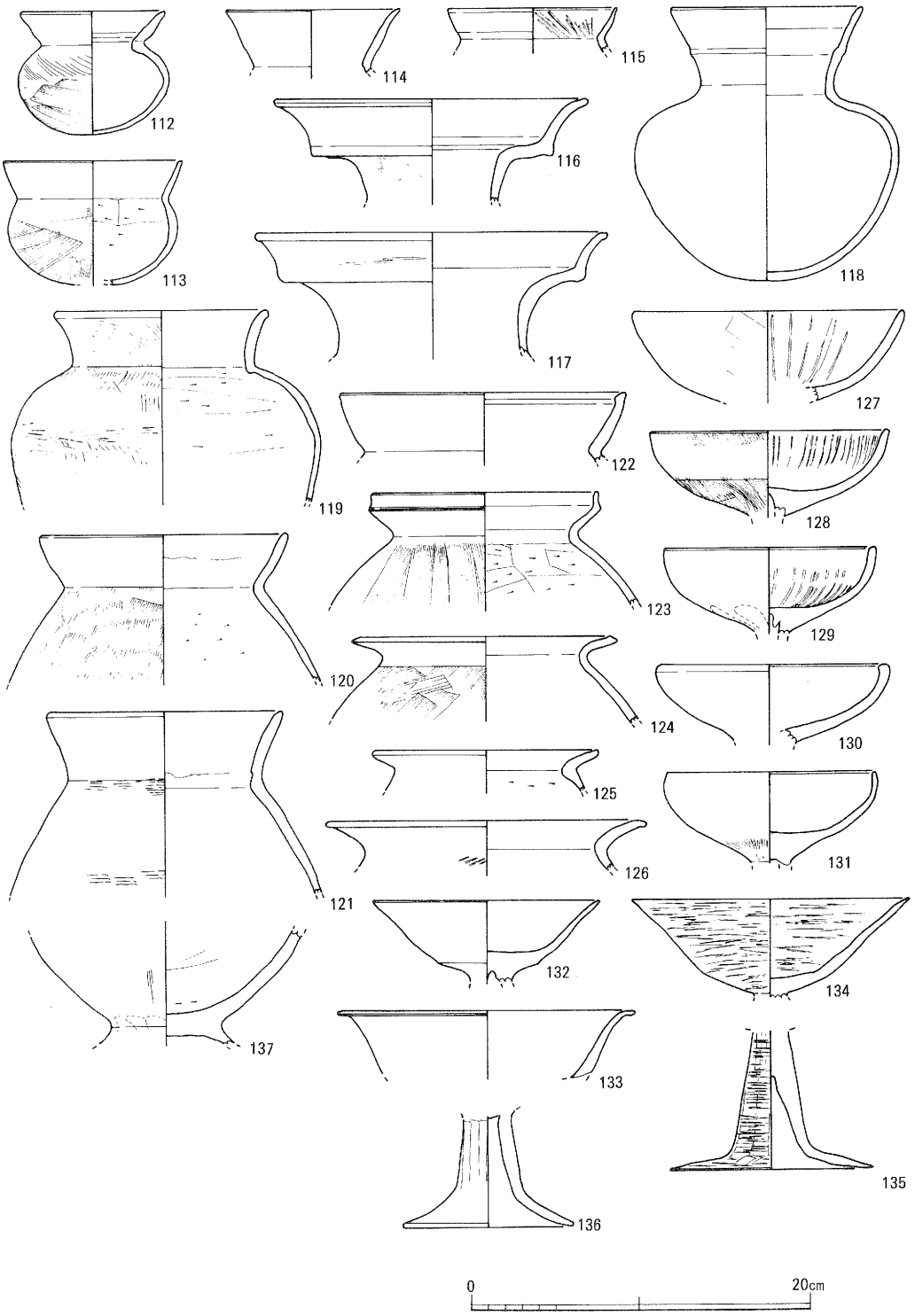


第15図　ＮＲ２下層（北区）出土遺物（Ｓ＝１／４）

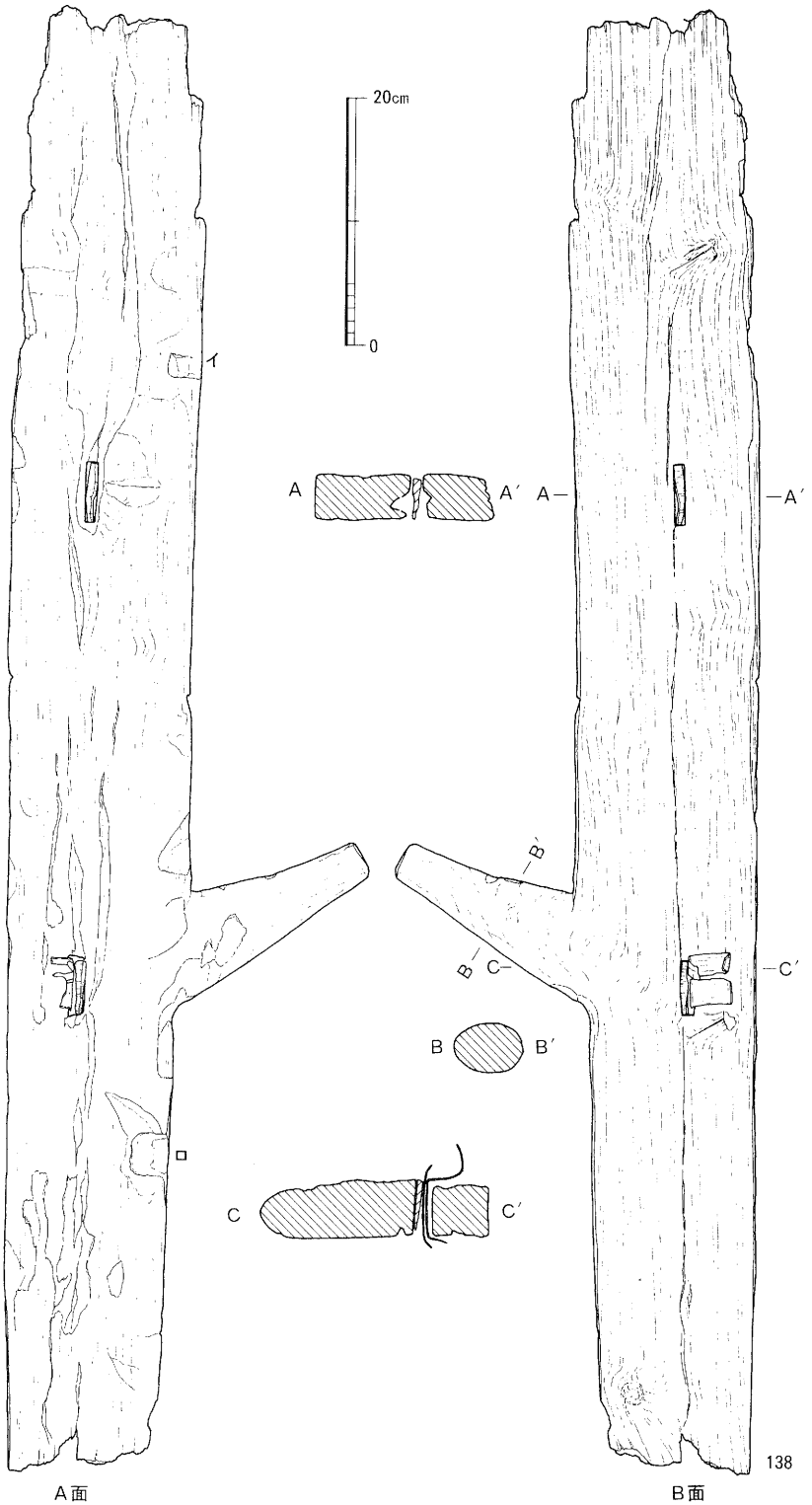
れている。時期は、河川出土ということから断定はできないものである。しかし共伴遺物（64～82）及び上位のＮＲ１出土遺物（56～63）は布留式期新相に比定されるものであり、また南区のＮＲ２出土遺物（83～97・112～137）からも、５世紀代を下るとは考えられず、横櫛としては最古例となる可能性がある。

註４

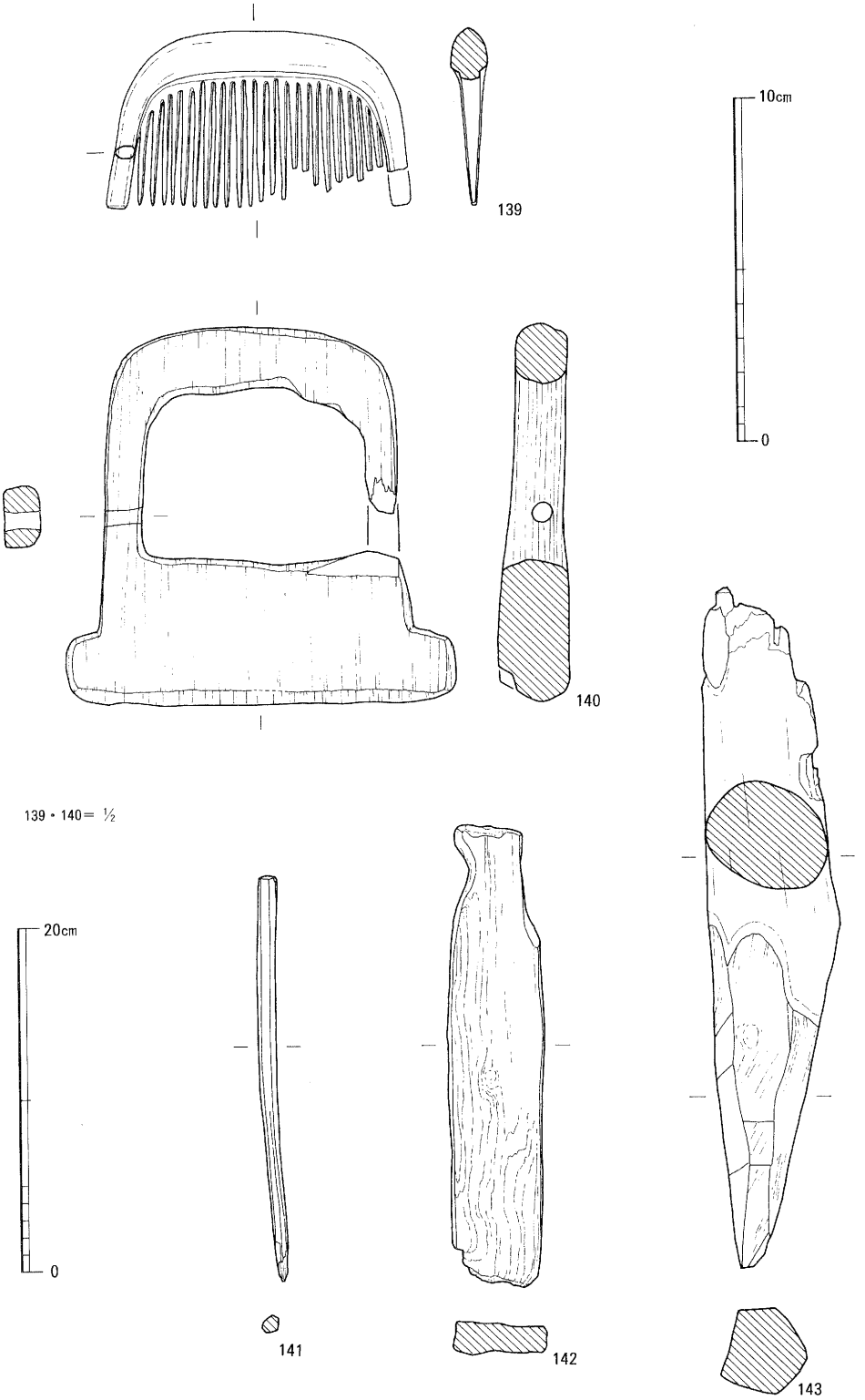
不明木製品（140）は南区北東部の上層にあたる青灰色シルトと暗灰黄色細砂の互層から出土した。方形の環状を呈する精製品で、法量は縦11.0cm・横11.3cm・厚さ1.5cm～2.1cmを測る。両側部に直径約５mmの穿孔を施している。141は六角形に面取りされた棒状製品で、下端は欠損している。長さ23.7cm・径約1.0cmを測る。142は長さ27.2cm・幅約5.6cm・厚さ約1.8cmを測る板状製品で、上部の両側が抉り込まれている。また表面は火を受けて焦げている。織機部品の可能性がある。143は断面楕円形の木材を使用した杭の下部である。表面には樹皮が遺存し、加工は先端部のみで、五角形に面取りされている。長さ39.9cm・最大径7.7cmを測る。



第16図　ＮＲ２上層～下層（南区）出土遺物（Ｓ＝１／４）



第17図　ＮＲ２上層（北区）出土遺物（Ｓ＝１／６）



第18図　NR２出土遺物（S＝１／２・１／４）

第３章　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)　口径 器高	色調　外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
1 六	土師質 皿	北区 ＳＷ１	9.4 1.5	乳茶色	やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
2 六	土師質 皿	北区 ＳＷ１	9.4 1.4	乳茶色	やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
3 六	土師質 皿	北区 ＳＷ１	8.8 1.4	乳茶色	やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
4 六	土師質 皿	北区 ＳＷ１	(9.3) 1.7	乳茶色	やや密	良好	内外面ナデ。	2/5 反転
5 六	土師質 皿	南区 ＳＥ１	8.8 1.5	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
6 六	土師質 皿	南区 ＳＥ１	9.1 1.6	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	完形
7	土師質 皿	南区 ＳＥ１	9.1 1.4	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
8	土師質 皿	南区 ＳＥ１	8.9 1.8	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	完形
9	土師質 皿	南区 ＳＥ１	8.8 1.4	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	完形
10	土師質 皿	南区 ＳＥ１	8.55 1.8	乳茶色	やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
11	土師質 皿	南区 ＳＥ１	9.2 1.4	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
12 六	土師質 皿	南区 ＳＥ１	9.0 1.3	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	完形
13	土師質 皿	南区 ＳＥ１	(9.2) 1.4	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	1/2 反転
14	土師質 皿	南区 ＳＥ１	(9.3) 0.95	明淡褐色	密	良好	内外面ナデ。	1/4 反転
15 六	土師質 皿	南区 ＳＥ１	14.4 2.7	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
16	瓦器 椀	南区 ＳＥ１	(15.0)	灰黒色 乳灰色	密	良好	内外面ヘラミガキ。	1/5 反転
17	土師器 椀	南区 ＳＥ１	高台径　(3.4)	明乳茶色	やや粗	良好	不明。	底部1/3 反転
18 六	瓦器 椀	南区 ＳＥ１	15.5 5.3 高台径　6.05	黒色	密	良好	口縁端部ヘラミガキ。体部外面上位ヨコナデ、中位～下位ナデ後ヘラミガキ。底部外面ナデ。内面ヘラミガキ。	ほぼ完形
19	瓦器 椀	南区 ＳＥ１	(17.6)	灰黒色	密	良好	内外面ヘラミガキ。	1/8 反転
20	須恵質 鉢	南区 ＳＥ１		灰白色	密	良好	内外面回転ナデ。	極小
21	土師質 羽釜	南区 ＳＥ１	(27.0)	黄褐色	やや粗１～５㎜の砂粒を多く含む	良好	不明。	1/8 反転
22	土師質 羽釜	南区 ＳＥ１	(36.2)	暗茶褐色	やや粗１～５㎜の砂粒を多く含む	良好	内外面ナデ。内面煤付着。	1/8 反転

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
23	土師質 皿	南区 SK1		(9.4) 1.7	乳茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	½ 反転
24	土師質 皿	南区 SK1		(9.4) 1.2	乳灰茶色	密	良好	内外面ナデ。	口縁¾欠損 反転
25 六	土師質 皿	南区 SK1		9.2 1.3	乳灰茶色	密	良好	内外面ナデ。	⅚
26 六	土師質 皿	南区 SK1		9.0 1.4	乳茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	完形
27	土師質 皿	南区 SK1		(10.0)	乳茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	⅓ 反転
28 六	土師質 皿	南区 SK1		(10.2) 1.6	乳茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	½ 反転
29	土師質 皿	南区 SK1		(9.6) 1.1	乳茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	¾ 反転
30	土師質 皿	南区 SK1		(14.6) 3.1	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	⅓ 反転
31	黒色土器 椀	南区 SK1		(15.6)	暗灰茶色	密	良好	不明。	⅙ 反転
32	黒色土器 椀	南区 SK1		(15.0)	暗黒褐色	密	良好	内外面ヘラミガキ。口縁部外面黒斑。	¼ 反転
33	黒色土器 椀	南区 SK1		(13.2)	乳灰褐色	密 2～5㎜の砂粒を含む	良好	内外面ヘラミガキ。	¼ 反転
34 六	土師質 台付皿	南区 SK1	高台径	8.6 17.2 (4.0)	明乳茶色	やや粗	良好	内外面ナデ。	完形
35	土師質 鉢	南区 SK1		(20.0) 9.0	乳茶色	やや粗	良好	不明。	⅕ 反転
36 六	土師質	南区 SK1	底径	5.9	淡茶色	やや粗	良好	脚部外面～裾部内面ナデ。脚部内面しぼり目。	脚部完存
37 六	須恵質 台付皿	南区 SK1	高台径	(11.6) 2.3 (7.0)	乳灰色	密	良好	内外面回転ナデ。底部糸切り。	¼ 反転
38 六	須恵質 鉢	南区 SK1	底径	(16.1) 5.6 (7.6)	灰白色	密	良好	内外面回転ナデ。底部糸切り。	⅓ 反転
39	須恵質 底部	南区 SK1	高台径	(17.2)	淡灰色	密	良好	体部外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ。高台部回転ナデ。底部内面ナデ。	⅛ 反転
40	土師質 羽釜	南区 SK1	鍔径	(19.5) (26.2)	褐灰色	やや粗4.5㎜以下の砂粒を多く含む	やや不良	内外面ナデ。	⅛ 反転
41 六	土師質 杯	南区 SD1		10.0 2.7	淡茶灰色	密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
42	黒色土器 椀	南区 SD1	高台径	7.45	乳茶色	やや粗	良好	不明。	底部完存
43	須恵質 底部	南区 SD1	高台径	(12.6)	淡灰色	やや密	良好	外面回転ナデ。内面ナデ。	¼ 反転
44 七	土師質 羽釜	南区 SD1		(24.0)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部～鍔部外面ヨコナデ。体部ナデ。	⅛ 反転
45	土師質 皿	南区 第4層		8.65 1.7	暗乳茶色	やや粗	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)　口径 器高	色調　外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
46	土師質 皿	南区 第4層	(15.0) 3.6	暗乳茶色	やや粗	良好	内外面ナデ。	½ 一部反転
47	白磁 椀	南区 第4層	(17.3)	淡灰緑色	密	良好	内外面回転ナデ。	極小 反転
48	須恵器 杯身	南区 第4層	(16.1) 4.1 高台径　(11.8)	淡灰黒色	密	良好	内外面回転ナデ。	⅙ 反転
49	土師器 甕	南区 第4層	(15.1)	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。	¼ 反転
50	土師器 甕	南区 第4層	(18.1)	橙褐色	密1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	不明。	¼ 反転
51	須恵器 蓋	南区 第4層	(11.0)	淡灰緑色	密	良好	回転ナデ。緑釉あるいは灰釉の可能性あり。	⅙ 反転
52 七	緑釉 皿	南区 第4層	高台径　(6.5)	乳茶色	密	良好	回転ナデ。底部糸切り。	¼ 反転
53	土師器 把手	南区 第4層	長さ　8.4 幅　4.3 厚さ　1.3	暗褐橙色	密　1.5㎜以下の砂粒を多く含む	良好	ナデ。	
54	土師器 把手	南区 第4層	長さ　4.5 幅　2.4 厚さ　1.5	灰黒赤色	密1.5㎜以下の砂粒を多く含む	良好	ナデ。	
55	土師質 土錘	南区 第4層	長さ　6.8 直径　2.6	淡茶灰色	密3.5㎜以下の砂粒を多く含む	やや不良	ナデ。	ほぼ完形
56	土師器 壺	北区 NR1	8.8 6.2	茶橙色	密	良好	口縁部ナデ。底体部ナデ。	口縁一部欠損
57 七	土師器 壺	北区 NR1	(8.4) 8.1	乳茶灰色	密	やや不良	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。底体部外面ハケ、内面上位ヘラケズリ、下位ナデ。 体部最大径　(9.2)	½ 一部反転
58	土師器 壺	北区 NR1	(9.1)	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヘラミガキ。頸部外面ヨコナデ、内面ナデ。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	⅓ 反転
59	土師器 鉢	北区 NR1	(12.0) 5.1	明乳茶色	やや粗	良好	不明。	⅙ 反転
60	土師器 高杯	北区 NR1	(15.8)	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ、内面ナデ。	杯部⅙ 反転
61	土師器 高杯	北区 NR1	底径　(13.8)	淡茶灰色	密	良好	脚柱部外面ハケ、内面ヘラケズリ。裾部外面ナデ、内面上位ユビオサエ、下位ハケ。三方孔。	脚部¼ 一部反転
62	土師器 高杯	北区 NR1	底径　12.9	明橙褐色	密	良好	脚柱部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	脚部⅔
64 七	土師器 壺	北区 NR2 上層	(9.0) 8.75	乳黄茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ、底体部外面ハケ、内面ナデ。 体部最大径　10.2	口縁¾欠損 一部反転
65 七	土師器 壺	北区 NR2 上層	9.45 10.5	淡茶色	やや粗	良好	口縁部外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ。底体部外面ハケ、内面上位ヘラケズリ、下位ナデ。 体部最大径　9.8	ほぼ完形
66	土師器 壺	北区 NR2 上層		淡茶灰色	密	良好	底体部外面上位ヨコナデ、中位ナデ、下位ヘラケズリ、内面ヘラケズリ。外面黒斑。 体部最大径　11.0	口縁部欠損 一部反転
67 七	土師器 甕	北区 NR2 上層	12.1 15.6	黒灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。頸部内面ナデ。底体部外面ハケで上位にタタキ残る。体部内面ヘラケズリ。底部内面ユビオサエ。体部最大径　17.2	底部一部欠損
68	土師器 甕	北区 NR2 上層	(14.6)	淡橙灰色 淡灰茶色	密	良好	口縁部ハケ。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	口縁⅛ 反転
69	土師器 甕	北区 NR2 上層	13.45	明黄褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ナデ。内面ヘラケズリ。外面煤付着。	口縁完存

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
70 七	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(17.1)	淡茶灰色	密 2mm以下の砂粒を多く含む	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。外面煤付着。	口縁¼ 反転
71 七	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(15.6)	茶褐色 灰茶色	密 1.5mm以下の砂粒を多く含む	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面タタキ、内面ナデ。外面煤付着。	口縁¼ 反転
72	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(16.6)	暗黒褐色 茶橙色		良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ナデ、内面ヘラケズリ。外面煤付着。	極小 反転
73 八	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(18.6)	褐灰色	密0.5～2mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ、内面ヘラケズリで上位ユビオサエ。体部外面煤付着。 体部最大径 (29.5)	½ 反転
74	土師器 鉢	北区 NR 2 上層		(16.0)	淡茶灰色		良好	口縁部～体部ヘラミガキ。底部外面ヘラケズリ。	口縁⅙ 反転
75 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		(15.6)	茶灰色		良好	口縁部ヨコナデ。杯部内面放射状ヘラミガキ。基部外面ハケ。脚柱部外面ヘラミガキ、内面ナデ。杯部外面黒斑。三方孔。	杯部⅓ 一部反転
76 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		17.1	淡茶灰色 淡茶褐色	密 3mm以下の砂粒を少量含む	良好	杯部外面ハケ、内面上位ヨコナデ、下位ハケ。	杯部¾
77	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		16.6	淡灰茶色 淡灰橙色	密 1mm以下の砂粒を少量含む	良好	杯部内外面ハケ後口縁端部ヨコナデ。体部内面ナデ。内面煤付着。	杯部ほぼ完形
78	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		(22.8)	乳橙色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。口縁端部内面ハケ後ヘラミガキ。	極小 反転
79	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		(23.4)	淡乳橙色 暗褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部外面ナデ、内面ナデ後ヘラミガキ。	杯部⅓ 反転
80	土師器 高杯	北区 NR 2 上層	底径	9.8	茶橙色	密	良好	ナデ。	脚部⅚
81	土師器 高杯	北区 NR 2 上層	底径	(12.7)	明黄褐色	密	良好	外面ハケ。内面ナデ。	脚部⅓ 一部反転
82	土師器 高杯	北区 NR 2 上層	底径	10.5	淡灰赤色	密	良好	杯部外面ナデ、内面ヘラミガキ。脚柱部外面ナデ。裾部外面ハケ。脚部内面ナデ。	口縁部欠損 一部反転
83	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		(14.4) 5.0	淡灰色	密	良好	口縁部～内面回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。	¼ 反転
84 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		(12.4) 3.6	暗灰色	密	良好	口縁部～内面回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。	¼ 反転
85 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		12.3 4.35	灰色	密	良好	口縁部～内面回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。	½ 一部反転
86 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		12.4 4.0	暗灰色	密	良好	口縁部～内面回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。	ほぼ完形
87 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層	つまみ径	11.8 4.7 (4.2)	淡灰色	密	良好	内外面回転ナデ。	ほぼ完形 一部反転
88 八	土師器 壺	南区 NR 2 上層		(8.25) 14.2	灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ後ナデ、内面ナデ。底部外面ヘラケズリ。 体部最大径 11.75	口縁¾欠損 一部反転
89 八	土師器 壺	南区 NR 2 上層		(11.7) 16.3	明黄褐色	密	良好	口縁部外面ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ハケ後ナデ。 体部最大径 15.0	口縁⅓欠損 一部反転
90 八	土師器 壺	南区 NR 2 上層		8.65 7.9	暗乳茶色	やや粗	良好	底体部外面ハケ。 体部最大径 10.1	ほぼ完形
91 八	土師器 壺	南区 NR 2 上層		10.3 8.1	暗灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	ほぼ完形
92 九	土師器 甕	南区 NR 2 上層		15.2	橙褐色	密	良好	肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	口縁ほぼ完存 一部反転

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)　口径 器高	色調　外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
93	土師器 甕	南区 NR 2 上層	(16.9)	灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヘラケズリ。口縁部煤付着。	⅕ 反転
94 九	土師器 高杯	南区 NR 2 上層	18.5	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ。内面ナデ。	杯部ほぼ完存 一部反転
95 九	土師器 高杯	南区 NR 2 上層	(21.3)	乳茶色	やや粗	良好	口縁端部ヨコナデ。口縁部外面ハケ、内面ナデ。体部ナデ。口縁部黒斑。	杯部½ 一部反転
96	土師器 高杯	南区 NR 2 上層	(13.65)	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ。内面放射状ヘラミガキ。	杯部ほぼ完存 一部反転
97	土師器 高杯	南区 NR 2 上層	底径　(10.7)	橙茶色	やや粗	良好	脚柱部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。裾部ヨコナデで内面上位ハケ残る。	脚部¼ 一部反転
98	土師器 壺	北区 NR 2 下層	(10.8)	明黄灰色	密	良好	口縁部内面～肩部外面ヘラミガキ。	口縁¼ 反転
99	土師器 壺	北区 NR 2 下層	(10.6)	暗灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	口縁⅙ 反転
100	土師器 壺	北区 NR 2 下層		茶橙色 茶赤色	密　2㎜以下の砂粒を含む	良好	肩部外面ヨコナデ。底体部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	口縁部欠損
101	土師器 甕	北区 NR 2 下層	(13.9)	明黄褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。外面煤付着。	口縁¼ 反転
102	土師器 甕	北区 NR 2 下層	(13.8)	暗黒褐色 茶橙色	密1.5㎜以下の砂粒を少量含む	良好	口縁部ヨコナデ。肩部内面ヘラケズリ。外面煤付着。	極小 反転
103 九	土師器 甕	北区 NR 2 下層	(14.4)	乳灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ハケ、内面ナデ。外面煤付着。	口縁⅙ 反転
104	土師器 甕	北区 NR 2 下層	(19.2)	暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	口縁⅛ 反転
105	土師器 甕	北区 NR 2 下層	(17.2)	黄茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面タタキ、内面ナデ。	口縁⅙ 反転
106	弥生 台付甕	北区 NR 2 下層	底径　7.2	明赤褐色	密　1～3㎜の砂粒を含む	良好	脚台部外面タタキ後上位ナデ、内面ハケ後下位ナデ。	脚部完存
107	土師器 器台	北区 NR 2 下層	9.2	淡橙褐色	密	良好	台部ヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ。脚部穿孔あり。	¾ 一部反転
108 九	土師器 高杯	北区 NR 2 下層	(22.1)	明乳褐色	密	良好	口縁部ハケ後ヘラミガキ。体部外面ハケ、内面ヘラミガキ。	杯部⅓ 反転
109	土師器 高杯	北区 NR 2 下層		淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。体部外面ハケ内面ヘラミガキ、脚柱部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	杯部¾ 一部反転
110	土師器 高杯	北区 NR 2 下層	(22.5)	乳茶色	密	良好	口縁端部ヨコナデ。口縁外面ハケ後ヘラミガキ。内面ハケ。	極小 反転
111	土師器 高杯	北区 NR 2 下層	(22.8)	淡茶灰色	密	良好	口縁部ハケ後ヘラミガキ。	極小 反転
112 九	土師器 壺	南区 NR 2	8.6 7.4	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ハケ、内面ナデ。 体部最大径　9.1	口縁⅙欠損
113	土師器 壺	南区 NR 2	(10.7)	灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	⅕ 反転
114	土師器 壺	南区 NR 2	(10.2)	暗灰茶色	やや粗	良好	ヨコナデ。	口縁⅓ 反転
115	土師器 壺	南区 NR 2	(10.2)	淡茶橙色	密	良好	口縁部ヨコナデ後内面ヘラミガキ。	口縁¼ 反転

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値) 口径 器高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 備考
116	土師器 壺	南区 NR 2	(18.4)	淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。頸部外面ハケ、内面ナデ。	極小 反転
117	土師器 壺	南区 NR 2	(20.5)	乳褐色	密	良好	不明。	口縁1/4 反転
118 九	土師器 壺	南区 NR 2	(11.2) 16.4	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。煤付着。 体部最大径 15.7	口縁5/6欠損 一部反転
119 九	土師器 甕	南区 NR 2	12.7	灰褐色	密	良好	口縁部ヨコナデで外面ハケ残る。体部外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ。外面煤付着。	1/2
120	土師器 甕	南区 NR 2	(14.4)	乳灰褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	口縁1/3 反転
121	土師器 甕	南区 NR 2	(13.85)	乳茶色	やや粗	良好	ナデ。体部外面タタキ残る。	口縁1/8 反転
122	土師器 甕	南区 NR 2	(17.0)	暗灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。	口縁1/6 反転
123 九	土師器 甕	南区 NR 2	(13.4)	黒茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。口縁端部外面下位に1条の沈線。体部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	口縁1/5 反転
124	土師器 甕	南区 NR 2	(15.0)	乳黄茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ、内面ナデ。	口縁1/8 反転
125	土師器 甕	南区 NR 2	(13.3)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	口縁1/5 反転
126	土師器 甕	南区 NR 2	(18.6)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面タタキ、内面ナデ。	口縁1/8 反転
127	土師器 高杯	南区 NR 2	(15.6)	乳灰褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ後内面放射状ヘラミガキ。	口縁1/3 反転
128 九	土師器 高杯	南区 NR 2	13.7	暗赤茶色	やや粗	良好	杯部外面ハケ後口縁部ナデ、内面放射状ヘラミガキ。内面煤付着。	杯部完存
129	土師器 高杯	南区 NR 2	12.45	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。杯部内面放射状ヘラミガキ。	杯部完存
130	土師器 高杯	南区 NR 2	(13.4)	灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	杯部3/4 一部反転
131 九	土師器 高杯	南区 NR 2	12.2	明灰茶色	やや粗	良好	杯部ナデ。体部～脚部間外面ハケ。口縁部外面黒斑。	杯部ほぼ完存
132	土師器 高杯	南区 NR 2	(13.4)	暗乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	杯部1/4 一部反転
133	土師器 高杯	南区 NR 2	(17.2)	淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。	口縁1/8 反転
134 九	土師器 高杯	南区 NR 2	(16.3)	灰橙褐色	密	良好	ヘラミガキ。	杯部1/2 一部反転
135	土師器 高杯	南区 NR 2	底径 (12.1)	灰乳茶色	やや粗	良好	脚部外面ヘラミガキ。脚柱部内面しぼり目。	脚部1/3 一部反転
136	土師器 高杯	南区 NR 2	底径 10.0	灰茶色	やや粗	良好	脚柱部外面ヘラミガキ、内面しぼり目。裾部ヨコナデ。	脚部3/4
137	土師器	南区 NR 2		暗茶褐色	やや粗1～3㎜の砂粒を多く含む。	良好	外面ナデ。内面ヘラケズリ。	一部反転

第４章　まとめ

今回の調査では古墳時代前期から平安時代の遺構・遺物を検出した。

遺構としては平安時代後期から末頃の井戸等の集落遺構があり、西側の第８次調査第２調査区で確認されている平安時代末～鎌倉時代の集落の東への拡がりが確認された。曲物井戸ＳＥ１は、数回の掘り直しが行われた後に埋められたようで、遺物の出土状況は井戸祭祀の様相を知るうえで重要なものであった。またピット等の建物に関連する遺構は認められず、当地は居住域としては利用されていなかった可能性がある。

河川堆積土からは古墳時代前期から中期の遺物が出土している。東部に隣接する第８次調査第３調査区と同様、ほぼ調査区の全域を占めるＮＲ２の検出により、当地は古墳時代中期頃までは大規模な河川の流路上にあることが確認された。北西部の同第２調査区北部で検出されている古墳時代中期の集落域は、当地までは及ばないようである。この集落はＮＲ１・２により形成された自然堤防上に営まれていたと考えられ、遺構面の標高は当調査地よりも30㎝～50㎝高くなっている。

ＮＲ２からは横櫛が出土している。古墳時代に盛行する櫛は竪櫛で、束歯式のものである。挽歯式の横櫛の最古例では６世紀末の資料として千葉県金鈴塚古墳出土品がある。また７世紀代では川原寺跡・飛鳥京跡、８世紀以降では平城京跡等で横櫛が一般的になる。これらの例はいずれも歯の細かいもので、１㎝当り７～８本を数え、８世紀以降さらに細かくなる傾向があり10本以上を数えるという。歯の構造に限ってみると、当横櫛はこれらとは趣を異にしており、弥生時代後期の挽歯式の竪櫛である大阪府茨城市東奈良遺跡・同東大阪市巨摩廃寺遺跡出土例に類似するものである。今回出土した横櫛は、形態的には横櫛の初現であり、歯の製作技法はこれら弥生時代後期の挽歯式の竪櫛の系譜上に位置付けられるものと考えられる。[註5]

古墳時代後期から平安時代中期までについては明確な遺構は確認されなかったが、包含層中には少量であるがこの時期の遺物がみられることから、集落は存続していると考えられ、後世の整地等により削平されているのであろう。

なお、当調査地から東に約30ｍの第18次調査では、標高6.6ｍ～7.0ｍで弥生時代後期の水田、6.0ｍ以下で弥生時代中期の遺構面が検出されている。今回の調査では標高約6.0ｍまでは河川堆積が続いており、弥生時代後期の集落は当地までは拡がらないか、あるいは河川により削平されている可能性が高い。

註

註１　㈶八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡』1990　㈶八尾市文化財調査研究会報告26

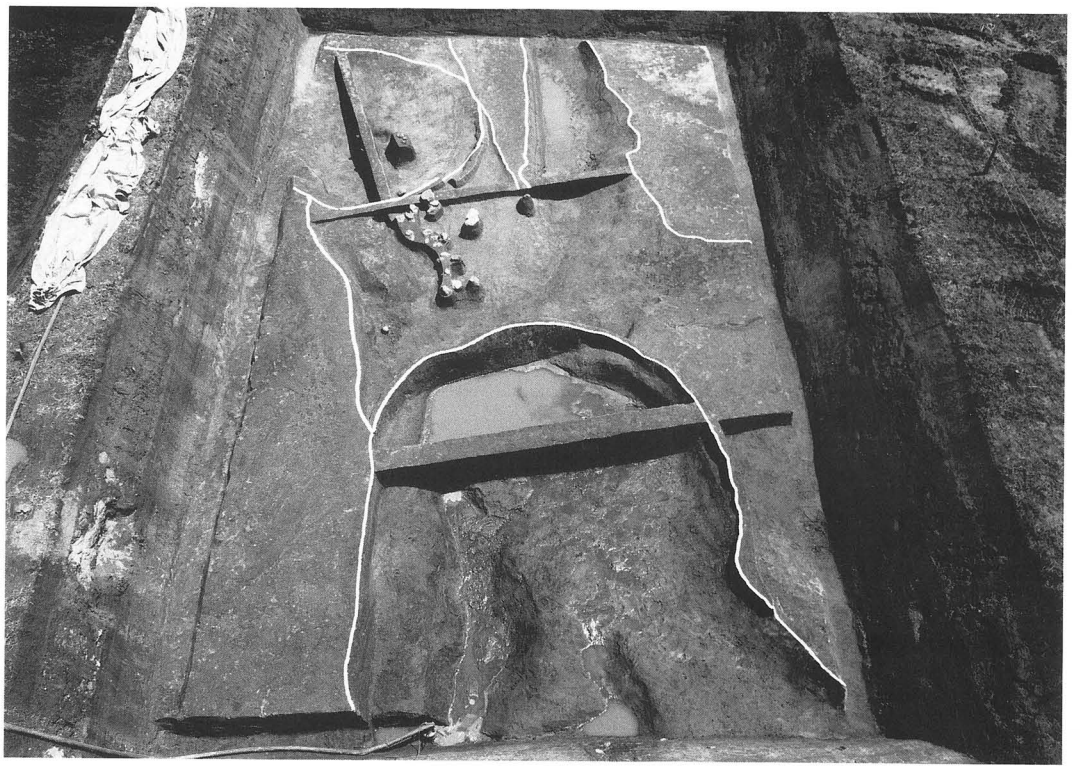
註２　㈶八尾市文化財調査研究会『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』1990
㈶八尾市文化財調査研究会報告28

註３　㈶大阪文化財センター『久宝寺南（その２）』 1987

註４　亀田　博「竪櫛」　（『末永先生米壽記念獻呈論文集』橿原考古学研究所内末永先生米壽記念会）

註５　前掲書　註４
奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代篇』1984
本間元樹「弥生時代の櫛」（『大阪府下埋蔵文化財研究会〈第28回〉資料』1993）

図　　版



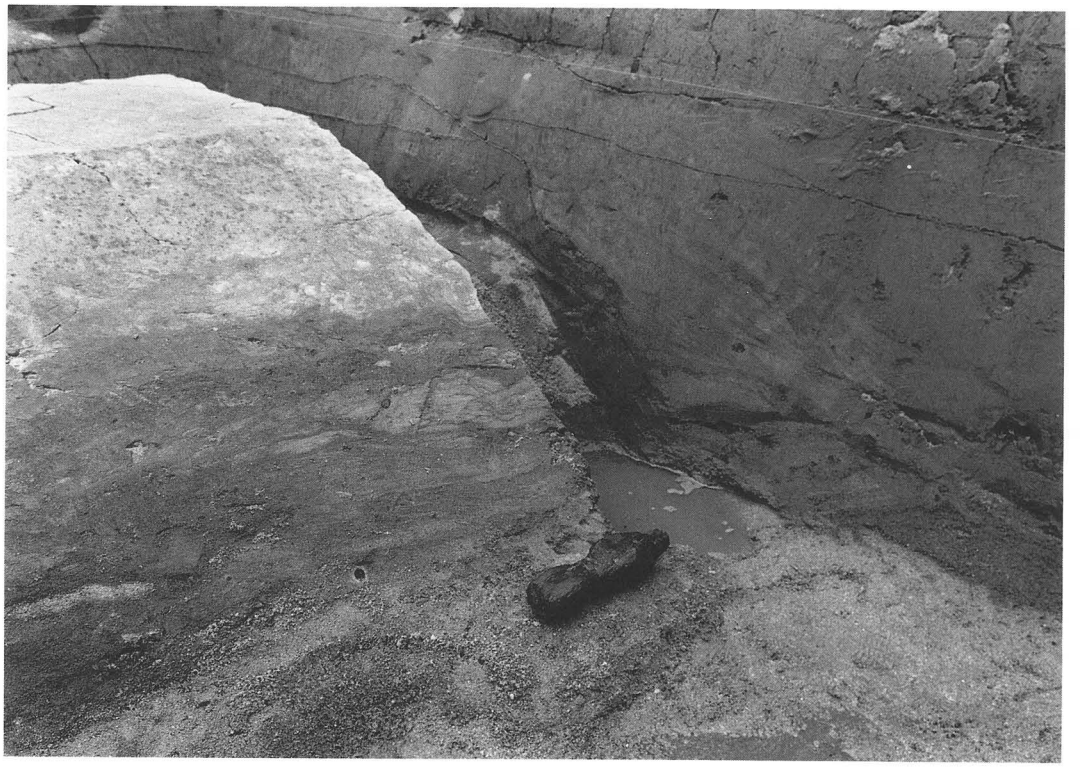
南区　全景（西から）

北区SW１（上が南）

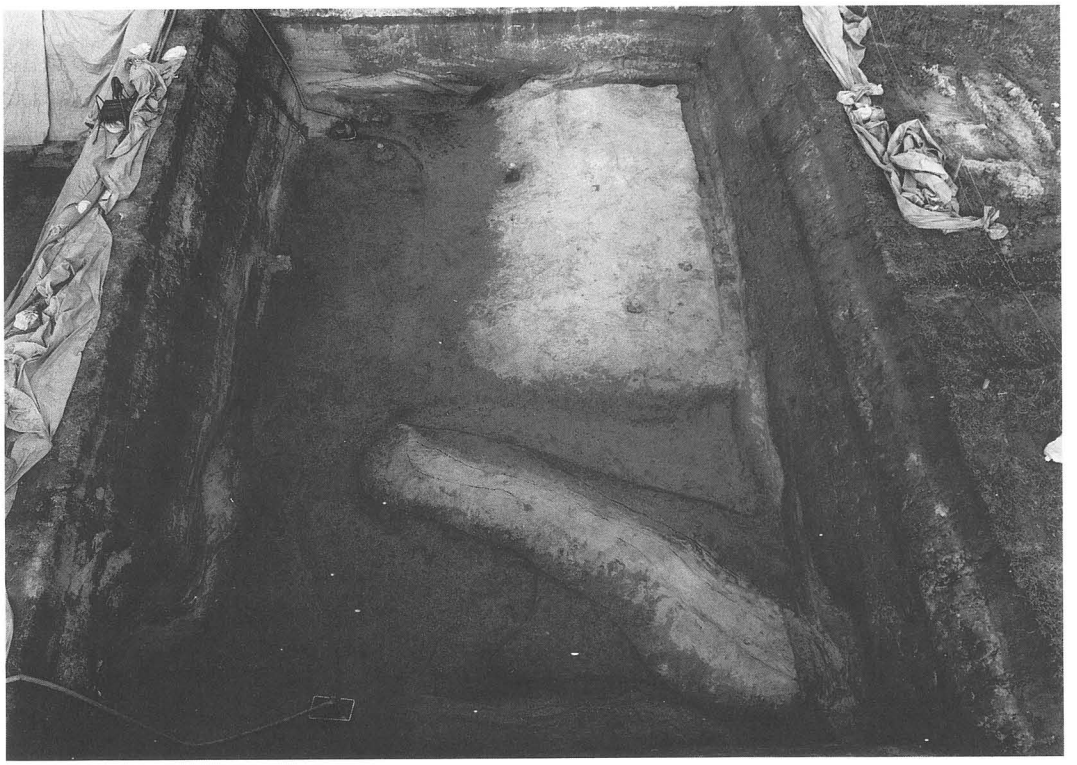
南区　SE１　上層遺物出土状況（西から）

南区　SE１　曲物（南から）

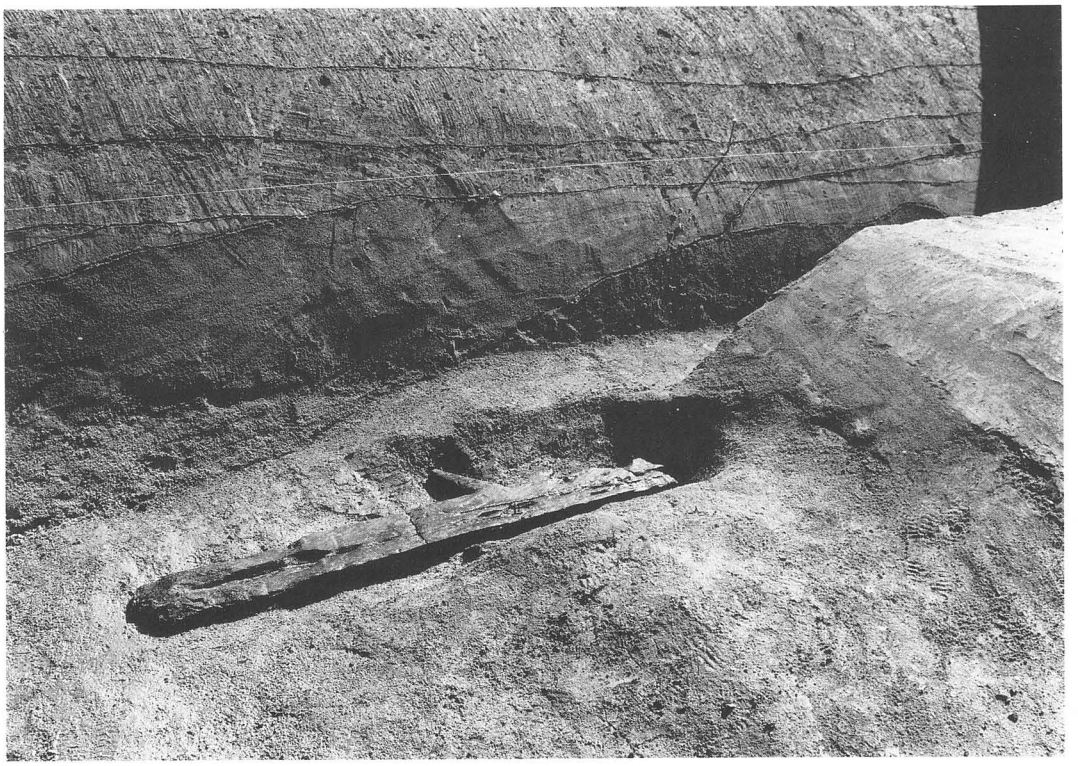
北区　ＮＲ１　全景（北から）



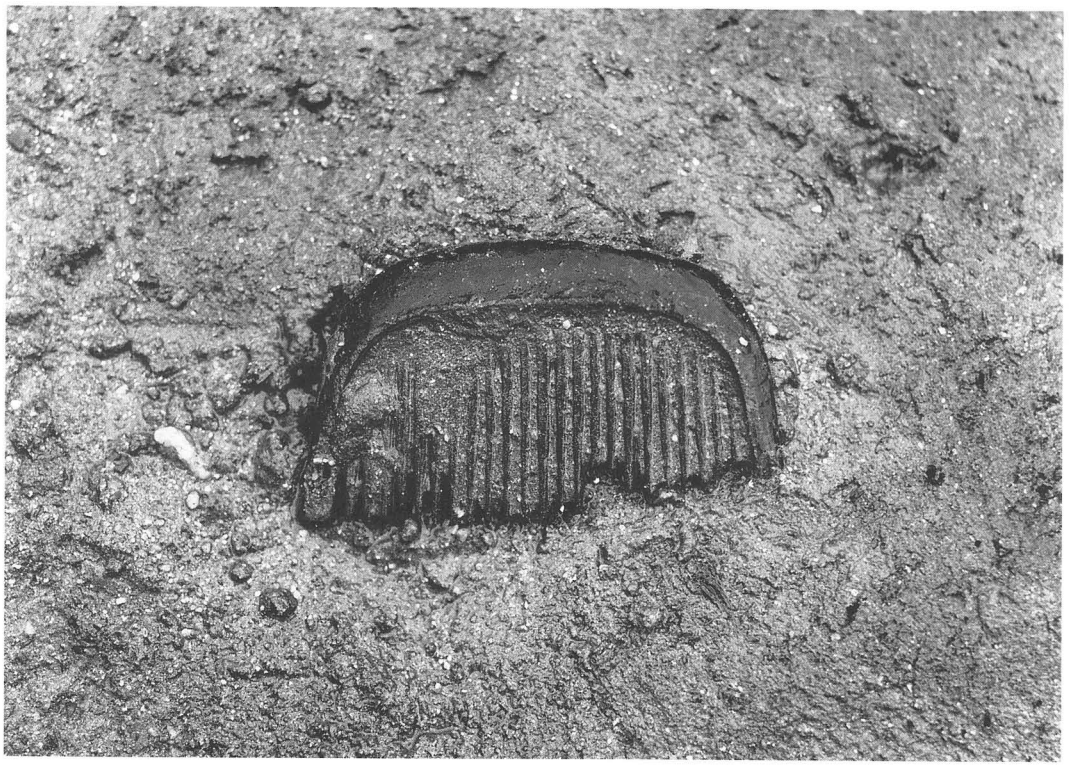
北区　ＮＲ１　横槌（63）出土状況（南東から）



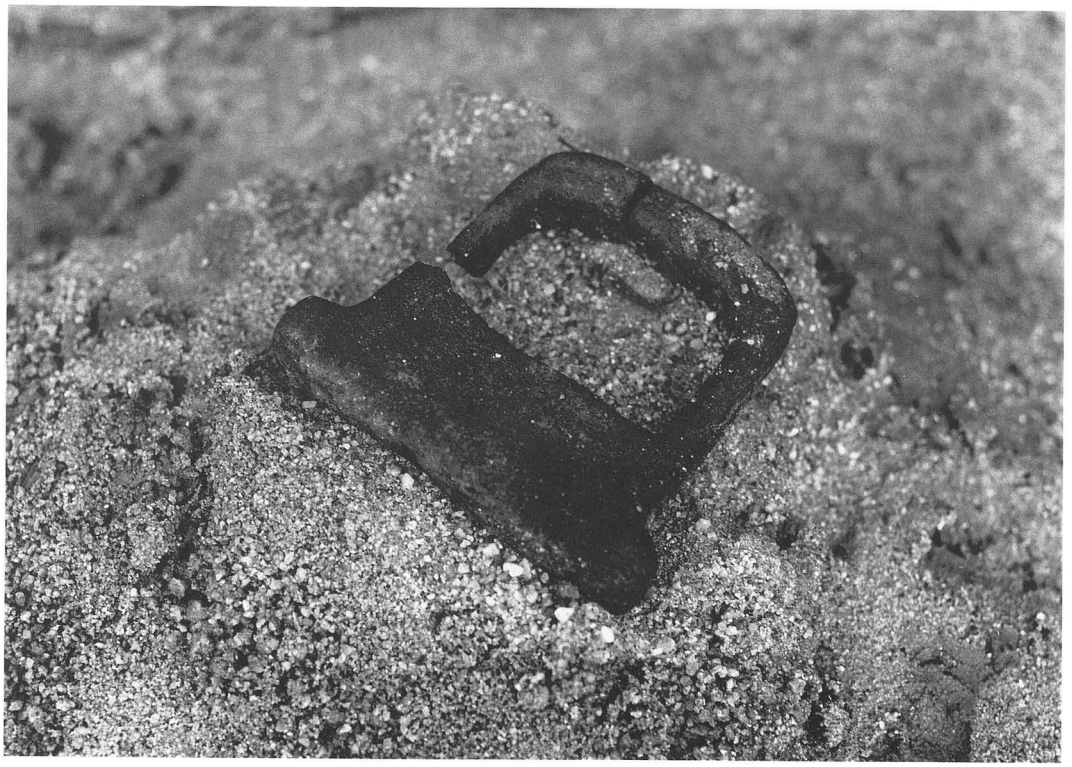
南区　ＮＲ２　全景（西から）



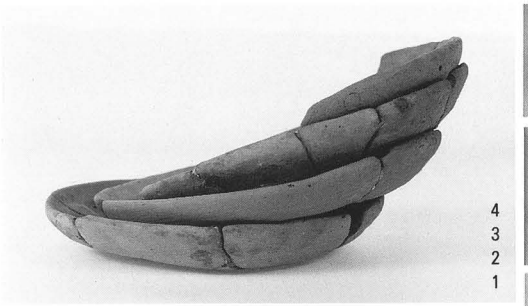
北区　ＮＲ２　木製品（138）出土状況（北東から）

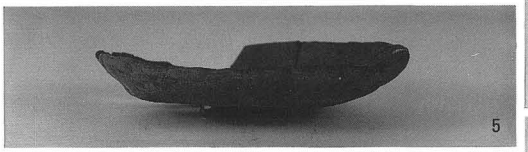


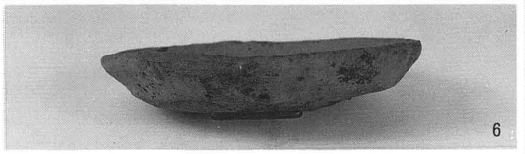
北区　ＮＲ２　横櫛（139）出土状況（上が北東）

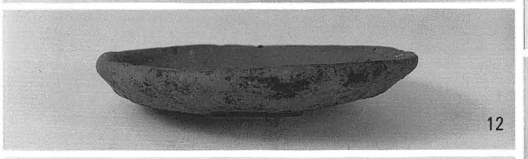


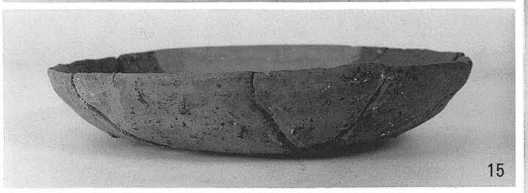
南区　ＮＲ２　木製品（140）出土状況（西から）

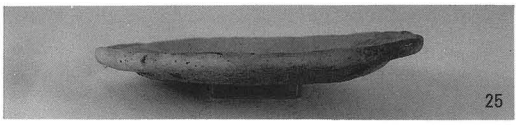


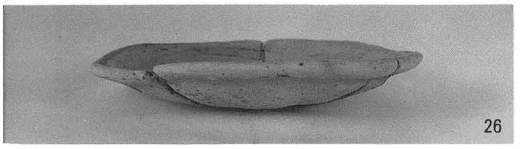


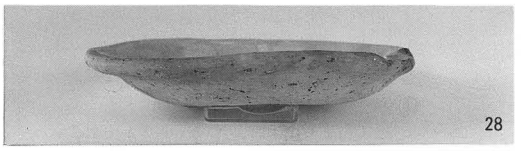


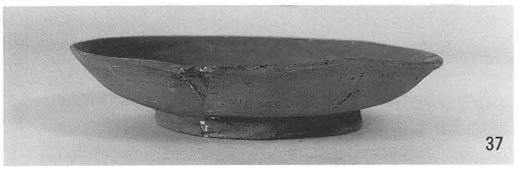


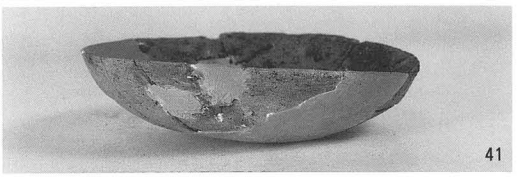




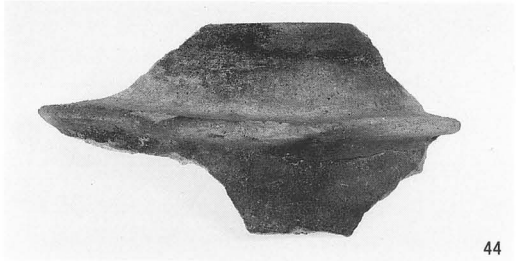


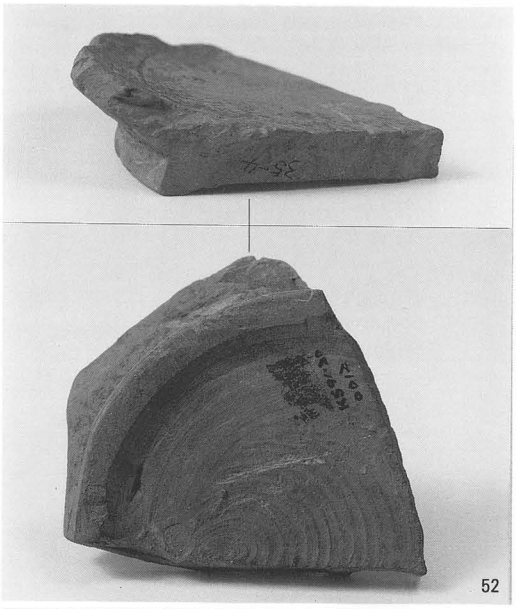






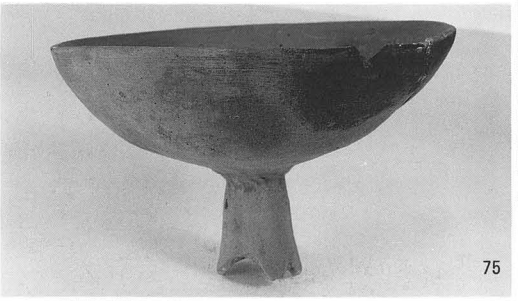
1～4：SW 1　　5～18：SE 1　　25～38：SK1　　41：SD 1



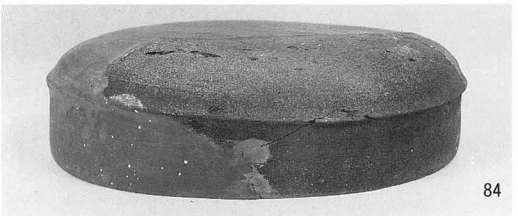


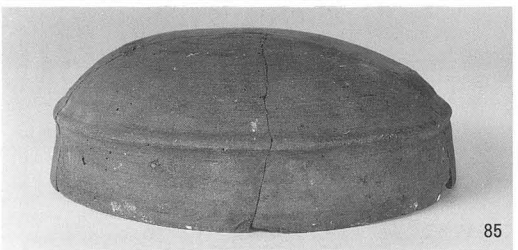
44：SD 1　52：南区　第４層　57•63：NR 1　64～71：NR 2 上層（北区）

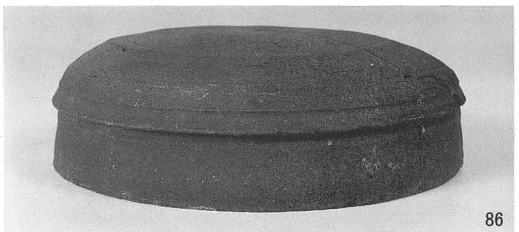
73


75

76


84


85


86

87

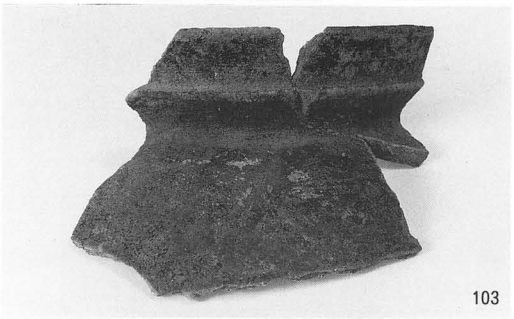
88

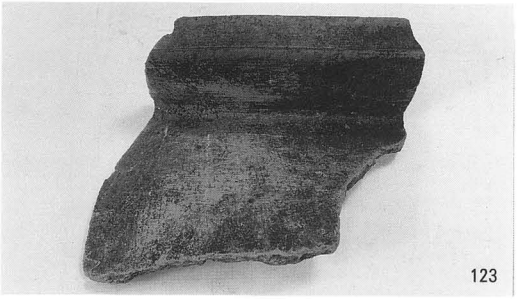
89

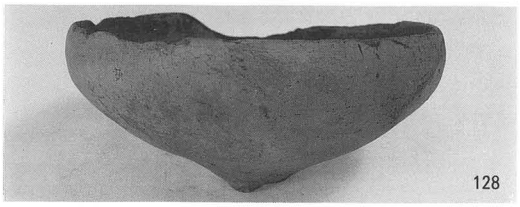
90

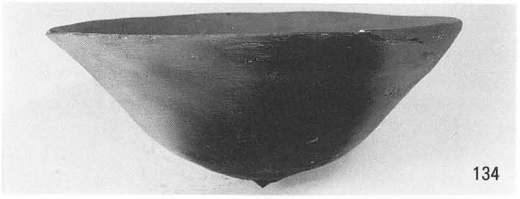
91

73～76：ＮＲ２上層（北区）　　84～91：ＮＲ２上層（南区）

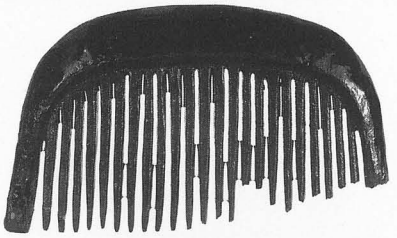








92～95ＮＲ２上層（南区）　103・108：ＮＲ２下層（北区）　112～134：ＮＲ２（南区）

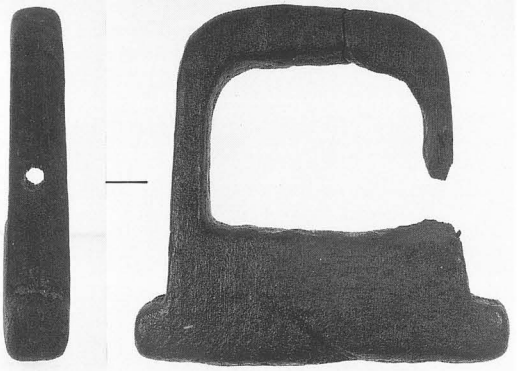


139

141

142

143



140

138～143：NR 2

138

Ⅳ　東郷遺跡第33次調査（ＴＧ90－33）

例　　言

1．本書は、八尾市桜ヶ丘１丁目39で実施した共同住宅建設に伴う東郷遺跡第33次（ＴＧ90－33）の発掘調査報告である。

1．本書で報告する東郷遺跡第33次の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が前田安弘氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成２年４月10日～５月10日にかけて実施した。調査担当は４月10日～30日まで青木勘時、その後、調査終了まで高萩千秋・岡田清一があたった。調査面積は約200㎡である。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－山蔦そのみ・西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－亀田（旧姓村田）英子・市森千恵子、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに……69

2．調査概要……70

1）調査の方法と経過……70

2）基本層序……70

3）検出遺構と出土遺物……71

4）出土遺物観察表……95

3．まとめ ……100

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図及び周辺図……69

第２図　調査地設定図……70

第３図　基本層序柱状図……71

第４図　遺構平面図……72

第５図　ＳＷ－１平面図……73

第６図　ＳＷ－１出土遺物実測図１……74
第７図　ＳＷ－１出土遺物実測図２……75
第８図　ＳＫ－１出土遺物実測図……76
第９図　ＳＫ－２平断面図……76
第10図　ＳＫ－２出土遺物実測図……77
第11図　ＳＫ－３平断面図……78
第12図　ＳＫ－４平断面図……78
第13図　ＳＫ－４出土遺物実測図……78
第14図　ＳＫ－５平断面図……78
第15図　ＳＫ－６平断面図……79
第16図　ＳＫ－７平断面図……79
第17図　ＳＢ－１平断面図……80
第18図　ＳＢ－２平断面図……81
第19図　ＳＢ－３平断面図……82
第20図　ＳＢ－４平断面図……83
第21図　ＳＢ－５平断面図……84
第22図　ＳＥ－１平断面図……85
第23図　ＳＥ－１出土遺物実測図１……86
第24図　ＳＥ－１出土遺物実測図１……87
第25図　小穴内出土遺物実測図……92
第26図　遺構に伴わない出土遺物実測図……94

図　版　目　次

図版　一　遺構写真　調査区全景（南から）
図版　二　遺構写真　上　ＳＷ－１（西から）
　　下　古墳時代前期の遺構（南から）
図版　三　遺構写真　上　ＳＫ－１（北から）
　　下　ＳＫ－１完掘（南から）
図版　四　遺構写真　上　ＳＫ－４（東から）
　　下　ＳＫ－７（西から）

図版　五　遺構写真　上　調査区南部小穴群（北から）
下　ＳＥ－１（南から）
図版　六　遺構写真　上　ＳＥ－１枠内遺物（南から）
下　ＳＥ－１断ち割り（東から）
図版　七　出土遺物　ＳＷ－１
図版　八　出土遺物　ＳＫ－１　41・44・47・50・51・52
ＳＥ－１　68

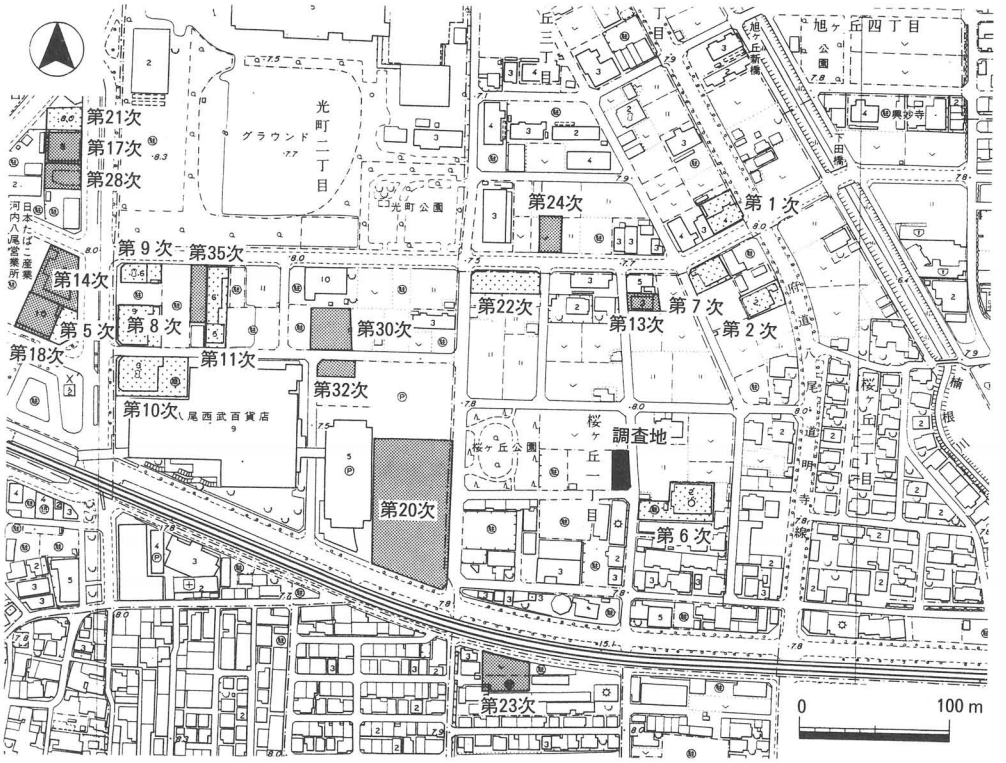
Ⅳ　東郷遺跡第33次調査（ＴＧ89－33）

１．はじめに

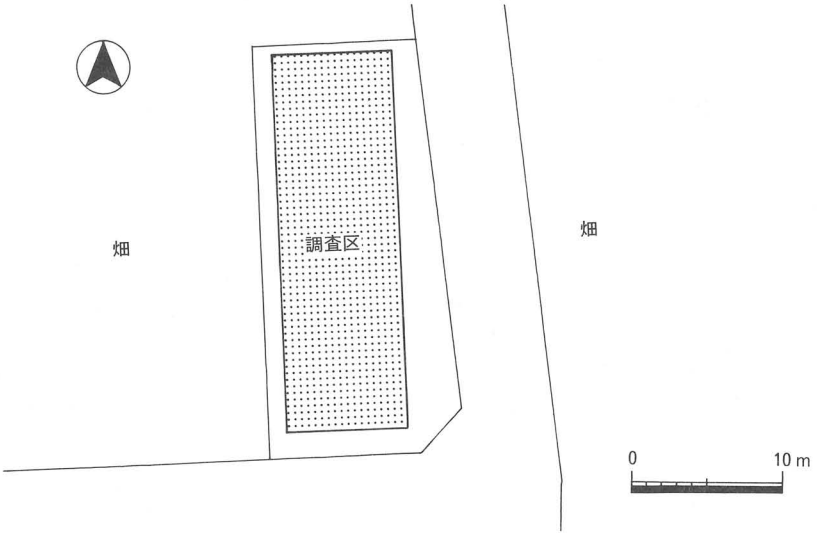
東郷遺跡は、八尾市の中央部にあたる本町１・７丁目、東本町１～５丁目・北本町２丁目・光町１・２丁目・桜ヶ丘１～４丁目、荘内町１・２丁目一帯に存在する弥生時代～近世に至る複合遺跡である。地形の立地では旧大和川の主流である玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する。標高は現在（T.P.＋）８～９ｍを測る。

周辺には当遺跡と同一沖積地上である複合遺跡が密集している。隣接する遺跡では西に佐堂遺跡・宮町遺跡、南に成法寺遺跡・矢作遺跡、南東に小阪合遺跡・中田遺跡、北に山賀遺跡、北東に萱振遺跡が確認されている。

当遺跡では現在までに数十次にわたる発掘調査が行われており、多大な成果をあげている。特に古墳時代初頭（庄内式期）から前期（布留式期）にかけての集落遺構が確認されている。当遺跡推定範囲の中央北部（現在近鉄大阪線八尾駅前北側）で竪穴住居群等で構成される居住域と方形周溝墓群等で構成される墓域が検出されており、当時の集落構成を知る上で貴重な資料が現在までに得られている。



第１図　調査地位置図及び周辺図



第２図　調査区設定図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、八尾市教育委員会文化財課・当調査研究会が当遺跡で実施した第33次調査にあたる。

調査地は、当遺跡内の東部にあたり、第７次調査地から西へ約40ｍの所に位置している。その調査では古墳時代前期～鎌倉時代に至る遺構・遺物が確認されている。また、平成３年度に市教委が実施した遺構確認調査では古代寺院があったことを証明する７世紀～９世紀にかけての土器・瓦が多量に出土している。

調査区は、建築工事の予定部分（20×10ｍ）に設定し、現地表下0.5ｍまでの土層を機械掘削した。以下、0.5ｍまでの土層を調査対象として人力掘削で実施した。

調査の結果、弥生時代後期～江戸時代に至る遺構・遺物を検出した。

２）基本層序

調査区の基本層序は、第２図に示すとおりで、現地表下約2.5ｍまでに存在する７層を摘出して基本層序とした。

第１層　盛土。層厚約50㎝。区画整理事業の造成により整地した土層である。

第２層　旧耕土。層厚15㎝。調査区北端部は低く、約40㎝の段差がみられる。

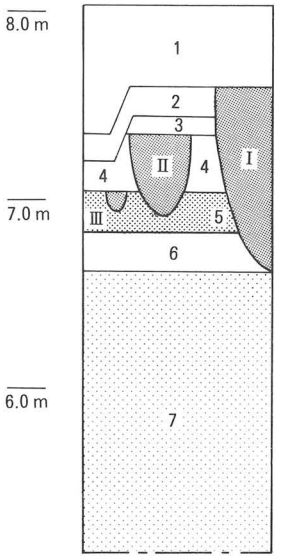
第３層　床土。層厚10㎝。調査区南部では上面から江戸時代の落込み状遺構が切り込んでおり、第７層上面まで達している。

第４層　黄褐色（10ＹＲ５／６）砂質土。層厚30㎝。平安時代前期の整地層で、調査区中央部では鎌倉時代の落込み状遺構が上面から切り込んでおり、第６層まで達している。

第５層　褐色(10ＹＲ４／４）砂礫混砂質土。層厚20㎝。弥生時代後期の包含層で、この上面では古墳時代前期（布留式古相）に比定される遺構及び奈良～平安時代に比定される遺構を検出した。

第６層　黄褐色(2.5Ｙ５／６）粘質シルト。層厚15～20㎝。

第７層　にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）砂礫。層厚150㎝以上。弥生時代後期以前の河川の堆積土である。層厚及び下層状況を確認するため、調査面から２ｍ程度掘削したが、砂層が堆積するのみであった。また、遺物についても検出できなかった。

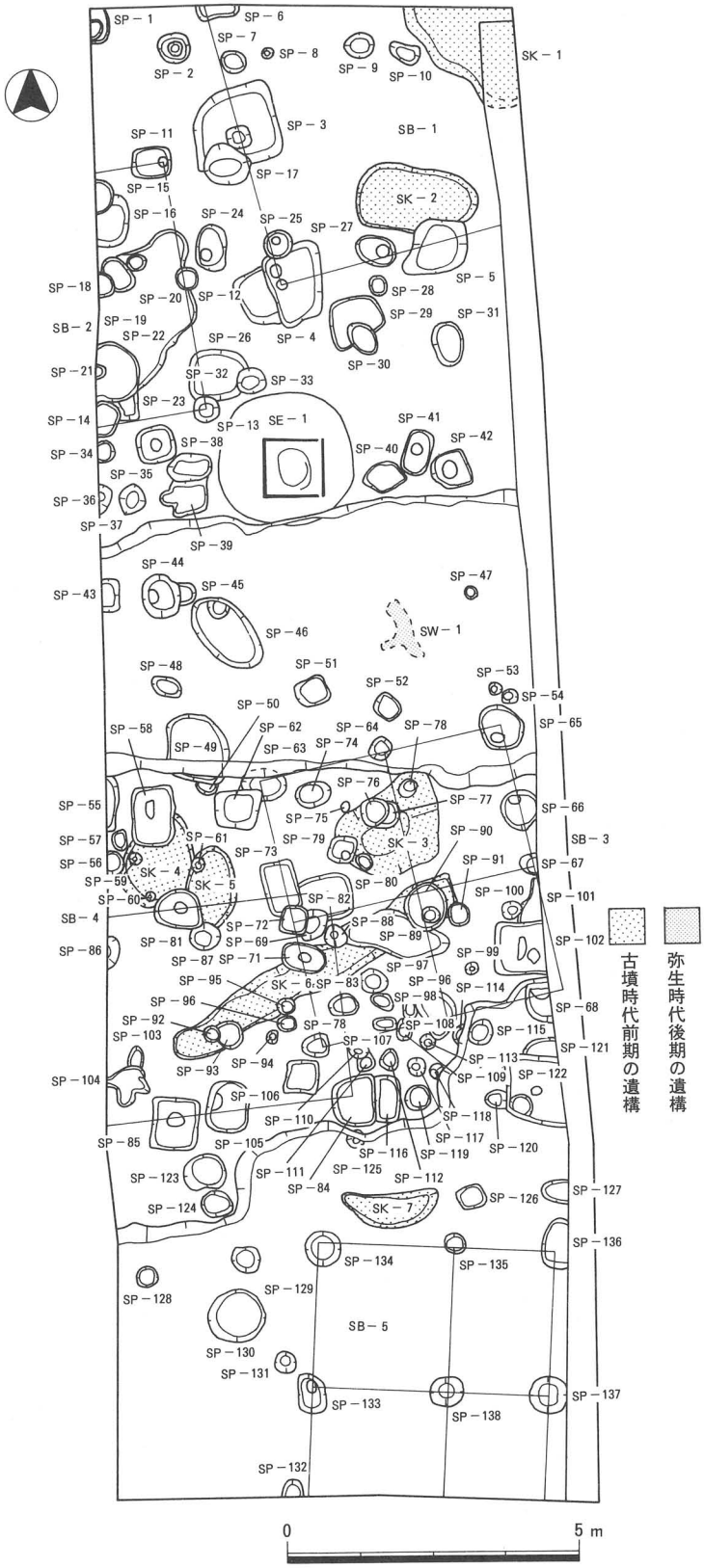


1　盛土
2　旧耕土
3　にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）砂質土
4　黄褐色（10ＹＲ５／６）砂質土
5　褐色（10ＹＲ４／４）砂礫混砂質土
6　黄褐色（2.5Ｙ５／６）粘質シルト
7　にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）砂礫
Ⅰ　江戸時代の落ち込み状遺構
Ⅱ　中世の落ち込み状遺構
Ⅲ　古墳時代～平安時代の遺構

第３図　基本層序柱状図

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、弥生時代後期～近世に至る遺構・遺物を検出した。遺構は第６層上面（6.8ｍ前後）で検出した弥生時代後期に比定される土器集積１箇所（ＳＷ－１）、第５層上面（7.0ｍ前後）で検出した古墳時代前期（布留式古相）に比定される土坑７基（ＳＫ－１～ＳＫ－７）、奈良～平安時代に比定される掘立柱建物５棟（ＳＢ－１～ＳＢ－５）、小穴（掘立柱建物の柱穴も含む）138個（ＳＰ－１～ＳＰ－138）、平安時代前期に比定される井戸１基（ＳＥ－１）、鎌倉時代に比定される落込み状遺構１箇所（ＳＯ－１）、江戸時代に比定される落込み状遺構１箇所（ＳＯ－２）を検出した。出土遺物は、遺構及び包含層内から弥生時代後期～江戸時代に至る遺物をコンテナ箱にして12箱分出土した。以下、各時代の遺構について記す。


SP－1
SP－2
SP－3
SP－4
SP－5
SP－6
SP－7
SP－8
SP－9
SP－10
SP－11
SP－12
SP－13
SP－14
SP－15
SP－16
SP－17
SP－18
SP－19
SP－20
SP－21
SP－22
SP－23
SP－24
SP－25
SP－26
SP－27
SP－28
SP－29
SP－30
SP－31
SP－32
SP－33
SP－34
SP－35
SP－36
SP－37
SP－38
SP－39
SP－40
SP－41
SP－42
SP－43
SP－44
SP－45
SP－46
SP－47
SP－48
SP－49
SP－50
SP－51
SP－52
SP－53
SP－54
SP－55
SP－56
SP－57
SP－58
SP－59
SP－60
SP－61
SP－62
SP－63
SP－64
SP－65
SP－66
SP－67
SP－68
SP－69
SP－71
SP－72
SP－73
SP－74
SP－75
SP－76
SP－77
SP－78
SP－79
SP－80
SP－81
SP－82
SP－83
SP－84
SP－85
SP－86
SP－87
SP－88
SP－89
SP－90
SP－91
SP－92
SP－93
SP－94
SP－95
SP－96
SP－97
SP－98
SP－99
SP－100
SP－101
SP－102
SP－103
SP－104
SP－105
SP－106
SP－107
SP－108
SP－109
SP－110
SP－111
SP－112
SP－113
SP－114
SP－115
SP－116
SP－117
SP－118
SP－119
SP－120
SP－121
SP－122
SP－123
SP－124
SP－125
SP－126
SP－127
SP－128
SP－129
SP－130
SP－131
SP－132
SP－133
SP－134
SP－135
SP－136
SP－137
SP－138
SB－1
SB－2
SB－3
SB－4
SB－5
SK－1
SK－2
SK－3
SK－4
SK－5
SK－6
SK－7
SE－1
SW－1
0
5 m
古墳時代前期の遺構
弥生時代後期の遺構

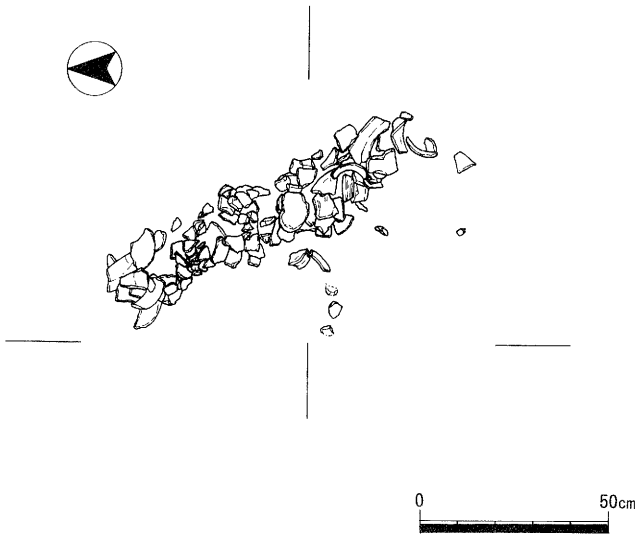
第４図　遺構平面図

弥生時代後期

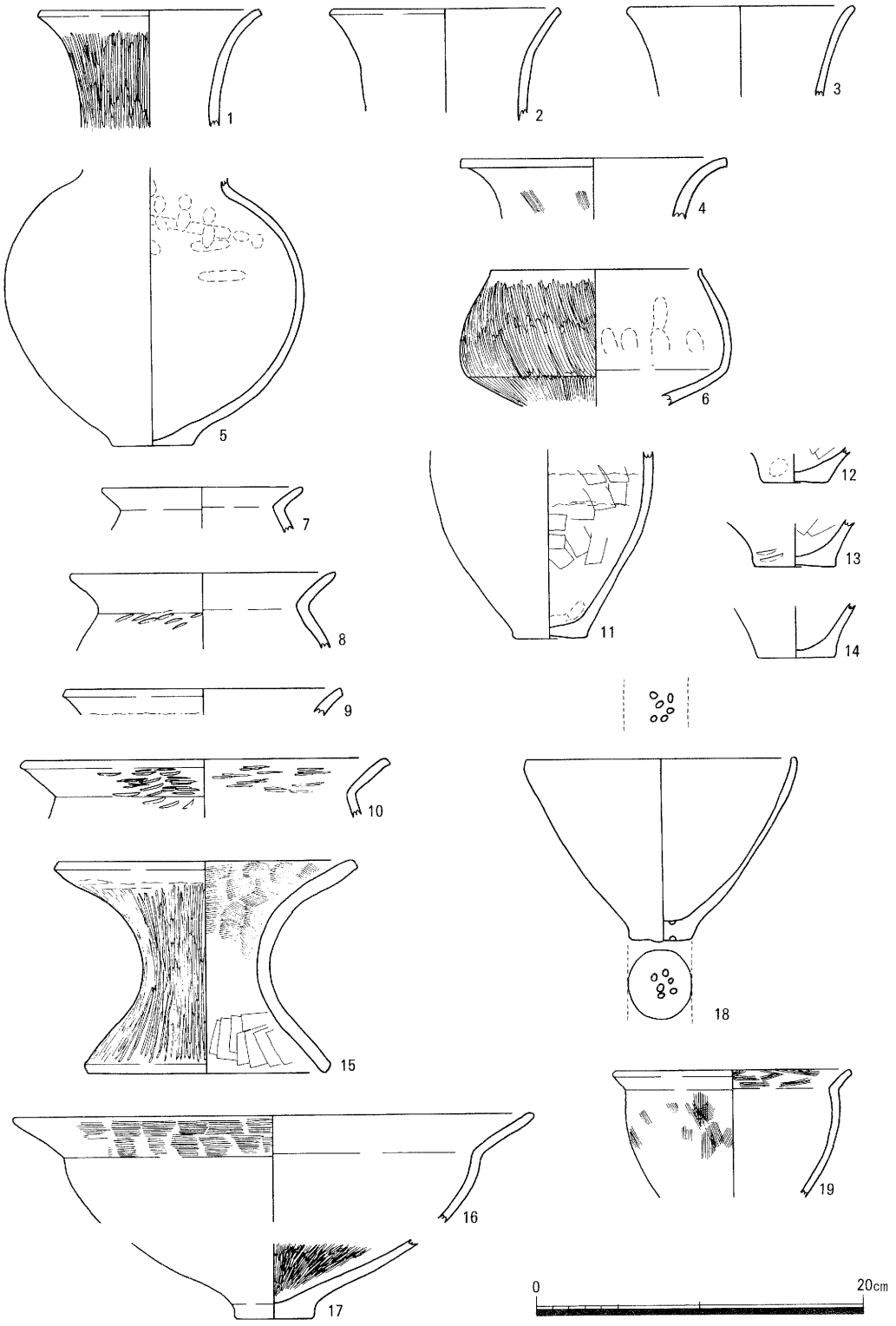
土器集積（ＳＷ）

ＳＷ－１

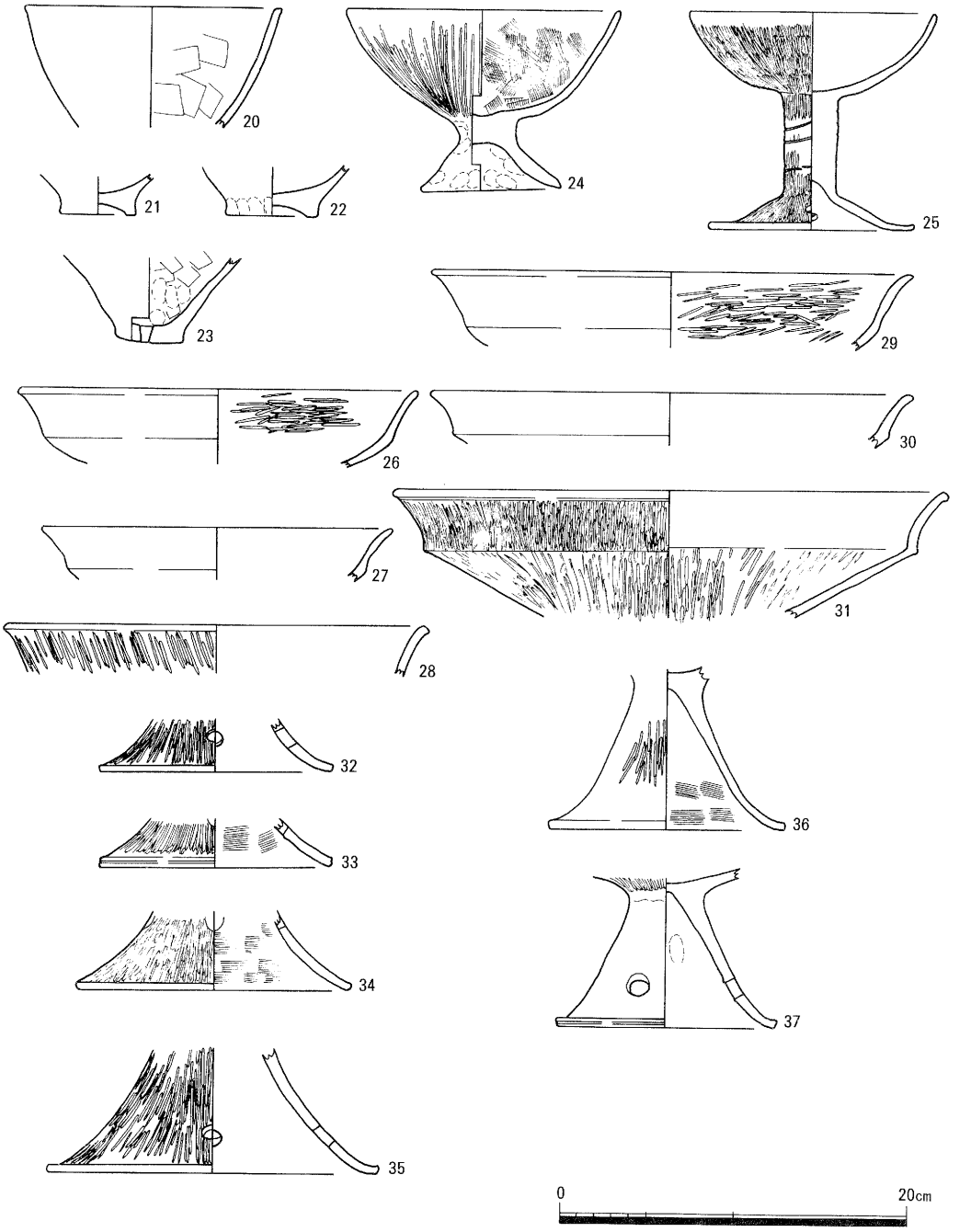
調査区中央部の第６層上面で検出した土器集積である。掘形の形状は確認されなかった。おそらく後世によって削平されたのであろう。検出範囲は東西30㎝、南北80㎝の長楕円形状で、土器はすべて破片化していた。個体数は約37点前後を数え、器種には壷（１～５）・甕（７～14）・鉢（16～21）・有孔鉢（23）・高杯（24～37）・器台（15）等の弥生時代後期末の土器片がみられる。このような検出状況は当調査区より北部へ約150ｍの第23次調査（TG88－23）の調査でも確認されており、広範囲に弥生時代後期末の生活面が存在するものと思われる。



第５図　ＳＷ－１平面図



第６図　ＳＷ－１出土遺物実測図１



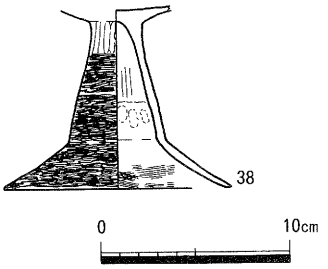
第７図　ＳＷ－１出土遺物実測図２

古墳時代前期

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

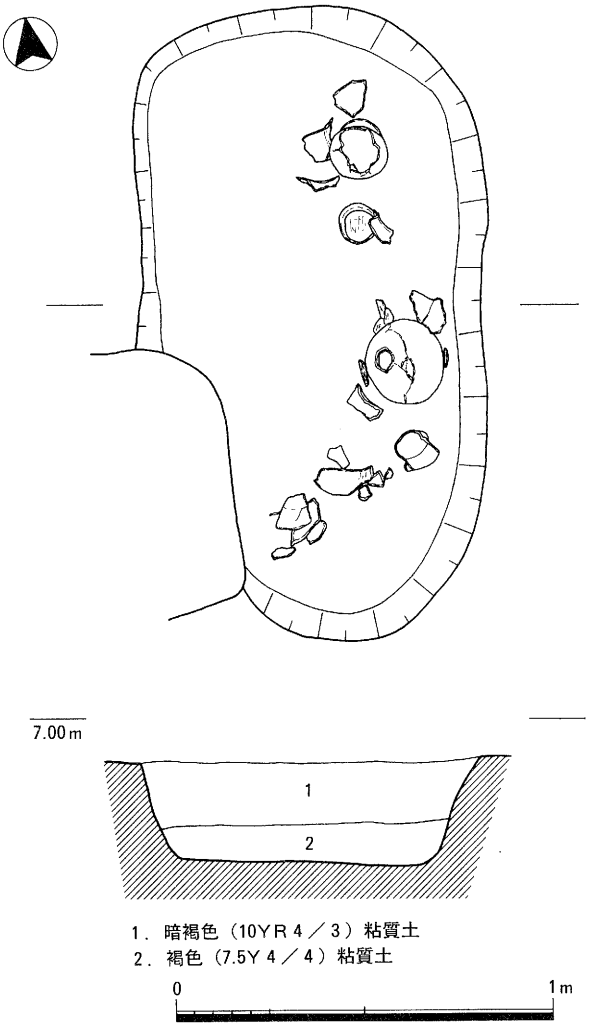
調査区北東隅で検出した。北東部は調査区外に至り、平面の形状は不明である。規模は検出部で、東西１ｍ以上、南北0.8ｍ以上、深さ20㎝を測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は２層に分かれている。第１層・第２層である。遺物は、内部から布留式古相に比定される高杯（38）とその他に甕等の小片がごく少量出土している。



第８図　ＳＫ－１出土遺物実測図

ＳＫ－２

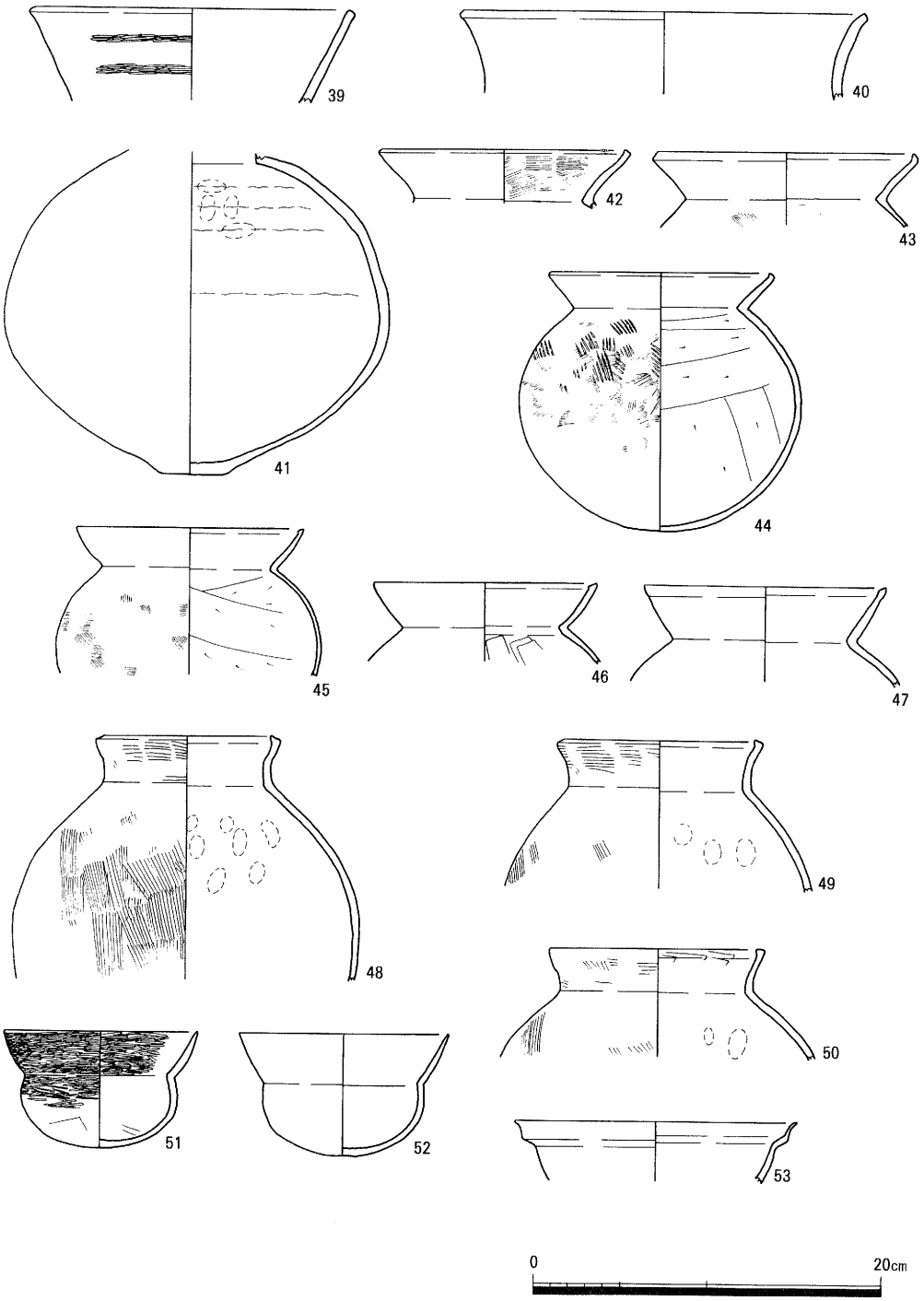
調査区の北東部で検出した。上部は整地層及び現在の土層によって削平されている。平面の形状は楕円形を呈し、南東部は平安時代前期の柱穴（ＳＰ－12）に一部切られている。規模は検出部で、東西1.8ｍ、南北0.9ｍ、深さ30㎝を測る。断面は半円形を呈する。堆積土は暗褐色（10YR４／３）粘質土・褐色（7.5Y４／４）粘質土である。遺物は、検出面よりやや浮いた状態で布留式古相に比定される壷（39～41）・小型丸底壷（51・52）・庄内式甕（42・43）・布留式甕（45～47）・東部瀬戸内系甕（48～50）と南部でＳＰ－12に切られている部分でも布留式甕（44）・鉢（53）の破片が出土している。



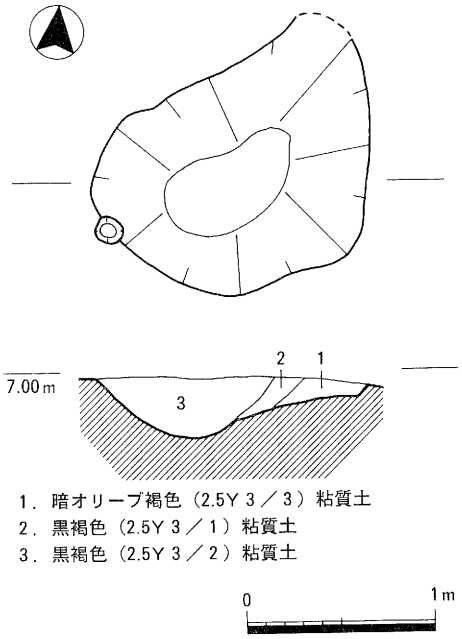
第９図　ＳＫ－２平断面図

ＳＫ－３

調査区中央部の東側で検出した。平面の形状は楕円形を呈する。規模は検出部で、東西1.5



第10図　ＳＫ－２出土遺物実測図



第11図　ＳＫ－３平断面図

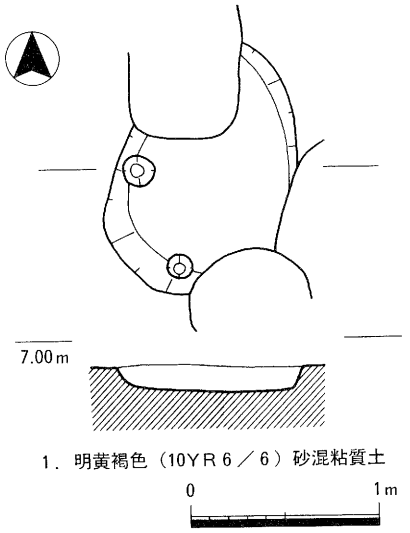
m、南北1.15m、深さ20cmを測る。堆積土は暗オリーブ褐色（2.5Y 3／3）粘質土・黒褐色（2.5Y 3／1）粘質土・黒褐色（2.5Y 3／2）粘質土である。遺物は、内部から布留式古相に比定される布留式甕等の小片がごく少量出土している。

ＳＫ－４

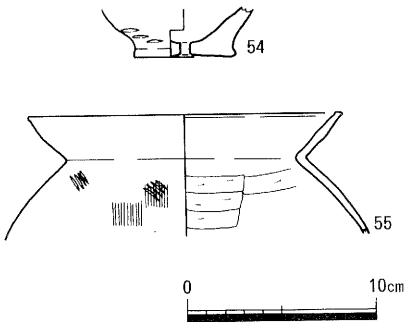
調査区中央の西側で検出した。平面の形状は楕円形を呈する。ＳＫ－５を切り、平安時代の小穴に切られている。規模は東西0.7m、南北1.15m、深さ15cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は明黄褐色（10YR 6／6）砂混粘質土である。遺物は、内部から布留式古相に比定される有孔鉢（54）・布留式甕（55）のほか小片で土器がごく少量出土している。

ＳＫ－５

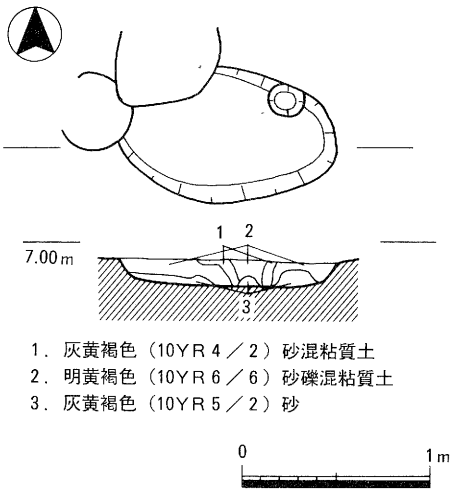
調査区中央の西側で検出した。東部はＳＫ－



第12図　ＳＫ－４平断面図

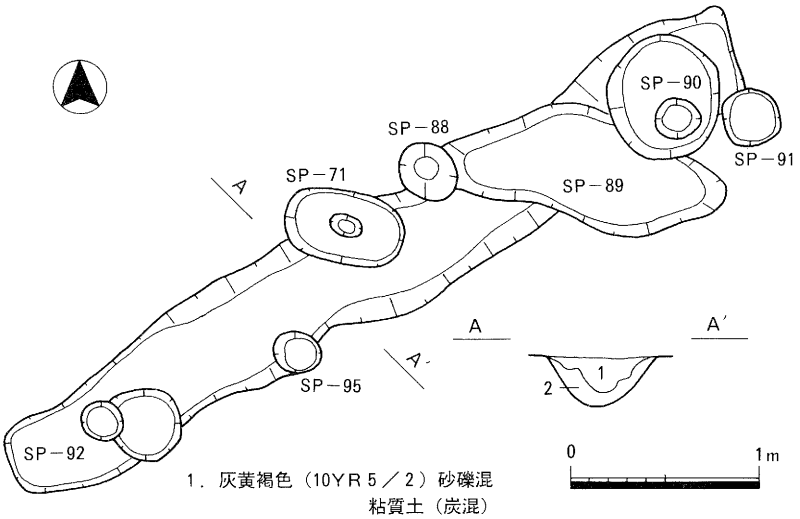


第13図　ＳＫ－４遺物実測図



第14図　ＳＫ－５平断面図

4によって切られ、南部と北部は小穴に切られる。規模は検出部で、東西１ｍ、南北1.4ｍ、深さ20cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は灰黄褐色（10YR４／２）砂混粘質土・明黄褐色（10YR６／６）砂礫混粘質土・灰黄褐色（10YR５／２）砂で、内部には炭・焼土魂が多量に含まれていた。遺物は、内部から布留式古相に比定される壷・鉢の小片が少量と砥石１点が出土している。

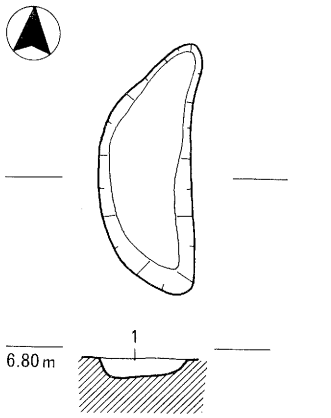


1．灰黄褐色（10YR５／２）砂礫混粘質土（炭混）
2．灰黄褐色（10YR４／２）砂礫混粘土

第15図　ＳＫ－６平断面図

ＳＫ－６

調査区のＳＫ－３～ＳＫ－５の南部で検出した。平面の形状は南西－北東の方向に長い溝状の形状を呈する。規模は検出部で、長径4.5ｍ、短径0.6ｍを測る。断面は半円形を呈し、深さは南東側で10cm、北東側で35cmを測る。堆積土は灰黄褐色（10YR５／２）砂礫粘質土・灰黄褐色（10YR４／２）砂礫粘土で、内部には炭が多量に含まれていた。遺物は、布留式古相に比定される壷・布留式甕等の小片がごく少量出土している。



1．にぶい黄褐色（10YR４／３）砂礫混粘質土

0　1m

第16図　ＳＫ－７平断面図

ＳＫ－７

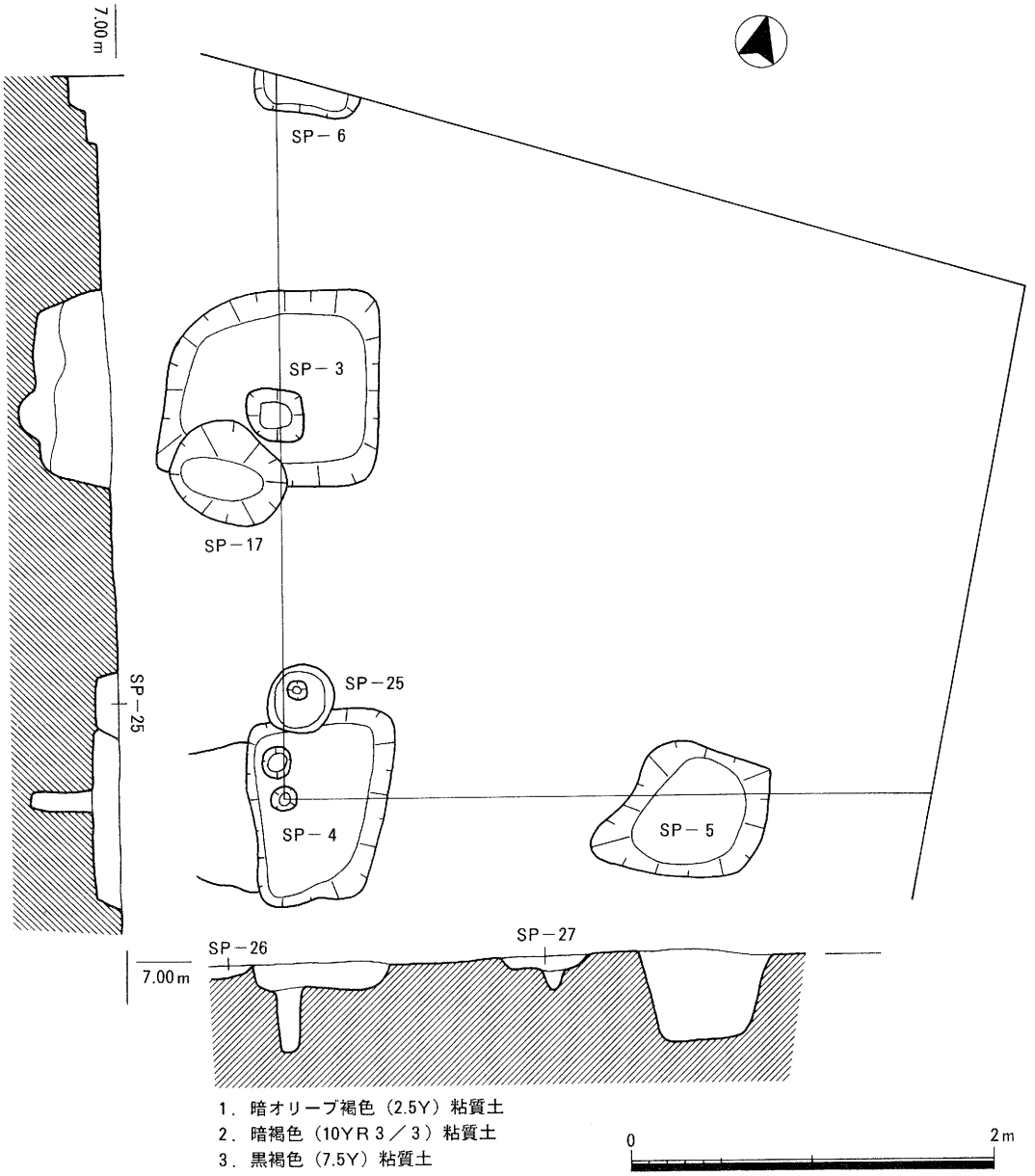
調査区南部で検出した。上部は江戸時代の落ち込みで削平されている。平面の形状は偏平な楕円形を呈し、東西1.3ｍ、南北0.5ｍ、深さ15cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色（10YR４／３）砂礫粘質土で、内部には炭・焼土魂が含まれていた。遺物は、内部から布留式古相に比定される土師器の小片がごく少量出土している。

奈良～平安時代前期

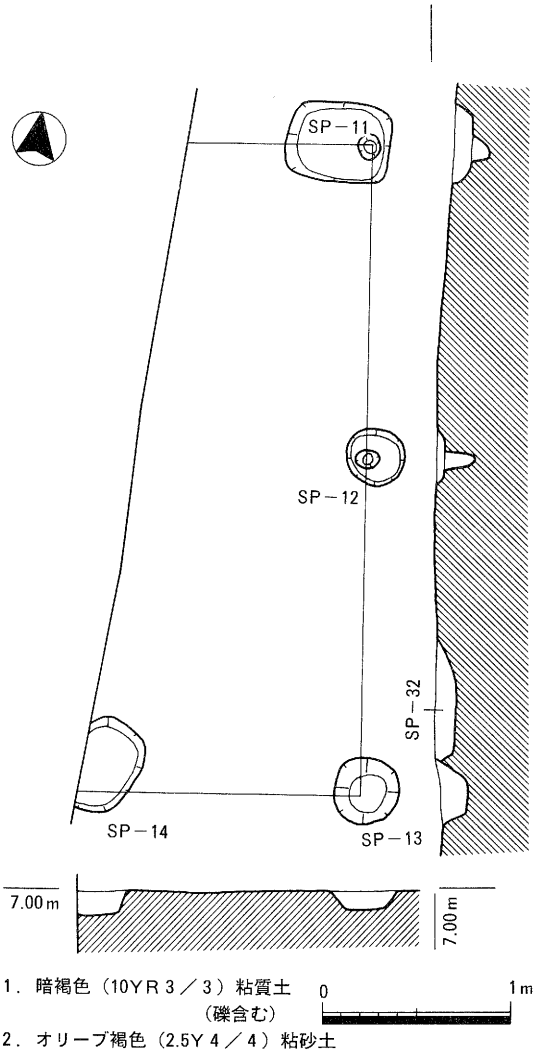
掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ－１

調査区北部で検出した。主軸はほぼ南－北を示し、検出部の規模は２間×１間で南西角の部分のみで、北東部は調査区外に至るものと思われる。間隔は東西が2.0ｍ、南北が2.5ｍである。柱穴の形状は隅丸方形で、一辺約0.6～1.1ｍ、深さ40～60㎝を測る。このＳＢ－１の柱穴は調査区内で最大の規模のものである。



第17図　ＳＢ－１平断面図



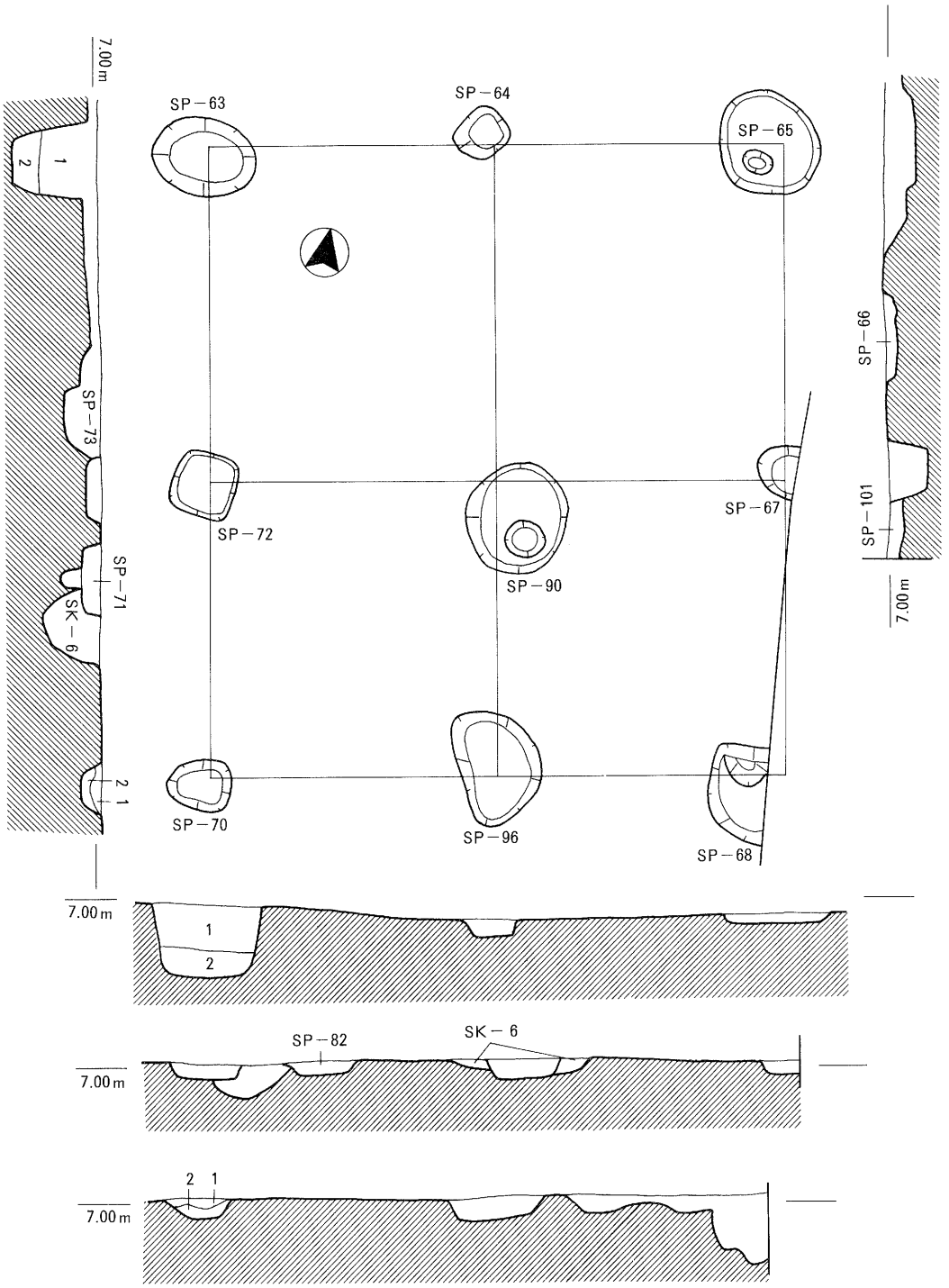
第18図　ＳＢ－２平断面図

ＳＢ－２

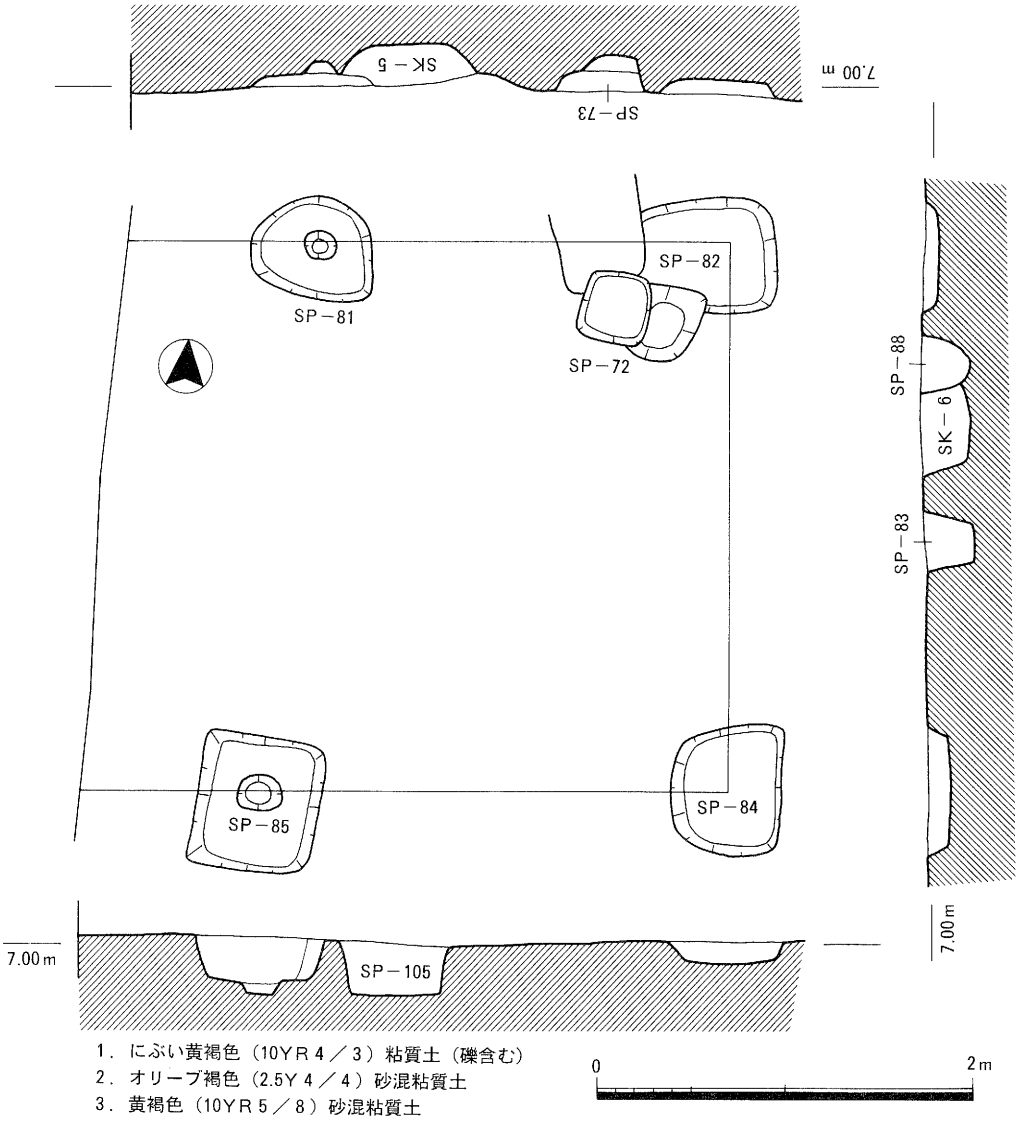
調査区中央で検出した。主軸はＳＢ－１より僅かに東に振っている。検出部の規模は２間（3.4m）×１間（1.5m）以上で、西部は調査区外に至るものと思われる。間隔は東西1.5m、南北が北から1.7m、1.7mである。柱穴の形状は円形及び隅丸方形で、径30～55cm、深さ30～40cmを測る。

ＳＢ－３

調査区中央部で検出した。主軸はＳＢ－２とほぼ同一方向を示し、規模は２間（3.4m）×２間（3.8m）の総柱の建物である。間隔は東西が西から3.35m、3.45m、南北が北から２m、1.8mである。柱穴の平面形状は楕円形及び隅丸方形で、径30～70cm、深さ25～45cmを測る。



第19図　ＳＢ－３平断面図

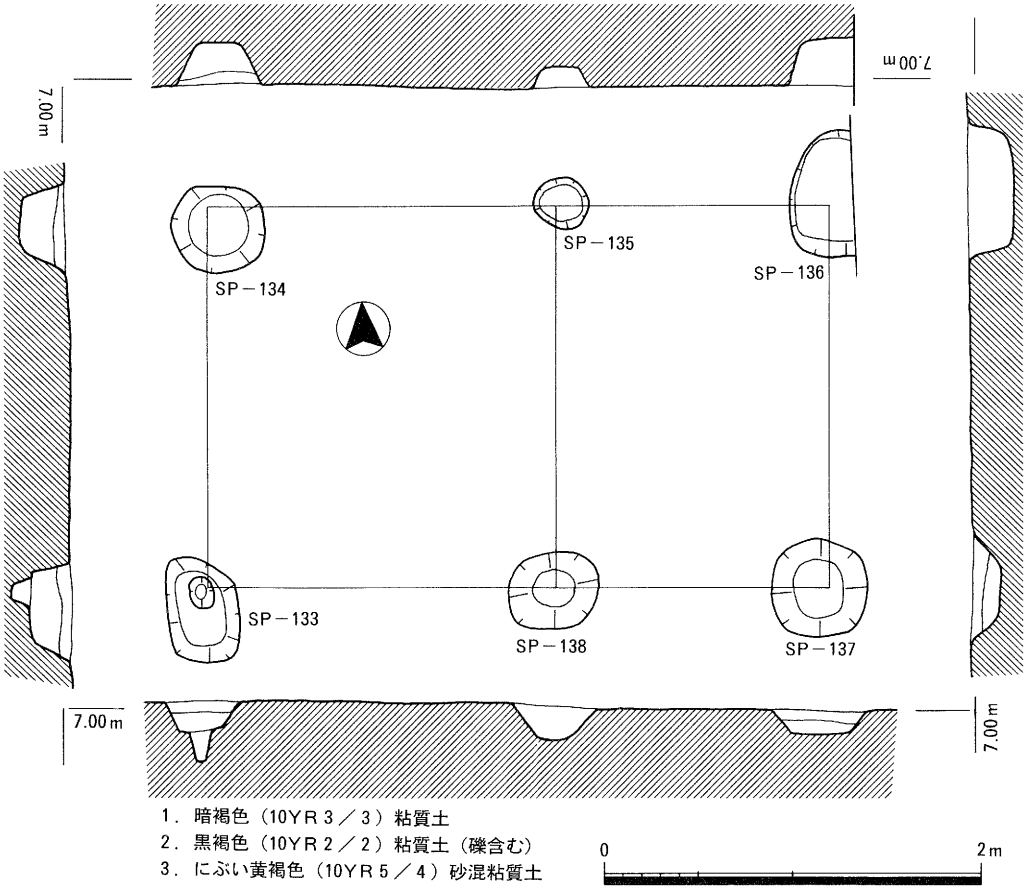


第20図　ＳＢ－４平断面図

断面はU字形である。遺物はＳＰ－69から平安時代のものと思われる土器の小片がごく少量出土している。

ＳＢ－４

調査区中央部で検出した。主軸はＳＢ－３より僅かに東へ振っている。規模は３間（６ｍ）×２間（４ｍ）である。間隔は東西２ｍ、南北２ｍである。柱穴の平面形状は隅丸方形及び楕円形で、径40～90cmを測る。断面はU字形及び逆凸形を呈する。遺物は出土しなかった。



第21図　ＳＢ－５平断面図

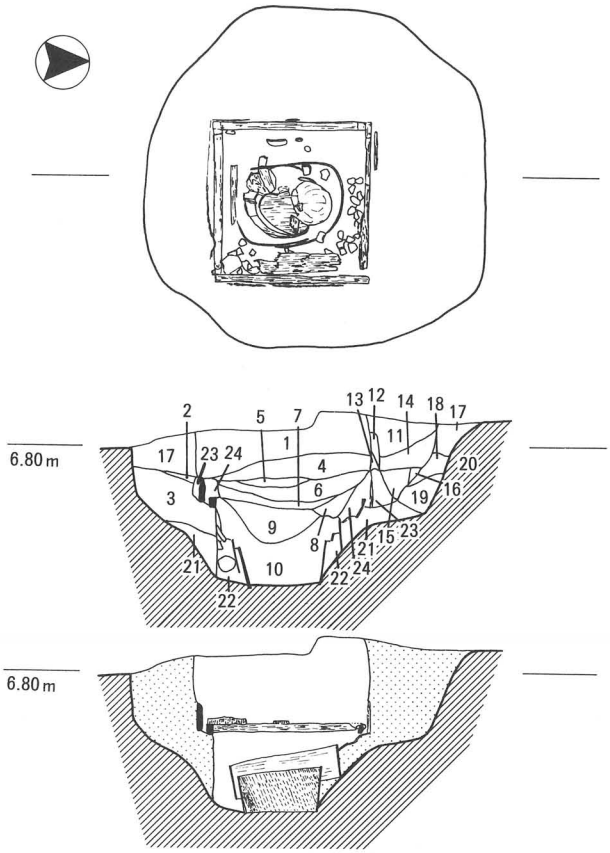
ＳＢ－５

調査区南部で検出した。主軸はＳＢ－４と同方向である。規模は２間（3.3ｍ）×１間（２ｍ）以上である。間隔は東西が西から1.9ｍ、1.4ｍ、南北２ｍである。柱穴の平面形状は楕円形及び隅丸方形を呈し、径25～65㎝、深さ20～40㎝を測る。断面はＵ字形を呈する。遺物は小穴内から平安時代のものと思われる土器の小片がごく少量出土している。

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

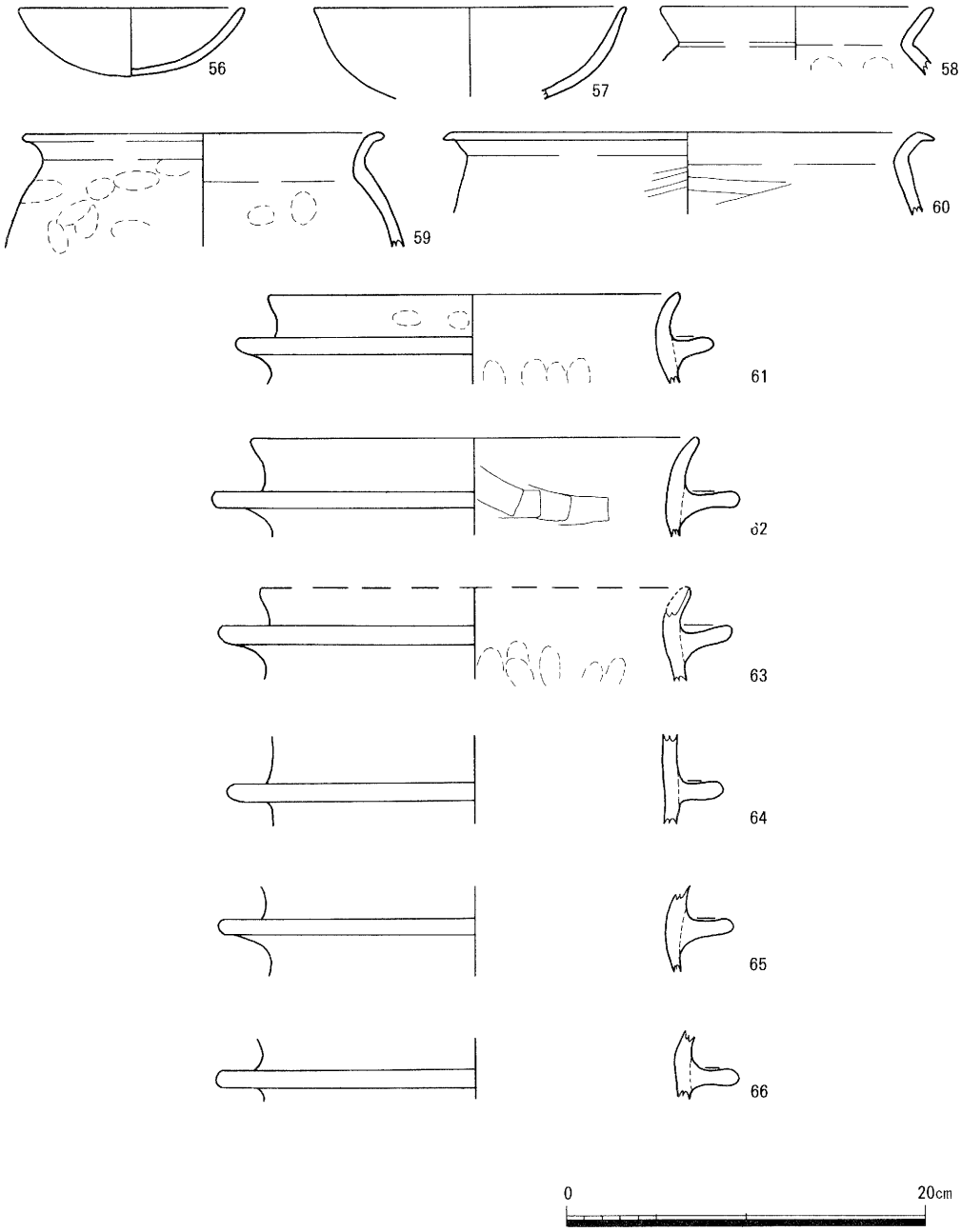
調査区中央北で検出した井戸側を備えた井戸である。平面の形状は、掘形が円形で径1.75ｍ、井戸側の上部が方形で一辺0.9ｍを測る。下部では南北に長い楕円形の曲物（１段目）、さらにその中に入り込んだようになったもう一つの円形の曲物（２段目）が備え付けていたのが確認



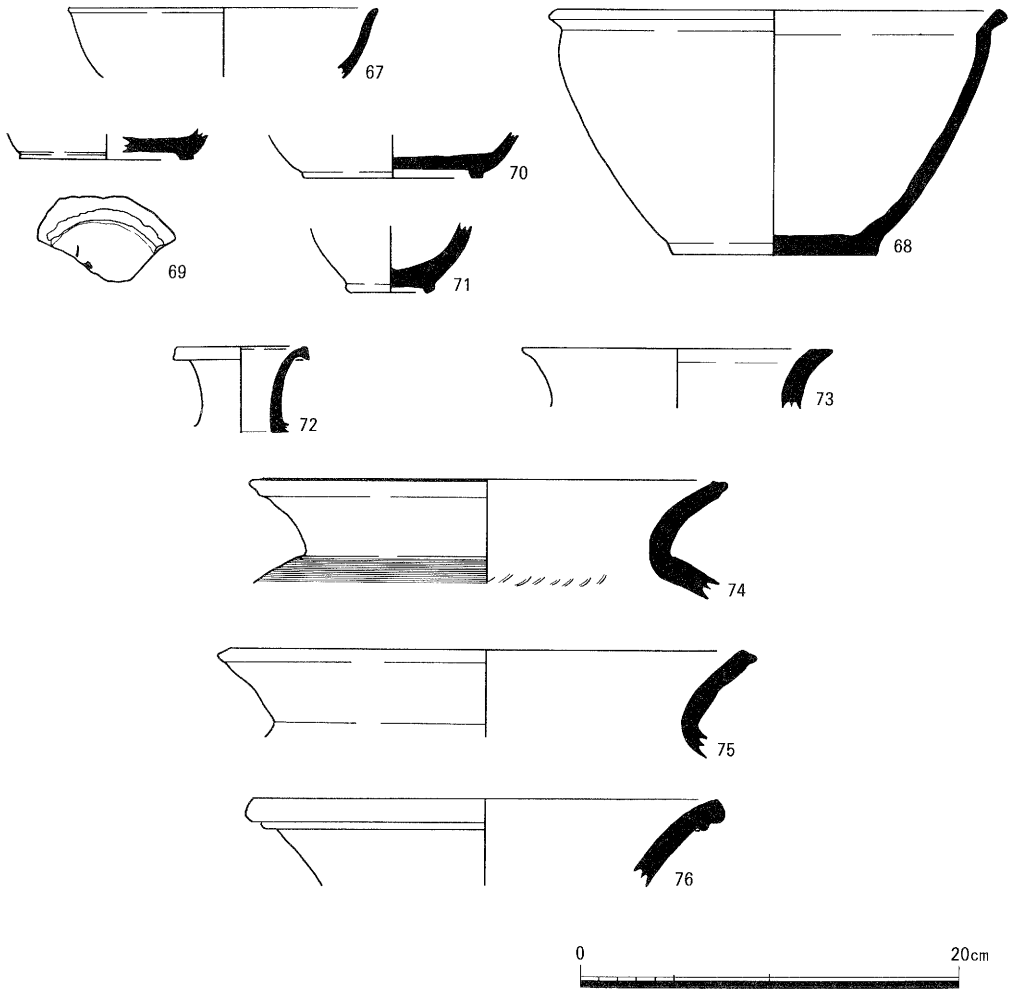
1．暗褐色（7.5YR３／３）細砂混シルト
2．暗灰色（N３／　）粘質土
3．褐色（10YR４／４）礫砂
4．暗褐色（7.5YR３／４）礫混シルト
5．暗褐色（7.5YR３／３）微砂混シルト
6．暗赤褐色（５YR３／４）粘質土
7．灰色（５Y５／１）シルト
8．暗灰色（10YR３／４）礫砂
9．暗青灰色（10BG３／１）粘質土
10．暗青灰色（10BG４／１）礫砂
11．黒褐色（7.5YR３／２）礫砂混シルト
12．暗褐色（10YR３／４）シルト
13．暗褐色（10YR４／１）粘質土
14．暗褐色（10YR３／４）礫砂混シルト
15．暗赤褐色（５YR３／２）礫砂混シルト
16．褐灰色（５YR４／１）シルト
17．にぶい黄褐色（10YR４／３）礫砂
18．褐色（10YR４／６）礫砂
19．にぶい黄褐色（10YR４／３）礫混細砂
20．褐色（10YR４／６）礫砂
21．暗灰色（N３／　）砂礫混粘質土
22．暗褐色（10YR4／4）粘質土
23．暗オリーブ黒色（10Y3／1）砂礫混粘質土
24．オリーブ黒色（7.5Y3／1）砂礫混粘質土

第22図　ＳＥ－１平断面図

された。遺物は、掘形内から古墳時代後期～奈良時代に比定される土師器の杯（56・57）・甕（58～60）・羽釜（61～66）・須恵器の杯（67・69・70）・鉢（71）・壷（72）・甕（73～76）破片、井戸側内から奈良～平安時代に比定される須恵器の鉢（68）１点、底付の曲物（径30cm、高さ８cm）１点と、土器の小片、木片がごく少量出土している。また、井戸底から人頭大の石１点が出土している。



第23図　ＳＥ－１出土遺物実測図１



第24図　ＳＥ－１出土遺物実測図２

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１～ＳＰ－138

調査区内で138個（掘立柱建物も含む）を検出した。平面の形状は、小さいもの（径20～40cm）には円形が多く、大きいもの（径50～100cm）には隅丸方形が多い。これらの小穴内には柱痕がみられ、多くのものは建物に関連する柱穴であると考えられる。ただ、調査面積の制約があり、調査区内での規則的な配列をもつものは前述した掘立柱建物５棟が確認されただけである。時期は、ほとんどが平安時代前期のものと考えられるが、整地層内には古墳時代後期～奈良時代のものが多く含まれており、小数の小穴には平安時代前期よりやや下るものもあると思われるが、調査では明確にできなかった。

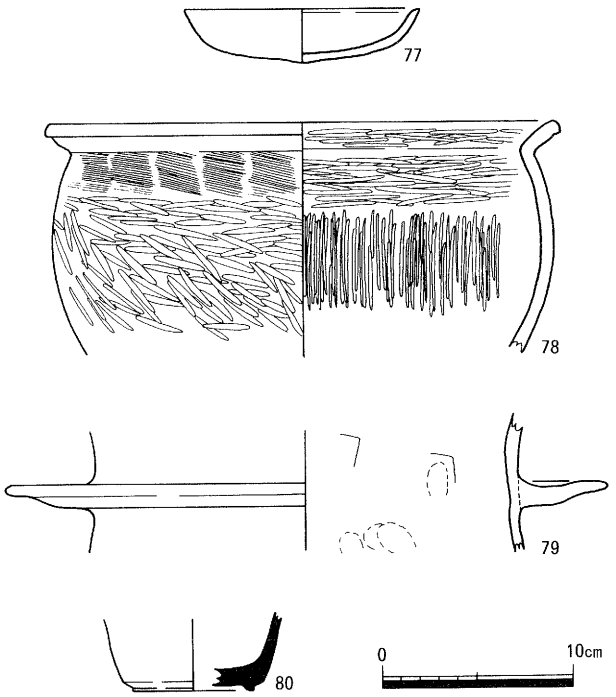
遺物番号	法量(cm)			平面形	断面形	堆積土	備考
	長軸	短軸	深さ				
ＳＰ－１	38.0	38.0	14.0	－	逆凸形	にぶい黄褐色砂混質土・黒褐色粘土質土	西部は調査区外に至る。
ＳＰ－２	24.0	22.0	20.0	円形	逆台形	褐色砂混粘質土・暗オリーブ褐色粘質土	柱痕跡１有り。
ＳＰ－３	118.0	106.0	48.0	隅丸方形	皿状形	灰黄褐色砂礫混粘質土・灰色砂混粘質土	ＳＰ－17に切られる。柱痕跡１有り。
ＳＰ－４	106.0	74.0	48.0	隅丸方形	逆凸形	暗オリーブ褐色粘質土（礫を若干含む）・にぶい黄褐色砂まじり・黒褐色粘質土	ＳＰ－25に切られ、ＳＰ－26を切る。柱痕跡２有り。
ＳＰ－５	84.0	74.0	50.0	楕円形	逆台形	にぶい黄褐色粘質土（細かい礫まじり）・黒褐色粘質土・暗褐色粘質土・灰黄褐色粘質土・黒褐色粘質土	ＳＰ－２を切る。
ＳＰ－６	60.0	18.0	12.0	－	皿状形	黒褐色粘質土	北部は調査区外に至る。
ＳＰ－７	31.0	31.0	10.0	円形	椀状形	黒褐色粘質土	
ＳＰ－８	16.0	15.0	13.0	円形	椀状形	黄褐色砂混粘質土	
ＳＰ－９	42.0	34.0	16.0	円形	椀状形	明黄褐色砂混粘質土・黄褐色砂混粘質土	
ＳＰ－10	44.0	26.0	16.0	楕円形	椀状形	明黄褐色砂混粘質土・灰黄褐色砂混粘質土	
ＳＰ－11	55.0	43.0	19.0	隅丸方形	逆凸形	にぶい黄褐色砂礫混粘質土・暗オリーブ褐色粘質土	柱痕跡１有り。
ＳＰ－12	32.0	32.0	20.0	円形	逆凸形	にぶい黄褐色砂礫混粘質土・暗褐色粘質土（礫まじり）	
ＳＰ－13	34.0	33.0	14.0	円形	椀状形	暗褐色粘質土	ＳＰ－32を切る。
ＳＰ－14	50.0	30.0	26.0	－	逆凸形	オリーブ褐色粘質土・暗褐色粘質土	ＳＰ－23を切り、西部は調査区外に至る。
ＳＰ－15	46.0	22.0	32.0	－	逆凸形	灰褐色砂混粘質土・オリーブ褐色粘質土	ＳＰ－16を切り、西部は調査区外に至る。
ＳＰ－16	74.0	46.0	32.0	－	逆凸形	黄褐色砂礫混粘質土・褐色砂礫混粘質土・灰黄褐色砂混粘質土・明黄褐色砂混粘質土	ＳＰ－15を切られ、西部は調査区外に至る。
ＳＰ－17	64.0	56.0	26.0	－	椀状形	にぶい黄褐色砂礫混粘質土・にぶい黄褐色砂混粘質土・褐灰色砂混粘質土・灰黄褐色砂混粘質土	ＳＰ－３を切る。
ＳＰ－18	34.0	22.0	17.0	不定形	逆凸形	暗褐色粘砂土・暗褐色粘質土	ＳＰ－19を切り、西部は調査区外に至る。
ＳＰ－19	52.0	30.0	14.0	楕円形	逆凸形	にぶい黄褐色砂混粘質土・暗い褐色砂混粘質土	ＳＰ－19を切られる。
ＳＰ－20	26.0	22.0	17.0	円形	逆凸形	にぶい黄褐色砂混粘質土・暗褐色粘質土	
ＳＰ－21	82.0	60.0	23.0	－	逆凸形	灰黄褐色砂混粘質土	ＳＰ－23を切り、西部は調査区外に至る。
ＳＰ－22	226.0	132.0	－	不定形	－	－	
ＳＰ－23	36.0	27.0	－	不定形	－	－	ＳＰ－21に切られる。
ＳＰ－24	64.0	44.0	24.0	楕円形	逆凸形	にぶい黄褐色砂礫混粘質土・にぶい黄褐色粘質土	柱痕跡１有り。
ＳＰ－25	38.0	38.0	21.0	円形	逆凸形	にぶい黄褐色砂礫混粘質土・オリーブ褐色粘質土	柱痕跡１有り。
ＳＰ－26	78.0	44.0	37.0	隅丸方形	逆台形	灰黄褐色粘質土・黒褐色砂混粘質土・にぶい黄褐色砂混粘質土	ＳＰ－４に切られる。

遺物番号	法量(cm)			平面形	断面形	堆積土	備考
	長軸	短軸	深さ				
SP－27	60.0	42.0	23.0	楕円形	逆凸形	オリーブ褐色粘質土・黒褐色粘質土	柱痕1有り。
SP－28	28.0	26.0	8.0	円形	皿状形	にぶい黄褐色粘砂土	
SP－29	80.0	60.0	8.0	隅丸方形	皿状形	褐色粘砂土	SP－30に切られる。
SP－30	52.0	34.0	8.0	楕円形	皿状形	オリーブ褐色粘質土・粘砂土	SP－29を切る。
SP－31	60.0	42.0	8.0	楕円形	皿状形	にぶい黄褐色粘砂土	
SP－32	70.0	66.0	12.0	隅丸方形	椀状形	暗褐色粘砂土	SP－13・SP－33に切られる。
SP－33	41.0	34.0	13.0	円形	椀状形	暗褐色粘砂土	SP－32を切る。
SP－34	30.0	24.0	10.0	－	逆台形	オリーブ褐色粘砂土	西部は調査区外に至る。
SP－35	54.0	52.0	23.0	隅丸方形	逆凸形	褐色粘砂土・黒褐色粘質土	柱痕1有り。
SP－36	40.0	18.0	20.0	－	椀状形	褐色砂混粘質土・灰黄褐色砂混粘質土	西部は調査区外に至る。
SP－37	38.0	36.0	12.0	隅丸方形	椀状形	褐色砂混粘質土	
SP－38	62.0	39.0	8.0	楕円形	皿状形	にぶい黄褐色粘砂土	SP－39に切られる。
SP－39	66.0	48.0	7.0	不定形	皿状形	にぶい黄褐色粘砂土	SP－38を切る。
SP－40	50.0	46.0	22.0	不定形	逆凸形	にぶい黄褐色粘砂土・黒褐色粘質土	
SP－41	64.0	38.0	21.0	楕円形	逆凸形	暗褐色粘砂土・黒褐色（砂混粘質土）	柱痕1有り。
SP－42	54.0	50.0	20.0	隅丸方形	逆凸形	暗オリーブ褐色粘砂土・黒褐色	柱痕1有り。
SP－43	38.0	26.0	10.0	－	皿状形	暗褐色粘砂土・にぶい黄褐色粘質土	西部は調査区外に至る。
SP－44	60.0	53.0	14.0	楕円形	逆凸形	暗褐色粘砂土（礫を含む）・暗褐色粘質土	SP－45を切る。
SP－45	32.0	20.0	8.0	－	逆台形	暗褐色粘砂土（礫を含む）	SP－44に切られる。
SP－46	120.0	68.0	33.0	楕円形	逆凸形	暗褐色粘質土・暗オリーブ褐色粘質土・暗褐色砂混粘質土	柱痕1有り。
SP－47	17.0	13.0	7.0	円形	逆台形	にぶい黄褐色粘質土	
SP－48	44.0	28.0	7.0	楕円形	皿状形	にぶい黄褐色砂礫混粘質土	
SP－49	100.0	96.0	18.0	楕円形	逆凸形	暗灰黄色粘質土（砂混）	SP－50を切る。
SP－50	30.0	16.0	16.0	－	逆台形	暗褐色粘質土	SP－49に切られる。
SP－51	44.0	40.0	10.0	隅丸方形	皿状形	にぶい黄褐色粘質土・黒褐色粘砂土（礫を若干含む）	
SP－52	36.0	32.0	13.0	隅丸方形	逆凸形	にぶい黄褐色粘質土・褐色礫まじり粘質土	
SP－53	20.0	18.0	8.0	円形	逆台形	褐色粘砂土	
SP－54	22.0	21.0	10.0	円形	逆台形	褐色粘砂土	
SP－55	80.0	34.0	8.0	－	皿状形	暗褐色粘質土・黒褐色粘砂土	西部は調査区外に至る。
SP－56	34.0	20.0	7.0	－	皿状形	黄褐色礫まじり粘質土・褐色礫まじり粘質土	西部は調査区外に至る。
SP－57	30.0	22.0	12.0	円形	逆凸形	明黄褐色粘質土・オリーブ褐色粘質土	
SP－58	79.0	54.0	8.0	隅丸方形		暗褐色粘質土（礫を含む）・黒褐色粘質土質土	SK－4を切る。
SP－59	17.0	15.0	5.0	円形	皿状形	明褐色砂礫混粘質土	SK－4を切る。

遺物番号	法量(cm)			平面形	断面形	堆積土	備考
	長軸	短軸	深さ				
ＳＰ－60	13.0	12.0	5.0	円形	椀状形	オリーブ褐粘質土	ＳＫ－４を切る。
ＳＰ－61	20.0	18.0	9.0	円形	椀状形	黄褐色砂混粘質土	ＳＫ－５を切る。
ＳＰ－62	65.0	54.0	6.0	隅丸方形	皿状形	にぶい黄褐粘質土	ＳＰ－63を切る。
ＳＰ－63	60.0	45.0	42.0	円形	逆台形	黄褐砂混粘質土・灰黄褐砂礫	ＳＰ－62に切られる。
ＳＰ－64	31.0	27.0	10.0	隅丸方形	逆台形	黄褐粘質土・暗オリーブ褐粘質土（礫を含む）	
ＳＰ－65	78.0	62.0	19.0	楕円形	逆凸形	褐粘砂土・暗褐粘質土（礫を含む）	柱痕１有り。
ＳＰ－66	54.0	48.0	14.0	円形	逆凸形	暗オリーブ褐粘質土・オリーブ褐砂まじり粘質土	柱痕１有り。
ＳＰ－67	32.0	24.0	15.0	円形	逆凸形	暗オリーブ褐粘質土	
ＳＰ－68	56.0	34.0	33.0	－	－	－	
ＳＰ－69	66.0	46.0	44.0	不定形	逆凸形	にぶい黄褐粘質土（細かい礫を含む）・オリーブ褐粘質土	
ＳＰ－70	40.0	30.0	12.0	楕円形	逆台形	灰黄褐粘質土（礫を多く含む）・暗褐粘質土	ＳＰ－82を切り、ＳＰ－72に切られる
ＳＰ－71	64.0	38.0	23.0	楕円形	逆凸形	にぶい黄褐粘砂土（砂混）・黒褐粘質土	ＳＫ－６を切る。
ＳＰ－72	36.0	36.0	7.0	隅丸方形	皿状形	にぶい黄褐粘砂土	ＳＰ－７０ＳＰ－73・ＳＰ－82を切る。
ＳＰ－73	62.0	49.0	20.0	隅丸方形	逆凸形	にぶい黄褐粘砂土・黒褐粘質土	ＳＰ－72に切られ、ＳＰ－82を切る。
ＳＰ－74	50.0	36.0	8.0	楕円形	皿状形	褐粘砂土	
ＳＰ－75	17.0	12.0	4.0	円形	椀状形	オリーブ褐粘質土	
ＳＰ－76	21.0	20.0	12.0	円形	逆台形	褐粘砂土	ＳＫ－３・ＳＰ－77を切る。
ＳＰ－77	37.0	10.0	8.0	－	逆台形	オリーブ褐粘砂土	ＳＫ－３を切り、ＳＰ－76に切られる。
ＳＰ－78	26.0	25.0	9.0	円形	逆台形	オリーブ褐粘砂土	ＳＫ－３を切る。
ＳＰ－79	38.0	37.0	23.0	隅丸方形	逆凸形	暗褐粘質土（礫を含む）・オリー	ＳＫ－３を切る。柱痕１有り。
ＳＰ－80	24.0	20.0	10.0	楕円形	椀状形	暗褐粘質土	ＳＫ－３を切る。
ＳＰ－81	64.0	57.0	13.0	不定形	逆凸形	にぶい黄褐粘質土（礫を含む）・黒褐粘質土	ＳＫ－４・ＳＫ－５・ＳＰ－87を切る。
ＳＰ－82	62.0	42.0	13.0	－	逆凸形	褐粘質土・オリーブ褐砂混粘質土	ＳＰ－73・
ＳＰ－83	42.0	31.0	24.0	楕円形	逆台形	にぶい黄褐粘質土（礫を含む）・暗褐粘質土	
ＳＰ－84	80.0	62.0	13.0	隅丸方形	逆台形	オリーブ褐	
ＳＰ－85	68.0	66.0	32.0	隅丸方形	逆凸形	にぶい黄褐粘質土（礫を含む）・黒褐粘質土・黄褐砂混粘質土	
ＳＰ－86	46.0	18.0	23.0	－	逆台形	黄褐粘砂土・暗オリーブ褐粘質土	
ＳＰ－87	42.0	38.0	32.0	円形	逆台形	にぶい黄褐粘質土（礫を含む）・黒褐粘質土	
ＳＰ－88	30.0	30.0	24.0	楕円形	逆台形	黄褐砂混粘質土	
ＳＰ－89	140.0	63.0	10.0	不定形	皿状形	にぶい黄褐粘質土（礫を含む）	
ＳＰ－90	66.0	60.0	26.0	円形	逆凸形	にぶい黄褐粘質土・（細砂を含む）・暗褐粘質土	
ＳＰ－91	30.0	30.0	30.0	円形	逆凸形	黒褐粘質土・暗オリーブ褐	
ＳＰ－92	22.0	21.0	10.0	円形	椀状形	オリーブ褐粘質土	
ＳＰ－93	38.0	33.0	20.0	円形	逆台形	暗オリーブ粘質土	
ＳＰ－94	18.0	16.0	12.0	円形	椀状形	暗オリーブ褐粘質土・（砂まじり）	

遺物番号	法量(cm)			平面形	断面形	堆積土	備考
	長軸	短軸	深さ				
SP－95	26.0	22.0	17.0	円形	逆台形	暗褐色粘質土（礫を含む）	SK－6を切る。
SP－96	26.0	22.0	10.0	円形	椀状形	黒褐粘質土	
SP－97	36.0	31.0	26.0	楕円形	逆台形	褐粘質土（礫砂まじり）	
SP－98	34.0	24.0	10.0	楕円形	椀状形	褐色粘質土（礫を若干含む）	
SP－99	19.0	17.0	14.0	円形	逆台形	暗褐粘質土	
SP－100	28.0	24.0	11.0	円形	椀状形	にぶい黄褐粘質土	SP－101を切る。
SP－101	64.0	28.0	－	－	－	－	SP－100・102に切られ東部は調査区外。
SP－102	70.0	68.0	31.0	隅丸方形	逆凸形	灰黄褐粘質土（礫まじり）・にぶい黄褐粘質土・暗褐礫まじり粘質	SP－101を切り、東部は調査区外。
SP－103	28.0	24.0	6.0	－	逆台形	にぶい黄褐粘質土	SP－104に切られる。
SP－104	60.0	55.0	6.0	不定形	皿状形	にぶい黄褐粘質土	SP－103を切る。
SP－105	68.0	59.0	29.0	隅丸方形	逆台形	オリーブ褐粘砂土・黄褐砂混粘質土	
SP－106	45.0	44.0	47.0	隅丸方形	逆台形	オリーブ褐粘砂土（礫を若干含む）	
SP－107	34.0	16.0	11.0	楕円形	逆台形	にぶい黄褐粘砂土	
SP－108	26.0	19.0	12.0	隅丸方形	逆台形	暗褐粘質土（礫を含む）	SP－69に切られる。
SP－109	42.0	23.0	14.0	楕円形	逆台形	にぶい黄褐粘砂土	
SP－110	30.0	20.0	18.0	楕円形	逆台形	暗褐粘質土	SP－111を切る。
SP－111	26.0	18.0	6.0	－	逆台形	オリーブ褐粘質土（礫を多く含む）	SP－110に切られる。
SP－112	30.0	25.0	32.0	楕円形	逆台形	オリーブ褐粘質土（礫を多く含む）	
SP－113	22.0	22.0	8.0	円形	椀状形	明黄褐砂混粘質土・黄褐砂混粘質土	SP－96に切られる。
SP－114	33.0	25.0	21.0	－	逆台形	明黄褐砂混粘質土・黄褐砂混粘質土	中世以降の落込みで切られる。
SP－115	34.0	34.0	21.0	楕円形	逆台形	－	
SP－116	66.0	35.0	26.0	隅丸方形	逆台形	暗褐粘砂土（礫を含む）・暗オリーブ褐粘質土	SP－84に切られる。
SP－117	26.0	23.0	24.0	円形	逆台形	黒褐粘質土・オリーブ褐粘質土・暗オリーブ褐粘質土	
SP－118	24.0	19.0	19.0	円形	逆台形	明黄色褐砂混粘質土	中世以降の落込みで切られる。
SP－119	36.0	35.0	20.0	円形	逆台形	黒褐粘質土	
SP－120	30.0	26.0	11.0	円形	逆台形	オリーブ褐粘質土	SP－122に切られる。
SP－121	46.0	26.0	24.0	円形	逆台形	暗オリーブ褐粘質土・暗灰黄粘質土・オリーブ褐粘質土	SP－122に切られ、東部は調査区外。
SP－122	95.0	78.0	23.0	隅丸方形	逆凸形	暗オリーブ褐粘質土（礫を多く含む）・オリーブ褐粘質土・黄褐砂混粘質土・黄褐粘質土	SP－120・121を切り、東部は調査区外。
SP－123	60.0	56.0	12.0	楕円形	逆台形	にぶい黄褐粘質土（礫を含む）	
SP－124	44.0	32.0	12.0	円形	逆台形	オリーブ褐粘質土	
SP－125	24.0	22.0	14.0	円形	逆台形	黄褐砂礫混粘質土	中世以降の落込みで切られる。
SP－126	36.0	34.0	18.0	隅丸方形	逆台形	褐砂混粘質土・にぶい黄褐砂混粘質土	
SP－127	37.0	29.0	20.0	円形	逆台形	明黄褐砂礫混粘質土・にぶい黄褐砂混粘質土	東部は調査区外。
SP－128	32.0	29.0	20.0	円形	逆台形	黒褐礫質土	
SP－129	36.0	36.0	12.0	円形	椀状形	暗褐粘質土（礫を含む）	
SP－130	80.0	74.0	20.0	円形	逆台形	暗褐粘質土（細かい礫を含む）・黒褐礫粘質土	

遺物番号	法量(cm)			平面形	断面形	堆積土	備考
	長軸	短軸	深さ				
SP－131	30.0	30.0	18.0	円形	逆台形	暗オリーブ褐粘質土・黒褐砂土	
SP－132	30.0	22.0	13.0	－	逆台形	褐砂混粘質土・灰黄褐砂礫	南部は調査区外。
SP－133	60.0	40.0	33.0	楕円形	逆凸形	暗褐粘質土・黒褐粘質土（あらい礫を含む）・黒褐粘質土（砂まじり）	SB－5
SP－134	49.0	46.0	22.0	円形	逆台形	褐粘質土・暗褐粘質土（礫をわずかに含む）	SB－5
SP－135	29.0	28.0	13.0	円形	逆台形	にぶい黄褐砂混粘質土	SB－5
SP－136	68.0	34.0	28.0	－	－	暗褐砂混粘質土・暗オリーブ褐粘質土	東部は調査区外。SB－5
SP－137	54.0	50.0	24.0	円形	逆台形	にぶい黄褐色砂質土・灰黄褐砂混粘質土	SB－5
SP－138	48.0	40.0	18.0	円形	椀状形	灰黄褐砂礫粘質土	SB－5



第25図　小穴内出土遺物実測図

鎌倉時代

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査区中央で検出した溝状の遺構である。方向は東－西方向で、幅約５ｍを測る。東壁付近では北方へ伸びる。切り込み面は第４層上面で、最深部では第７層まで切り込んでおり、弥生時代後期の遺構面を削平している。当調査地の北部で実施している第１次調査（TG80－１）・第13次調査（TG82－13）などの調査でもよくにた遺構が確認されている。

江戸時代

落込み状遺構（ＳＯ）

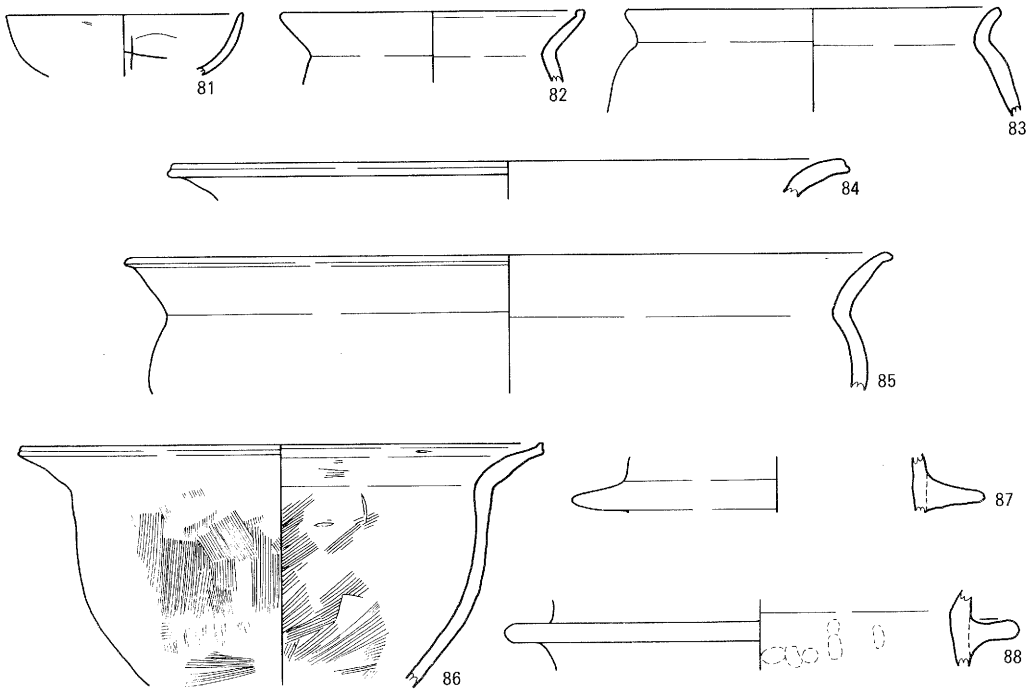
ＳＯ－１

調査区南部で検出した。第３層上面から第８層まで切り込んでいる落ち込み状遺構である。北肩は東西方向に伸びるが、南肩は調査区外に至り、不明である。この落ち込み状遺構は古地図からみると条里遺構に関連する区画溝ではないと予想される。

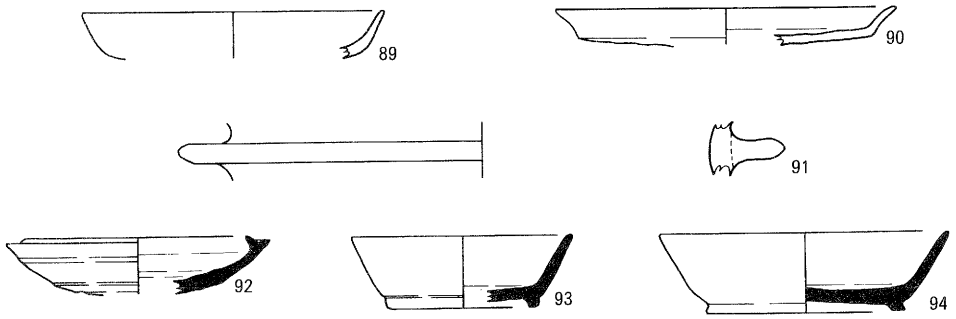
遺構に伴わない出土遺物

基本層序の第２層・第３層・第４層から古墳時代から鎌倉時代の遺物が出土している。遺物はコンテナ箱にして約９箱分出土したがほとんど細片化したものであった。その大半は中世の整地層である第４層内から出土した遺物である。

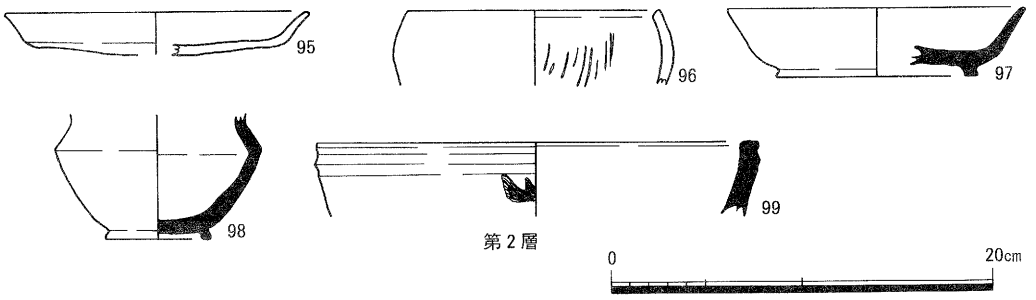
以下、図化できたものについて記す。第４層から出土したものは奈良時代に比定される土師器の杯（81）・甕（82～84）・鉢（85・86）・羽釜（87・98）である。第３層から出土したものは平安時代後期に比定される土師器の中皿（89・90）・羽釜（91）、古墳時代後期に比定される須恵器の杯身（～93）である。第２層から出土したものは平安時代後期に比定される中皿（99）、古墳時代後期の土師器の鉢（96）、須恵器の杯身（97）・小型壷（95）・器台（96）である。



第４層



第３層



第２層

第26図　遺構に伴わない出土遺物実測図

4）出土遺物観察表

SW－1

遺物番号 図版番号	器種 遺構番号	法量（cm） 口径 器高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	壺 （弥生土器）	口径　13.2	口縁部外面ヨコナデ・ヘラミガキ、内面ナデ・接合痕	にぶい橙色	3㎜以下の砂粒（長石・雲母・角閃石）を含む	良好	
2	同上	口径　13.8	口縁部内外面摩耗のため調整不明	橙色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
3	同上	口径　13.6	口縁部内外面摩耗のため調整不明	にぶい橙色	7㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
4	同上	口径　16.2	口縁部外面ヨコナデ・ハケナデ（12本／cm）、内面ナデ	外　にぶい褐色～灰褐色 内　橙色	5㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
5	同上	体部径　18.2 底径　4.8	体部の外面上部～中間部分は摩耗のため不明、裾部ナデ、内面上部指ナデ・指頭圧痕	外　にぶい褐色 内　にぶい橙色～灰褐色	9㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
6	台付無頸壺 （弥生土器）	底径　12.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面指ナデ・指頭圧痕	外　にぶい褐色～灰褐色 内　にぶい橙色	6㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
7	甕 （弥生土器）	口径　12.4	口縁部内外面ヨコナデ	外　浅黄橙色～淡褐色 内　淡橙色	5㎜以下の砂粒を含む	良好	
8	同上	口径　16.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ・接合痕、内面ナデ	外　にぶい褐色～灰褐色 内　にぶい橙色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
9	同上	口径　16.8	口縁部内外面ナデ、外面に接合痕有り	外　茶褐色 内　橙色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
10	同上	口径　22.0	口縁部内外面タタキ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	外　にぶい褐色 内　にぶい橙色	7㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
11 図版七	高杯	底径　4.6	体部外面磨耗のため調整不明、内面ヘラナデ・接合痕・指頭圧痕	外　浅黄橙色 内　黒褐色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
12	同上	底径　4.2	底部外面ナデ・指頭圧痕、内面ヘラナデ	外　にぶい褐色～黒褐色 内　にぶい褐色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
13	同上	底径　5.2	底部外面タタキ・しぼり目、内面ヘラナデ	外　にぶい橙色 内　にぶい褐色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
14	同上	底径　4.8	底部外面摩耗のため調整不明、内面ナデ	外　にぶい橙色～にぶい赤褐色 内　灰黄褐色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
15 図版七	器台 （弥生土器）	口径　17.8	口縁部外面ナデ、内面ハケナデ（9本／cm）、体部外面ヘラミガキ・ナデ内面ハケナデ・ヘラナデ	にぶい橙色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
16 図版七	鉢 （弥生土器）	口径　32.0	口縁部外面ヘラナデ、（9本／cm）内面ナデ、体部外面摩耗のため調整不明内面ナデ	外　淡橙色～にぶい黄橙色 内　淡黄橙色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
17	同上	底径　4.8	底部外面ナデ、内面ヘラミガキ	外　にぶい黄橙色～褐灰色 内　にぶい橙色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母・石英）を含む	良好	
18 図版七	同上	口径　16.4 器高　11.2 底径　3.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面不明、裾部内面にヘラナデ、底部内外面に棒状のもので押さえた痕	外　明橙褐色～橙色 内　明橙赤褐色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良	
19	同上	口径　14.2	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ 体部外面ハケナデ（10本／cm）内面ナデ	外　にぶい橙色 内　にぶい褐色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
20 図版七	同上	口径　14.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラナデ	外　にぶい黄褐色～灰褐色 内　褐灰色～黒褐色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母・石英）を含む	良好	

遺物番号 図版番号	器　種 遺構番号	法量　器高 (cm)　口径	調整・技法等の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
21	鉢 (弥生土器)	底径　4.2	底部内外面ナデ	外　にぶい橙色 内　にぶい褐色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
22	同上	底径　5.0	底部外面指頭圧痕有り、内面摩耗のため調整不明	にぶい褐色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
23	有孔鉢 (弥生土器)	口径　14.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面指ヘラナデ	外　にぶい黄褐色～灰褐色 内　黒褐色～黒褐色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
24 図版七	高杯 (弥生土器)	口径　15.6 器高　10.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ後ハケナデ(10本／cm)脚部内外面指頭圧痕	外　明赤褐色～にぶい褐色 内　明茶褐色	3㎜以下の砂粒（角閃石・雲母）を含む	良	
25	同上	口径　14.0 器高　12.6 底径　11.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ、脚部外面ヘラミガキ後ナデ、四方孔有り	外　にぶい橙色～にぶい赤褐色 内　にぶい橙色	5㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
26	同上	口径　22.8	摩耗のため調整不明	外　淡黄橙色 内　淡橙色	5㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
27	同上	口径　24.2	口縁部内外面ナデ	外　にぶい黄橙色～褐灰色 内　にぶい橙色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
28	同上	口径　24.1	口縁部外面ヘラミガキ、内面ナデ	外　にぶい橙色 内　にぶい黄褐色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
29	同上	口径　27.6	口縁部外面摩耗のため調整不明、内面ヘラミガキ	淡橙色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
30	同上	口径　27.8	口縁部外内面ヨコナデ	外　にぶい黄橙色～橙色 内　黒褐色～にぶい黄橙色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
31 図版七	同上	口径　31.6	口縁部外面ヘラミガキ、内面ナデ、体部内外部ヘラミガキ	にぶい橙色	2㎜以下の砂粒（角閃石・雲母）を含む	良	
32	同上	口径　13.4	脚部外面ヘラミガキ、内面ナデ、四方孔有り	外　にぶい橙色 内　にぶい橙色～にぶい褐色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
33	同上	底径　13.4	脚部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ、(10本／cm)、四方孔有り	外　にぶい黄橙色 内　にぶい橙色	2㎜以下の砂粒（雲母）を含む	良好	
34	同上	底径　15.8	脚部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ、(8本／cm)、四方孔有り	外　にぶい橙色 内　にぶい橙色～にぶい赤褐色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	
35	同上	口径　19.0	脚部外面ヘラミガキ、内面ナデ、四方孔有り	外　にぶい淡橙色～褐色 内　にぶい淡橙	5㎜以下の砂粒（角閃石・角閃石・雲母）を含む	良好	
36	同上	口径　13.6	脚部外面ナデ後ヘラミガキ、内面ナデ後ハケナデ（9本／cm）	外　淡橙色 内　にぶい橙色～明褐灰色	4㎜以下の砂粒（石英・雲母）を含む	良好	
37 図版七	同上	底径　12.4	体部外面ヘラミガキ、内面ナデ、脚部外面ナデ・ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ・指頭圧痕、三方孔有り	にぶい橙色～にぶい褐色	4㎜以下の砂粒（角閃石・雲母）を含む	良好	

土坑

遺物番号 図版番号	器　種	法量（cm） 器高 口径	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
38	壺 （土師器）	口径　12.0	脚部外面ヘラミガキ、内面しぼり目・ナデ・接合痕・指頭圧痕、裾部内面ハケナデ	外　橙色 内　明橙色	1㎜以下の砂粒（長石・雲母）を含む	良	
39	同上	口径　17.8	口縁部外面ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ヨコナデ	外　黄橙茶褐色 内　黄橙灰褐色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
40	同上	口径　23.2	口縁部内外面ナデ	外　橙色 内　にぶい橙色～にぶい褐色	3㎜以下の砂粒（雲母・角閃石）を含む	良	
41 図版八	同上	口径　21.9 3.3	体部外面ヘラミガキと思われる表面剥離のため調整不明、内面ナデ、指頭圧痕・接合痕	外　橙色～淡橙色 内　にぶい黄橙	4㎜以下の砂粒（長石・雲母・チャート・赤褐色酸化粒）を含む	良	黒斑有り
42	甕 （土師器）	口径　14.0	口縁部外面ナデ、内面ハケナデ（8本／cm）	外　にぶい橙色～灰白色 内　にぶい橙色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
43	同上	口径　14.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ、内面ヘラナデ	外　黒褐色～淡灰黄褐色 内　褐灰色～灰黄白色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母・石英）を多量に含む	良	
44 図版八	同上	口径　12.6 15.0 16.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ後ハケナデ（10本／cm）、内面ヘラケズリ	外　にぶい褐色～黒褐色 内　にぶい橙色～灰黄褐色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母・石英）を多量に含む	良	
45	同上	底径　13.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ（9本／cm）、内面ヘラケズリ	外　にぶい橙色 内　にぶい橙色～淡橙色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
46	同上	底径　12.8	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、体部外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ	外　淡橙色～赤茶褐色 内　淡橙色	2㎜以下の砂粒（石英・角閃石・雲母）を含む	良	
47 図版八	同上	底径　14.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラケズリ	外　浅茶橙色～灰色 内　灰白色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を少量に含む	良	
48	同上	口径　9.6	口縁部外面ハケナデ（6本／cm）、内面ヨコナデ、体部外面ハケナデ（6本／cm）、内面ナデ・指頭圧痕	外　にぶい橙色～灰茶褐色 内　灰黄色～淡茶灰色	8㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
49	同上	口径　11.0	口縁部外面ハケナデ（6本／cm）、内面ヘラナデ、体部外面ハケナデ（6本／cm）、内面指頭圧痕	外　にぶい橙色～褐灰色 内　淡橙色～淡茶灰色	9㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母）を含む	良	
50 図版八	同上	口径　12.4	口縁部外面ハケナデ（6本／cm）、内面ヘラナデ、体部外面ハケナデ（6本／cm）、内面指頭圧痕	外　褐灰色～にぶい黄橙色 内　にぶい淡黄橙色	6㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母）を含む	良	
51 図版八	小型丸底壺 （土師器）	口径　11.1 5.8	口縁部内外面ヘラミガキ、体部外面ヘラミガキ・ヘラケズリ、内面篦工具痕	外　橙色～黒褐色 内　明橙色～にぶい赤褐色	1㎜以下の砂粒（長石・雲母）を含む	良	
52 図版八	同上	口径　12.2 7.0	口縁部内外面・体部外面は摩耗のため調整不明、体部内面ナデ	外　橙色～灰茶褐色 内　明橙色～にぶい赤褐色	2.5㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良	
53	高杯 （土師器）	口径　16.4	口縁部内外面摩耗のため調整不明	外　橙色 内　淡黄橙色	2㎜以下の砂粒（雲母）を含む	良	
54	有孔鉢 （土師器）	口径　5.2	底部外面タタキ、内面ナデ	外　にぶい橙色～にぶい赤褐色 内　にぶい橙色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良	
55	甕 （弥生土器）	口径　16.4	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・ハケナデ、体部外面タタキ後ハケナデ、内面ヘラケズリ	外　にぶい黄橙色～灰茶白色 内　淡黄橙色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を含む	良好	

SE－1

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
56	杯 (土師器)	口径 器高	12.4 4.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ナデ	外　にぶい黄橙色～褐灰色 内　黒～黒褐色	1㎜以下の砂粒を含む	良	
57	同上	口径	17.6	口縁部外面摩耗のため調整不明、内面ナデ、体部内面ナデ	外　にぶい黄橙色～灰褐色 内　黒褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良	
58	甕 (土師器)	口径	15.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面に指頭圧痕	外　明褐灰色 内　明褐灰色～褐灰色	2㎜以下の砂粒を含む	良	
59	同上	口径	20.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面ナデ・指頭圧痕	外　灰黄褐色～橙色 内　明褐灰色～淡橙色	4㎜以下の砂粒を含む	良	
60	同上	口径	25.8	口縁部内外面ナデ、体部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ	にぶい橙色	2㎜以下の砂粒を含む	良	
61	羽釜 (土師器)	口径	22.8	外面ナデ・接合痕、内面指頭圧痕	外　にぶい橙色～にぶい赤褐色 内　にぶい赤褐色～褐色	3㎜以下の砂粒を多量に含む	良	
62	同上	口径	24.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、体部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ	外　橙色～にぶい黄褐色 内　にぶい橙色～褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良	
63	同上	口径	24.0	外面ナデ、内面摩耗のため調整不明	外　にぶい橙色～灰褐色 内　にぶい褐色～黒褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良	
64	同上	鍔径	22.8	体部外面ヨコナデ、内面ナデ	外　明赤褐色 内　橙色	3㎜以下の砂粒を含む	良	
65	同上	鍔径	28.8	体部外面ヨコナデ、内面ナデ	橙色～明赤褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良	
66	同上	鍔径	29.4	体部外面ヨコナデ、内面ナデ	外　橙色～褐色 内　にぶい橙色	2㎜以下の砂粒を含む	良	
67	杯 (土師器)	口径	16.4	内外面回転ナデ	灰白色	精良	良	
68 図版八	鉢 (須恵器)	口径 器高 底径	24.0 13.1 10.8	内外面回転ナデ、底部糸切り痕	外　灰白色～にぶい黄橙色 内　灰黄褐色～灰色	精良	良好	
69	杯身 (須恵器)	底径	9.2	内外面回転ナデ、底部貼付け高台・底部側面に墨書（解読不明）有り	白灰色	精良	良好	黒斑有り
70	鉢 (須恵器)	底径	8.4	内外面回転ナデ、内面に静止ナデ	白灰色	精良	良好	
71	小型壺 (須恵器)	底径	4.4	内外面回転ナデ、体部外面回転ヘラケズリ	白灰色	精良	良好	
72	壺 (須恵器)	口径	6.8	内外面回転ナデ	外　赤灰色～明褐灰色 内　赤灰色	1㎜以下の砂粒をごく少量含む	良好	
73	同上	口径	16.4	内外面回転ナデ	白灰色	精良	良好	
74	同上	口径	23.6	口縁部内外面回転ナデ、体部外面回転かき口、内面同心円タタキ	白灰色	精良	良好	
75	同上	口径	27.0	内外面回転ナデ	外　灰色～暗灰色 内　淡灰色	精良	良好	

4）出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
77	小型鉢 (土師器)	口径 器高	12.4 2.8	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・ナデ	橙色	1㎜以下の砂粒を含む	良	
78	甕 (土師器)	口径	26.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、体部外面ハケナデ・ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	外　にぶい黄橙 内　黒褐色～にぶい黄褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良	
79	羽釜 (土師器)	鍔径	31.8	体部外面ヨコナデ、内面ナデ・ヘラナデ・指頭圧痕	外　にぶい橙色～褐色 内　にぶい褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良	
80	杯身 (須恵器)	底径	6.4	内外面回転ナデ、裾部回転ヘラケズリ	灰白色	精良	良好	
81	杯 (土師器)	口径	12.6	内外面ヨコナデ	橙色	1㎜以下の砂粒を含む	良	
82	甕 (土師器)	口径	15.8	内外面ヨコナデ	橙色	1㎜以下の砂粒を含む	良	
83	同上	口径	19.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ	外　淡橙色 内　橙色	4㎜以下の砂粒を含む	良	
84	同上	口径	35.2	口縁部内外面ヨコナデ、外面ハケナデ、	にぶい橙色	2㎜以下の砂粒を含む	良	
85	鉢 (土師器)	口径	39.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラナデ	橙色	2㎜以下の砂粒を含む	良	
86	同上	口径	27.8	口縁部外面ハケナデ・ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部外面ハケナデ（10本／cm）、内面ヘケナデ（8本／cm）	橙色	4㎜以下の砂粒を少量含む	良	
87	羽釜 (土師器)	鍔径21.8		体部外面ナデ	外　橙色 内　明赤褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良	
88	羽釜 (土師器)	鍔径	21.2	体部内外面ナデ、内面ハケナデ・指頭圧痕	にぶい赤褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良	
89	皿 (土師器)	口径	15.8	口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナデ	橙色	2㎜以下の砂粒を含む	良	
90	同上	口径	18.0	口縁部内外面ヨコナデ、底部外面指頭圧痕、内面ナデ	にぶい橙色	1㎜以下の砂粒を含む	良好	
91	羽釜 (土師器)	鍔径	32.0	体部内外面ナデ	外　橙色 内　明赤褐色	2㎜以下の砂粒を含む	良好	
92	杯身 (須恵器)	口径	11.6	内外面回転ナデ	外　浅黄橙色 内　褐灰色	精良	良好	
93	同上	口径 器高	13.9 3.8	内外面回転ナデ	灰白色	精良	良好	
94	同上	口径 器高	10.4 4.2	内外面回転ナデ	灰白色	精良	良好	
95	皿 (土師器)	口径	16.0	口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ヨコナデ、内面指頭圧痕	にぶい橙色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	黒斑有り
96	椀 (土師器)	口径	13.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ	橙色	2㎜以下の砂粒を含む	良好	
97	皿 (須恵器)	口径 器高	15.6 3.6	内外面回転ナデ	灰白色	精良	良好	
98	同上	底径	3.5	内外面回転ナデ反転	灰白色	精良	良好	
99	同上	口径	23.4	内外面回転ナデ・外面に波状文	灰色	精良	良好	

3．まとめ

今回の調査地は東郷遺跡推定範囲の東部に位置する。隣接する既往調査では当調査地と同様、弥生時代後期～江戸時代に至る遺構・遺物が検出されている。以下、調査の成果について各時代ごとに記す。

弥生時代後期

調査区で確認された基本層序第６層がこの時期の包含層にあたる。調査区内では土器の集積が見られただけで、集落遺構は検出できなかったが、当調査区の北部（約150ｍ）に位置する第13次（昭和56年度市教委）調査・第23次（TG88－23）調査でも検出しており、広範囲に存在していることが明らかになった。

古墳時代前期（布留式古相）

第６層上面（標高6.9ｍ）から切り込む土坑７基（ＳＫ－１～ＳＫ－７）を検出している。この時期の遺構としては隣接する第７次（市教委）調査・第22次（TG87－22）・第23次（TG88－23）調査でも検出しており、その広がりが確認された。

奈良時代～平安時代前期

当調査区の北東部（約150ｍ）に位置する第１次（市教委）調査では柱穴・井戸の集落遺構が検出されている。さらに当調査地の東部約100ｍの所で八尾市教育委員会が平成３年度に実施した遺構確認調査で寺院関連の遺物（瓦等）が多量に出土している。今回の調査地では寺院に関連する瓦片は出土しなかったが、調査区内に多数の柱穴が密集して検出しており、その寺院関連の建物ないしはその周囲に居住していた建物群ではないかと想定される。

平安時代末～鎌倉時代

既往調査の結果から当調査地周辺では、この時期に大規模な開発により整地された層が確認されている。今回の調査地でも同様の土層が確認できた。

以上、今回の発掘調査の成果である。調査区では各時代の遺構が高密度に重複しており、今後、周辺で調査を実施に際して、充分注意をしなければならないであろう。

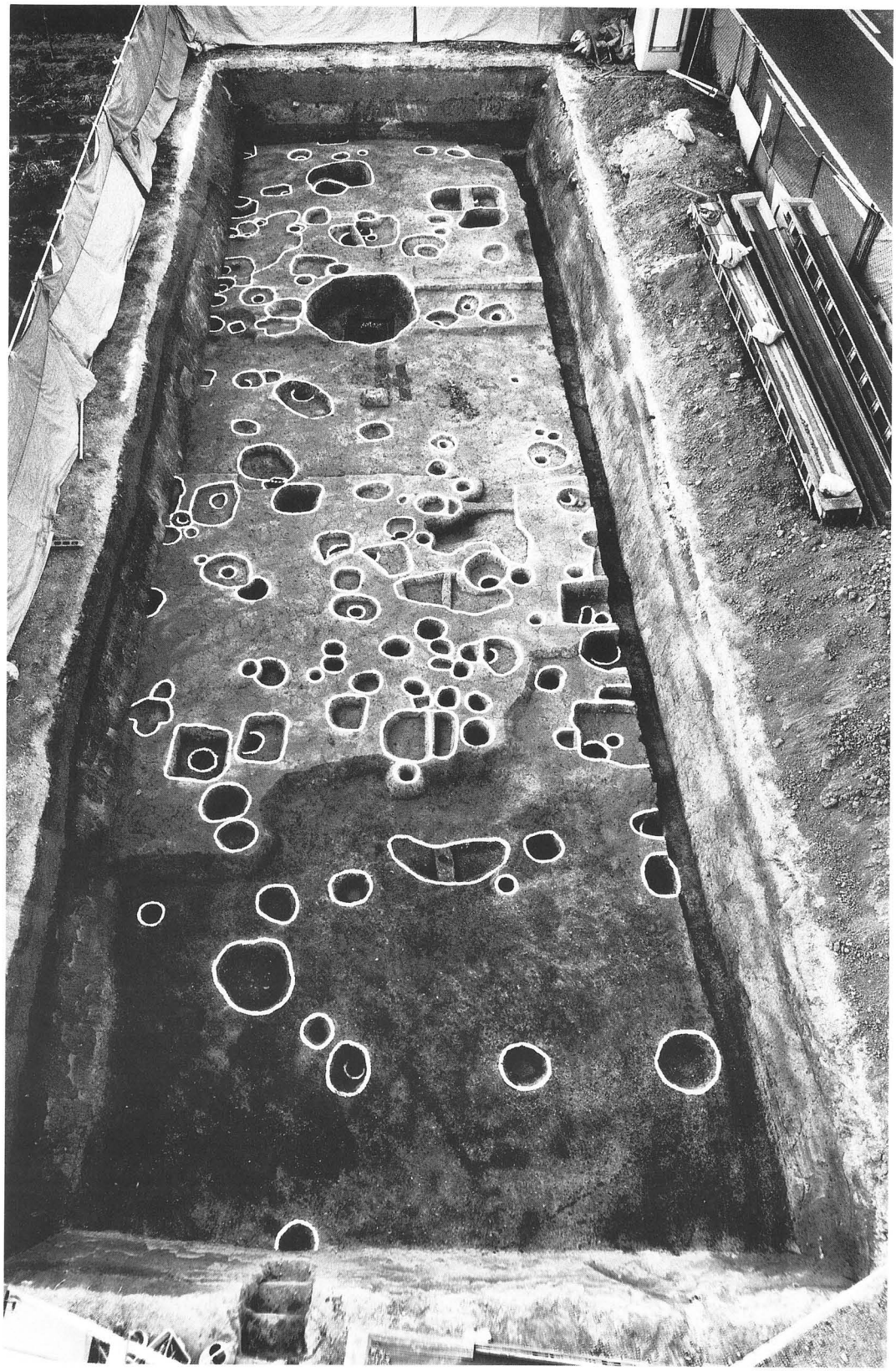
参考文献

○ ㈶八尾市文化財調査研究会「第８章　東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告２　1983．８

○ ㈶八尾市教育委員会「東郷遺跡」『東郷遺跡・萱振遺跡』㈶八尾市文化財調査研究会報告17

○ 八尾市教育委員会「９．東郷廃寺（90－531）の調査」『八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告25　平成３年度国庫補助事業　1992．３

図　　版



調査区全景（南から）